

古代ロシア研究特別号

ISSN 0289-1255

ロシア文法の周辺

一般言語学への招待

著者 山口 巖

2005
日本古代ロシア研究会
2008年8月校訂

目 次

はじめに.....	1
文字表.....	9
第1話 ロシア語の文字と発音.....	11
1. ロシア語の文字.....	11
2. ロシア語の発音の特徴.....	16
3. 母音.....	19
4. 子音.....	20
5. アクセントと母音の減衰.....	24
6. 子音の同化.....	25
第2話 暦について.....	28
第3話 名詞の性.....	39
第4話 数というもの.....	55
第5話 格 — インド・ヨーロッパ語の格 I.....	82
第6話 格 — インド・ヨーロッパ語の格 II.....	90
1. 動詞の格支配.....	90
2. 造格の意味.....	95
第7話 格 — 格に関する一章.....	103
第8話 否定の構文.....	111
1. 概説.....	111
2. 存在否定の生格.....	111
3. 否定生格.....	117
第9話 活動体と不活動体.....	136
1. 現代語における活動体と不活動体.....	136
2. 歴史的発展.....	140
3. 人名.....	140
4. 普通名詞.....	141
第10話 印欧祖語の知識 I.....	143
1. 前置き.....	143
2. 語幹形成母音.....	143

3. 母音交替	144
4. 語根の構造	146
5. 印欧語の母音とその対応	148
第 11 話 印欧祖語の知識 II	156
1. ソナント	156
2. 二重母音	159
3. スラヴ語要素の話	164
4. ウムラウトの話	166
第 12 話 名詞の語幹と変化	170
1. 印欧語の名詞変化語尾	170
2. U 語幹名詞と O 語幹名詞	170
3. U 語幹名詞と O 語幹名詞の混同	172
4. ES 語幹名詞	175
5. I 語幹名詞	176
6. 子音語幹名詞	177
7. 接尾辞*men を持つ中性名詞	178
8. A 語幹名詞	179
第 13 話 形容詞の問題 I	181
1. 印欧語の形容詞	181
2. 長語尾形と短語尾形	183
3. 性質形容詞と関係形容詞	184
4. 性質形容詞	188
5. 性質形容詞の長語尾形と短語尾形	190
6. 問題の整理	194
第 14 話 形容詞の問題 II	197
1. 中世ロシア語の形容詞	197
第 15 話 形容詞の問題 III	206
1. 品詞としての形容詞	206
2. 形容詞の種類と長語尾・短語尾形	209
第 16 話 言語類型学 I	213
1. 古典的な言語の類型-はじめに	213

2. 概念の発生	213
3. 言語的普遍	218
第 17 話 言語類型学 II—ロシアにおける類型学的研究	225
1. 先駆者たち	225
2. 活格言語と能格言語	227
3. 包含事象と随伴事象	229
第 18 話 内容的類型学の概要 I	237
1. 活格言語	237
2. 名詞の性と格	238
3. 品詞としての形容詞	239
第 19 話 内容的類型学の概要 II	248
1. 言語類型	248
2. 人称	249
3. 数	254
4. 態 (アスペクト)	256
第 20 話 内容的類型学の概要 III	262
1. 中動相	262
2. 中動相の起源	263
3. 時称について	265
4. 時称体系の発達	269
5. 動詞の文法的意味の形成	274
第 21 話 動詞の意味	276
1. はじめに	276
2. 動詞の意義	279
3. 動詞の意義構造	283
4. 状態動詞	285
第 22 話 時間というもの	289
1. はじめに	289
2. 時間概念の発生	289
3. cogito ergo sum の意味	293
4. 時間と私の流れ	294

5. 時間の種類	298
第 23 話 言語に反映している時間	302
1. はじめに	302
2. 過去と現在の関係	302
3. 現在形	307
4. 補説	311
第 24 話 時間の観念の発生以前	314
1. はじめに	314
2. 時間の観念の発生以前	314
3. 時間の観念の発生に関わる可能性を持つ諸現象	319
関係文献	341

はじめに

Nihil est in rebus,
quod ante non fuerit
in verbis.
— A. M. Peshkovsky¹

これは1999年8月26日から9月3日まで大阪外国語大学で行った集中講義を校正し、いくつかの補足を加えたものです。そのもとになったのは1999年の第一セメスターに鳥取大学において一般教養科目として講義したもので、表題は当初『ロシア語の周辺』としていましたが、『ロシア文法の周辺』とした方がより内容に即しているように思われましたので、集中講義に際してそのように訂正しました。その後同じ年の第二セメスターにも、その続きを講義しながら、一方ではすでに講義したものについても、追加したり書き換えたりする作業を続けました。鳥取大学は2000年の3月末で停年退官をしましたが、引続き非常勤講師として2年間講義を行いました。内容については刻々と変化しているといっても過言ではないと思っています。この作業は今後も行うことになると思いますが、平成17(2005)年3月をもって現職の鳥取環境大学を停年退職するのを期に、発表したいと考えました。

さて、言語の文法は、何か守らなければならない面倒で無味乾燥な規則の集りのように思われるのが普通です。文法は言語毎に異なっており、また同じ言語でも時代によっていろいろと異なっています。ある時代に支配的であった規則がいつの間にかなくなり、影も形もなかった規則が生れてくる、というようなことは、常に起っている現象です。

どうしてこのようなことが起るのでしょうか。あるいはどうしてこのようなことが可能なのでしょうか。

一つには言語というものは客観的な現実の構造をそのまま反映するものではないということが挙げられます。しかしそういったからといって言語が客観的現実と何の関係もないということもまた、あり得ないことでしょう。もしそうなら言語を使って現実に関与することはできないと考えられるから

¹ 「前もって言葉に存在しないで現実中存在するものは何もない。」ペシコフスキーはロシアの高名な言語学者。

です。

また一つには人間は体の大きさとか、感覚器官の性質とか、あるいは運動能力とかさまざまな制約を持っています。またそこから来る感情の動きにも一定の枠があると思われます。こういう主体としての人間が客観的現実に対処するためには、主体と客体の間にある種の「折合い」を付ける必要があります。言語というのはそういう「折合い」の一つの形だということです。「言語は主観と客観のディアレクティケー（対話）の上に成り立つ」というのは、そういう意味だと思われます。そしてその折合いの付け方は、それぞれの言語集団のいる環境や文化などの条件によってさまざまだと思われます。しかし人間という枠がその底にあるとすれば、言語の異なりにも一定の枠があると考えるのが論理的だと思われます。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが、人間の言語は種々さまざまだけれども、その底には一つの言語があるといった意味も、このことだったのだらうと思われるのです。

しかし成り立ちとしてはそういうものであったとしても、言語は一度できてしまえば、それを使う人間の認識や行動を縛るはたらきをします。それは言語の固有の性質だろうと思います。そうでなければ言語は言語として働くことが難しくなるからです。これは後で「人間の言語の持つ条件」として挙げるものです。

以前には言語と認識の関係について、言語は客観的現実を自由にパターン化して取入れることができるという考え方がフンボルト・サピア・ウォーフの仮説という名の下に広く信じられてきました。しかしこれは人間が客観的現実をそのまま言語構造として反映するという考え方と同じく、極端に過ぎます。

なぜかといえば、言語と認識に関して、少なくとも二つの条件があると思われるからです。

- 1) 人間の受容器官 (感覚器官) の持つ制約
- 2) 人間の言語の持つ条件

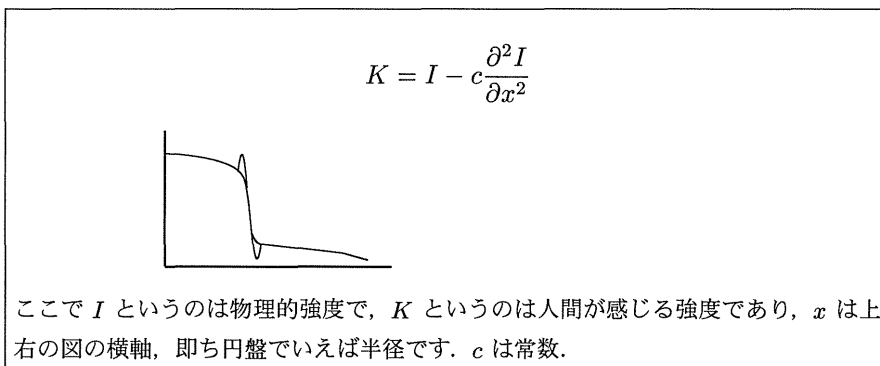
1) の場合

たとえば人間の視覚は、対象の明るさが連続的に暗くなっていくとき、暗くなり出す時点では、目は本当の明るさよりは明るく感じ、暗くなってしまっ

て明るさが一樣になる時点では、本当の明るさよりも暗く感じるようになっていきます。したがって人間はその境界に線があるように錯覚するのです。

これがものの輪郭です。この視覚の働きによって、人間は元々客観的には存在しないはずの輪郭を、あたかも存在しているかのように思うのです。

これをマッハ Ernst Mach (1834-1916) は数学的に次のように表したということです。



2) の場合

たとえば日本語では/papa/というばあい、[phapa]としか発音しませんが[ph]と[p]は区別できません。それは日本語では意味に関係しない(違う音素でない)からです。しかし/papa/と/baba/はまったく意味が違います。だから日本人ならば[p]と[b]はどこにあっても区別できるのです。

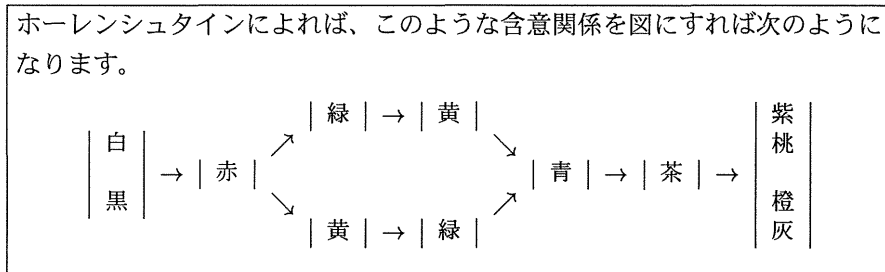
これに対して朝鮮韓国語では、[p]は語頭でしか発音できません。語中では[b]としか発音できないのです。そしてたとえ[p]と[b]を取替えても、意味も変らないし、[p]と[b]の区別もできません。同じ音と感じられるのです。そのかわり[ph]と[p]とはどこにあっても明瞭に区別でき、どちらを使うかで意味も違ってきます。このように言語にないものはそれが現実にあっても認識できないのです。

色の場合でも、人間は自分の言語がもっている色彩語に合せて、現実には連続しているスペクトルを切断して認識していますが、客観現実としてはそのような切れ目はなく、連続しています。

逆に人は、自分の言語にない範囲の色を、すぐには思い浮べることができません。たとえばページュという言葉が入ってくるまでは、すぐにこの色を想像することは、誰にもできなかったでしょう。

最近言語によって、色の認識に一定の順序があることが分ってきました。実際の順序の細かいところについては、まだ議論がありますが、順序があることは、間違いがないらしいのです。

ホーレンシュタインによれば、このような含意関係を図にすれば次のようになります。



この表は、次のことを意味しています。いま、二つしか色彩語をもっていない言語があるとします。するとそれは必ず「白」と「黒」に当る語をもっています。もし三つの色彩語をもっている言語であるならば、三つ目の色彩語は必ず「赤」にあたる語だということです。

さらに、場合によっては言語によって外界の認識が異なるだけでなく、そこに働く論理そのものも異なっていることがあり、それによって言語をいくつかの内容的類型に分類できることが、最近分ってきました。

1970年代に集大成されたロシア言語研究の成果として「内容的類型学」があります。これは今までの言語研究の常識を覆す画期的なもので、屈折語、膠着語、孤立語というような、それまでの言語類型学とは全く異なった「ものの観方」を与えました。

このことによって、たとえば文には「誰が、どこで、何をした」という要素がないと意味が分らないから、主語を表す形(主格)、目的語を表す形(対格)はどんな言語にもある、というような、今まで常識と考えられていた考えが、普遍的に正しいものではないことが分ってきました。

このような考えは、文明語といわれる、主としてヨーロッパの言語の属している、一つの類型(対格言語類型)の中でのしか通用しないことが分ってきた

のです。

現在のところ対格言語類型の外に、このような類型として「活格言語類型」と「能格言語類型」があることが確実に分っています。この中でカフカス地方の言語に多く見られる「能格言語類型」は、「活格言語類型」と「対格言語類型」の中間にあるものだと考えられています。それで「活格言語」と「対格言語」を比較すると、その特徴が分ってきます。

活格言語には、何も格の印をもたない裸の名詞があります。これは動詞などの述語の説明をするものと言えます。「行く」というとき、行くのは誰かが分からないと困るからです。言いかえれば「行く」という行為が成り立つために必要なものとして、これを説明するために名詞が添えられるわけです。たとえば「太郎行く」というような場合です。同じように「石大きい」ということもできます。

生物の場合、他の生物や「もの」に作用をすることができます。これを「行為者」Actor といいます。例えば「太郎が次郎を殺す」というような場合です。しかしよく考えて見れば、もし次郎が死ななければ、「太郎が殺す」ということはできません。しかし逆に太郎がいなくても、次郎は死ぬことができます。言いかえれば、「死ぬ」ということと、死が訪れる生物との関係は極めて密接で、切離すことはできませんが、「殺す」という行為は「死ぬ」生物がいないと成り立たないのです。

このほかに、活格言語では「～が」または「～によって」というように、行為者を表す特別な形(格)があります。これを「活格」といいます。

そうすればこの言語では「次郎死ぬ」とおなじように、「太郎によって次郎死ぬ」という言い方で、「太郎が次郎を殺す」ことになります。ヨーロッパの研究者は長い間どうして同じ裸の形「次郎」がある場合に主語になり、ある場合には目的語になるのかが分りませんでした。ヨーロッパ語が主格と対格を厳密に区別していたからです。

しかしよく考えて見れば、「太郎が」「次郎を殺す」というのは、単なる認定の問題に過ぎません。

例えば呪いが有効であるという文化をもった社会では、太郎が遠く離れたところで真夜中に蠟燭を立て、五寸釘を藁人形に打ち付けていても、「太郎が

殺した」ということになるでしょう。認定の問題だからこそ、現在でも殺人をめぐる裁判がしばしば行われるのです。この事態がひとりでに起ったのか、それとも誰かが惹き起した結果なのか、およびもしそうなら、惹き起したのは誰なのかが問題になります。このことが決して自明なことがらではなく、判断の結果に過ぎないからです。

このように、ただ一つ確実なことは「次郎死ぬ」ということだけなのです。「死ぬ」という言葉は、誰か死ぬ人がいることを予定しています。それが誰であるかを補ってやらなければ、「死ぬ」という言葉は意味を持たないといえます。ですからこのばあいの「次郎」というのは厳密には主語ではなく、「死ぬ」を説明するものだといえることができます。

このことからこのタイプの言語が「他動詞」と「自動詞」の区別をもたないこともよく分ります。たとえば「石重い」というのと同じように、「石行く」といえばこれは意味がありませんが、「太郎によって石行く」といえば、「太郎が石を運ぶ」ことになります。「燃える」と「焼く」、「走る」と「追う」が同じ単語だということも当然です。

さらにこのことから、無生物が活格をもたないことも当然だと理解できます。

さらにまた、この言語が受身(受動態/相)をもたないことも明らかです。「太郎によって石行く」という文はどうしたって受身にはできないのです。受動態が可能なのは、自動詞と他動詞を区別している対格言語にのみ特有なものなのです。

以上のことから、この言語は世界を生物と無生物に区別する「ものの観方」に基づいているといえることができます。

いま、「～によって」のように、行為者 Actor を表す印をもったものを「活格」、何も印をもたないものを「絶対格」ということにしますと、絶対格には何について言われているかというテーマを表す Subject, 即ち自動詞の主語となるばあいと、行為が及ぼされる対象 Patient を表す場合の二つがあります。

対格言語	意味	活格言語
主格	A	活格
	S	
対格	P	絶対格

これに対して対格言語では行為者 (A) とテーマ (S) は主格で、行為が及ぼ

される対象 (P) は、対格で表されます。

いま、

Mary slapped Diana, and ran away.

(メアリーがダイアナをたたいて逃げていった)

という文があったとします。この時「逃げていった」のはだれでしょうか。おそらく皆は「メアリーに決っている」というでしょう。しかしこれが正しいのは、対格言語の場合だけなのです。

どうしてこのようなことが起るのでしょうか。このばあいメアリーはダイアナをたたいたのですから上の表では A(ctor) で、ダイアナは P(atient) です。そして逃げていったのは自動詞の主語、すなわち S(bject) です。すなわち

メアリー (A) がダイアナ (P) をたたいて、(S) が逃げていった。
ということになります。

対格言語の場合は A と S は主格で表されます (A=S) から、逃げていったのはメアリーでなければなりません。ところが活格言語では S は P と共に絶対格で表されます (P=S)。ですからこのばあいには逃げたのはダイアナでなくてはならないのです。

このことは、一見奇妙に思われますが、完全に論理にかなっています。このことから、私たちがいくつかのよく知っている言語の事実を直ちに普遍化することが誤りであることが分ります。

世界の見方、認識の仕方は決して一つしかないわけではありません。それぞれの言語が、同じ客観現実を違ったように認識し、違った論理で自分たちの世界像を作っているのだということが出来ます。このことは、学問をする場合にも自分の考えていることが絶対正しいかどうか、常に検証しながら進むことが大切であることを教えていると思います。

活格言語類型のことが分って来るにつれて、今まで無反省であって、そのためによく分ってはいなかった対格言語の特徴も少しずつ分ってきました。この言語は「誰が何をしたか」ということを重視する言語類型です。行為の主体性をはっきりさせようというのです。それに伴って、行為の対象があるかないかを問題にするようになりました。

こうして自動詞と他動詞の区別が重要になってきました。主格は常に行為と一体のものとして理解され、自動詞にも他動詞にも「行為主体」という意味で同じ主格が使われるようになりました。

この言語では、行為者 (A) だけでなく、単なるテーマ (S) を表すときでも主格を使うことができたから、受動態が可能になりました。

活格言語の、例えば「次郎死ぬ」という場合には「死ぬ」ということと「次郎」が密接に関係していましたから、次郎の様子、即ち、次郎がどういう風に死ぬのか、死につつあるのか、それとも死んでしまったのかということが、とても大切だったと思われます。このような行為の様子、様態を、文法家はアスペクトとかアクチオンス・アルトなどといいます (アスペクトとアクチオンス・アルトはよく似た概念ですが、厳密に言えば一寸異なっています。しかしこれについては今は述べません)。

これに対して対格言語の「誰が何をした」という場合には、行為と主体とが密接な関係を持ちますから、「何時したのか」ということが、行為の様子よりも大切になります。すなわち、現在、過去のような時制が発達することになります。少なくとも現在そう考えている人が多いと思います。

しかし、類型学の立場からの対格言語の研究は始ったばかりで、まだ充分に分ったということではできません。

ともあれこのような類型学の結果は、言語というものが客観世界をそのまま反映したものではないことを、今までよりもはっきり確信させます。言語の反映の仕方、現実との「折合い」の付け方にはさまざまな仕方があると思われるのです。

このことは言語の文法規則にも当てはまります。文法規則を見るとき、言語はその規則によってどのように折合いを付けているのか、また文法規則からのさまざまな逸脱を見るとき、煩わしい例外だと敬遠するのではなくて、言語がそのことによってどのように折合いを付け直そうとしているのかを考えるというのは、楽しいことでもあり、文法に対する観方を変えることにもつながります。

ギリシア文字、ロシア文字立体及び斜体、キリル文字
グラゴール文字 対照表

ギリシア語		ロシア立体		ロシア斜体		キリル	グラゴール	発 音
A	α	A	a	A	a	А	Ⲁ	[a]
		Б	б	Б	б	Б	Ⲗ	[b]
B	β	В	в	В	в	В	Ⲙ	[v]
Γ	γ	Г	г	Г	г	Г	Ⲡ	[g]
Δ	δ	Д	д	Д	д	Д	Ⲣ	[d]
E	ε	Е	е	Е	е	Е	Ⲥ	[je]
		Ж	ж	Ж	ж	Ж	Ⲧ	[ʒ]
						С	Ⲩ	[dz]
Z	ζ	З	з	З	з	З	Ⲫ	[z]
Η	η	И	и	И	и	И	Ⲭ	[ɛ:]>[i]
		Й	й	Й	й			[i]
Θ	θ	Θ	с	Θ	с	Θ		[f]
I	ι	I	i	I	i	і		[i]
						І, і, ї	Ⲯ Ⲭ	[i]
K	κ	К	к	К	к	К	Ⲱ	[k]
Λ	λ	Л	л	Л	л	Л	Ⲳ	[l]
M	μ	М	м	М	м	М	Ⲵ	[m]
N	ν	Н	н	Н	н	Н	Ⲷ	[n]
Ξ	ξ					ξ		[ks]
O	ο	О	ο	О	ο	О	Ⲹ	[ɔ]
Π	π	Π	π	Π	π	Π	Ⲻ	[p]
P	ρ	Р	р	Р	р	Р	Ⲽ	[r]
Σ	σ,ς	С	с	С	с	с	Ⲿ	[s]
T	τ	Т	т	Т	т	Т	Ⲽ	[t]
Υ	υ	У	у	У	у	У	Ⲽ	[i]
OY	ου	У	у	У	у	У, оу	Ⲽ	[u]

第 一 話

ロシア語の文字と発音

1. ロシア語の文字

§1 ロシア語の文字は英語などで用いられている、いわゆるラテン文字とはだいぶ様子が違ってきます。文字の読み方はともかくとして、文字の並び方が大きく異なっているのは困ります。辞書を引くと文字がこの順で並んでいるので、文字の順番を知らないと辞書も引けないということになるからです。

ところでロシア語の文字は普通キリル文字 Cyrillic といわれています。しかしこれは本当は正しくありません。正確にはロシア語の文字は「市民字体」гражданский шрифт といわれています。キリル文字というのは今でも教会で使われて典礼の言葉となっている、教会スラヴ語で書かれたものに用いられています。

今のチェコのボヘミア、モラヴィア地方一帯に、大モラヴィア帝国 (Velkomoravská říše) といわれる一大帝国を築いていたスラヴ族の王コツェルが、スラヴの地にキリスト教を伝えるための教師を送ってくれるように、ビザンツ帝国の皇帝ミカエロスに頼みました。9世紀頃のことです。

これに答えてビザンツの皇帝は当時のテッサロニカ地方の出身である哲学者コンスタンチノス (ロシア語ではコンスタンチン Константин) と、その兄で既に僧となっていたメトディオス (ロシア語ではメフォヂイ Мефодий) の二人を、スラヴの国に送りました。それはテッサロニカには多くのスラヴ人が住んでいて、この二人もパイリンガルだったからでもありました。

二人は出発する前に文字を持たなかったスラヴ人のために文字をこしらえ、聖書のいくつかを翻訳したといわれています。二人は政治的、宗教的な色々な困難の中で任務を果たしましたが、コンスタンティノスは後にローマで没し、教皇からキリルという贈名をもらいました。そこからスラヴの文字はキリル文字といわれることになりました、めでたしめでたし — というわけにはいきませんでした。

何故かといいますと、コンスタンティノスとメトディオスの事蹟は、それぞれ『コンスタンチン伝』 *Vita Constantini* と『メフォヂイ伝』 *Vita Methodii*

に詳しく書かれており、二人は「スラヴの使徒」と呼ばれているのですが、これらの伝記の中では、彼らが文字を作ったとしか書かれていないからなのです。

一方彼ら及び彼らの直接の弟子たちが翻訳した、古い聖書のスラヴ語 — これを「古教会スラヴ語」(Old Church Slavonic, Altkirchenslawisch, vieux slave) といいます — には、グラゴール文字という文字で書かれたものと、キリル文字で書かれたものがあります。そのためスラヴの使徒たちが作ったのがどちらの文字であるかについては、色々な説が生じました。

§2 グラゴール文字は成立が古いと考えられる文献に多く見られます。またキリル文字で書かれたものには、前に書いた羊皮紙の文字を擦って消して、その上に新たに書いたもの (palimpsest といわれます) が見られ、その中には赤外線などによって、消された文字がグラゴール文字であったことが確認されるものもあるので、グラゴール文字の方が古いということはほとんど定説になっています。

しかし古いからといって、スラヴの使徒たちが作ったのがグラゴール文字であるということには、必ずしもなりません。とくにキリル文字が形も並び方もギリシア文字によく似ているのに対して、グラゴール文字は起源がはっきりしない、特殊なものですから、彼らが作ったものはキリル文字であったかも知れません。少なくともこの文字を「キリル文字」と名付けた人々は、恐らくそう考えたのでしょう。

序でに言えば、この時代には、古代スラヴ語辞書の形をしたものが全く知られていなかったのに、どうして文字の並び方が判るかといいますと、ギリシア語もスラヴ語も、数を表す記号を持ってはいませんでした。だから数字を表すのにアルファベットを使って、文字で表していました。ギリシア語では1は α , 2は β のようになります。名前が示すように、私たちが用いているアラビア数字は、アラビア語から借りたものです。

ともあれこの数字の値はアルファベットの順に割り当てられているのが一般的な習慣でしたから、これによって文字の並び方がかなり明らかになります。しかし困ったことに、グラゴール文字も、ギリシア語とは似ても似つかない (たとえば *въ томъ же лѣтъ* 「同じ年に」 というのをグラゴール文字

で書けば、 $\Psi \cdot \Phi \cdot \Theta \cdot \Lambda$ のようになります) のに、ギリシア語の数の値と対応する文字の音価とがよく似ているのです。たとえば 1, 2 はそれぞれグラゴール文字の α と β に当る文字(すなわち + と 卍)に割り当てられています。したがって数の値を手がかりにしてどちらをキリルたちが作ったのかを決めることはできません。

§3 キリル文字はピョートル大帝 Пётр Великий (1672-1725) の時まで使われていましたが、1710 年に開明君主であったピョートル大帝は、彼が自分の手で選んだ西欧の文字に近い字体の文字を使うように、勅令を出しました。この文字が「市民字体」と呼ばれるものです。私たちがロシア文字とかキリル文字という時には、実際にはこの文字を思い浮かべているのです。

ただし帝政時代には、表に挙げましたように、今日用いられていない文字もいくつかあります。これは既に当時語源的なものに過ぎず、発音は別の文字と同じという場合があったためです。

たとえば *も* は発音の上では *e* と全く同じで [je] ですが、語源的には印欧語の **oi*, **ai* および **e* の変化したものです。たとえば *лес* 「森」、*цвет* 「花」などはそれぞれ *лѣсъ*, *цвѣтъ* と書かれていましたが、発音は *лес*, *цвет* と書くばあいと変りがありませんでした。

また人の名の Φῆδορ はギリシア語の Θεόδωρος, ラテン語では Theodorus¹ であって, 古くには Θῆδορъ と書かれていましたが, ロシア語では th は [f] と発音されるようになっていましたので, Gr. φιλόσοφος Lat. philosophus² などの ph と同じように ф で表すようになりました。

またロシア語の и はもともとギリシア語の η, Η であって、長い ē を表していました。ē は多くの言語で [i] あるいは [iː] を表すようになります (例えば英語の *feet* [fe:t] > [fi:t]) が、ロシア語の場合にも同じように [i] を表すようになったので、もともとの ι に対応する i と区別がつかなくなっていました。

革命後の文字改革でこのどちらを残すかで色々議論があったといわれ、iを残すことを主張した人々は、この方が「幅が狭い」ので、紙を何パーセントだけ節約できることを根拠にしたと聞いています。当時の物資の不足を物語

¹theo- は「神」、dōron (中性) は「贈物」で、「神の贈物」というほどの意味と思われます。

²philo- は「愛する」, sophos は「知恵」で「知恵を愛する者」というほどの意味。

るエピソードといえましょう。

§4 文字表では、ギリシア語とロシア語、それに念のためキリル文字を並べてあります (cf. p.9). ロシア文字の順序は、明らかにギリシア文字の並び方に準じています。ギリシア語に対応する文字が欠けているのは、ロシア語特有の文字です。また斜体は原則として筆記体と同じもので、立体を斜めにしたものではありません。

若干の説明を加えますと、たとえば Π, π は、円周率などに用いられるギリシア語のパイ Π, π ですから、発音は [p] となります。また P, p は密度や曲率半径などを表すのに用いられる、ギリシア語のロー P, p ですから、[r] であって絶対に [p] と発音してはなりません。

また C, c はギリシア語のシグマ Σ, σ に当ります。大文字は数学で和を表す記号に用いられていますから、既に皆さんにはおなじみの字だと思います。このシグマは既に古典ギリシア語において C とも書かれていました。この違いは、要するに「余った」ものを内側に折曲げるか外側に膨らませるかの違いということになります。したがってこれは [s] であって、絶対に [k] ではありません。

序でに暦について少し触れておきますと、1917 年旧暦 (ユリウス暦) 10 月に社会主義革命が起りました。革命は 10 月 25 日のオデッサ攻撃に始まり、翌 26 日には冬宮が攻撃されました。このことから旧ソヴェト時代にはこれは「大十月社会主義革命」Великая октябрьская социалистическая революция と呼ばれています。

しかしこの時のロシアの暦は未だ旧暦、即ちユリウス暦が使われていました。暦については第二話で補足して説明しますが、これによれば 10 月 25 日は新暦、即ちグレゴリオ暦では 11 月 7 日に当ります。1900 年代の新暦と旧暦の暦のずれは 13 日ですから、25 日に 13 日を加えた 38 という日数から 10 月の日数 31 を引いた数 7 (即ち $25 + 13 - 31 = 7$) が 11 月の日付になるからです。

この年に成立した臨時政府は直ちに暦の改革に着手し、翌 1918 年の 1 月 31 日 (水) の次の日を 2 月 14 日 (木) としました。これによってロシアでもグレゴリオ暦が用いられるようになりましたが、このために革命の一周年記念

日は11月になってしまいました。

§5 1917年に成立した臨時政府は、その年のうちに帝政時代の文字を改革して現在のロシア語に見られる文字を用いる案を発表しました。電光石火というべきですが、文字の改革は単なる小手先のことなく、思想の問題であることが多いといえます。ピョートルの文字改革も、これによってロシア語が完全に中世の絆を断ちきって近代語に変貌したといわれています。革命後の文字改革にも、社会主義革命への踏絵ともいえる意味があったと思われる。

事実、たとえば硬音で終る単語には必ず音を持たない硬音符を付け加えるのが帝政期の綴字法でありましたが、硬音符 ъ はその前の文字が硬音であることを示す役割を果たすだけに過ぎませんでした (cf. p.16)。これでは紙の無駄であるというところから、廃止が決ったのですが、革命に反対の気分を持つ印刷所は断固として硬音符を外そうとしなかったといえます。そこで業を煮やした「革命的」兵士と市民が印刷所を襲って硬音符を箱から取出して捨ててしまうということが、オデッサをはじめ、あちこちで起ったという話です。

§6 この「革命的」行為によって、確かに硬音符を使うことができなくなりにはしましたが、実は硬音符には、語中に用いて前の子音が「硬く」発音されることを示す役割もありました。「硬い」「柔らかい」というのがどういう意味を持つのかについては、後で述べることにしますが、たとえば *сѣсть* は *c* を「硬く」即ち後ろに [u] の音が続くような気分で発音して [jest'] と続けます。これによって *c* を「軟らかく」、即ち後ろに [i] が続くような気分で発音して [jest'] を続ける *сестъ* とは意味が異なることになります。しかし硬音符が捨てられてしまったのではこの区別はできません。

20年代のはじめに印刷されたものに、しばしば硬音符の代りにアポストロフィが用いられているのは、硬音符がないための苦肉の策でした。このような記法がかなり長い間続いたのを見ると、硬音符の調達には大分時間がかかったようです。

第二次世界大戦の時にロシアのウクライナ地方はナチス・ドイツの占領下に入りましたが、この時ナチスは帝政時代の綴字法を復活させようとして、こ

れを奨励したといわれています。これもナチスへの忠誠度を測るための踏絵だったのでありましょう。

このように考えてみますと、文字の改革というのは一国の文化というだけにとどまらず、政治、思想上の重大事であることが判ってきます。そしてロシアの場合にも文字改革を進めようとするのがいつも学校の教師であり、反対に回るのが作家であったというのは、極めて興味深い問題です。日本の国語政策はどうなっており、どうなっていくのでありましょうか。つい考え込んでしまうのです。

2. ロシア語の発音の特徴

§7 さて今硬音符について少し触れましたが、文法ではこの文字は普通、音を持たないと説明されています。音のない文字が存在するということは、それ自体驚くべき不思議なことと思われそうですが、これにはそれなりの訳があります。スラヴ語に特に体系的に現れるいわゆる「硬音」と「軟音」との対立と関係しているのです。

スラヴ言語学では「硬い」音と「軟らかい」音ということがよく言われますが、一体「硬い」とはどういうことか、また「軟らかい」とはどういうことかについての、納得できるような説明は、寡聞にして見あたらないように思われます。私の考えでは、これは次のようなものであると思われる。

まず次のような「式」を考えてみます。

$$x = \text{KI} - \text{I}$$

$$y = \text{KO} - \text{O}$$

さてこの x と y ははたしてイコールでしょうか。言い換えればこの二つの K の音は同じ音なのでしょうか。注意深く観察してみれば、この二つは同じではありません。 $x \neq y$ です。

音については百見は一聞に如かずであって、書いた言葉で説明するのは大変難しいのですが、最初の場合は舌が前の方で破裂を作るので、「キ」に近い音になるのに対して、後の場合は、英語のたとえば pack の「ク」のような音になります。

いま最初の $K=x$ の音を仮に K_1 とし、後の $K=y$ の音を K_2 と表すことにしますと、 K_1 は K_2 に較べて口の前の方で発音されていることが判りま

す。これは KI と KO を交代で発音してみて、舌の動きがどうなっているかをみれば、割にはっきり判ることです。

たとえば [o], [u] と発音した後で [i], [e], [ɛ] を発音してみると、舌が口の中で後ろから前へ移動していることが感じられることでしょう。[i], [e] などは口の前の方で発音される^{まえじた}前舌母音なのです。従ってその前に来る子音も、無意識にそれに備えて、あらかじめなるべく前の方で発音するようになります。逆に [o], [ɔ], [u] などの^{あとじた}後舌母音の前にある子音の場合には、なるべく口の奥の方で発音した方がつながりがよくなる訳です。もし K_1 に続けて後舌母音の O を発音すると「キョ」のようになるし、 K_2 に前舌母音の I を続けると「クィ」のような音になります。

このように、子音はただ一つの点でしか発音されないわけではなく、後に続く音を予想しながらある範囲の中で発音点(調音点という)を移動させるのです。ロシア語やスラヴ語では、ある子音あるいは母音を発音するとき、口の前の方で発音されるものと比較的後ろの方で発音するものとがある場合には、前の方で発音されるものを「軟らかい」と定義し、後の方で発音されるものを「硬い」と定義します。

§8 またロシア語では я [ja], ю [ju], е [je] のように要素 [j] をもった「母音」があります。これは複合音であって一つの「母音」と考えるのは誤りのようにも思われますが、実はア・プリオリに「母音」とか「子音」とかいうのは必ずしもなくて、ある言語の体系の中で「母音」として扱われれば、母音であると認めることができるのです。

たとえば後で述べるように、印欧語比較言語学で再構成された理論的な「印欧祖語」の体系の中では、音韻は母音と子音に分れるのではなくて、その中間にソナントといわれているものがあります。子音は英語で consonant といわれますが、con- はラテン語で「共に」を表し、ロシア語の съ- (< сън- < *kom-) と同源です。

また sonant は「音がするもの」という分詞から来ています(cf. Sony). すなわち、consonant は「何かと共に音を立てることのできるもの」で、単独では音を立てられないものと考えられた名前です。そうすれば sonant というのは、「それ自体で音を立てられるもの」ということになります。

印欧祖語の場合, *i, *u, *l, *r, *m, *n がこれにあたります。ソナントは響きの高い子音で、母音と共に用いられると子音として、子音の間に挟まれると母音として働きます (たとえばその反映として梵語の Rgveda 「梨具吠陀^{リグヴェーダ}」とか、現代チェコ語の vlk 「狼」、krk 「首」などがあります)。

*i と *u だけは子音として働くときの文字 *y と *w とをもっていますが、その他のソナントには子音として働く形しかありません。そこで比較言語学者たちは母音として働くソナントを *l, *r, *m, *n のように表しています。そうすると印欧祖語では本来の母音としては *a, *e, *o とその長母音しかないことになります。

一方、印欧祖語では、二重母音は母音とソナントが結合したものとして扱われますから、たとえば *ai, *au, *al, *ar, *am, *an などは、この言語ではすべて二重母音なのです。

§9 そういう訳でロシア語の場合、[j] のついた母音も、全体として母音と考えることができます。この時、たとえば [ja] と [a] とを較べますと、[ja] の方が前の方で発音される [j] をもっていますから、先に述べた定義によって、「軟らかい」母音と考えられます。そこで文法によく出てくる「硬母音」と「軟母音」の区別が生じることになります。

ここで少し説明を加えておく必要があるのは、第一に o と e 及び ъ の関係、及び и と ы の関係です。音声だけでいえば、硬音

硬母音	а	у	ы	о	э
軟母音	я	ю	и	ё	е

の [o], [ə] に対応する軟音は、それぞれ [ë] と [e] でなければなりません。しかし文法的には [o] に対応する軟母音は [e] と [ë] であり、[ə] は体系から外されています。その理由は、一つには *jo が歴史的に je (e) に変化したことによって、[o] と [e] が対立するようになったこと、並びに ə はもともと外来語であって、本来語では俗語起源の этот 以外には用いられないことにあります。また ё はアクセントをもった é が、ある条件を満たしたときに変化したものですから、o との対立には変化がありません。

第二に ы と и についていえば、ы は [i] と発音しながら舌を後ろに引くことができる音です。万国発音記号 (IPA) ではこれを [ɨ] によって表しています。

したがって定義により [ɐ] は硬母音になります。

子音の場合には軟らかい子音が語末に来たときには軟音符 ъ で、硬い子音が来たときには硬音符 ь でこれを表しました。これが、これらの記号の本来の使い方でありました。

通常は語末の場合、あるいは硬母音が続く場合は、子音は自然に「硬く」発音され、後に軟母音が来たときには自然に「軟らかく」発音されます。したがって硬音符は語末に限ってではなくてもよいのですが、軟音符はなくてはならないことになります。

語中の場合、たとえば前に挙げた *сесть* 「坐る」の場合には、語頭の *с-* は自然に軟らかく発音され、スムーズに次の母音に移行しますが、*съесть* 「食べてしまう」の場合には、語頭の *с-* は「硬く」発音されなければなりません。

したがってこの場合、次の母音にスムーズに移行することができないために、何か *с* と次の *е* の間が切られたような印象を与えることになります。硬音符が時に分離符といわれるのは、このような印象に基づいた命名であると考えられます。従ってこの場合、アポストロフで代用することもできた訳です。

序でに言えば、先に例として挙げた *К* は、軟音と硬音の対立が比較的分かり易いためにこれを用いたのですが、本来ロシア語ではこの音は常に硬く発音され、軟らかく発音されることはありませんでした。その理由は、軟らかい *К* が歴史的に **k > ts* あるいは **k > tʃ* のように別の音に変化してしまったためなのです。したがってこれらの喉音 *К, Г* に軟母音が続くものはそれより後に生じたものです。

(1) 母音

§10 はじめロシア語の読み方を解説する部分はなかったのですが、平成11年度および平成12年度前期の受講生から、教えて欲しいという要望が出されていました。そこで読み方について、簡単に説明することにしました。以下がその追加部分です。

既に表で示しましたように、ロシア語の母音には硬母音と軟母音とがあります。そして硬母音と軟母音とは原則として対応しています。すなわち、

硬母音	а [a]	ы [ɨ]	é [e]	о [o]	у [u]
軟母音	я [ja]	и [i]	е [je]	ё [jo]	ю [ju]

[j] の要素は舌の前の方で調音 (発音すること) しますから、この要素のついた母音は全体として [j] を持たないものに比べて前の方で調音されることになります。先に子音について、舌の比較的前の方で調音されるものを「軟らかい」と定義しました。したがって [j] のついたものが「軟らかい」ことになります。しかしこれは純粹に音声的な立場から見た対応表です。更にこれも前に説明しましたが (cf. p.19), ы と и とが対応しているのは, ы [ɨ] が舌を [i] の位置から後ろに引いて発音されることから, これが и に対応する硬母音になる訳です。

これに対して実際に使われるのは, 文法的な対応表です。これは次のようなものです。

硬母音	а [a]	ы [ɨ]	о [o]	у [u]	ə [e]
軟母音	я [ja]	и [i]	е [je], ё [jo]	ю [ju]	—

これが音声的な対応と異なっているのは, (1) 硬母音 о に対応するものが e と ё であること, および (2) ə が対応の軟母音を持たないこと, の二点です。

- (1) の理由は, スラヴ語族が今のように分裂していない時代に [o] に音声的に対応していた [jo] が [je] に変化したこと, およびアクセントをもつ [je] のあるものがその後 [jo] に変化したことです。
- (2) は ə が本来ロシア語にはなかった音で, 現在でも外来語の外には俗語に由来すると思われる əTOT 「これ, この」に用いられるだけだからです。

(2) 子音

§11 子音の発音は表の中で発音記号に示したとおりですが, 幾つか注意する必要のあるものがあります。

1. т, д — 英語の t と d は舌の先 (舌尖^{ぜっせん}) を歯茎に当てて調音します。それでこれを「歯茎音」alveolar といいます。これは息が強く出ますし、そのために後に来る母音が i でも o でもあまり音色に変わりはありません。

しかし日本語の t と d は舌尖が歯の先に当たります。それでこれを歯音 dentals といいます。これはあとに [i] の要素が来ると「軟らかく」(音声学的には「口蓋化」palatalization といいます) になって「チ」, 「ヂ」のようになります。

ロシア語のばあいも歯音ですから, и が来ると「チ」, 「ヂ」になります。また e は発音が [je] ですから, 同じように「チェ」, 「ヂェ」のように発音されます。つまり軟らかい母音の前では常にこのような「軟らかい」発音になります。

これを音標文字では [t], [d] で表します。しかしこのような記号はいろいろ面倒なので, 便法として [t'], [d'] のようにアポストロフィが使われます。

「軟らかい」ти, ди は日本語の「チ」や「ヂ」と同じように発音されるといいましたが, これらは「軟らかく」発音されるだけで「破裂音」です。破裂音というのは舌で息をせき止め, 一度にそれを緩めることによってできる音です。どこでせき止めるかによって音の種類が変わります。「歯音」, 「歯茎音」などがそうですが, このほかにも喉のところでせき止める「喉音」(k, g のようなもの), 「唇音」(p, b のようなもの) などがあります。

2. 「摩擦音」 — 「破裂音」に対して, 音を破裂させて出すのではなく, 摩擦をして出す「摩擦音」というものもあります。s, z, sh [ʃ], 英語の th [θ] または [ð] などがこれに当たります。

これに対して英語の ch は破裂させると同時に摩擦をさせます。発音記号に [tʃ] のように, [t] と [ʃ] の二つが結合されて示されているのはこのためです。したがってこれは「軟らかい」[t] とは全く違った音です。

次のものは歯音ですが, この類に属する摩擦音として c, ɣ があります。発

音してみましょう。

歯 音				
та	тə	то	ту	ты
тя	те	тё	тю	ти
да	дə	до	ду	ды
дя	де	дё	дю	ди
са	сə	со	су	сы
ся	се	сё	сю	си
за	зə	зо	зу	зы
зя	зе	зё	зю	зи

3. 英語の sh に近いのは ш です。これは元々 [ʃt] だったのが [ʃʃ] > [ʃʃ] というように変化したものです。

これに対して ш は音声学では「そり舌音」retroflex と呼ばれるもので、舌を後に丸めて「シュ」という音を出すものです。またこれに対応する有声音は ж です。

発音記号では正確には [ʂ] および [ʐ] と表すようですが、文字が得られにくいと面倒なので、ふつうは [ʃ] および [ʒ] で表されます。そのため ш は ш と区別するために [ʃʃ] と表されます。

この音がロシア語の ш よりも「軟らかい」印象を与えるためです。

ロシア文法では ш, щ, ж に破擦音の ч [tʃ], ц [tʃʃ] を加えたものを「シュー音」と呼んでいます。古くはこれを「上顎音」と呼ばれていました。

シ ュ ー 音					
ча,	чо,	чу,	че,	чё,	чи
ша,	шо,	шу,	ше,	шё,	ши
ща,	що,	щу,	ще,	щё,	щи
жа,	жо,	жу,	же,	жё,	жи
ца,	цо,	цу,	це,	цё,	ци

4. 次の表の子音は「喉音」です. κ [k], Γ [g], χ [x] がこれですが, このうち χ は喉の奥で「ハッ」というような息を出す摩擦音です.

喉 音

ка,	ки,	ку,	ке,	ко
га,	ги,	гу,	ге,	го
ха,	хи,	ху,	хе,	хо

これらのシュー音と喉音には共通の特徴があります.「正書法規則」という規則の適用を受ける点です.

正 書 法 規 則

ψ を除いてその他の子音の後には ы , ю , я を書かない. もし文法的にこれらの文字が来るときには, これを и , у , а に変える. ψ の後では ю , я は у , а に変えるが, и も ы も用いることができる.

5. この外子音には唇音 labial および有声子音に属する л , р , м , н , й があります.

唇 音

па,	пэ,	по,	пу,	пы
пя,	пе,	пё,	пю,	пи
ба,	бэ,	бо,	бу,	бы
бя,	бе,	бё,	бю,	би
фа,	фэ,	фо,	фу,	фы
фя,	фе,	фё,	фю,	фи
ва,	вэ,	во,	ву,	вы
вя,	ве,	вё,	вю,	ви

その他の子音

ла,	лэ,	ло,	лу,	лы
ля,	ле,	лё,	лю,	ли
ра,	рэ,	ро,	ру,	ры
ря,	ре,	рё,	рю,	ри
ма,	мэ,	мо,	му,	мы
мя,	ме,	мё,	мю,	ми
на,	нэ,	но,	ну,	ны
ня,	не,	нё,	ню,	ни

6. й は俗に「半母音」とも呼ばれますが、英語の y [j] を表します。前にも言いましたように、ロシア語では [j] は母音と結合して「軟らかい」母音を作りますから、й の役割は母音の後について二重母音を作ることにあります。

これらは、前に説明しましたように (cf. p.17), 音声学的にはソナントに当り、母音と子音の間にあるものです。

й

ай,	эй,	ой,	уй,	ый
яй,	ей,	ёй,	юй,	ий

(3) アクセントと母音の減衰

§12 ロシア語のアクセントは強さアクセントです。アクセントをもった母音は少し長めに発音されます。アクセントを持たない母音は弱まり、音色が変るばあいもあります。細かいことはここでは述べる余裕がありませんので、大まかなことだけに話を限ることにします。なお ë は常にアクセントをもっています。

一番目に (耳に?) つくのは, o です。a と o は次の規則に従います。

- (1) アクセントのある音節では [a,ɔ]. 例) órgan [órgən] 「器官」 (cf. orgán [ɐrgáːn] 「オルガン」)
- (2) 語頭およびアクセントのすぐ前の音節では中間的な a [ɐ]. 例) стакáн [stɐkáːn] 「コップ」, оркэ́стр [ɐrk'ɛːstr], 「オーケストラ」, Москв́а [mɐskváː] 「モスクワ」
- (3) その他の位置では [ə] と発音されます. 例) йва́ [íːvə] 「やなぎ」, ко́локол [kɔːləkəl] 「鐘」
- これに対して e, я は次の規則によります.
- (4) アクセントのある音節では e, я はそれぞれ [je, ja] と発音されます. 例) э́сть [jɛːstʲ] 「存在する (cf. E. is, Ger. ist)」
- (5) 前に立つ子音が硬子音のときは, これを対応する軟子音にして [e] と発音されます. 例) студэ́нт [stud'(j)ɛːnt]
- (6) アクセントのない音節のばあい, 語頭またはアクセントのある音節のすぐ前にあるときには, e, я は [jɪ] と発音されます. [ɪ] は [i] より心持口の開きが大きいものです. 例) Еврóпа [jivróːpə] 「ヨーロッパ」, семина́р [s'imináːr] 「ゼミナール」
- (7) 語末にあるときにはどちらも [jə] のように発音されます. 例) воскресе́ние [vɔskr'is'ɛːn'ijə] 「日曜日」

(4) 子音の同化

§13 子音の有声・無声の同化といわれている現象は, 次の規則に従って行われます.

- (1) 母音および対応する無声音のない有声子音 (л, р, м, н, й) ならびに в を除くその他の有声子音は, その前に立つ無声子音を有声化します. л, р, м, н, й および в < IE *w が前にある無声子音を有声化しないのは, これが母音に近い性質を持ったソナントだからだと思います.

- (2) 逆に無声子音は、母音とソナントを除く有声子音の前にあるばあいには有声化します。
- (3) ただし **в** だけはソナントに由来してはいますが、無声子音の前で無声化し、**ф** になります。**ф** はもともと外来音ですが、この音が有声子音と結合する語は今のところありません。
- (4) この外、(2) で述べたような無声化をうける有声子音は、「完全な語末」absolute final でも無声化します。この現象を同化と区別して「中立化」と呼ぶ人もいます。

実例を見てみましょう。

- (1) **ры́бка** 「小魚」、**вы́ставка** 「展覧会」、**во́дка** 「ウオツカ」、**вождь** 「族長、指導者」、**ска́зка** 「民話、おとぎ話」
- (2) **экза́мен** 「試験」、**сда́ча** 「お釣り」、**футбо́р** 「フットボール」
- (3) **за́явка** 「申請、エントリー」
- (4) **ге́рб** 「紋章」、**гне́в** 「怒り」、**архипела́г** 「群島」、**Леони́д** 「レオニード(人名)」、**Кавка́з** 「カフカス、コーカサス」、**бага́ж** 「手荷物」、**молоде́жь** 「若者」

§14 子音がいくつか結合したときに発音が文字通りにならないばあいがあります。

- (1) **с / з + ш / ж > шш / жж** 例) **сшить** [шшить] 「縫い合わせる」、**зжать** [жжать] 「握りしめる」
- (2) **сч / зч > щ** 例) **счёт** [щёт] 「計算、勘定」、**изво́зчик** [изво́щик] 「御者」
- (3) **чт > шт, чн > шн** (特定の語にのみ起る) 例) **что** [што] 「何」、**ску́чно** [ску́шно] 「退屈だ」

- (4) стн / здн / стл > [сн] / [зн] / [сл] . これは特定の語において起ります. 例) гру́стно [гру́сно] 「悲しい」, по́здно [по́зно] 「(時間が) 遅い」, сча́сливый [щасли́вый] 「幸福な」

第 二 話

暦について

§15 ロシアは 1917 年、ソヴェト革命が起った翌年まで、ユリウス暦を使っていました。しかしヨーロッパや日本などの多くの国は新暦といわれるグレゴリオ暦を使っていましたから、換算する必要があります。日本でも明治 33 年 (1900) までは旧暦といわれる天保暦を使っていました。これはユリウス暦とは異なるものですが、いずれにしてもここでざっと暦のことについて述べておくことが必要だと思います。

暦の歴史は極めて古く、遠くエジプトに遡るとされますが、ローマを建国し、ローマという名にその記憶をとどめている伝説の王ロムルス Romulus が、紀元前 750 年に暦を制定したといわれています。これをヌマという王が紀元前 710 年に改訂したと伝えられます。この暦によれば 1 年は 355 日であったといわれますが、紀元前 46 年になると、有名なユリウス・カエサルがエジプトの暦の体系の整然としていることに感激して、暦の改革を行いました。こうして 1 年は 365 日になりました。

古いローマでは 2 月 23 日に国境を護る神 Terminus に捧げる国民的な祭り Terminalia がありましたが、カエサルは閏年にはこの日の後にもう一日加えて、これも 2 月 23 日としました。つまり、2 月 23 日は閏年には二回あったわけです。閏年は 4 年に一度でしたから、一年はこのことによって平均 365.25 日になりました。

この暦はユリウス・カエサルの名を取って、ユリウス暦と呼ばれるようになりましたが、325 年にニケアで行われたニケア公会議では、すべてのキリスト教徒がこの暦に従うことが義務づけられました。キリスト教世界の公式の暦となったのです。序でにいえば、この時、一年の初めは春分の日である 3 月 21 日にすることも決まりました。これを 3 月暦といいます。

§16 しかし本当の一年、つまり太陽が地球を一回りしてもとの場所に戻るのには、整数で割り切れないで、端数が無限小数の形で付いています。そ

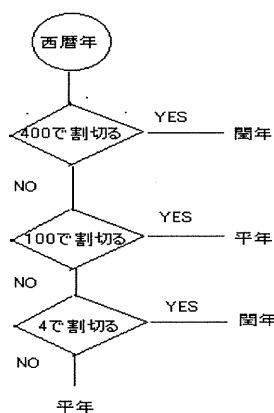
れによれば1太陽年は365.242199.....日ということになります。4年に一度閏年をおいて一年を365.25日としても、この端数は400年経つと積み積って3日の誤差になります($365.25 - 365.242199..... = 0.007801.....$; $0.007801..... \times 400 = 3.1204.....$ cf. p.37)。今度は多すぎるのです。それで少しずつ季節と暦がずれてきます。

それでローマ教皇グレオリオ13世(1502-1585)は、さきに100で割った元の数を今度は400で割ってみて、割り切れない年は閏年にしないと決めました。こうすれば400年に3回あるよけいな日が省けるからです。もちろんこうしても完全に暦と太陽の動きとが一致することはあり得ませんが、その差は1年の平均で0.000301.....となり、1万年に3日の誤差が生じるに過ぎないことになります(i.e. $0.007801 \times 400 = 3.1204$; $(3.1204 - 3) \div 400 = 0.000301$; $0.000301 \times 10000 = 3.01$)。まずは我慢できる程度の狂いだということになります。

しかしこの場合別の問題も生じていました。春分はユリウス暦の上ではこの時3月11日になってしまっていたのです。それで10日を省く必要が出てきました。

その主な理由は教会の祝日のうち、聖人の日のように固定されたもの以外のいわゆる「移動祭日」と呼ばれるものが、すべて春分の日次の満月の後の日曜日に行われる復活祭を基準にして定められていたからです。

ユリウス暦のまま放置しておくと、春分は実際の暦より早くなって、やがて復活祭を真冬に祝わねばなることでしょう。グレゴリオ13世は改暦教書というものをだして、ユリウス暦1582年10月4日(木)の次の日をグレゴリオ暦1582年10月15日(金)としました。このことによって、食い違った10日の問題を解決し、曜日の連続性を保つという問題も、同時に解決したの



です。

§17 ユリウス暦からグレゴリオ暦への移行は、国によってさまざまです。

例えば教皇グレゴリオ 13 世の教書に直ちに応じたのはイタリアの大部分でした。すなわちローマ・カトリックを奉じるイタリア、スペイン、ポルトガル等は定められた日にグレゴリオ暦に移行しました。

フランスは少し遅れて、同じ 1582 年の 12 月 10 日をグレゴリオ暦の 12 月 20 日にすることによって、新暦に移行しました。ユリウス暦 1582 年 12 月 10 日は月曜日で、グレゴリオ暦の同じく 12 月 20 日も同じく月曜日でしたから、この場合にも曜日の連続性が確保できたわけです。

オランダのカトリックの地方もおなじく 2 カ月遅れて移行しました。ドイツやスイスなどのカトリック教徒の多く居住する地方は 1583 年、ハンガリーは 1587 年に、それぞれグレゴリオ暦に移行しました。(p.31 以下の表参照)

ドイツの福音教会はグレゴリオ暦に移行するとカトリックの発言権が大きくなると考えて、長い間逡巡した後、1700 年になってやっと移行しました。

この時には、もう 11 日を省くが必要になっていましたから、2 月 18 日の翌日をグレゴリオ暦 3 月 1 日としました。ユリウス暦 2 月 18 日は日曜日で、グレゴリオ暦 3 月 1 日は月曜日だったのです。

この同じ 1700 年には、新教を奉じるデンマークおよびスイスでも改革が行われました。英国国教会を奉じるイギリスでは、移行が行われたのは、1752 年で、ユリウス暦 9 月 2 日 (水曜日) の翌日をグレゴリオ暦 9 月 14 日 (木曜日) としました。同時にイギリスではそれまで 3 月 25 日としていた一年のはじめの日を 1 月 1 日に改めました。

翌 1753 年にスウェーデンは 3 月 1 日の前の 11 日を省くことにしました。すなわち、ユリウス暦 2 月 17 日 (水) の翌日をグレゴリオ暦 3 月 1 日 (木) としたのです。

これは新たにインターネットによって Karl T. Hagen 氏の資料を入手してこれを参考にして作成したものです (<http://ourworld.compuserve.com/homepages/khagen/GregComv.html>, Copyright 1996 by Karl T. Hagen. Last updated May 28, 1999). なお曜日は筆者の調査によるものです。

グレゴリオ暦移行の年月日					
国名	移行年	ユリウス暦 移行前日	グレゴリオ暦 移行日	曜日	備考
イタリア	1582	10.4	10.15	金曜	
スペイン	1582	10.4	10.15	金曜	
ポルトガル	1582	10.4	10.15	金曜	
ポーランド	1582	10.4	10.15	金曜	
フランス	1582	12.9	12.20	月曜	
ベルギー (一部)	1582	1582.12.21	1583.1.1	土曜	スペイン語諸州
オランダ (一部)	1582	12.21	1583.1.1	土曜	Holland ¹
ベルギー (一部)	1583	2.10	2.21	月曜	Liège
ドイツ (旧教)	1583	2.13	2.24	木曜	Augsburg
ドイツ (旧教)	1583	10.4	10.15	土曜	Trier
ドイツ (旧教)	1583	10.5	10.16	日曜	Bavaria
オーストリア (一部)	1583	10.5	10.16	日曜	Tyrol
ドイツ (旧教)	1583	11.2	11.13	日曜	Jülich
ドイツ (旧教)	1583	11.3	11.14	月曜	Cologne
ドイツ (旧教)	1583	11.4	11.15	火曜	Würzburg
ドイツ (旧教)	1583	11.11	11.22	火曜	Mainz
ドイツ (旧教)	1583	11.16	11.27	日曜	Baden
オーストリア (一部)	1583	12.14	12.25	日曜	Carynthia ²
神聖ローマ帝国宮廷	1584	1.6	1.17	火曜	
スイス (一部)	1584	1.11	1.22	日曜	Lucen ³
ドイツ (新教)	1584	7.1	7.12	木曜	Westphalia
ポーランド	1584	1.12	1.23	月曜	Silesia
スペイン	1584	?	?		アメリカ植民地
ドイツ (新教)	1585	6.16	6.27	木曜	Paderborn
ハンガリー	1587	10.21	11.1	日曜	
ハンガリー (一部)	1590	12.14	12.25	火曜	Transylvania
ドイツ (新教)	1610	8.22	9.2	木曜	Prussia
ドイツ (新教)	1615	12.13	12.24	木曜	Neuburg
ドイツ (新教)	1617	?	?		Kurland
ドイツ (新教)	1624	?	?		Osnabrück

つ　　づ　　き					
ドイツ (新教)	1631	3.15	3.26	水曜	Hildesheim
スイス (新)	1655	2.28	3.11	木曜	Wallis
フランス (新)	1648	?	?		Alsace
ドイツ (新教)	1668	2.1	2.12	日曜	Minden
フランス	1682	2.5	2.16	月曜	Strasbourg
ドイツ (新教)	1700	2.18	3.1	月曜*	その他の地方
デンマーク	1700	2.18	3.1	月曜	
ノールウェイ	1700	2.18	3.1	月曜	
オランダ (新)	1700	6.30	7.12	月曜	Gelderland ⁴
デンマーク (新)	1700	11.16	11.28	日曜	Færø諸島
アイスランド	1700	11.16	11.28	日曜	
オランダ (新)	1700	11.30	12.12	日曜	Utrecht ⁵
スイス (新)	1700	12.31	1701.1.12	水曜	Zürich ⁶
オランダ	1700	12.31	1701.1.12	水曜	Friesland ⁷
オランダ (新)	1701	4.30	5.12	木曜	Drente
スイス	1724	?	?		Appenzell ⁸
イギリス	1752	9.2	9.14	木曜	
アメリカ	1752	9.2	9.14	木曜	イギリス植民地
スウェーデン	1753	2.17	3.1	木曜	
フィンランド	1753	2.17	3.1	木曜	
ドイツ (全土)	1775				
アメリカ	1867	10.5	10.18	金曜	Alaska
ブルガリア	1915	11.1	11.14	日曜	
ギリシア	1916	7.14	7.28	金曜	
トルコ	1917	?	?		
ロシア	1918	1.31	2.14	木曜	
エストニア	1918	2.1	2.15	金曜	
ラトビア	1918	2.1	2.15	金曜	
リトアニア	1918	2.1	2.15	金曜	
ユーゴ	1919	3.4	3.18	火曜	
ルーマニア	1919	3.31	4.14	月曜	

また表の中の肩付の番号がつけられているものは、施行されたのが複数の地方にわたっているために表の中に書けなかったものです。これらについては以下の表を参照してもらいたいと思います。

1. Holland, North Brabant.
2. Carynthia, Styria.
3. Lucen, Uri, Schwyz, Zug, Freiburg, Solothurn.
4. Gelderland, Zutphen.
5. Utrecht, Overijssel.
6. Zürich, Bern, Basel, Schaffhouse, Geneva, Thurgovia.
7. Friesland, Groningen.
8. Appenzell, Glarus, St. Gallen.

ドイツのばあいには地方によってさまざまであることが、31ページの表から認められます。このため日付について大変な不便が起ったと考えられます。新教を奉じる地方では表にありますように、ユリウス暦1718年2月18日の次の日をグレゴリオ暦の3月1日にすることでようやく大体の決着がつけました。

しかしこれには条件が付いていて、閏の置き方(置閏法といいます)はグレゴリオ暦ですが、復活祭と復活祭を決める際の基準になる春分点の決め方は、ルドルフ表によってウラニエンボルグの子午線を基準に決めることとした[63, p.60]。

この暦法はデンマークでも採用され、スイスでもバーゼルなどの地方では1701年1月12日に、オランダの新教徒の地方では1700年7月1日あるいは12月1日に、また一部は1701年1月12日にこれに従ったといわれます。これは改良暦といわれるものでありました。

§18 改良暦には二つの問題があります。ルドルフ表 *Tabulae Rudolphinae* というのは「ケプラーの法則」で有名な天文学者ケプラー Johannes Kepler (1571-1630) が作ったものです。有名なデンマークの天文学者ティコ・ブラーエ Tycho Brahe (1546-1601) は、プラハを居城としていた神聖ローマ帝国の皇帝ルドルフII世(在位1576-1612)の許可を得て、ケプラーをプラハに招待しました。翌年ブラーエが没した後、彼は皇帝付数学者 *Imperatoris Mathematicus*

になったといわれます [46, pp.102-114].

ケプラーは後に火星, 月, 日, 惑星の暦を作りました. それを皇帝ルドルフ II 世に捧げて「ルドルフ表」と名付けたのです [46, pp.115-117].

ケプラーが行った計算は当然ユリウス暦に基づいていましたから, 復活祭の日付も勿論ユリウス暦でした.

§19 もう一つの問題は基準となる子午線をウラニエンボルグに定めたことでした.

ウラニエンボルグというのはおそらくウラニボルイ Uraniborg のことだと思います. これがあるベン島 Ven は今述べたティコ・ブラーエの故郷で, 彼によって 1576 年に天文台が置かれました. 現在はスウェーデン領ですが Hveen あるいは Hven [va:n] と呼ばれ, スウェーデンとデンマークの間の Øresund [ørəsən] 英名 The Sound 海峡にあります. 従ってこれはグリニッジとさほど経度は異なっていないと思われますから, 問題はないようにも見えます.

しかし基準をどこかに置くというのは, そのこと自身が具合が悪いことになることもあります. 日付変更線の両側では一日日付が異なることはよく知られています. だから基準点は決めないでそっとしておかないと, 世界の人々が皆同じ日に復活祭を祝うことができなくなるのです. そういうわけで教会の暦法上は春分はどこの子午線に準拠しているかということはいわないで, いつも暦面上の 3 月 21 日と決めてこの問題を避けているのだそうです [46, pp.84-85].

とにかくこのように, 本質的にはユリウス暦に基づき, 基準点を一定の地点に置いたもので妥協した暦を「改良暦」というそうです. しかし 1724 年と 1744 年の復活祭はグレゴリオ暦と一致しませんでした. そして同じことが 1778 年にも起ることが分りましたので, プロシア王のフリードリヒ II 世は 1775 年 12 月 13 日に復活祭をグレゴリオ暦に従うことにして, その翌年に「帝国改良暦」というものを作ったといわれます. これは結局グレゴリオ暦そのものに他なりません [63, p.60].

ロシア正教会が永らくグレゴリオ暦を認めなかった主な理由として挙げられたのは, グレゴリオ暦が教会の典範^{かんぱん}から外れているということだったよう

です。

すなわちニケアの公会議で定められたカノンに拠れば、復活祭はユダヤ教徒と同じ日に祝うべきではなく、また、彼らよりも早く祝ってはならない。少なくとも彼らよりも一日は遅くなければならないというものでした。

ユダヤ教徒は春分の後の満月の日に復活祭を祝っていましたが、ロシアでは復活祭はその後の日曜日に祝うことになっていたのです。グレゴリオ暦はユダヤの復活祭に対する考慮を行っていないため、復活祭はユダヤの復活祭と同じ日になったり、それよりも前になったりすることがあります。

こういうわけで、カトリック側からのさまざまな努力にもかかわらず、ロシア正教会はグレゴリオ暦を採用せず、カトリック側と宗教的な論争を重ねてきたのです。

革命後、国が公式にグレゴリオ暦に移行した後でも、ロシア正教会は依然としてユリウス暦を使用してきました。ソヴェト体制が崩壊した今日では、一層その傾向が強まっていると思われます。

たとえばインターネット上に見られるロシア正教の「正教か死か」に見える大主教セラフィム師の主張はロシア正教の公式の立場を示していると思われますが、この点に関して現在でも全く譲歩を見せてはいません (http://www.-rusk.ru/Orthodox_Press/Almanac/Alm6/ab_3.htm)。

表の中で(新教)としているのはプロテスタントの地方です。またアスタリスク(*)を付けているのは、「改良暦」といわれているもので、これは実際にはグレゴリオ暦なのですが、春分点と復活祭の満月の日付については、天文学的に決めるというものだそうです。また表の何時改暦したかという改暦の日付は国によっては地方毎に複雑な経過を辿ったようです。

§20 日本がそれまでの月の運行に基づく太陰太陽暦から太陽暦に変わったのは、1872(明治5)年だということですが、この時はユリウス暦を使うのか、グレゴリオ暦を採用するのか明示されていなかったもので、1898(明治31)年5月11日の勅令によって、1900(明治33)年からグレゴリオ暦を採用することが明示されたとのこと [63, pp.59-63][53, pp.295-326]。

渡辺敏夫はこれについて次のように書いています。

明治五年改暦に際し、太陽暦は採用されたが、布告中には閏年のことに関し

ては「四年毎に一日を置く」とだけ規定され、グレゴリー暦法であるか、ユリウス暦法であるか明示されていなかった。明治三十三年は西紀一九〇〇年に当るので、グレゴリー暦では平年になるから、明治三十一年五月十一日勅令第九十号で暦年に関して、

朕閏年ニ関スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

と、明らかにグレゴリー暦なることが示された。

神武天皇即位紀元数ノ四ヲ以テ整除シ得ベキ年ヲ閏年トス。但シ紀元数ヨリ六百六十ヲ減ジテ百ヲ以テ整除シ得ベキモノノ中、更ニ四ヲ以テ其数ヲ整除シ得ザル年ヲ平年トス

かくしてわれわれはグレゴリー暦法を採用して現在に至っている [63, p.98].

つまり、既に述べたように、ユリウス暦では4で割り切れる年を閏年としているのに対し、グレゴリオ暦は4で割り切れ、同時に100で割り切れる西暦年は平年とすることになっています。

神武天皇即位紀元は皇紀といわれているもので、西暦に660を加えたものです。したがって皇紀から660を引いて得た西暦の年数を100で割って割り切れる年と4で割り切れない年がグレゴリオ暦の平年になります。ただし400で割り切れる年は閏年になります。

ユリウス暦はこの100で割って割り切れる年も閏年にしますから、100で割り切れる世紀年(終りが00となる年)でその商が4で割り切れない年にはちょうど一日だけグレゴリオ暦よりもずれてきます。

グレゴリオ暦への改暦の回勅が行われた1582年にはこのずれが10日に達していました。これ以後は1700年、1800年、1900年に一日ずれますから、20世紀には結局13日のずれが起ります。

たとえば、ロシアで1910年3月7日は、イタリアでは1910年の3月20日に当たります。仮に2日かかってロシアからイタリアに着いたとき、日付は3月22日という奇妙なことになります。逆にイタリアの人が3月20日に同じく2日かけてロシアに行くと、3月の9日になるでしょう。馬車で旅行するような時間のかかる方法の場合はまだいいのですが、電話などの発達した現代では想像以上に面倒なことになると考えられます。

ところで2000年にはどうなるでしょうか。答は簡単で、20を4で割ると割り切れますが400でも割り切れますから、この年は閏年で、ずれは変りま

せん。序でに言えば、21世紀は2001年から始ります。

§21 このような面倒なことはどうして起るのでしょうか。先程ざっと説明しましたが、もう一度繰り返すと、原因は太陽の周りを地球が回って元の位置に戻るのが整数で表せないことにあります。春分点から再び春分点に戻るのを回帰年といいます、これはおよそ365.24220日に当たります。

これを仮に365.25と近似しますと、一年を365日としたとき、4年で一日のずれが起ります。4年に一度閏年を置いて1年を366日にするのはこのためです。しかしこのばあい、 $365.25 - 365.24220 = 0.0078$ 日だけ多くなります。 $0.0078 \times 400 = 3.12$ ですから、400年の間に3日多すぎることになります。そうすると世紀年のうち、100で割り切れるが400で割り切れない年を平年にすると、400年で0.12日だけ多くなります。これは100年で0.03日に当たりますから、一万年で3日のずれが起ることになります。実用的にはこれくらいのずれは影響が少ないので、取りあえずこれは考えないようにしよう、というのがグレゴリオ暦だといえます。

§22 改暦は人々の生活に密接な関係を持っているので、改暦には多かれ少なかれ混乱が伴いました。明治五年の改暦は維新後西欧に追いつくことを第一に考えていた政府の事情があったと思われますが、改暦建議書が提出されたのが11月の始めだったのにも拘わらず、改暦が行われたのはわずかその1週間後の11月7日のことだったといわれます。これについて渡辺は面白いことを言っています。

最も大きな問題は、旧暦では閏年のために、官吏に支払う月給が十二箇月であったり、十三箇月であったりしたのでは、年によって予算も違ってくる。二年あるいは三年に一度ずつ、十三箇月の一年があることは、西洋流に月給制を採用すると財政上に大きな支障を来すことは明らかである。明治六年は旧暦では閏年に当り、早速この影響が現れるので、財政逼迫に苦しんでいた明治新政府はこの困難を避けるための非常手段としての処置であった [63, pp.99-100]。

念のため言えば、日本の旧暦は、一ヶ月が29日か30日のどちらかで、閏年はそのどちらかの日数の月が一月加わって13ヶ月から成っていました。

渡辺敏夫はこれに続けて次のように述べています。

……明治八年の出版で、小川為治の『開化問答』の中に、旧平と開次郎の二人の問答体で、旧平を旧暦の方がはるかに便利で太陽暦が矛盾に満ち、毛唐人の恥辱を受けると悲憤慷慨させている。参考のため少し長いが引用しておこう。
……これ迄世間に於て旧来の暦を用い来り何一つ差支ふこともなかりしに、何を以て先年政府に於て足下より鳥の起つ如く急に太陽暦をとり用ゐこれをお廃しなされしか、更に合点の行かぬことで御座る。これまでの暦なれば四季の氣候を始めとして、天氣の様子、潮の干満に至る迄恒に定り居て大抵かはらぬ事なれば、職業を営む便利は勿論、衣服其外の用意に至りても自然に都合よく整いたる事でござるを、改暦以来は盆も正月もごたまぜにて、櫻が六七月頃に咲き、雷やいなびかり電が十月頃にはためき、雪や霰が四五月に降る次第なれば、かの土用綿入に寒帷子といふ諺に背かずして、万事につき甚不都合のみ多きことでござる。ナント年頭の札者が玉の汗を流しながら、誠にお暑うて結構なる春でござると口上を述べ、暑中の客人がガタガタふる戦へながら、大分むしむしと寒じ升と一札するを見ては、どうもこらへられぬではござらんか。……政府の毛唐人好の料簡より遂に晦日に月の出るようになり升した [63, pp.101-103].

旧暦は太陰太陽暦であったために農事と関係が深く、また晦日は必ず朔でしたから、新月で大潮でした。当然 15 日は満月だったわけです。十五夜というのは文字通りでした。この記事は、それまで慣れていたことが様子が変わってしまうために起る混乱をおもしろおかしく書いてあります。

イギリスでは表にも挙げましたように、1752 年 9 月 2 日水曜日の次の日を 9 月 14 日木曜日として 11 日を省きました。これに伴って

ロンドンなど各地で暴徒が町に集結し「我らの 11 日を返せ」と叫んだ。……ブリistolでは、改暦をめぐる暴動が、最後には死者を出す騒ぎにまで発展したらしい [53, pp.320-322].

とダンカンは書いています。暦が変わると支払日、給料日も変る可能性があります。11 日がなくなってしまうと、その影響が広く社会生活の上に及ぶのは明らかでした。

第 三 話

名詞の性

§23 英語を学んできたものには、ドイツ語やフランス語あるいはロシア語を学ぶときに、名詞に性があるといわれれば、はじめは何となく判るような気がするかも知れません。しかし生き物ならともかく、無生物にまで性の区別があると聞けば、奇異に感じない訳にはいきません。しかも性の区別は、フランス語では男性と女性の二つしかないのに、ドイツ語やロシア語には男性、女性の他に中性もあります。

それだけではありません。たとえば「太陽」はドイツ語では *die Sonne* といつて女性なのに、フランス語では *le soleil* [lə solɛʁ] のように、男性です。ロシア語といえば *солнце* となって中性になります。

どうしてこのような不合理なことが起るのかという質問に決って返ってくる答は、おそらくそう決っているのだからしょうがないというものでしかないであります。言語学にとっても、これは扱いかねる問題であつて、統語論的な意味しかないというのが、関の山です。

実際、性を区別する言語は形容詞が性を区別することが多く、またロシア語の動詞の過去形のように、形容詞以外にも性を区別することもあつて、それによって形容詞や動詞がどの名詞と関係しているかがはっきりするということはあります。

英語は比較的語順が固定しているので、形容詞が性の変化をしなくても、どの名詞に係るか分かり易いという説明もあります。しかし英語より語順の固定の程度が高いというフランス語は、形容詞が性による変化をしていますから、この説明はほとんど意味をなさないことになります。

§24 逆にロシア語の場合には語順がかなり自由ですから、形容詞が性を区別することによって、その形容詞がどの名詞に係っているかはかなり明らかになります。

たとえば印欧語の語根 *pleə⁻¹ はラテン語では plēnus 「一杯の、満ちた」、英語の full にあたるものですが、ロシア語では полн-ый という形で受け継がれています。この形容詞は、何で満たされているかを示すのに、名詞の属格という形を用います。ロシア語では「生格」といわれている形です。

例えばロシア語では полный воды стакан (「一杯の (男性単数主格)」+「水 (女性単数生格)」+「コップ (男性単数主格)」=「水で一杯のコップ」) という文章では полный 「一杯の」という形容詞は男性単数主格ですから、воды 「水」にかかることは絶対にありません。同じ男性単数主格の стакан 「コップ」以外にはないのです。

もちろんロシア語は語順がかなり自由ですから、стакан, полный воды ということもできます。

これに対して、例えば英語のように、形容詞がこのような変化をしない言葉では、たとえば *a full of-water cup ということはできません。この言語では修飾語と被修飾語をできるだけ近くにおいて誤解を避けるようになってますから、a cup full of-water というしかないことになります。

водá「水」の変化		
格	単数	複数
主格	водá	вóды
生格	воды́	вод
与格	водé	вóдам
対格	воду	вóды
造格	водóй	вóдам
前置格	водé	вóдах

§25 しかしだからといって、語順の自由さと、たとえば形容詞の変化とが直接に結びついていると考えるのも、また正しくはないであらう。ロシア語でも後のような語順、即ち стакан, полный воды という語順だけを使って、полный воды стакан のようなややこしい語順を止めることだってできるはずだ。

英語は変化を失ったために、これを補うために語順が固定したという人がいますが、逆に語順が固定したから変化を失ったという考え方も、同じように可能です。私は英語の場合後の方が可能性が高いのではないかと考えています。しかしこれについて詳しく論じるためには独立の論文が必要となるで

¹ アスタリスク * がついてるのは、印欧語比較文法で理論的に再構成された祖語の形を示しています。印欧祖語というのはインド・ヨーロッパ語族 (印欧語族) に属するさまざまな言語が独立の言語に分れる前に話されていたと考えられる言語で、比較言語学の方法を用いて理論的に推定した形です。もちろんこの形は理論的に考えられるいくつかの形のうちで可能性の高いと考えられているものであって、これが実際に話されていたとはかぎりません。

しょう。

しかしもしそうとすれば、性が統語論的な意味を持つというのもかなり疑わしいことになります。

これは格について話すときにいうことですが、序でに述べておけば、印欧語では例えば今例として挙げた full の場合のように、ある形容詞や前置詞が名詞のどういう格を要求するかという点で、意味的によく似た動きをすることが多く見られます。

たとえば「内から外へ」という動きを示す前置詞が、しばしば属格をとることがあります。ロシア語では из という前置詞は生格をとることになっています。例えば прыгнуть из окна (「跳ぶ」+「中から外へ」+「窓(単数生格)」=「窓から外へ跳ぶ」) というような場合です。英語の場合にも out はもともと属格をとっていたらしいとおもわれます。だから例えば jump out of-the-window のようにいうことになっている訳です。

もちろん印欧語のすべてがそういうわけではありませんが、割にそういう場合が多いことも確かであり、それが語源の共通性に根ざしていると思われるのです。したがってロシア語の生格要求の前置詞や形容詞について、例えば英語で of を伴っているかどうかを見てみるのも面白いでありましょうし、記憶に便であるかも知れません。

§26 さて、以上のようなことを考えてみますと、そもそも性について考えることは、それ自体意味のないことのようにも見えてきます。性の持つ不合理性は、生き物の場合にも見られます。

ロシア語の場合「子ども」をあらわす дитя́ という語は中性です。文法によればこれが中性なのは、子どもの場合には未だ性的に成熟していないからであるといえます。一方ロシア語では -ёнок という接尾辞をとって「子ども」を表す多くの語があります。たとえば ребёнок 「子ども」、тёлёнок 「子牛」、цыплёнок 「ひよこ」 etc.etc.

これらは何れも男性名詞として扱われていますが、これらが「性的に成熟している」と考えることは難しいでありましょう。

ドイツ語の場合にも指小辞をあらわす接尾辞 -chen があります。この接尾辞のついたものは、原則として中性名詞として扱われるのが通則です。しか

したたとえば Mädchen「乙女」は既に詩語になった Magd, Maid にこの指小辞をつけたものでありまして、性はやはり通則に従って中性になります。この場合には「性的に成熟していない」ということはできないでしょう。

スロヴァキアの著名な作家にムニャチコ Ladislav Mňačko (1919-) という人がいます。彼の作品の中に「死の名はエンゲルヘン」Smrt se říká Engelchen というものがあります。Engelchen というのは、1939 年のいわゆる「ミュンヘンの裏切り」Mnichovská zrada によって列強がナチス・ドイツのチェコ進駐を黙認した結果、ナチスの保護領 Protektorat になったチェコに君臨し、暴虐の限りをつくしたゲシュタポの指揮官の呼名ですが、文字通りには Engel「天使」に接尾辞 -chen がついたもので、「小天使」の意味になります。実に皮肉な渾名だということができましょう。これもまた中性名詞なのです。

従ってここでもまた、性を意味論的に解釈することは難しいという結論に達するようです。

§27 一方代名詞は一般に変化に対して極めて保守的であることが知られていますが、印欧語の場合、指示詞は *so (男性), *sā (女性) に対して中性は *to- のように語幹の区別がありました。梵語の sa, sā, ta, ギリシア語の ho (ὁ), hē (ἡ), to (το) がこれです。またラテン語ではたとえば指示代名詞 ille (男性), illa (女性) に対して中性は illud のように語尾が異なっていたこと、あるいはある種の形容詞ではたとえば omnis (男・女性) に対して中性は omne のようになっていることなどから、古くには男性と女性の区別はなく、男性・女性が全体として中性に対立していたのではないかという見解が、以前から主として比較言語学者の間でいわれて来ました。

ごく最近、帝政ロシア、ソヴェト、新しいロシアを通じて積み重ねられてきた言語研究の結果、内容的類型学というものが成立してきました。その中で、我々が知っている印欧語が対格言語というタイプに属するものであり、これ以外に活格言語および能格言語という、言語の全く異なったタイプの言語が世界に数多く存在していることが判ってきました。

このタイプの違いというのは、ここでは簡単に説明できませんが、世界の認識の仕方が全く異なっていて、従って言語そのものの構造が全く異なった論理によって構成されているというものです。

そして印欧語はその中の活格言語類型から発展したものであるという考えが、有力になって来ました。これは客観世界が生物と無生物の二つからなると考え、その原理が言語のすべての構造を貫いているものです。ここではある行為をとってみても、それが生物に関わるものであるか、そうでないかが最も重要な区別であり、他動、自動などの区別は存在しません。格にも主格とか目的格とかいうものはなく、全く異なった格の体系をもっています。

このような言語がやがて行為を他に及ぼすもの、並びに自分で行うか、ある性質を持っているものを併せて主格で表し、行為を受けるものを対格で表すようになって、自動詞、他動詞の区別が生れてきます。この過程の中で、生物が男性と女性に分れてくると考えられるのです。

§28 生物の場合にはそういう過程で説明できますが、無生物の場合には性の現象は説明できません。しかし印欧語の中に、たとえば「火」を示すものに、**a(i)gn-?*² cf. Lat. *ignis*, Skr. *agnis*, R. *ogon'* (огонь) のようなものと、**puər* cf. Gr. *pūr* (πῦρ), 「水」を表すものに **akw-* cf. Lat. *aqua*, Skr. *aka* のようなものと、**wud-?* cf. Gr. *hudōr* (ὕδωρ) のようなものがある、というように、同一の意味に対して二つの語彙が存在するものがあり、一方が男性あるいは女性の性を持ち、他方が中性名詞であるものが知られています。

このような語彙を集めた結果、有性のものは儀式に関わる宗教的なもの、中性のものは通常の語彙ではなかったかという説が唱えられています。何れにせよ有性のものと中性乃至無性のものの間には、何らかの社会的な価値の相違が存在し、性はその反映としてあったのではないかと考えられます。

有性の場合にも、生物の場合には雌雄の別が有性の中での性の分化をもたらした蓋然性が高いといえますが、この場合でも、何らかの社会的価値の反映が無意識に投影された可能性があります。

たとえばロシア語には集合からその集合に属する元ないし要素を取出すための接尾辞として、*-ин-* があります。これは個物としてというより、むしろ集団ないし集合として対象を認識し、従って集団ないし集合に対してまず名が与えられるような場合に用いられます。

たとえば *крестьян-* という名で「お百姓」という集団がまず認識され、更に

²cf. Gr. αἴγλη the light of the Sun or Moon, ἀγλαός splendid, shining.

二次的にその中の一人を抽き出すとき、この接尾辞を付加して *крестья́н-ин* といいます。従ってこの種の接尾辞を持つものは複数になるとこの接尾辞を失います。もはや必要ではなくなるからです。

たとえば *крестья́н-е* 「お百姓さんたち (複数主格)」などです。 *англича́н-ин* 「イギリス人」、 *бо́яр-ин* 「(モスクワ公国時代の) 貴族」などもそうです。

まず集団として認識されるということは、集団を構成するメンバーの個性が比較的弱いということを意味します。

たとえば日本人は初めてヨーロッパ人を見て「毛唐」といいました。毛髪から受ける印象が極めて強く、それが集団を決定する基準 (内包) となったからです。その中のある人物の特徴は、その後で初めて二次的に認識されるわけです。従ってこの種の構成を持つ単語は、民族名に多く見受けられることになります。

§29 それでは *-ин-* という接尾辞が付くものは全部男性名詞かといいますと、そうではありません。

無生物については *-ин-* は更に *-а* が付加されて女性名詞になります。たとえば *би́сер* 「ビーズ」、 *виногра́д* 「ぶどう」、 *же́мчуг* 「真珠」などの一粒を指すときには、それぞれ *би́сер-ин-а*、 *виногра́д-ин-а*、 *же́мчуж-ин-а* のようになります。これらのものは一つ一つが著しい個性をもっていると認識されるわけではありませんけれども、なお一つ一つ数えることができる程度には大きいといえます。

これに対してもっと粒が細かい場合には、よほどの暇人でなければ一つ一つを数えようとは思われません。この場合にはまず集合に名前が付けられる傾向は「ぶどう」などよりもはるかに強いと考えられます。

たとえば「砂」です。このようなものであっても、場合によってはその一粒を取出す必要が出てくるでしょう。たとえば *a grain of sand* というような場合です。

このような場合にはロシア語はどうするかといいますと、指小の接尾辞 (指小辞) で *-ин-* を延長します。たとえば *песо́к* 「砂」 — *песч-и́н-к-а*、 *пе́рец* 「胡椒」 — *переч-и́н-к-а*、 *рос-и́н-к-а* 「露の一滴」、 *волос-и́н-к-а* 「一筋の毛」、 *круп-и́н-к-а* 「穀物、塩などの粒」のような場合がこれに属します。

この接尾辞 -in-a および -in-ka を取るものが、女性名詞として扱われていることは、注目してよいでしょう。

このことからロシア語は対象の個別性の強弱に極めて敏感な言語であるといえます。そして女性が男性よりも弱い個別性を持つという言語状態が、無意識の中に存在していると考えられます。

これは女性が社会的に弱い立場に置かれていた長い歴史の結果ではないかと思われるのです。

§30 その一つの証左として、指小辞と性と、生き物であるかどうかという区別との間には、非常に微妙な関連があることを挙げることができます。

ロシア語の指小辞は、よく知られているように、女性名詞に特徴的な語尾である -a/-я あるいは中性名詞に特徴的な語尾である -o/-e を持つことが多いといえます。

情緒的には単にサイズが小さいことを意味する、本来の意味での指小辞 diminutive というよりは、愛称 hypocorative や卑称 pejorative 等として用いられることが圧倒的に多いと言えます。

たとえば -ишк-
a/-o という接尾辞
を持つ名詞は卑称
として用いられま

	男性	女性	中性
活動体	-ишка (男)	—	—
不活動体	-ишко (男)	-ишка (女)	-ишко (中)

すが、派生のもとになる語(派生原基)があらわす対象が 1) 活動体であるかないか、2) 性は何か、によって、異なった語尾と性をとります。

まずはじめに例を挙げましょう。

1. ворíшка 「こそ泥」 — вор; колдунíшка — колдún 「魔法使い」;
купчíшка — купéц 「商人」; плутíшка — плут 「ペテン師」; стари-
чíшка — старíк 「老人」; зайчíшка — зáяц 「ウサギ」; петушíшка
— петúх 「雄鶏」(男性活動体)
2. домíшко — дом 「家」; городíшко — гóрод 「町」; забóришко —
забóр 「柵, 囲い」; тулúпишко — тулúп 「死体」(男性不活動体)
3. земíшка — земл́я 「土地」; квартíришка — квартíра 「住居」;
слúжбишка — слúжба 「仕事」(女性)

4. *жизньишко* — *жизнь* 「住居」; *молочишко* — *молоко* 「ミルク」;
письмишко — *письмо* 「手紙」; *ружьишко* — *ружьё* 「銃」 (中性)

以上の他、少数の愛称があるといわれます。たとえば、*сынiшка* — *сын* 「息子」; *братишка* — *брат* 「兄弟」; *шалунiшка* — *шалун* 「いたずらっ子」など。

§31 上の表に見えるように、男性の活動体をあらわす語から作られたものは、*-ишка* の形を取り、不活動体名詞から作られたものは *-ишко* の形を取りますが、どちらも男性名詞として扱われます。

これに対して女性名詞の場合は、*-ишка* の形を持ちますが、女性名詞になります。活動体を表す女性名詞から作られる例が全くないかどうかは今のところ判りませんが、あっても例外的だろうと思われます。

更に中性名詞の場合があります。インド・ヨーロッパ語の中性名詞は、昔の活格言語時代の無生物をあらわす名詞から発展したものと考えられており、ロシア語でも、*дитя* 「子ども」のように、若い個体を表すものの他は、本来活動体を表すものには用いられなかったと考えられます。

しかし時代が下るにつれて、たとえば *лицо* が元々の意味である「顔」の他に、「人物」の意味も持つようになって、中性名詞でも活動体を表すものが出てきました。

これに属するものは他に、*живое существо* 「生き物」、*ничтожество* 「とるに足らない人物」などの他、「動物」という総称 *животное* が既にそうですが、動物の分類なども中性名詞になります。

たとえば *пресмыкающееся* 「爬虫類」、*беспозвоночное* 「無脊椎動物」、*млекопитающее* 「哺乳類」等がそうです。これは元々ヨーロッパの学術用語であったラテン語のカルクです。たとえば *insectus* 「切れ目を入れられた」 < *inseco* 「切れ目を入れる」であり、これが「*anima* (息、靈魂) をもったもの」を意味する中性名詞 *animal* を修飾していたために、中性の *insectum* (*animal*) となったのだと思います³。

³*пресмыкающееся* < *пресмыкаться* 「這う」/ *reptile* < *repto* 「這う」、*млекопитающее* / *mammale* 「*mamma* < 乳房 > をもった」、*бес-позвоночное* / *in-vertebratum* 「*vertebra* < 関節、特に脊椎の関節 > をもっていない」など。普通は複数で *reptiles*, *invertebrata*, *mammalia* などとして用いられます。

この他例外をなすものに, божество「神」, чудовище, чудіще「怪物」のような, 超自然のものがあります。

これらの中性名詞がいつ頃から活動体として変化するようになったのかは, 今のところはっきりしませんが, 女性名詞と同じように, 複数においてのみ生格と対格が同じ形になることから見ても, 比較的新しい現象であることは, 間違いありません。

しかも例が少ないことから, おそらくは女性名詞にこの区別が生じたのよりも, 新しい現象だと思われます。

§32 それはさておき, ここで元に戻って先に挙げた表を見れば, 男性名詞は活動体が -ишка, 不活動体が -ишко で, この後のものは, 性は男性ですが, 形としては, 中性不活動体の形と同じです。

これに対して女性名詞は -ишка の形を持ち, 男性活動体名詞と同じで, ただ性が女性になっています。

言い換えれば, -ишка (男性) — -ишка (女性) — -ишко (男性) — -ишко (中性) という系列がここに存在していると考えられるのです。私はこれを後で数について述べることを考え併せて, 対象の個性の強弱の系列であると考えたいと思っています。

もちろんこのことによって, ロシア語が女性差別をしているといっているわけではありません。言葉というものは, いつもそれが生きた時代のさまざまな状況を少し後になって取入れる (もっと正確に言えば, 後になって「規範化する」, すなわち言語の規則として取入れる) ものだと考えられますから, 言語の規則には, いつも以前にあった社会的文化的な状況が反映していると言いたいのです。

これはどの言語についても言えることで, 英語でも chairman は差別用語だからということで, chairperson に置き換えられましたが, これもそんなに昔のことではありませんでした。最近の新聞では, cameraperson という言葉も目にすることがあります。この傾向が続けばやがて manhole も personhole になるかもしれません。

指小辞というものは, それがサイズの小さいものを指す場合でも, あるいは愛称であれ, 卑称であれ, 必然的に個性の弱화를惹き起すと考えられます。

が、その程度は、情緒的な愛称や特に卑称の場合により強くなると言えると思われます。

このような系列が比較的明瞭に見て取れるのも、この接尾辞がもっぱら卑称を表すものだからだと思われるのです。

§33 以上性と対象の個性の程度との関連について述べましたが、ロシア語の色々な現象を見て行くうちに、性と個性の関係は、過去のある時期の社会的文化的な状況の反映であったとしても、現在の状況はそれから進んで個性の弱化の程度を表すという機能が、もともとこれらの性に特徴的であった語尾に既に移行しているのではないか、と思われる例があちこちに見られることも確かです。

すなわち、今では -a/-я とか -o/-e という、元々女性や中性に特徴的であった語尾が、性には必ずしも関わらずに、元来女性や中性がもっていた個性の弱化の程度を表す指標になっているのではないかと思われるのです。先に挙げた ворѣшка 「こそ泥」のばあいには、-a の語尾がついているにもかかわらず、男性名詞として用いられているのも、その現れであると見られます。

§34 このような観方を裏付ける有力なものとして、通性 общий род といわれる一群の名詞があります。

これはたとえば сиротá 「孤児」のように語彙のレベルでは男性か女性かが未決定で、具体的な文章の中で男性を指しているか女性を指しているかで文法的な性も定まるといえるものです。

ギリシア語でロシア語の общий род に当るのは κοινον (ラテン語 commune) ですが、これは男性、女性、中性を通じた場合に使われ、男性か女性かに限られたものは ἐπικοινον (ラテン語 epicoenon) といわれます。たとえばラテン語の mūs 「ネズミ」は男性です。ギリシア語の μῦς も男性ですが、オクスフォードの Liddell & Scott の大辞典は、わざわざ even of the female と注しています。

ロシア語でも例えばネズミの場合女性名詞として扱われています。これらの比較的小さい動物の場合、雌雄の別が意味を持つことが少なく、単に類全体を示すことが多いからだと考えられます。それにも拘わらず、例えば解剖実習

のような限られた場合であっても、雌雄の別を明示する必要に迫られることがあります。ロシア語ではこのような場合には、самец「雄」とсамка「雌」が用いられます。例えばсамец мыши, самка мыши「ネズミの雄, 雌」のような場合です。同じように、блoхá「ノミ」は女性、жук「甲虫」は男性となります。

これに対して先に挙げた「孤児」のような、通性に属するものは、ロシア語では、語彙の段階では性に関して男性でも女性でもなく、完全に未決定なのです。

形態的にはこれらは -a/-я か -o をとります。初級の文法ではこれについて何も触れない場合が多く、触れても -a/-я の類に属する上述の сиротá の他, убийца「人殺し」などの二・三の語に限られていますが、実は通性に属するものは意外に多いのです。

これまで指摘されたことがありませんが、この種の名詞は意義的にも特徴を持っています。何らかの意味で社会的に好ましくない性質をもっていると考えられた人物を指すことが、圧倒的に多いのです。

たとえば -a/-я の類に属する通性名詞を接尾辞の種類によって分類して示すと、次のようになります。

- 1) 接尾辞零: егоzá「せっかち」, забия́ка「喧嘩好き」, кале́ка「(肉体的あるいは精神的な) 障害者」, неве́жа「不作法者」, неве́жда「もの知らず」, неря́ха「だらしのない者」, обжoра「大食い」, ре́ва「泣き虫」, сиротá「孤児」, таратoра「お喋り」など。
- 2) -га: брюзгá「不平家, 文句言い」, бедня́га「可哀相な人」, воря́га「物盗り」, дела́га「功利主義者」, бродя́га「放浪者」, работя́га「働き者, 肉体労働者」, ворю́га「泥棒野郎」, жадню́га「吝, しわんぱう」, подлю́га「卑劣漢」, пьянчу́га「飲んだくれ」, зверю́га「ひとでなし」, торопы́га「せっかち」
- 3) -ка: белорúчка「労働しない人」, вы́скачка「成り上り者」, ла́комка「美食家」, невиди́мка「人嫌い」, недоу́чка「知ったかぶり」, попроша́йка「乞食, 物ねだり」, самоу́чка「独学者」, сладкоéдка「甘党, 美食家」, таратoрка「お喋り」, гадю́ка「マムシ野郎」, злю́ка「おこ

りんぼう」

- 4) **-са**: кри́кса「泣き虫, わめき虫」, пла́кса「泣き虫」, хны́кса「ベそかき」
- 5) **-ха**: зама́раха「汚いやつ」, расте́ряха「ぼんやり者」, завиро́ха「ほら吹き」

以上の他, **-ша**, **-на/-ня**, **-ла**などの形を持つものもあります。

いずれにしてもこれらの語で表される人物をマイナスイメージをもつものと捉える社会的文化的環境が、過去に存在していたことが推定できます。逆に левша́「左利き」のように現在ではマイナスイメージを持つとは言えないものが通性をもっていることによって、これが否定的なものと考えられていた時代が、過去にあったと推測されます。

性の起源

§35 活格言語に先行する言語類型は何かということについては、未だ決定的な結論は得られていませんが、種々の証拠からして、いわゆる多分類言語といわれているものではなかったかと考えられています。

現在この類型に属しているのは、アフリカのバントゥー語族がその代表的なもので、いま類型学の観点からも、この語族の比較言語学的研究が精力的に行われ始めています。この語族の中で世界的によく知られているのは、アラビア語、ペルシア語などの「文明言語」と混交し、交易の言語として、また部族間の共通語として広く用いられているスワヒリ語ですが、この言語では森羅万象が11個のクラスに分れています。そのうちの10のクラスはそれぞれ単数と複数に対応していますから、実質6個のクラスがあることとなります。

このクラスは大別すると次のようになります。

1)	m-/wa- クラス	主として人のクラス
2)	m-/mi クラス	主として植物のクラス
3)	j(i)-/ma- クラス	主として丸いもののクラス
4)	ki/vi- クラス	主としてもの、言語、指小などのクラス
5)	n(y)-, ∅- クラス	主として動物のクラス
6)	u- クラス	主として抽象名詞、国などのクラス

たとえば一人のウガンダ人 m-ganda が複数集って wa-ganda になり、U-ganda の国を作って ki-ganda を話す、という風になる訳です。

これらのクラスは形容詞だけでなく、動詞や前置詞などにも文法的な一致を要求しますが、人や動物を表すものの文法的な一致がだんだん統一され、それ以外のグループと区別される傾向を示しつつあるといわれています。

たとえば

Ki-jana m-refu w-a Nigeria a-li-soma...
a-youth 1class-tall 1class-of Nigeria 3person-past-read...

ここの kijana は ki-family (もののクラス) に属していますから、文法的な一致は、厳密には次のようにならなければなりません。

*Ki-jana ki-refu ch-a Nigeria ki-li-soma.....

しかしスワヒリ語の現在の文法では、いわゆる所有形容詞とそれに準ずる若干の場合を除いて、もはやこのような一致は存在しないといわれています。

次のような例も同様です。

N-dege m-dogo a-me-ruka
a-bird 1class-small 3person-perfect-jump-up
(*N-dege n-dogo zi-me-ruka.)

§36 ここで興味のあるのは典型的なもののグループの ki-/vi グループです。もともとこのグループに属してはいない、たとえば jiko 「大きい木製のスプーン」(3 のクラス) が ki-/vi-のクラスに入れられると ki-jiko 「茶さじ」のように、指小の意味を持つことになります。これは印欧語で指小を表す接

尾辞がつくと中性、即ちもののクラスになるというのとよく似ています。

また指小辞はロシア語でも愛称に用いられることが多く見られます。プリーナといわれる口承文学などには特に多いといえます。たとえば О солнце, солнышко! などという時, солнышко は солнце 「太陽」の指小辞ですが, これは太陽に対して親愛の情を示すものでありまして, そのたびに太陽のサイズが大きくなったり小さくなったりするわけではありません。

一方スワヒリ語で「山」を表す単語は *lima* です。これを *ki-* のグループに入れると指小辞になり, 「丘」というほどの意味になります。

面白いのはアフリカで一番高いはずの山が, この指小辞を用いて Kilima Njaro 「輝く?山」⁴ と呼ばれていることです。これも親愛の情の現れであるに違いありません。

このように見て来ますと, 性はもともと外界を認識するに当って行う何らかの分類原理であった可能性があります。印欧語の場合, この分類を生物の雌雄に関係づけてしまったために, 混乱が起ったのだと思われるのです。

このような認識における分類が存在しているというのは, 外界の認識が具体的であるということでありましょう。これは決して「野蛮」であるとか「未開の心性」の結果であるということではできません。現に日本語では「枚」, 「本」, 「頭」などのように, いわゆる助数詞という形で, このような分類を行っているのです。

§37 ロシア語の場合, 他のスラヴ語とは異なって, いわゆる「性の原理」というものが強く働いているのが特徴であるといえます。これは名詞の語尾と性とをできるだけ一致させようとするもので, これによってロシア語では性の判別が非常に容易になっています。

これはロシア語では歴史的に一定の語尾を持つ名詞には同じ性を与えようとする, 強い傾向が見られた結果であります。たとえば語尾 *-b* をもつ女性特殊変化(いわゆる第三変化)には, かつては多くの男性名詞も属していまし

⁴Kilima Njaro は, 周知のように, タンザニアにあるアフリカの最高峰を含む山です。最も高い峰は, 海拔 5895 m といわれ, 万年雪に覆われ, 頂上付近には氷河があります。Njaro は少なくともスワヒリ語の語根にはなく, その意味には諸説があります。その一つは「輝く」というものですが, そのほかに「キャラバン」を意味するという説もあるといえます。奴隷貿易の時代に, ここを通過して奴隷を運ぶキャラバンが行き来したというのです。これに対してマサイ族には, 「泉」又は「水」を意味するという言伝えがあるといえます。

た. たとえば лебедь「白鳥」, гость「客」, голубь「鳩」等々です.

これらはどんどんなこの変化形式から逃げ出して, 同じ -ь という語尾を持つ男性軟変化形式に逃げ込んでしまいました.

	硬変化	軟変化	特殊変化
男性	-(ъ)	-ь	
女性	-а	-я	-ь
中性	-о	-е	-мя

ただ一つ哀れをとどめたのは, 男性名詞の путь「道」です. これは逃げ遅れ, 今に至るも第三変化の唯一の例外として男性名詞のままになっています. そして男性の「象徴」として僅かに単数造格において男性・中性名詞と同じ -ём という語尾をもっているのです.

第二変化と第三変化は名詞の変化語尾が違いますから, 第二変化に逃げ出すということは, 変化の形式さえも変えるほど, この「性の原理」は強力なものであったということができましょう.

§38 序でもう一つ性に関することをいっておきますと, ロシア語では家畜の場合, 印欧語の多くの言語と同じように, 雄と雌とが異なった名前を持つことが多くあります. これは彼らがかつて狩猟牧畜民族であって, 家畜の雌雄の別が生活の上で極めて重大であったことに関係しているのでありましょうが, ここで面白いのは, 種を示す名詞 (nomina speciēs) として用いられるのが, 家畜の場合には雌を指す名詞だということです.

たとえば雄牛は бык, 雌牛は корова といいますが, 牛一般を指すときは корова です. これに対して быкの方は雄の牛しか指しません.

同じように кот「雄猫」と кошка「雌猫」, пёс「雄犬」と собака「雌犬」, петух「雄鳥」と курица「雌鶏」などもそうです.

翻って考えて見れば, 英語の場合 cowboy とはいいますが oxboy というのは聞いたことがありません. しかし彼らが追っているのは明らかに雌の牛ばかりではないはずで. そうすると英語の場合にも, 古くにはロシア語と同じシステムをもっていたのかも知れません. これについては専門家の意見を聞く必要があります.

これに対して野獣の場合には, 種を表すのは雄であって, 雌を指す単語は雌しか指すことはありません. たとえば медведь⁵「熊」: медведиха「雌

⁵*medhu は「蜜」です. cf. R. мёд「蜂蜜」Skr. madhu. また *ēd- は「食べる」の意味です. cf. R. есть < ѣд-ти < *ēd-tēi, cf. E. ed-ible. 従ってこれは「蜜を食べるもの」の意味で, 英語の bear がもともと brown と同源であって, 「茶色いもの」を指していたのと同じよ

熊」, волк 「狼」: волчи́ха 「雌の狼」などがそうです。

* * *

以上とりとめのないような話ではありますが、名詞の性の問題にも、社会的、歴史的、あるいは言語的な認識の問題が、さまざまに絡み合い、それが伝統とも関わって、複雑な様相を呈していると考えられます。そう簡単にこうだと割り切るわけにはいきませんが、人間が日常使っていることによって、そこには今いったような情の問題も知らず知らずに反映されているということ、そしてまたロシア語はそのような情的な問題にかなり敏感な言語であるということとは言えそうであります。

うに、もとは古代のタブーであったと思われる。

第 四 話

数というもの

§39 皆さんは、英語を習い始めたときに、一つのを表すときは名詞や代名詞は単数形をとり、二つ以上のものを指すときには複数形を使うと聞いて、何か面倒くさそうと思った人もいるでしょう。あるいは仲々合理的だと思った人もいるかもしれませんが、現在、印欧語族に所属する言語は、大部分が単数と複数の区別を持っています。

確かに一つのは単数で、二つ以上のものは複数で表すというのは合理的であるように見えます。しかしよく考えてみますと、単数と複数は形が違います(「能記」の違い)。ですから違う単語だということもできます。言い換えれば、単数形と複数形は質の違いをもっているということもできるということです。

どうしてこういうことが言えるかといいますと、次のようになると思います。

まず、現代言語学の基を作ったといってもよい、フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913) によれば、言語記号は、たとえば耳に聞える「ツクエ」というような音の印象のパターンと、話し手の頭の中にある「机」の概念とが、頭の中で結合していて、互いに一方が他方を呼び出す関係にあるといっています。

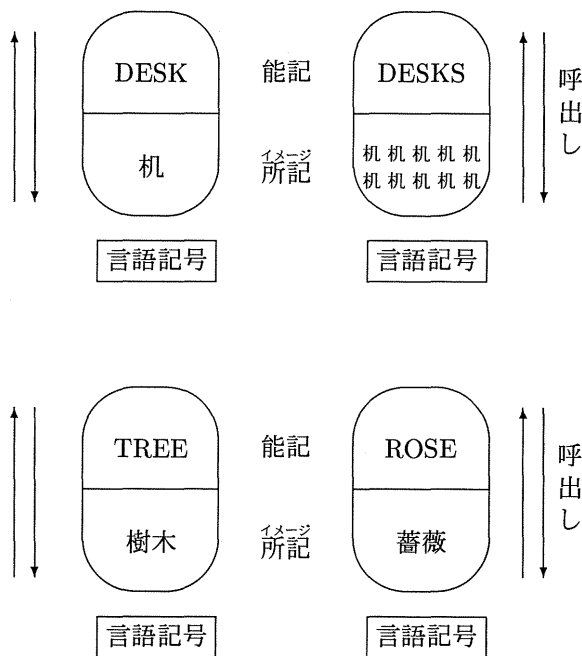
彼はこの「音声印象」を「指し示すもの」という意味でシニフィアン signifiant と名付け、これによって呼び出される概念を「指し示されるもの」という意味でシニフィエ signifié と呼びました。

初めてこの書物(『一般言語学講義』[52])を訳した小林英夫は、シニフィアンを「能記」、シニフィエを「所記」と訳しました。現在の日本の言語学では、この訳語が一般に使われています。

言い換えれば、言語記号は「能記」と「所記」から成っているということになります。

もし「ハナ」という能記が、二つあるいはそれ以上の違った所記、たとえば「花」と「鼻」とに対応しているばあいには、ホモニム「同音異義語」と

いわれます。逆に「人が死亡すること」という所記が「亡くなる」、「死ぬ」、「お隠れになる」などの能記で表すことができるように、同じ所記が異なる能記と対応しているときには、「同意語」とか、「類義語」とかいわれます。したがって、もし「能記」も「所記」も互いに異なっているならば、この二つのものは全く違った「言語記号」ということになります。



一方、たとえば DESK という能記は、「一つの机」のイメージとつながっていますが、「二つ以上の机」のイメージとは、絶対につながってはいません。逆に DESKS という能記は「二つ以上の机」のイメージとしかつながっていません。そうするとこの二つのものは、全く異った言語記号、言い換えれば別の単語だともいえることになります。

もしそうでなければ、「樹木」と「薔薇」とは、DESK と DESKS と同じように、能記においても、また所記においても異なっているのに、なぜ異なっ

た記号と言えるか分らなくなってしまうことになります。

ところがここでもまた問題がでできます。DESKS のような所記のばあい、指す相手 (対象) が二つのときでも、三つのときでも、また四つのときでも、同じ能記で表すことになります。

これは何か不合理なことであるようにも、思われます。なぜなら、一つのものを指すときと、二つの対象を指すときとは「質的」な違いとして表されるのに、これより隔たりの大きい、たとえば二つの対象を指すときと、七つの対象を指すときには、同じ能記によって、すなわち質の同じものとして表されるからです。

§40 こうしてみますと、単数と複数という観念は、客観世界に実在しているものの状態を反映したものというよりは、むしろそれぞれの言語が、ある種の対象を、一つあるかそれとも一つ以上あるかに従って分類する、分類原理であるということになります。

実際に単数形の名詞と複数形の名詞とは違った語であると主張する言語学者もしばしば見受けられます。その意味でこれは、第三話で触れたスワヒリ語のような、多分類言語における類、あるいは印欧語の文法上の性と本質的にはあまり異なったものではないとも、考えられます。

そう考えてみますと、英文法で習う、「常時複数名詞」pluralia tantum などというのも、よく理解できます。たとえば trousers 「ズボン」、news 「ニュース」、thanks 「謝意」のような場合です。

ロシア語の場合にももちろんこういうものはたくさんあります。その中には英語の場合のように、常時複数名詞で表すことが何となくわかるような気のするものも、全く理由のわからないものもあります。

前者に属するものはたとえば

- 1 Аа) очки 「眼鏡」、са́ни 「橇」、брю́ки 「ズボン、スラックス、パンタロンの類」、пантало́ны 「ドロワーズ」、кальсо́ны 「ズボン下」、штаны́ 「ズボン」、пла́вки 「競泳用パンツ」、острогúбцы 「ニツパ」、плоскогúбцы 「ペンチ」、куса́чки 「ニツパ、爪切り」、но́жницы 「鋏」、тиски́ 「万力」のようによく似た (あるいは対照的な) 二つの部分がどこかで繋がっている場合、もここに入ります。

面白いのは、よく似たものを繋ぐものを指す場合にも、常時複数名詞が使われる場合のあることです。たとえば

- 1 A) кандалы 「手かせ、足かせ」、качели 「ぶらんこ」、носилки 「担架」、
узы 「絆」。

または二つ以上の似たものが何かで繋がっているようなものも、しばしば常時複数名詞になります。たとえば、

- 1 B) вилы 「(農業用の) フォーク、熊手」、грабли 「同」、перила 「欄干、手すり」、подмостки 「栈橋」、полаты 「板張の寢床」、помочи 「吊革」、соты 「ミツバチの巣」、счёты 「そろばん」、чётки 「数珠、ロザリオ」。

§41 このほかロシア語では複雑な過程や複雑な行為から成り立つ、たとえば儀礼を含むような対象や過程について、常時複数形を用いる場合があるとされています。たとえば

- 2 A) бегá 「競馬」、брéдни 「妄想、たわごと」、вы́боры 「選挙」、дебáты 「討論、議論」、кóзни 「謀りごと、陰謀」、напа́дки 「非難、論難」、переговóры 「交渉」、роды́ 「出産」、сбо́ры 「(旅などの) 支度、用意」など。

- 2 B) -ины で終る儀礼を含む日を表すものもここに入ります。たとえば、

имени́ны 「名の日」(自分の名と同じ聖人の記念日)、крести́ны 「洗礼祝い」、ро́дины 「誕生日」、смотре́ны 「見合い」など。

数の感覚で説明が付かないものは、たとえば

- 3) черни́ла 「インク」、сли́вки 「クリーム」、духи́ 「香水」、бели́ла 「おしろい」、румя́на 「紅」、де́ньги 「お金」などがあります。

часы「時計」というのも二本針があるのが普通ですから、何となくわかるような気がするのですが、針が二本あるとは思えない вещи「量り」なども常時複数名詞だと聞けば、確信がぐらついてきます。しかし昔の秤はいわゆる天秤で、二つの皿がありますから、これもこの類にはいるのでしょう。また деньги はモンゴル語で「小さい銀貨」あるいは貨幣一般をあらわす tengah ないし tengteheh を語源とする dengi の借用語であるとされています。そうとすればこれが一見複数形と思われる形を持っているのはそのためかもしれません。

§42 単数・複数という分類原理が、決して客観世界をそのまま反映したものではなく、それぞれの言語における約束にすぎないということ、従ってそれは決して普遍的な原理ではないということは、たとえば日本語のように、単数・複数の区別をしない言語の存在によっても明らかであると思われますが、他方ではいわゆる「双数」 dualis を持つ言語の存在からも、このことが裏付けられます。

「双数」というのは、対象が二つのときにとられる数であり、印欧語も古くにはこの形をもっていました。現在でも、ベルリンのすぐ東に分布し、スラヴ語派の一つであるソルブ語 (Sorbisch)¹ はこの形をもっています²。

このように考えれば、数というものも結局は一種の分類原理であり、その意味で「性」に近いものだと言うことができます。スワヒリ語で単数と複数が別の類に分けられているのは、こういう認識の仕方を反映したものだと考えられます。現に日本語では「助数詞」といわれるものをもっていますが、これは数に対して与えられる分類原理に他なりません。

¹ソルブ語は「上部ソルブ語」Obersorbisch と「下部ソルブ語」Niedersorbisch とに分れていますが、ベルリンの近くに分布するのは上部ソルブ語です。これはまた古くには「ヴェンド語」Wendisch と呼ばれましたが、これは蔑称であるとして現在では用いられていません。これらの言語はいわゆる「言語島」Sprachinsel を形成しており、周りがゲルマン語であるために、急速にゲルマン化しつつあります。この民族の伝承の中でわりに有名なものに「クラバート伝説」Krabat というものがあります。これを基にして 1971 年にプロイスラー Otfried Preussler とホルツィンク Herbert Holzinger という作家が Krabat を書きました。これは 1972 年にドイツ児童図書賞を受賞しました。邦訳は『クラバート』偕成社 1980 です。

²言語が正常に歴史的に変化するためには、その言語で十分な社会的活動が行われるだけの規模と条件が必要であると考えられています。話し手が比較的少ない言語島の場合、このような条件を満たすことが難しくなると、言語が正常に変化せず、古い形を残すことが多いのです。ソルブ語が動詞や名詞に古い形を今なお残しているのはこのためであろうと考えられています。

たとえば平たいものは「枚」、長いものは「本」、丸いものは「個」などを用いることになっています。

しかしこのような議論は、純粋に論理的なレベルでの話であります。

実際には、言葉というものは、論理だけで動くものではないと考えられます。言語は却って論理化できないものをもその内に含み、論理化できないものを表すところに、その本当の存在理由があるかも知れないのです。

もし論理的なものだけを相手に伝えればよいのであれば、もっと数式に近いものになっていたかも知れません。

こういう観点から数をみると、すこし異なった結論が得られるかも知れません。

そうすれば単数で示されるものは、少なくとも話し手の視野の中にはある単語で示される対象がそれ一つしかないものであるということになります。したがってそれは他の種類の対象とは、全く異なったものとして表されます。いわばかけがえがないものと意識されるということです。

かけがえなさ、という点でいえば、これは人称でいえば一人称、すなわち「私」ということになります。

それでは双数はといえば、これは二人称に重なります。そうすれば、三数を区別する体系の場合、複数は三つ以上の対象を表すことになります。

したがってこれは、無限に連なっていることができます。無限を「望んでいる」といってもよいでしょう。これは複数というカテゴリーのもつ、開かれた性質に、その根拠を求めることができます。

そうとすれば、これは「第三者」、すなわち話し手でもなく聴き手でもない、いわば「社会」のはじまり、いわば社会に対して開かれたものだということができます。

ラテン語で「証人」を意味する *testis* というのは、もともと **tri-stēs* 「3 + 立つ」でありました。したがって第三者が知るということは、事柄をもちや「君と僕」の間で内密にはできなくなったことを意味します（ロシア語の *между нами* とか、フランス語の *entre nous* のように、「私たちの間で」という言い方は「内密に」を意味しています）。

第三者の承認は社会の承認につながっていると考えられます。逆に第三者に知られたことは、誰にももう隠しようがなくなったということの意味して

います。それだからこそ、これが「証人」を意味することになったのだと考えられるのです。

§43 タブーが生れるのも、こういう土壌の上であると考えられます。

素朴な心性においては、ものの名前は、その本性と分ちがたく結びついていいると考えられる傾向があります。ものの名前は、それが指し示す意味、あるいは指し示す「本体」と切り離せない、本質的な結びつきをもっているという考え方です。

ギリシア哲学ではこの関係を φύσει physei という言葉で表しました(この問題はプラトンの『クラチュロス』という著作で扱われています)。これは φύσις physis の与格で、「本然的に」というほどの意味を表します。

これに対する考え方は、ものと名前とは本質的な関係のない、約束事に過ぎないとするものでありました。これは θέσει thesei といわれます。これは θέσις thesis (本来は「おくこと」、「置かれたもの」という意味で、それから「テーゼ」という意味にも用いられました)の与格で「約束で」というほどの意味です。

名前と本性とが必然的に結びついていると信じる人々は、名前を分析すればものの本性が分ると考えました。そしてその本性を ἔτυμον etymon 「真実のもの」と名付けました。この本性を探求する学こそが、ἐτυμολογία etymologia に他なりません。今私たちが「語源学」といっている etymology は、実は元々こういうものだったのです。

序でに言えば、この立場の違いは realism(us)「実念論」と nominalism(us)「唯名論」という形で中世の哲学にも引き継がれました。現代の言語学は、唯名論の立場をとっています。

physei という考え方に従えば、たとえば自分の名前を自分以外の他人に知られたならば、自分の本質が他人の手の中にあることを意味します。そうなるともはや自分に対する支配権は永久に失われ、他人の自由になってしまいます。

あるいはまた、恐ろしいもの、はばかりあるもの、忌み嫌うものなどの名を濫りに口にするには、必然的にその名と一体になっているものを呼び出すこととなります。これは絶対に避けなければなりません。こうしてさまざ

まなタブーが生れます。

民族学では、アフリカの部族の中には親が付けた名前は絶対に第三者に報せることなく、通称で過す習慣を持つものがあるといわれています。今述べたことから明らかなように、これは physei の立場であるということが出来ます。自分の本質を表す名前を第三者に明かすことは、自分に対するコントロールを失うことになると考えられるからです。

§44 ロシア語の場合にも、中世ロシア語では三数体系をもっていました。たとえば硬変化名詞の主格の形を見ると、これは表に見られるような語尾をもっていました。

これが現在見られるような二数体系に移るとき、原則として双数の形はなくなり、二つの対象を表す場合にも、複数形が用いられるようになりました。

	単 数	双 数	複 数
男 性	-ъ	-á	-и > -ы
中 性	-о	-и	-а
女 性	-а	-ѣ > е	-и

「原則として」というのは、そうでない場合もあったからです。これはどうしてでしょうか。

たとえば глаз「目」という語を考えてみます。これは глаз — глаз-á — гла́з-ы という系列を作っていました。しかし中世ロシア語を話していた人は双数の глаз-á という形は始終使っていましたが、複数の гла́з-ы という形はまず自分で使ったことも、人が使うのを聞いたことも全くなかったか、たとえあったとしても、極めて稀であったと思われます。複数の形は事実上存在していなかったといえるでしょう。

こういう場合に глаз-á という形をなくして гла́з-ы という形を使うのには、大きな抵抗があったと思われます。

そういう訳でこの種の名詞は双数形を解釈し直して複数形と考えました。そして本来の複数形の方が消滅することになったのです。こうして複数形に不規則が生れました。

ただし同じく複数形で -а になる不規則形にはもう一つ異なった起源を持つものがあり、こちらの方が数は多いのですが、これについては後に述べます。

双数起源の不規則形を持つものには、他にはたとえば ро́г — ро́г-á「角」,

рука́в — рукав-а「袖口」, край — кра-я「端」などがあります。бе́рег — берег-а「岸」もこれに属します。

これはちょっと考えると変に思われるかも知れませんが、単数の「岸」を持つのは池とか湖で、二つの岸を持つのは川です。しかし三つ以上の岸を持つものは、少なくとも三次元の世界では考えられないのです。

中性名詞の場合には、たとえば ко́лен-о — ко́лен-и「膝」, плеч-о — плеч-и「肩」, о́к-о — о́ч-и「目」, у́х-о — у́ш-и「耳」などがあります。

女性の場合にはどういう理由か現在のところ分りませんが、双数の形を残しているのはロシア語では дв-а「二」の女性形の дв-ѣ > дв-е と о́б-а「両方」の女性形 о-ѣ > о-е だけです³。дв-а, о́б-а の語尾 -a が双数起源であることはもう明らかでしょう。

他のスラヴ語ではたとえばチェコ語には女性名詞の双数形も残っていて ruk-a — ruk-e「手」, noh-a — noz-e「足」のようなものがあります。-ѣ はスラヴ語では歴史的に前の子音を変化させるので、ロシア語ではこれを避けようとしたのかも知れません。

§45 統語論のレヴェルでも、双数は形を変えて生き残りました。たとえば「二脚の机」というとき、ロシア語では два стола́ といいます。そしてこれは単数生格の形だと教わります。しかしこれは歴史的には実は双数の形なのです。双数がなくなってもこの形は残りましたが、そのためにこれを解釈し直して、これと同じ形をしている単数生格形と考えたのです。

しかしもしそうとすれば、三脚、四脚の場合にも стола́ の形が用いられるのはどうしてかという問題が起きてきます。実は三脚および四脚の場合には、元々複数が規則通りに使われていたのです。

ところが双数が次第に崩れてなくなる過程で、これが最終的に単数生格であるという解釈を受けるまで、男性 O 変化名詞の場合でいえば、本来双数主

³ о́б-а は印欧祖語の *ambh-ō に由来します。スラヴ語では印欧語の *a と *o は混同されて -o になり、また *ā と *ō は共に a となりました。また *am, *an, *om, *on は鼻母音化して [ǫ] となり、ロシア語では一般に y となりましたが、例外的に o となることもありました。*ambh- はギリシア語では ἀμφι amph-i となりましたが、これは英語などでたとえば amphibion「両棲類」, amphitheater「円形劇場」(両方から見るができる)などになっています。またこれはラテン語では ambo「両方」となりました。英語では ambiguity「両義的、曖昧な」, ambivalence「反対感情両立」, ambidexter「両手利き(両方右手の意味)」などに借用されています。

格形である *-а/-я* という語尾と、本来複数主格形である *-ы/-и*⁴ とが、同じ複数の意味を持つ異形態 (allomorph) だと考えられる時期があったと思われます。そのために、たとえば古代ルーシの貨幣単位であるグリヴナ *гривна* は、本来の双数主対格形 *гривнѣ* と本来の複数主対格形 *гривны* とが、混同されて使われていました。

女性名詞のこの混同はかなり早くに生じたと思われますが、おそらく初めは数詞 3 および 4 と結ぶ名詞が、本来の双数形と混同したと思われます。

次に挙げる表は「ノヴゴロド第一年代記」の新輯 *Младший извод* に収められているロシア最古の法典ルスカヤ・プラヴダにおいてグリヴナの使用を見たものです。括弧の中は異本です。従って括弧のないものは、異本がないということになります。

この表からこの写本では 2 と結ぶ場合はすべて本来の双数形が使われていること、3 と結ぶ場合には異本に双数形をもっていますが、底本では複数形が用いられているもの 4 例、逆に異本に複数形をもってはいますが、底本では双数形が使われているものが 3 例あり、異本がなくて双数形が用いられているものが 5 例、同じく異本がなくて複数形が用いられているものが 1 例であることが分ります。

2	гривнѣ	3	例
3	гривны(гривнѣ)	4	例
3	гривнѣ(гривны)	3	例
3	гривнѣ	5	例
3	гривны	1	例

「ノヴゴロド第一年代記」新輯は、およそ 15 世紀頃迄に成立したと思われますから、このことから、女性名詞の場合、極めて早い時期からまず双数形が 3 および 4 と結ぶ時に混同されたということが出来ます。それから 2 と結ぶ形に複数形が広がったのだろうと推測することが出来ます。そうすると、本来の双数形と本来の複数形は、共に同じ機能を持った異形態 allomorph に過ぎなくなります。どちらを使っても意味が変わらないと思われるようになる訳です。このとき、ロシア語では双数の形を選択したと考えられます。こういうわけで、ロシア語では 2, 3, 4 と結合する名詞に双数形が用いられるよ

⁴ 本来は男性 O 語幹名詞の複数主格形は *-и* ですが、その後硬変化と軟変化との対立が明確になって来るにつれて、硬変化名詞は複数対格の語尾 *-ы* を主格に借用しました。これには語幹が硬子音で終る場合、語尾 *-и* が、語幹の硬子音を口蓋化するために語幹に不規則が生じることを避けようとしたためと考えられています。たとえば *вѣлк-ъ/вѣлц-и* 「狼」に見られる通りです。

うになったのではないかと、推測されるのです。

男性名詞にこれと同じ混同の過程が始まるのはずっと遅く、動揺の兆しが見えるのが1550年の法令集 *Судебник* からであることを考えれば、現代ロシア語で女性名詞の双数主格形が две < двѣ および обе < обѣ 以外には残らなかったのは、女性名詞の場合に複数形の一般化の過程が、早くに完了したためではないかと思われます。

これに対してたとえばチェコ語やポーランド語の場合には、数詞2, 3, 4と結ぶ名詞には複数主格形が用いられています。

ここではロシア語と逆の過程が起ったわけですが、しかしその前提としては、やはり双数形と複数形が混同され、異形態と思われた状態が存在していた時期のあったことがあると思われます。

§46 ここでもう一つ問題が起ります。どうしてこのような混同の過程が数詞2, 3, 4の場合に限られ、5以上の数詞の場合に及ばなかったのでしょうか。

この問題に答えるのは、比較的易しいと思われます。なぜなら、два, три, четыре は名詞を修飾するいわば形容詞型の数詞であったのに対して、5以上の数詞はインド・ヨーロッパ語族では元々名詞型だったことによると考えられるからです。

たとえばロシア語の пять (5) は *penkʷe- またはゼロ階梯の母音度をもつ *pŋkʷe- に *-to- が付加されたものと考えられています。ですからこれにつく名詞は元々複数の属格(生格)形でなければなりません。このために語尾の混同は5以上の数詞には拡大しなかったと考えられるのです。

§47 ところで前にいくら対象を増やしても複数で表すことができ、したがって複数は無限を望んでいる、といいました。どうしてここで複数は無限を「含んでいる」といわなかったのかという理由は、おおよそ次のようなことによります。

「無限」についてはいろいろな種類が考えられ、数学でも色々な「無限」を区別しているようですが、一番単純な「無限」は自然数の無限集合に含まれ

ている要素(元)の数でしょう⁵。

これは普通ヘブライ語の最初の文字アレフ $\aleph$ で表すようです。これにゼロがついたもの $\aleph_0$ は可付番集合の濃度といわれています。可付番というのは、どの要素も順番を付けて一列に並べることができるという意味です。自然数は大きさの順に並べることができますから、可付番集合です。

これに対し実数の集合はそのうちに可付番ではない無限集合を含んでいて、 $\aleph_0$ よりも大きい濃度の無限集合を作っています。これを連続体の濃度といい、 $\aleph$ で表しています。

さらに集合 R から R への関数全体の濃度は f であらわされ、関数の濃度と呼ばれています。これは連続体の濃度より大きい濃度を持つと考えられています⁶。

数学のことはさておき、普通の言語、たとえば英語でも、「無限」というのは infinity であり、単数名詞で表されます。ロシア語の無限 бесконечность もやはり単数です。

これは漢語ですが、梵語に由来する佛語には無限を意味する言葉がたくさんあります。たとえば「無量」、「無量億」、「阿僧祇」、「無量阿僧祇」、「無量劫」⁷、「無量億劫」、「無量阿僧祇劫」などというのがこれです。

どうしてこういうことが起るのでしょうか。これは人の認識の仕方と関係があって、数が大きくなると人はこれを「数」ではなく、「量」としてしか認識できないからだと思われます。ですからもしアメリカの言語学者ホワットモウ Joshua Whatmough (1897-1964)⁸ が述べているように、Tierra del Fuego の土着民が3までしか数を数えられなかったとしても、それだけで彼らが3個の事物しか考えなかったということにはならないと思われます。

事実は3までの数によって彼らは有限より無限をのぞんでいたと考えるべきであろうと、思われるのです。

⁵ 集合は英語では set といいますが、ロシア語では множество といいます。またある集合に含まれる元の数を日本語では「濃度」といいますが、これは英語の density の直訳です。ロシア語ではこれを「威力」にあたる мощность という語で表しています。集合 A の濃度は通常 $|A|$ として表されます。

⁶ 第四話末尾の「参考」を参照。

⁷ 「劫」という語が加わるとは時間を指します。従って「無量劫」というのは「無量」の時間を表します。

⁸ アメリカの言語学者。ラテン語以前のイタリアの北西部とその近接した地域にはなされていた印欧語に属するヴェネト語 Venet の研究で知られています。

すなわち、私たちの認識の仕方によって、単数は複数を経て、やがてまた単数に回帰するのだと思われます。これはもはや、出発点の単数ではなく、一つの集合を表すものです。

§48 このような大きい数に対して私たちがなおこれを数直線の上に位置づけることができるとすれば、それは算法によってこれを定義するという方法をとる以外にはありません。たとえば「無限」という言葉と「恒河沙」(ガンジス川の砂という意味)とを較べて、後の方が多そうと感じれば、後の方が無限の種類の中で、「より無限」な数という風に思うわけです。人によっては逆に「無限」の方が大きいと感じることもあるでしょう。

「無限」と「恒河沙」との間に算法による定義があるかどうかは分りませんが、人はこのような感覚を算法によって裏付けようとします。従ってこれもまた、約束事に過ぎません。

たとえばロシア語で *тьма* は「無数」という意味と「一万」という意味があります。これは「無数」に *десять тысяч* すなわち 1000×10 という算法を当てはめたものですが、本当は「無数」、「ものすごく多い数」という感覚的、情緒的な名前に過ぎなかったと思われます。

その証拠に *тьма тем* 「*тьма* の *тьма* (*тем* は *тьма* の複数生格)」は、この算法でいけば $10000 \times 10000 = 100,000,000 = 10^8$ すなわち「一億」とならなければならないのに、古代ロシアでは「十万」を指すに過ぎませんでした。

これではあまりにもひどいと思ったのかも知れませんが、今では「数十万」という意味にも用いられると、辞書にあります。「数十万」という表現は不定の数しか示さず、位取りだけを示すものと考えられます。「まあ、こんなものだろう」という感じを表すものだと思います。

これとよく似た現象が英語の場合にもあります。

たとえば *billion* は *million* を二倍にした (bi- 「2」) 「作り物」です⁹。*million* は「100万」すなわち $1000 \times 1000 = 10^6$ ですから *billion* は $10^6 \times 10^6 = 10^{12}$ となるはずです。

イギリス人は几帳面にそう考え、これを「1兆」としました。しかしアメ

⁹*million* ということばそのものもともとラテン語にはなく、ラテン語で「沢山」の意味から 1000 を意味するようになった *mille* から作られた「作り物」で、中世ラテン語において用いられるようになり、1370-1380 年代が初出だといわれます。

リカ人はこれを 10^9 すなわち「10 億」と考えています。イギリス人が「^{10¹²}兆」で考えているのに対して、アメリカ人の考え方は、「位取りの区間を上げる」算法だといえましょう。

すなわちイギリス人が trillion および quadrillion を、それぞれ 100 万の 3 乗、すなわち $(10^6)^3 = 10^{18} = 10^{6 \times 3}$ と 100 万の 4 乗、すなわち $(10^6)^4 = 10^{24} = 10^{6 \times 4}$ と考えるのに対して、アメリカ人は $(10^6) \times (10^3)^2 = 10^{12}$ と $(10^6) \times (10^3)^3 = 10^{15}$ と考えていると思われるからです。

すなわち、位取りのコンマは三つおきに入れられるので、アメリカ式は一つ上位のコンマに入る数を上位の位の数と考えるわけです。

フランスがアメリカ式、ドイツがイギリス式というのも、何かお国柄を思わせるところがあります。

ともあれ、接頭辞が表す数をいま n とおくと、イギリス・ドイツ式は $(10^6)^n$ 、アメリカ・フランス式は $(10^6) \times (10^3)^{n-1} = 10^{6+3 \times (n-1)}$ という、一般式によって表されることになります。英語で普通用いられる数を表す接頭辞は、表に示すとおりです。

この場合には明らかにラテン系の接頭辞が用いられていますから、いま、nonillion という語を考えますと、これはイギリス・ドイツ式で $(10^6)^9 = 10^{54}$ となり、アメリカ・フランス式では $(10^6) \times (10^3)^{9-1} = 10^{6+3 \times 8} = 10^{30}$ となります。興味のある方は辞書で調べてください。

ついでにいいますと、ラテン語の数詞は 11 から 20 の間では次ページの表のようになっています。

そこでたとえば septendecillion という数を考えてみます。そうすると、これは上で述べました一般式に当てはめると、イギリス・ドイツ式では $(10^6)^{17} = 10^{102}$ という、途方もない数になります。アメリカ・フランス式でも $10^{6+3 \times (17-1)} = 10^{54}$ になります。

数を表す接頭辞		
数	ラテン語系	ギリシア語系
1	uni-	mono-
2	bi-	di-
3	tri-	tri-
4	quadru-	tetra-
5	quinti-	penta-
6	sexti-	hexa-
7	septi-	hepta-
8	octo-	octa-
9	non-	nona-
10	decem-	deka-

このような数は一体どこまで実際にあるのでしょうか。

100 はラテン語では centi- , 1000 は milli- で表しますから, centillion は, 計算によって, イギリス・ドイツ式では 10^{600} , アメリカ・フランス式では 10^{303} になるはずです。

では millillion はどうでしょうか。実際にあるのでしょうか。もしあったと仮定すれば, どういう数になるか計算してみてください。

§49 思わず脱線してしまいましたが, それではロシア語はどうなっているのでしょうか。言い忘れましたが, イギリス・ドイツ式では, アメリカ・フランス式の billion 「10 億」 10^9 に当るものは milliard で表します。ロシア語でもこの数を миллиард によって表します。billion に当る билли́он という語は, それぞれ「ロシア・アメリカ・フランス式では 100 million (= 10^9 = 10 億)」, イギリス・ドイツでは「1000 ミリアルドに等しい数」すなわち 10^{12} となっています。

そこで milliard に当る миллиард を引いてみますと, 「1.000.000.000 という数」とあります。位取りの表し方については後で述べますが, とにかくこれは 10^9 ですから, миллиард = билли́он という, 不思議なことになります。

細かいことはこの際大目に見るとすれば, трилли́он はドイツ, イギリスの 10^{18} に対し 10^{12} ということになり, アメリカ・フランス・ロシアの三国同盟が成立するというわけです。

さて, 今保留した位取りの表し方ですが, ロシア語では三桁ずつに区切る印 (これを一般に delimiter といいます) は, コンマでなくてピリオドなのです。コンマを使うと間違いになります。この記法は実はロシア語だけでなく, ドイツ語やフランス語でも用いられているものです。日本と同じ記法を用いているのは, 英国とアメリカ, 即ち英語の場合が主です。ヨーロッパの国の言語では独仏露の表記の方が多数だと言われています。

11 ~ 20	
数	ラテン語
11	ūndecim
12	duodecim
13	tredecim
14	quattuordecim
15	quīndecim
16	sēdecim
17	septendecim
18	duodēvīgintī
19	ūndēvīgintī
20	vīgintī

どうしてかといえば、整数部分と小数部分とを区切るデリミターにコンマが使われるからです。ですから 123.456 は「十二万三千四百五十六」であって、「百二十三点四五六」では断じてないのです。これはかなりロシア語に慣れている人でも、書くときにうっかり間違えることが多い誤りです。

ところで漢数詞のばあいでも、大きい数の時には、同じように算法に「ゆれ」が見られます。千は誰でも知っているように、 10^3 で、万はその 10 倍、すなわち 10^4 になります。しかし億は古くには 10^5 、すなわち万の 10 倍であったようです。しかし漢数詞のばあいには位取りが欧米のばあいと異なって 4 桁で統一されたためだと思われませんが、億は 10^8 になりました。兆も同じく古くには億の 10 倍、すなわち 10^6 だったものが、 10^{12} になりました。

億	兆	京 けい	垓 がい	秭 し	穰 じょう	溝 こう	澗 かん	正 せい	載 さい
10^8	10^{12}	10^{16}	10^{20}	10^{24}	10^{28}	10^{32}	10^{36}	10^{40}	10^{44}

§50 こういうことを考えながら複数とは何かということを考えてみると、複数というのが可能になるためには何かの点で「よく似たもの」がないといけなことが分ります。もしこれしかない絶対無二のものならば、複数にすることはできないでしょう。

「よく似たもの」があるということは、そのものの個性が、絶対無二のものに較べるとある程度弱いと考えられます。しかしもし個性が全くないと複数にはなりません。昔の笑い話に、 $1+1=2$ だという人に、粘土を二つくつつけたら一つになってしまうという話がありますが、個性がないと二つとは認識できないということが一方であります。

たとえばロシア語では рыба 「魚」という語は, сто вагонов рыбы 「貨車 100 台の魚」というように、普通単数で使います。この語の複数は違う種類の魚について、その違いを強調するとき以外には使われないのです。おなじことがたとえば ягода 「イチゴ」のようなものにも見られます。たとえば В лесу они собирали ягоды. 「森で彼らはイチゴを摘んでいた」というような場合です。

中世ロシア語では раб 「奴隸」とか плен 「捕虜、戦争奴隸」のような個性を認めない場合にも、複数は原則として使われませんでした。

現代ロシア語で原則として単数でしか使わない、いわゆる常時単数名詞 *singularia tantum* として文法書などが挙げているものは、集合名詞、物質名詞や抽象名詞のほかには、次のようなものがあります。たとえば、

дичь「野禽」、дробь「散弾」、зeлeнь「草、緑色野菜」、па́даль「(動物の) 屍体」、по́гань「汚らしい、嫌らしい人、もの」、че́лядь「奴僕」、че́рнь「下層民」など。

英文法は、fish, salmon, trout, sheep などは「単複同形」だといいますが、ロシア語などを考えれば、これは本当は単数だとするのが正しいのではないかと思います。

§51 したがって複数というのは個性がある程度弱まってはいるが、全くなかったわけではないものの集りに対して与えられる、認識の形に対応したものだといえることができるでしょう。第三話で述べた крестья́нин「お百姓」のような集団に先に名前が与えられるのは、個々の要素の個性が、かなり弱い場合だと言えます。個性がほとんどなくなってしまう場合、たとえば песок「砂」のように、単数名詞になってしまうのはそのためだと考えられます。

そうしてみますと、名詞がある対象を指すときに、その対象の個性が比較的弱いと認識されたとき、はじめは複数によって表されていたものでも、数がますますつれてこれを構成する個物の個性がさらに弱化し、やがて集合名詞となって単数に回帰する傾向が強いといえます。

印欧語には *-ā という語尾があり、集合名詞を表す女性名詞を作っていました。そして中性名詞は複数をもっていなかったと考えられています。中性名詞はもののクラスに属していましたから、個性が極めて弱く、従って複数をもてなかったのだと考えてもよいように思われます。

たとえば ἀστὴρ *astēr*「星」は複数では ἀστρ-οι *astr-oi* のようになりますが、集合名詞として ἀστρ-α *astr-a* という単語もありました。この語尾 -α は中性名詞複数の語尾にもありますから、もしこれを中性複数の形であると考えたとすれば、その単数は ἀστρ-ον になります。

この単数名詞は実際にはほとんど用いられませんでした。その理由は、お

そらくはもともと集合を表す女性名詞であったのが、中性複数に解釈し直され、いわゆる back-formation によって ἄστρον という形ができあがったためではないかと思われるのです..

§52 ロシア語の場合、集合を表す -a(-я) は、中性名詞の複数と考えられるようになりましたが、男性名詞の場合にも、今述べた条件に当てはまるものは、複数においてしばしば -a(-я) の語尾をとるようになったと考えられます。

たとえば人を表すものは、どの言語においても個性の低下が激しいと考えられます。日本語の場合「お女中」という、比較的身分の高いものが「女中さん」になり、さらにはこの言葉が蔑称と感ぜられるようになって、今では「家事見習」になってしまいました。

古期ラテンの時代には、mātrona といえば荘園のような大きな家を取仕切る貴婦人を指していたものが、時を経るに従って、いまでは英語で matron という病院長さんを表すようになっています。lady にもその傾向は顕著です。

というわけで、たとえば учитель は本来は「師」、「指導者」を意味していました。今でもこの意味に用いられるときには、учител-и のように、本来の複数語尾をつけます。しかし、社会的職業に転化するようになると、この語は個性を弱め、複数には учител-я のように、元々集合名詞を表していた -a(-я) の語尾をとるようになりました。дóктор, -á 「博士」、профёссор, -á もそうだと考えられます。

19 世紀にロシアのシチエルバ Лев Владíмирович Шёрба (1880-1944)¹⁰ という、著名な言語学者が、офицер-á 「士官 (複)」という語は офицёр-ы に較べて軽侮のニュアンスが感ぜられるといっています。このことから既に当時 офицёр 「士官」が社会集団化しつつあったことが知られます。

§53 もうひとつの造語法として印欧語の女性名詞 *-yā の母音 *-ā が母音交代をして、「弱階梯」になった *-yə に遡るものがあります。

これはロシア語では -ья の形を持ち、女性名詞で、同じく集合を表してい

¹⁰ ベテルブルグ・レニングラード学派の重鎮。

ました。たとえば *bhrāte(r)- は梵語では bhrātā, ラテン語の frāter, ギリシア語の φρατήρ で、古教会スラヴ語では брат(p)ъ に対応します。これは英語の brother に他なりません¹¹。この語幹に接尾辞 *-yə をつけた *bhrātryə に当るのは、ギリシア語では φρατρία です。これは古くには氏族の意味にも用いられましたが、モルガン Lewis Henry Morgan (1818-1881)¹² などの民族学者は、この語を氏族の下位分類で、内部における通婚が不可とされる集団に用いています。

いずれにしても、この形に正確に対応するのは、ロシア語では брат-ья です。この語は最初女性名詞として兄弟の集団を表すものとして用いられ、変化も女性名詞の変化をし、形容詞も女性形で、また動詞も単数形と呼応していました。

これがやがて先ず動詞が複数になり、次いで形容詞も複数形をとるようになりました。最後に変化も複数になって、брат の複数形の位置に納り、もともとの複数形 братья は消えてしまいました。

このことから分りますように、-ья をとる名詞は、もともと個性の弱化が激しいと思われるものを指す場合が多いと思われます。そして上に挙げた、複数で -a をとる名詞と較べると、その成り立ちから個性がこれよりももっと低いと考えられます。

それで語尾における個性の強弱を仮に次のように表すことができると思います。

-ы > -а > -ья

たとえば、男性名詞の場合、клин — кли́нья 「楔」、кол — ко́лья 「杭」、колос — колóсья 「穂」、ком — ко́мья 「(柔らかい、または脆いものの丸っこい) 固まり」、о́вод — овóдья 「車輪の枠」、пóлоз — полóзья 「(櫓などの) 滑り木」、стул — сту́лья 「椅子」などのようなものです。中性名詞の場合は кры́ло — кры́лья 「羽」、перó — пéрья 「羽根」、полéно — полéнья 「薪片」など。

¹¹ 接尾辞 *-ter- は行為者を表すのにも用いられますが、親族を表す場合にも使用されました。これは語尾がない場合には *-tēr のように、末尾の母音を延長することが多く見られました。また梵語やインド・イラン語派、バルト・スラヴ語派などのいわゆるサテム語族に属する言語では、しばしば接尾辞の末尾の子音 *r を落す現象が見られます。

¹² アメリカの歴史家で人類学者。Ancient Society によって知られる。

この個性の強弱の強さの系列は、次のような場合に明らかな意味的な相違をもって用いられます。たとえば, лист — листы 「書類」 / листься 「木の葉」, зуб — зубы 「牙, 歯」 / зубья 「(鋸などの) 歯」, кол — колы 「(五点満点の) 一点」 / колья 「杭」など。

これに対して、次のような場合もあります。колéно — колéни 「膝」(双数起源)/ колéна 「世代」 / колéнья 「(竹などの) 節」, 「(歌などの) 節」. клюк — клюки 「(ドアなどの) 掛金」 / ключья 「鉤」など。

このように、一見単なる不規則形と思われるものでも、よく観察して見れば、その言語を話す人々の認識の仕方に、深く根をもっていることが分ります。

むしろそのような認識の仕方が根深いものであるだけに、これらの単語は、すぐに他のものと同化して規則的なものになることに抵抗して、変化を拒否するために、不規則になると思われます。

ロシア語の брат — братья,あるいは複数でも単数形で用いられる рыбаのような例を見れば、英語の語尾 -en (たとえば child-r-en, ox-en, brothers に対する brother-en など) がなかなか消滅しないのも、これらの名詞の表す対象の個性に対する感覚が支えになっているのではないのでしょうか。

一つの仮説として提示しておきたいと思います。

§54 最後に蛇足をけ加えますと、みなさんは2, 3, 4を表す数詞には単数生格を用いるという、おかしい統語論を習ったか、あるいはこれから習うと思います。これを一般式の形で書けば、次のようになります。

$$(\text{形容詞}_{\text{複数主格}}) + \begin{cases} \text{два/две} \\ \text{три} \\ \text{четыре} \end{cases} + (\text{形容詞}_{\text{複数生格}}) + \text{名詞}_{\text{単数生格}}$$

たとえば,

последние два чистых листа
最後の二枚の汚れていない紙

このような два столаのような形は、これまで述べてきたことから明らかなように、本当は単数生格ではなく、双数の主格だったのです。これが双数が失われたときに、単数生格と同じ形であったために、単数生格と解釈し

直されたのです。双数が失われたことによって、こういうような、一見不合理な構文ができてしまったのです。

§55 さて、せっかく集合の濃度という概念を学んだのですから、その一つの利用の仕方を挙げてみましょう。

20世紀を特徴づけた構造言語学の中で、特異な位置を占める学派に、北欧学派とか、コペンハーゲン学派とかいわれているものがあります。イェルムスレウ Louis Hjelmslev (1899-1965) に代表されるこの派の学者たちは、自分たちの理論を *Glossematics* と呼んでいます。日本では「言理学」とか「グロセマティックス」とかいわれています。

イェルムスレウの学説で、一つの特徴となっているのは、これがメタ理論をも扱っていることです。

メタ理論というのは理論を対象とする理論のことです。理論というものは多くの場合に何かのことがらや現象を対象にして、そこから導き出されるものです。しかし同じようなことがらや現象を対象にしても、そこから同じ理論が導き出されるとは限りません。

もし二つ以上の理論が導かれたとき、一つだけが正しい理論で、他の理論は皆間違っているのでしょうか。以前にはそう考えられていました。

しかし20世紀に入ってロバチェフスキーなどの「非ユークリッド幾何学」が現れてきました。これはユークリッド幾何学の公理とされている平行線は交わらないという公理を変更しても、正しい理論が得られるということを示したものとされています。

これをきっかけにして「正しい」複数の理論が同じ対象に対して成り立ちうるという考えが起ってきました。そうすると理論が「正しい」ということはどういうことかが、まず問題になります。また二つ以上の理論があるばあい、どの理論がより優れたものかを決定できるような基準も必要になります。

このようにして理論を対象にした理論が生れてきました。これがメタ理論と呼ばれているものです。

イェルムスレウはこのような基準として「経験的原則」 *empirical principles* というものを挙げています。これは網羅性/包括性 *exhaustiveness/comprehensiveness*, 妥当性 *adequacy*, 単純性 *simplicity* です。これはある理論(モデル

ル) が生み出したものがより多くの対象を説明できるかどうか (包括性), それ対象以外の余計なものも生み出すことがないかどうか (妥当性), できるだけ単純なものであるかどうか (単純性) によって, どの理論が最も適当かを決めようとするものです。

ロシアの言語学者アプレシアン Юрий Дереникович Апресян (1930-) はこれに「経済性」という基準を加えて, 次のように示しています。

ここで M は対象の集合, N はモデルによって生み出される対象の集合, P は「包括性」, A は「妥当性」, E は「経済性」, S は「単純性」をそれぞれ表し, b は初期概念 (公理) の数, c はモデルが集合 N を生み出すのに必要な規則の数を表すとされています。

$$P = \frac{|M \cap N|}{|M|}$$

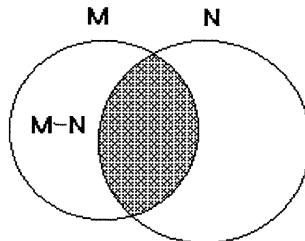
$$A = \frac{|M \cap N|}{|N|}$$

$$E = \frac{|N| + 1}{|N| + b}$$

$$S = \frac{|N| + 1}{|N| + c}$$

これらの式はどういう意味を持っているのでしょうか。考えてみましょう。なお $|M|$ は, 前にもいいましたように集合 M の濃度を表しています。

§56 一般に集合 M と N の関係は右の図のようになります。灰色の交わった領域 ($M \cap N$) は集合 M と N の「交わり」(meet) といい, 記号 $\cap$ の形から M キャップ N などといいます。序でに言えば M と N の全体 ($M \cup N$) を「合併」(join) といい, 同じく記号の形 ($\cup$) から M カップ N とも言います。絶対値の記号は前にも言いましたように, 集合の濃度を表します。



そうすると $M - M \cap N$ は集合 M から集合 M と N の交わり, すなわち $M \cap N$ を引いたものですから, 結果として $M - N$ に等しいと言えます。

それでは $P = |M \cap N|/|M|$ はどういう意味を持っているのでしょうか。

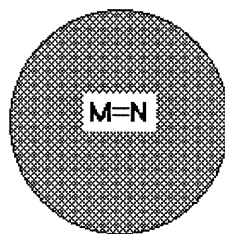
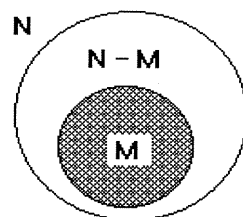
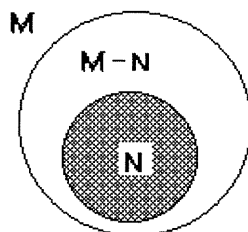
ここで M は理論が扱う対象である, 現実存在している事象の集合を表し, N はある具体的な理論が扱うことのできる事象の集合を表しているとします。そうすると $M \cap N$ はこの理論が扱うことができ, かつ現実存在している事象の集合を表しています。また M から N と交わっている領域を引いたもの ($M - M \cap N$) は現実存在しているにもかかわらず, この理論

では扱えない事象の集合を表すことになります。

したがって $M - N$ の割合が大きければ、それだけこの理論は現実の事象を説明する力が弱いといえます。この割合をみようというのが P の意味なのです。したがって P の値が1に近づけば近づくほど、この理論の説明力は大きいものになります。

しかしたとえ P が1になっても、それだけで安心するわけにはいきません。実は集合 $N - M \cap N$ 、即ち理論が扱うことのできる事象から交わりを引いた領域も意味を持っているからです。この部分は「特定の理論が説明できる事象ではあるが、集合 M に属していない」もの、すなわち現実には存在していない事象の集合を表しています。つまりこのような部分が大きければ大きいほど理論としてはそれだけ多くの「余計なもの」まで説明してしまうために、効率的ではないということになります。これが $A = |M \cap N|/|N|$ のもっている意味なのです。したがって A が1に近づけばそれだけこの理論が効率的なものだということになります。

上に述べたことから $P = A = 1$ という状態がもっともよい、理想的な理論の状態だということができます。これは現実に存在している事象を過不足なく説明し、かつ現実に存在しないような事象を何一つ説明しようとはしない理論で、理想に過ぎないかも知れませんが、これは右の図のように集合 M と N がぴったりと一致したことを示しています。



§57 式 E と S を説明するためには、少し予備的な知識が必要なので、ここで述べることにしましょう。

数理言語学では言語 L を (L, Σ, V, P) という組によって表されるとしています。 Σ というのは初期集合と呼ばれるもの、 V はアルファベットの集合、 P は「導出規則」の集合と呼ばれます。これは言語に限られるわけではなく、

たとえばユークリッドの幾何学を例に取っておおまかに説明すると、「初期集合」は「平行線は交わらない」とか「三角形の二辺の和は他の一般より大きい」といったそれ自体証明できない自明な仮定(公理)の集合に当たります。V は $a, b, c, \dots$ のような記号や $+$ や $-$ のような演算子など、この理論の中で使われる記号の集合です。また P はこれらを使って初期集合からたとえば証明を導き出す規則の集合と考えられます。L はこれによって導出される「正しい」文の集合を表します。こうして導き出された全体が言語あるいは幾何学ということになります。

その中で有名なチョムスキーの生成変形文法の生成部門といわれているものもそうですが、定常状態言語 finite state language というものが考えられています。これは元々自動販売機のような定常状態オートマトン finite state automaton に利用するためのものであったと思われませんが、これは導出規則が非末端記号を A, B, C などとしたとき、末端記号 a, b, c などと表されるものだけか、非末端記号 + 末端記号の形をしたものに限られる言語です。非末端記号は言語で言えば、たとえば S とか NP とか、あるいは品詞のような、なにか抽象的なカテゴリーを表すものと考えられます。オートマトンの場合には、これはある「状態」を表すものといえます。

いま話を簡単にするためにきっかり 60 円を入れたときに飴が出てくる自動販売機を考えてみましょう。また買う品物を選ぶこともできないし、お釣りも出ないということにしましょう。こういう自動販売機を仮に「ぶったくり君」と呼ぶことにします。さて 10 円玉と 50 円玉は言語で言えば単語に当たります。10 円玉を仮に a 、50 円玉を b としますと導出規則は次のようになります。最初に 10

- | |
|-------------------------------|
| 1. $\sigma \rightarrow C_1 a$ |
| 2. $\sigma \rightarrow C_5 b$ |
| 3. $C_1 \rightarrow C_2 a$ |
| 4. $C_1 \rightarrow b$ |
| 5. $C_2 \rightarrow C_3 a$ |
| 6. $C_3 \rightarrow C_4 a$ |
| 7. $C_4 \rightarrow C_5 a$ |
| 8. $C_5 \rightarrow a$ |

円を入れるとぶったくり君は導出規則 1. によって C_1 の状態に移り、 a を書き出します。もし 50 円玉を入れるとぶったくり君は導出規則 2. によって状態 C_5 に移り、 b を書き出します。というわけで aaaaaa あるいは ba または ab が得られるとこれらは末端記号だけからできており、かつ L に属している正しい文なので、ぶったくり君は「判った」という意味で飴をぼとりと落とすことになります。結局ぶったくり君が分る文章は aaaaaa と ab と ba だけだということになります。いわば「ぶったくり語」という言語はこの三つの文

だけから成っていることになるわけです。

もし50円玉を続けて入れるとぶったくり君はどういう行動をするでしょうか。また100円玉を入れるとどうでしょうか。もし適当な書換え規則がないときには $C^i \rightarrow \sigma$ すなわち初期状態に戻ってしまうという規則を付け加えると、ぶったくり君は理想的なぶったくり君になると思いませんか。逆にある言語理論が適当な書き換え規則によってたとえば、末端記号だけからできてはいてもそれが定義された文章の集合になれば、すなわち理論が理解できないような文を生み出すとすれば、それは上に挙げた $N - M \cap N$ の領域に属するものになります。もし70円であめ玉が出てくる機械のばあいにはどんな規則の集合が必要になるでしょうか。

§58 ところで先にユークリッド幾何学で述べましたように Σ は空集合ではなく、公理の集合と考えられます。理論は少なくとも一つ以上の証明できない公理を出発点として構築されと考えられます。公理が少なければそれだけ理論は経済的に構築されと考えられます。少なくともアプレションはそう考えました。それが $E = |N| + 1/|N| + b$ の持つ意味だと考えられます。

また導出規則が少ない方が理論は単純になると思われませんが、導出規則が全くなければ理論が成り立たないことは明らかです。これが $S = |N| + 1/|N| + c$ の意味するところだと思われます。

* * *

参 考

*以下は興味のある方だけ読んでください。

〔可付番集合の部分集合〕

可付番集合のすべての元は、大きさに従って一列に並べることができるといういました。そうすると可付番集合の部分集合はどうなるでしょうか。たとえば奇数の集合の全体は明らかに自然数の部分集合ですから、可付番集合の部分集合になります。そうすると自然数の集合 N のそれぞれの元に、たとえば $2n+1$ に当る奇数の集合の元を対応させることができます。自然数の集合は無限集合ですが、その元のすべてにこの対応を作ることができて、しかも一列に並べることができますから、この奇数の集合もまた、可付番集合ということになります。一般に可

付番集合の部分集合はまた可付番集合であることが示されています。またこの操作は無限に続けることができますから、一見奇妙に思われるかもしれませんが、奇数の集合の濃度もまた、可付番集合の濃度 $\aleph_0$ に等しいことになります。すべての有限集合と可付番集合をあわせたものを「高々可付番の集合」といいます。
[連続体の濃度]

$0 < x \leq$ という実数の集合 R_1 が可付番集合でないことを示すのは、次のようにします。 R_1 の元 x は、無限小数としてただ一通りに表すことができます。

$$x = 0.x_1x_2x_3 \cdots a_n \cdots$$

いま、 R_1 が可付番集合であるとし、そうすればその元に対して通し番号を付けることができる筈です。すなわち、次のように上から下へ並べることができるはずですが、

$$\begin{array}{ccccccc}
 a_1 & = & 0.a_{11} & a_{12} & a_{13} & \cdots & a_{1n} & \cdots \\
 & & \searrow & & & & & \\
 a_2 & = & 0.a_{21} & a_{22} & a_{23} & \cdots & a_{2n} & \cdots \\
 & & & \searrow & & & & \\
 a_3 & = & 0.a_{31} & a_{32} & a_{33} & \cdots & a_{3n} & \cdots \\
 & & & & \searrow & & & \\
 \cdots & & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\
 & & & & & \searrow & & \\
 a_n & = & 0.a_{n1} & a_{n2} & a_{n3} & \cdots & a_{nn} & \cdots \\
 & & & & & & \searrow & \\
 \cdots & & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots
 \end{array}$$

ここでこの表の対角線にある項 $a_{11}, a_{22}, a_{33}, \dots, a_{nn}$ からなる数を考えます。その上で次のような小数 b を定義します。

$$b = 0.b_1b_2b_3 \cdots b_n \cdots$$

$$b_n = \begin{cases} 1 & a_{nn} \neq 1 \text{ のとき} \\ 2 & a_{nn} = 1 \text{ のとき} \end{cases}$$

そうすると $0 < b \leq 1$ ですから、 $n \in R_1$ です。したがってこの数は上の表の中の数のどれか (a_n) と一致しなくてはなりません。ところがどのような数をとっても、上の表のどの数とも、第 n 項において異なっています。これは矛盾しています。このことは、この数が無限集合ではあっても、可付番の集合では

ないことを示しています。したがってこのような可付番でない無限集合 R_1 を自分の中に無限部分集合として持っている実数の集合も、また可付番ではないことになります。

〔関数の濃度〕

たとえば実数の集合 R から R への関数があるとしたときに、この関数全体の集合を F とします。いま R に属するどのような元 x にも定数 a を対応させるような関数 f_a を考えます。そうすると定義によって当然これは集合 F に属します。すなわち $f_a \in F$ 。今こういう関数の全体の集合を考えて C としますと、 C は F の部分集合になります。このとき実数 a に f_a という関数が対応するとしますと、 a は実数、 $f_a \in C$ ですから、これは集合 R から C への一対一の対応が得られます。二つの集合の間に一対一の対応が少なくとも一つあるとき、これらの集合は「対等である」といわれ、 $C \sim R$ のように書きます。 R が連続体の濃度を持っているから、これと対等な集合 C も少なくとも高々可付番の集合ではないことが分ります。従って集合 F も高々可付番の集合ではないことになります。

いま、かりに R から F への一対一の対応 g があるとします。そうすると F の任意の元は、 R から R への関数ですから、 R のある元 a と g_a とを対応させる関数になります。そこでさらに次のような関数を新しく定義します。

$$h(a) = g_a(a) + 1$$

すると定義から当然 $h \in F$ ですから、これはある g_b に等しいことになります (h に等しい関数 g_b が存在するはず、といってもよい)。従って $h(x) = g_b(x)$ 。 x に b を代入すると $h(b) = g_b(b)$ 。一方上の定義から $h(b) = g_b(b) + 1$ となります。この矛盾は R から F への一対一の対応があると仮定したことから起ったものですから、結論としてそのような対応はない、すなわち R と F とは対等ではない、ということになります。この項の前半の結果とあわせて考えれば、集合 F は R よりも大きい濃度を持つということになります。これが関数の濃度 $\mathfrak{f}$ というわけです。(これは赤穂也『集合論入門』培風館 1959 の説明を基にしました。)

第 五 話

格 その一、インドヨーロッパ語の格 I

§59 英語を習い始めた時を思い出しますと、英文法という七面倒くさいものがある、面喰らうことが沢山ありました。

その中には、格というものがあって、これは日本語のテニヲハのようなものだと考えなさい、といわれました。

それで何となくそういうものかと思って過してきましたが、大学に入ってロシア語やラテン語、ギリシア語などを習うようになりますと、そう簡単なものではないことがだんだん分ってきました。ギリシア語の格は五つですが、ロシア語やラテン語には6格があります。サンスクリットではさらに一つ増えて7格になります。

格というものが文章の中での名詞が他の単語とどういう関係にあるかを示すものだとしますと、言葉によって数がいろいろ異なっているのは、どうにも変で、極めて不当である、といたくもなります。

それでも主格と目的格(対格)がないと、文章の意味が分らなくなるといわれれば、至極もつともな気がしてきます。インド・ヨーロッパの言語に必ずといっていいほどこれらの格があるのは、そのためでしょう。

また所有格(属格、ロシア語では生格という)がないと、「テニヲハ」の「ノ」のない日本語のように、たちまち困ってしまいます。

「誰それに本をあげる」というようなばあいの「二」に当る与格(英語では間接目的語という)もないと困るように思えます。

しかしそのほかの関係は、前置詞などを使えば表せないことはないと思われます。

このことから、格の中に重要性の違いがあることが分ります。一番重要なのはいうまでもなく主格と対格です。これに続くのは属格と与格です。それ以外の格は重要度から見れば三番目以下になります。

§60 こういった考えは、漠然とではありますが、少なくとも古代から存

在していました。

ギリシアのアレクサンドリア時代の文法家たちは、格のことを *πτῶσις* *ptōsis* と呼んでいました。この言葉は動詞の *πίπτω* 「*píptō* 落ちる」から作られたものでありました。そして主格と対格は *ἡ ὀρθή πτῶσις* *hē orthē ptōsis* 「正しい *ptōsis*」と呼ばれて、別格のものと考えられていました。

なぜ格が「落ちる」という動詞から作られたかといえ、要するにその他の格は「正しい格」から「落っこちる」ことによってできたと考えたからであるようです。ダラクしたわけです¹。

ラテン語で「落ちる」という動詞は *cadō* ですが、これの名詞に当るのは *casus* でありました。それでラテン語も格のことを *casus* といい、主格と対格は *casus rectus* 「正しい格」と呼びました。

それ以外の格はひっくりめて *casus obliquus* 「傾いた格」と呼ばれました。「かぶいた」² すなわち「正道ではない格」という訳です。英語で *case* といわれるのはこれに由来しています。

日本語でも *casus obliquus* はしばしば「斜格」という名で呼ばれます。これに対して *casus rectus* は「直格」と訳されています。

ロシア語のばあいは「落ちる」に当るのは *па́дать* ですから、これを使って *падéж* という語を格を表すために用いています。

序でに言えば、日本語の「格」という訳語も、たとえば「品格」というように、どれだけ「ダラク」しているかいないかというところから発想されたのではないかと思います。

§61 主格はギリシア語では *ἡ ὀνομαστική πτῶσις* *hē onomastiké ptōsis* と呼ばれました。*onomastiké* というのは *ὀνομάζω* *onomázō* 「名前で呼ぶ」という意味の動詞からできていますから、「(ものを) 名前で呼ぶ格」というほどの意味です。

ラテン語でこれに当るのは *nominō* ですから、主格は *casus nominativus*

¹ こういうとはなはだ刺激的ですが、本当の意味合いは、ある基本的なものが、具体的なばあいに従ってより具体的な意味をとるというほどのものであったと思われます。

² 「かぶく」という動詞の「かぶ」というのは「頭」の意味で、「頭が傾く」という意味から、「勝手気ままなふるまいをする。派手な身なりや、異様な、または好色めいた言動をする」という意味になったと、小学館の『日本国語大辞典』にあります。これに漢字を当てたものが歌舞伎(者)であるといわれます。

と訳されました。

日本語の「主格」というのは、「主語になる格」という意味だと思われますから、名前の付け方が少し異なっています。

おもしろいのは対格の名前です。ギリシア語ではこれは *ἡ αἰτιατική (πτῶσις)* *hē aitiatiké ptōsis* と呼ばれていました。

これは元々 *αἰτέω aitéo* 「求める、要求する」あるいはその中動相の形 *αἰτέομαι aitéomai* 「自分のために求める、要求する」という動詞から作られたものであり、これはさらに *αἰτία aitía* に遡ると考えられています。

この *aitía* というのは「罪」という意味と並んで「理由、原因」のような意味もあり、*aitéo* や *aitéomai* はこの後の方の意味に対応しています。前の方の「罪」に当る動詞は、よく似た形を持っていた *αἰτιάομαι aitiáomai* 「罪ありとする、訴追する」でありました。

ラテンの文法家はどうもこの二つを取り違えたのではないかと思います。が「罪ありとする」という動詞 *accūsō* を使って、*casus accusativus* としました。ロシア語でも「罪ありとする」の意味に当る *винительный падеж* という用語を受け継ぎました。

§62 それにしてもギリシアにおいて対格はどうして「理由」とか「原因」と結びつけられたのでしょうか。

英文法で習ったときには、目的格は動作が及ぼされるものを表すのであって、他の事物に動作が及ぶものが他動詞だというように教わった覚えがあります。そのときにはそういうものかと思っただけでしたが、その後このような説明はあまり正しいとはいえないと思うようになりました。

そのきっかけになったのは、大学の三回生の時の冬だったと思いますが、当時慶応大学におられた有名なイスラム学者の井筒俊彦先生の集中講義でありました。講義題目は「一般意味論」という、聞き慣れないもので、わずか一週間の講義に過ぎませんでしたが、これに出席したことが、その後の私の研究の方向を決定したということが出来ます。

それはともかく、先生はたとえば *Jack loves Jill*. という文章があるときに、*Jack* の *love* という行為が *Jill* に及んでいるというのは、全く現実を反映したものではない、というようなことをいわれました。

現実にあるのは Jack と Jill であって、光線が Jill に当って Jack の網膜上に Jill の像を結ぶ。その姿態に反応して Jack の頭が悩乱して、特殊な状態になる。これが Jack loves Jill. の正体なのであって、Jack の行為が Jill に及んだのではない。被害者はむしろ Jack なのである、といわれました。

今の言葉で言えば、言語の構造は現実世界の構造をそのまま写像したものではなく、両者はその構造に関して同じではないということになりましょうか。もしそうとすれば、love と Jill の関係は、原因と結果ということになります。Jill が原因で love なるカッコ付の「行為」が起るわけです。

そうすれば love は本質においては自動詞でなくてはなりません。その証拠にたとえ Jack が悩乱しても、Jill がそれにつれて悩乱するということは、必ずしもありません。だからこそ、「片思い」という美しい言葉が生れることになるのです。

§63　　そういう目で疑ってかかると、一方では対格、あるいは目的格というもの、他方では他動詞、自動詞などという区別が、甚だしく疑わしいものに映ってきます。

十返舎一九の「東海道中膝栗毛」のなかに、弥次さんだか喜多さんだかが「湯を沸かしてへえろう」というと、相手が「湯を沸かしたら熱くてへえれねー」という。片方が「飯を炊く」といえば、他方は「飯を炊いたら粥になってしまう」という。これは「結果の意義」resultative meaning といわれているものですが、この意義は私の知る限り目的格／対格によって表されます。

たとえば「手紙を書く」、「着物を縫う」なども皆そうです。最初から手紙や着物があるわけではなく、書いたり縫ったりした結果手紙や着物ができてくるのです。最初にはないものに行為が及ぶわけではありません。「作る」という動詞などはまさにその典型的なものだといえることができます。

それでは行為が典型的な形で対象に及ぶと思われる、たとえば「切る」という動詞のばあいはどうでしょうか。

これもよく考えて見れば、「切る」という「行為」は客観的な現実の中には存在しないことが分ります。

どうしてかといえば、ある風景の中に人が一人いて、その人が斧を手に持って手を縦に振っているとします。このとき、斧が空を切っているときには、見

ている人は斧を「振っている」と思うでしょう。もしこの斧が木に当って跳ね返っているとすれば、見る人は木を斧で「叩いている」と思うかもしれません。しかし、この運動の結果木が二つの部分に分れそうになったとすると、見る人は木を「切っている」というに違いありません。

しかしよく考えて見れば、この人の行っている「主体的な運動」そのものは、これらのばあいを通じてほとんど同じだといえます。しかも最後の「切る」というばあいにも、もし完了形とか過去形でないならば、まだ木は二つの部分に分れてはいません。見ている人は、この人が木を二つにしようと「意図している」のだらうと推測できたときにこの動詞を使うことができるのです。

このことから分りますように、このばあいにも、**同じ行為をその行為の結果を見ながら違う「行為」と認識しているに過ぎない**と思われま

す。そうすると「木を切る」というばあいの目的格／対格は、行為の結果であるということになり、「切る」という行為も客観世界には存在しないことになります。

§64 以上のことから目的格・対格は行為の原因のばあいも、結果のばあいもあるということになります。

梵語はこの格を karma といいます。karma というのは kr- 「作る」という語根に印欧語の中性名詞を作る接尾辞 *-men が母音交替を起した形 -mṇ がついた、*ker-mṇ という語からできたと考えられています。そうするとこれは「作られたもの」というほどの意味になり、結果を表すということになります。

この karma という語は、仏教では以前になされたことの結果という意味で業と訳されています。「あの人は業が深い」などというあの業です。このことからでしょうか、梵語学ではこの格を業格ごうかくといているようです。これもやはり行為の結果を表す格を意味しているといえます。

こういう目で見ますと、英文法の目的格というのは、怪我の功名だと思えますが、とてもよい名前だといえることができます。

§65 さて、英語で所有格といているものは普通属格といわれています。これはギリシア文法では ἡ γενική hē geniké といっていました。これは

γένος génos 「種，種族」から作られた形容詞で，「種に属する」または「種に共通する」という意味でした。

ラテン語でこれに当るのは genus ですが，これから作られる形容詞は generālis のはずでした。generālis はもともと「種の，種に共通の」という意味であり，それがやがて「一般的な」という意味になっていきました。

この genus あるいは generālis は，さらに遡れば印欧語の *gen- 「生む」という語根からできたものだといわれています。これからできた有名な言葉はいろいろありますが，たとえば (g)nātūra というのもそうです。

これは「生れつきのもの」ということから「本来の性質＝本性」を意味するようになり，また「おのずから生れ出てきたもの」という意味で「自然」を意味することにもなりました。

「自然」というのは，元々「人の作意によらずに自ずから然るべくなったもの」という意味だといわれます。

ところがラテンの文法家たちは何を勘違いしたのか hē geniké を「生む」という意味にとって，genetivus としました。これは「生れに関係する」という意味ですから，完全な誤訳というべきですが，ロシア語はこれに倣って родительный падеж (文字通りには生む人の格) と訳しました。日本のロシア文法でもこの格の名はそういうわけで「生格」という，おもしろい訳語になりました。

しかしロシア語では生き物を表す名詞の対格がこの格と同じ形になりますから，「生格」というのも，決して悪い名前ではないと思っています。

§66 ともあれ，以上の三つの格は，それぞれに重要な格の形式であると思われます。それは印欧語だけでなく，これらの格を持っている言語が多く見られるからです。

その中でも，主格と対格/目的格は最も重要なものだと思います。これ以外の格はしばしば前置詞を付けることによってその論理的な関係を表すばあいが見られるのに対し，主格と対格だけは，前置詞を付けてこの格の意味を表すことがほとんどないといってよいと思われるからです。

もちろんたとえばロシア語で в Моск-
 бы 「モスクワ (の中) へ」というように、
 前置詞が対格を要求するばあい、外
 の言語でも広く見られることです。

英語でもこれらの格は、現在では前
 置詞を付けずに動詞と結びつきます。そ
 れが主格なのか対格/目的格なのかを示
 すものは、語順の外にはありません。

属格のばあい、英語では所有格とし
 て “-s” で表すばあいと、前置詞 of に
 よるばあいがあります。しかし前置詞
 を用いる言語はインド・ヨーロッパ語の
 ばあい、たとえばフランス語 (de) やブ
 ルガリア語 (на) のように分析的になっ
 た言語を除いては、比較的少数です。

これに対して与格は英語のように目
 的格を用いるばあいと前置詞 to による
 ばあいとが見られますが、前置詞を用
 いることが多いように思います。

英語のばあい、元々ドイツ語のよう
 に四つの格を持っていたのですが、人
 称代名詞のばあい、中性を除いて与格

が残り、目的格になりました。中性のばあいには逆に与格がなくなって、本
 来の対格が目的格になりました。これがどうしてなのかは、おもしろい問題
 なのですが、そのうちにお話する機会があるかもしれません。

ロシア語にはこのほか「造格」と「前置格」という変った格があります。造格
 は「何かを造る格」という意味で、サンスクリットの「具格」(instrumentālis)
 に当ります。この格は近代ではほとんどが英語の by や with のような、前置
 詞による表現に変わっています。

「前置格」は元々は場所を表す「所格」(locativus) が、単独では用いられ
 なくなったものです。

スオミ語名詞の格

1. 主格	nominativus
2. 対格	accusativus
3. 部分格	partitivus
4. 属格	genetivus
5. 態格	essivus
6. 転格	translativus
7. 随格	comitativus
8. 具格	instrumentalis
	instructivus
9. 内 (在) 格	inessivus
10. 出格	elativus
分離格	
11. 入格	illativus
12. 位格	adessivus
13. 奪格	ablativus
14. 与格	allativus
	dativus
15. 沿格	prolativus
16. 逸格	abessivus
欠格	

格の数が多いことで古くから知られているのは、フィンランドのスオミの言語です。この言語は普通 16 の格が知られています。これを調べるのは物好き以外にはないとも思われますが、それぞれの格にヨーロッパの研究者が付けた名前があり、これが時に便利なので、あえて挙げておきます。もちろんこの中にはインド・ヨーロッパ語について古くから用いられている、格の名前もあります。大きな英語の辞書でしたら載っていますので、興味があれば格の意味も含めて調べてみてください。(参考: 泉井久之助『言語の構造』昭和 14 年 弘文堂 84-86 頁。)

第 六 話

格 その二、インド・ヨーロッパ語の格 II

1. 動詞の格支配

§67 すでに述べましたように、インド・ヨーロッパ語の格は、主格、対格、属格を最も基本的な格とし、これに言語によってさまざまな、より具体的な関係を表す格を加えて格の体系ができていたと考えられます。この具体的な関係を表す格は、だんだん前置詞と共に用いられる「分析的」なものに変っていきました。

英語の場合はこのような変化が最も進んだ言語の一つと思われます。

たとえば「中に」という関係的な意味は in という前置詞で表されます。これに対して「中へ」という関係的な意味は、in に「向っていく」意味を持つ前置詞 to を加えて into という前置詞によって表されることになりました。

このようになりますと、関係的な意味はすっかり前置詞によって表すことができるようになり、名詞の格は問題にならなくなります。ところがロシア語のばあいにはそうではありません。ロシア語で「中に」を表す前置詞は в ですが、これは元々場所を表す所格に付けて、その意味をよりはっきりさせるために使われたものだと考えられます。

所格はもともと場所を表すだけで、独立に用いられていました。それに「中に」を表す в をつけたり、「上に」を表す на を付けたりして、より細かに表現しようとしたわけです。それがだんだんと一般的になってくると、もう所格は単独で用いられることがなくなり、特定の前置詞とつながるばあいだけに用いられるようになったのです。

こうして所格という格はなくなり、前置格が生まれました。

対格のばあいもそうです。インド・ヨーロッパの言語では、対格はしばしば方向を表すのに用いられました。たとえばラテン語では Rōmam eō 「ローマ (単数対格) 行く (一人称単数)」といえば、「私はローマに行く」という意味になりました。

ギリシア語では、「中へ」という意味を表すときには、前置詞 eis (εἰς) が名詞の対格と共に用いられるのが、普通でした。たとえば、Ἐλθὼν δὲ ὁ Ἰησοῦς

εἰς τὰ μέρη Καισαρείας τῆς Φιλίππου ἡρώτα τοὺς μαθητάς. (Matth.16:13)
「イエスがピリポのカイザリアの地方に行かれた¹ とき、弟子たちに尋ねた
.....」

一方、「中に」の意味を表すときには、前置詞 en (ἐν) と名詞の与格を用いるのが普通です。しかし、碑文の中に、この前置詞が対格をとって、たとえば γράψαι ἐν χαλκῳμα 「青銅板の中へ私は書き込んだ」のような表現があると報告されており、古くにはこのような用法もあったのではないかと考えられます。

§68 ロシア語のばあい、中世には未だ対格が独立して方向を表すばあいが、しばしば見られました。たとえば, ГЛЮБЪ ЖЕ ВНИДЕ УЕРНИГОВЪ (Лавр. ѡбт.) 「グレーブはチェルニゴフの中へ (対格) 入った。」

このように方向を示す対格をもっと細かく表現するために、ラテン語では in 「中に」を付けてやれば、英語の into の意味になります。たとえば amnis in Atlanticum Oceanum effunditur. (Plin.) 「(その) 川は (単数主格) 大西洋 (単数対格) に注ぐ」というようなばあいです。

ロシア語も同じように方向を表す対格に в を付けてやれば、「中へ」という意味になります。こうして в には、前置格の名詞をとるときと、対格の名詞をとるときとの意味が異なるようになりました。これが文法で前置詞の格支配といわれているものです。

このようにしてみると、前置詞の格支配というのは、英語のように前置詞が関係概念のすべてを表すような言語状態に至る、中間的な段階であることが分ります。

すなわち、何時の頃か大昔には、たとえば先に挙げた「川は大西洋に注ぐ」という意味で、*amnis Atlanticum Oceanum effunditur のような表現があったと考えられるのです。これは「大西洋に」ということを表しているだけなので、大西洋の「中に」なのか「上に」なのかははっきりしません。そこではっきりさせるために、前置詞 in がついたのだと考えられます²。

¹文字通りには「地方の中に行く」。

²このような例は、古期ラテン語 Archaic Latin に多く見られることが、報告されています。たとえば, nam ille quidem hinc abiit Alidem. (Plaut. Captivi) 「というのはまさに彼がここからアリスへ立去ったのだから」(Alis はペロポネソスの町 Elis のドーリア名); iam Cyprum veni. (Plaut. Mercator) 「すでにキプロス島に私は来ている」; pater ad mercatum hinc me

従ってこれらはいずれもいわば副詞のように、漠然と方向を表していたものを詳しく説明するのが、本来の役割だったと考えられます。

ただしこの「漠然と方向を表す」というのも、実はその下にもっと深い事情があったことが、最近になって内容的類型学の進展によって分ってきました。これについては、別のところで述べるつもりです。

こういう訳で、ロシア語では *в* だけでなく、*на* 「上へ/上へ」も前置格と対格をとります。そのほか、造格をとる *над* 「上の方に」、*под* 「下の方に」、*за* 「の向うに」なども、対格をとると、それぞれ「上の方に」、「下の方に」、*за* (cf. to the other side of) 「の向うへ」のようになります。

また行為がある場所を通るような意味を持つ前置詞、たとえば *через* 「通って、越えて」(cf. across) や *сквозь* 「の中を通して」(cf. through) なども対格をとります。

§69 「から」を表す前置詞は、ロシア語にはいくつかあります。*от* は「起点からの離脱」を表します。また *с* は「表面からの離脱」、*из* は「中からの離脱」、そして *из-за* は「背後からの離脱」を表しています。

これらの共通点はいずれも生格を要求することです。大部分の名詞が印欧語の *O* 語幹名詞といわれるものからなっているスラヴ語の男性名詞硬・軟両変化の単数生格の形 *-a/-я* は、印欧語の奪格(従格ともいわれます) *ablativus* の **-ōd* に遡るといわれています。

本来の属格の語尾が、この語尾によって置き換えられたのですが、その結果、この格は属格の働きと奪格の働きの二つを受け継いだといわれています。

属格の意味は、すでに述べたように英語では所有格あるいは「of + 名詞」とほぼ同じと考えられます。

奪格はラテン語に見られますが、たとえば, *Hostēs urbe expulsi sunt*. 「敵は町から追い出された」(*urbe* は *urbis* 「町」[cf. *sub-urb*] の奪格) のように、広い意味で「～から」の意味を表したり, *vehor equō, nāvī*. 「馬によって、船によって、私は行く」(*equō* は *equus* 「馬」の奪格 [cf. *equestrian* 「騎手、馬術家」], *nāvī* は *nāvis* 「船」の奪格 [cf. *navigation* 「航海」] など、

meus misit Rhodum. (Plaut. *Mercator*) 「私の父は商売のために私をここ、ロードス島に(対格)よこした」など [I, II, pp.235-236].

vēhor は中動相一人称単数現在 — [cf. vehēcle 「乗物」³] のように、手段を表すなど、さまざまな意味に用いられますが、基本的にはやはり「から」の意味を持っています。

こういう訳で、ロシア語の生格のばあいも、もとは単独で使われたと考えられますが、あまりはっきりとした例はありません。

ただしこれは、たとえば ДВА ОУЧЕНИКА СВОИХ «自分の弟子たちの(うちの)二人」のようなばあい、あるいは ПИТЬ ВОДЫ «水を飲む」(ВОДЫ は вода の部分生格 [cf. to drink some water]) のようなばあいに受け継がれていると考えられます。

たとえばロシア語の「中から外へ」を意味する前置詞 из は英語の out of に対応しますが、この of はもともと名詞の属格を表していたのではないのでしょうか。

§70 ところでロシア語で на 「上に/上へ」と в 「中に/中へ」は、はっきり区別があって、その使い方に疑問の余地はないようですが、実際にはそう簡単ではありません。

たとえば国のばあいには в Грúзии 「グルジアで」、во Фрáнции 「フランスで」のように、普通 в と名詞の前置格が使われます。しかしウクライナのばあいには на Укràине のように、на が用いられます⁴。

このように в を使うか、あるいは на を使うかは、最終的には一つ一つの名詞について覚えなければなりませんが、一応の規則らしいものはあります。

まず第一に町の名、境界によって囲まれている地域の名などは、原則として в が用いられます。たとえば в Лóндоне 「ロンドンで」、в Кры́му 「クリミアで」、в Грúзии 「グルジアで」、во Фрáнции 「フランスで」のようなばあいです。今言った原則の例外は、すでに述べたように、на Укràине 「ウクライナで」のようなばあいです。

³vēhōr は IE *wegʷh- という語根から作られています。これはサンスクリットの váhati 「運ぶ」、アヴェスタ vazaiti、スラヴ語の vezъ に対応しています。

⁴Украина が в でなくて на をとるのは、この語が край 「端、地方、辺境」からできているためではないかと思われまふ。ソヴェト体制が崩壊した後、ロシア人が на Украине と言うとウクライナ人が強く反発して в Украине だと抗議したという挿話が聞かれましたが、これはこのような事情によるものと思われまふ。на がいたくウクライナ人の自尊心を傷つけたのだと思われまふ。

もし明確な境界によって囲まれていない、あるいは抽象的な土地のばあいであれば、**на** が用いられます。たとえば、**на родине**「祖国で、故郷で」、**на чужби́не**「異国の地で」のようなばあいです。

更に壁で囲まれた建物。たとえば、**в теа́тре**「劇場で」、**в гості́нице**「ホテルで」、**в церкв́и**「教会で」など。

勉強、研究の場。たとえば、**в шко́ле**「学校で」、**в университе́те**「大学で」、**в институ́те**「高等専門学校で」などにも **в** が用いられます。

§71 ロシア語の格で一番広い働きをするのはやはり造格だと思われます。

この格は *insutrumentalis* すなわち道具を表す格であると、一般的に考えられています。現に梵語学ではこの格を「具格」と呼んでいます。

たしかにたとえば **писа́ть перо́м**「ペンで書く」、**би́ть ка́мнем**「石で打つ」というようなばあいには道具の意味になります。

また人などに使って行為者を表すばあいにも、広い意味で道具と考えることができます。たとえば **э́та кни́га им на́писана**。「この本は彼によって書かれた」というようなばあいがこれに当たります。

しかし「内容を表す」とされる造格の用法は、道具の意味から導くことができません。文法によれば、これは「行為の目的語や行為の及ぼす領域を示すことによって、動詞の意味を限定する」といわれています。

たとえば、**руководи́ть за́ня́тия́ми**「仕事を指揮する」、**па́хнут сено́м**「干し草のにおいがする」というようなばあいです。

一方、ここに属するとされている、たとえば **занима́ться му́зыкой**「音楽にたずさわる」とか、**интересова́ться живо́писью**「肖像画に興味を持つ」のように、**-ся** を伴っているもの、すなわち再帰動詞 *reflexiva* の多くは、語源的に説明することのできるものがあります。

前のばあいは **занима́ться** は語源的には **занима́ть**「占める、占有する」という動詞に **-ся**「自分を」という再帰代名詞がついて、「自分を占める」、すなわち、音楽などで、自分を占有することから、「たずさわる」という意味がでてきたと考えられるからです。

後のばあいも、**интересова́ть**「興味を起させる」に **-ся** が加わって、「自分に興味を起させる」すなわち「興味を持つ」ということになりますから、何

によって興味が惹き起されたのかが造格に立つのは、よく理解できます。

§72 こういう風に歴史的な観点から説明できるものもよくあります。言語というものが、常に歴史の中で変化していくものだからです。

たとえば *учить* 「教える」という動詞は、教えるものを与格にし、教えられる人を対格にします。たとえば *учить студентов* (対) *русскому языку* (与格) 「学生にロシア語を教える」のようなばあいです。格の支配を知らないとこれは「ロシア語に学生を教える」と訳しかねません。

またこれの再帰動詞 *учиться* は「習う」という意味になりますが、習う対象は与格になります。

たとえば, *учиться музыке* (与格) 「音楽を学ぶ」です。これはこれらの動詞を作っている **ūk-* という語根がもともと「慣らす」という意味だったことに起因しています。ロシア語でもこの語根から作られたものに, *при-выкнуть* 「慣れる」という、そのものずばりの動詞があります。

ですから先に挙げた *учить студентов* (対) *русскому языку* (与) という動詞は、もともと「学生をロシア語に慣らす」という意味だったと考えられるのです。

同じように, *учиться музыке* (与格) は「音楽に慣れる」という意味でした。日本語でも「ならう」(習う) というのは「なる」(慣る) の延語である可能性があるとは私は考えています。

小学館の『日本国語大辞典』を引いてみると、「ならう」の項には「いままでにしばしば体験して常のこととなっている意をあらわす」となっています。もしそうしたらここには考え方の共通性が見られると言えるかもしれません。

2. 造格の意味

§73 さて話を元に戻しますと、先ほどの *руководить занятиями* 「仕事を指揮する」のようなばあいは、道具の意味から説明することができません。

たとえば, *длинными зимними вечерами* в колонии было жутко 「長い冬の夕べなどにはコロニー(施設)の中は気味が悪かった」のような時を表す造格、あるいは Он ехал *берегом* широкого озера 「彼は広い湖の岸を歩いてた」のような場所を表す造格、さらには *Время летит иногда*

птицей, иногда ползет **червяком** 「時間は時には鳥のように飛去り、時にはミミズのように這っていく」のように、行為の様子(様態)を表すとされるものも同様です。

このことから、造格の基本的な意味を「道具」とするのは正しいことではないと思われてきます。「道具」→「はたらき」は成り立っても*「道具」→「空間」、*「道具」→「時間」、*「道具」→「様態」のどれもが派生関係を考えるのが難しく、成り立たないからです。逆に「はたらき」→「道具」は成り立ちます。もし「はたらき」を基本的な意味とすれば、上に挙げたどの関係も成り立ちます。

§74 このようなことに基づいて、造格が補語に立つばあいも説明することができるとおもわれます。

たとえばロシア語のばあい、英語の主格補語や目的格補語に当るものには、主格に立つばあいと造格に立つばあいとがあります。

造格補語をとるのは、主として「にする」とか「になる」のような意味を持つ動詞のばあいです。

たとえば **называйте меня даже эгоистом** — так и быть, но не **называйте меня светским человеком**. 「私をエゴイストと呼んでもいい。まあそうかもしれない。しかし俗な人間とは呼ばないでください」というようなばあいには、補語の名詞は造格に立ちます。あるいは **его избрали секретарём** 「人々は彼を書記に選んだ」というばあいにも同様です。

ところが英語の be に当る連辞(文法用語では「連辞」は *copula* といいます) **быть** には、補語は主格になるばあいと造格に立つばあいとがあります。

そして現在時称の時にはほとんどが主格にたちますが、未来のばあいにはほとんどが造格の形を取ります。

過去形のばあいには主格になるものと、造格になるものとがあります。どちらをとるかについては、大きな文法書には、いろいろと細かいことが書いてはありますが、もう一つよくわかりません。

そこで私は、上に述べた造格の機能と照らし合せながら、次のように考えてみたことがあります。少し面倒かもしれませんが、我慢して聞いてください。

まず、分割ということについて説明します。

ある集合を、互いに交わらないように、いくつかのグループに分けます。たとえば学生の集合を年齢とか性別とか、学年で分けるばあいを考えてみてください。このような分け方をすれば、誰も違ったグループに同時に所属することはありません。

これに対して、サークルで分けると、同時に二つ以上のサークルに入っている人がいて、交わらないように分けることはできなくなります。

これは分ける基準に問題があります。代数学ではこの基準を「反射律」、「対称律」、「推移律」という三つの関係に合っているかどうかで判断します。

反射律というのは「自分と自分が同じ関係にある」という関係です。たとえばイコールという関係は反射律を満たしています ($a = a$)。しかし「より大きい」という関係はそうではありません。 $a > a$ が成り立たないからです。「親である」という関係もそうです。自分は自分の親になれないからです。

つぎに対称律というものがあります。これはある関係を $\circ$ で表しますと、 $a \circ b$ ナラバ $b \circ a$ という関係です。 $\circ$ がイコールならば、この関係は成り立ちます ($a = b \rightarrow b = a$)。 a が b に等しいナラバ b は a に等しいことが成り立つからです。「親である」という関係についてはもちろん成り立ちません。 a が b の親であれば b が a の親であることがあり得ないからです。

さらに推移律というのがあります。これは $a \circ b$, $b \circ c$ ナラバ $a \circ c$ という関係が成り立つものを指します。イコールだけでなく、「より大きい」という関係についても、この関係は成り立ちます。すなわち、 $a > b$, $b > c \rightarrow a > c$ です。

以上の三つの関係が同時に成り立つような基準で集合を分けると、きれいに分割することができます。これを「分割」といい、分割されたそれぞれのグループを「組」とか「細胞」(cell の直訳、ロシア語では ячейка) とか呼びます。

さらに分割 P が与えられたときに (すなわち、 P という「基準」で分割されたときに)、それぞれの組に a , b , c などの要素が分れてはいるとします。このとき a , b , c などを、それが属している組の「代表元」といい、その集合を $P(a)$, $P(b)$ のように表すことがあります。

たとえば、いま三年生に3クラスがあるとして、太郎君は1組に、花子さんが2組に、そして鳩子さんが3組にいたとしたとき、それぞれの組

を「太郎君の組」、「花子さんの組」、「鳩子さんの組」というようなものです。

いま、 a, b, c などのはいっている、要素の集合のそれぞれの要素と、これらの要素を代表元とする集合との間にある対応関係 f をつけるとします。具体的には要素 a には $P(a)$ が対応するような規則を与えるわけです。関数 $f(x)$ などというのも、基本的には同じ考えに立っています。

たとえば「鉛筆」というものと、「鉛筆」と同じ働きをするものを集めたグループとを対応させる訳です。

そうすると f は鉛筆とその働きとを対応させる規則だと考えることもできます。このような f を写像 (mapping, отображение) といいます。

§75 格についていえば、造格というのは、このような写像を作る働きをするものだと考えるわけです。

序でに言えば、ある集合があるときに、それらの集合の要素をこの集合の外延 extension といい、これらの要素に共通する性質あるいは概念をこの集合の内包 intension といいます。

集合というものについて、もう少しわかりやすく言いますと、次のようなものになるかと思えます。

たとえば私たちが「鉛筆」というとき、私たちは具体的な鉛筆を思い描いて言葉にします。ロシア語のばあいには、このような「名指し」の働きは主格が受け持っています。

しかし仮定のように、もしロシア語の「鉛筆」の造格が、「鉛筆」そのものを指すのではなくて、「鉛筆」という集合の全体を指しているとします。集合というものは、たとえば目の前にある具体的なものが「鉛筆の集合」に属するものかどうかという判断を基礎において成り立っています。更にこの判断は、この集合に属することができるものの「条件」、あるいは「性質」に基づいています。

たとえば「5 に等しいかこれより小さい正の数の集合」という条件は、一つの集合を与えます。

数式で書けば、これは $0 < x \leq 5$ となりましょう。数学ではこのようにある集合を定める関数を「特徴関数」characteristic function といっているようです。

言語のばあいにはこれは必ずしも一つでなく、性質そのものが集合を作っているのが普通です。言語学で意味的特徴 semantic features といっているのが、これに当たります。論理学で「内包」というのは、実はこの意味的特徴に他なりません。

そういうわけですから、私たちの目の前にあるものが「鉛筆」というものであるかどうかは、それがもっている「性質」の束に照らして判断されるわけです。この中には形に関する特徴もありましょうし、性質に関する特徴、働きに関する特徴などもありましょう。「鉛筆」に関して、これを決定する性質の中でも重要なものは、「それで字や絵をかく」という働きに違いありません。

そうとすれば、もし仮定のように、ロシア語の名詞の造格が、この名詞の指す対象そのものではなくて、それが表す集合を指しているとすれば、これはそれによってこの名詞の指す対象の集合そのものの内包だけではなく、その内包が暗黙の内に前提としている「性質」、「働き」などをも表すのだと考えることができます。そうすれば造格が「働き」を表したり、「概念」を表したり、「性質」を表したりするということが、矛盾なく説明できると思われるのです。

§76 そこで本題に戻って、まず、英語の対格補語に当るものについて考えてみます。ロシア語も含めて古代語のばあいには、これは単数の対格でした。

たとえばラテン語では *eam dūxit sibi uxōrem* (彼女・単数対格 導く = めとる・現在完了3単 自分・与格 妻・単数対格)「彼は彼女を自分の(ために)妻としてめとった」というようになるのがきまりでした。

中世のロシア語でも、これと同じ言い方をしていました。

взя ю собѣ жену

「とる・アオリスト3単 彼女・単数対格 自分・与格 妻・単数対格」

これを仮にそのまま英語の単語に置き換えてみますと、*he-takes her (to)-himself wife.* のようになります。

このどちらのばあいにも、妻に当る単語は現実に存在している人物ではなくて、妻というカテゴリーにすぎません。「彼女を妻としてめとる」というのは、「彼女を妻というカテゴリーの中に迎え入れる」ということを意味していたはずで

このような対格の使い方を文法家は「第二対格」とよんでいます。

しかしおそらく実際に存在している人物である「彼女」と実体のないカテゴリーにすぎない「妻」とを同じ単数対格で表すことは、考えれば奇妙なことでもあります。

現代ロシア語ではこの表現は он взял её в жёны すなわち「彼女を妻(複数)の中へとる」(直訳すると take her into wives) という表現に変えていきました。

しかしロシア語では人間、動物などの活動体は対格の形が жён となっており、жёны という形は不活動体でなくてはなりません。もっともきわめて古い時代には活動体と不活動体の区別はなく、両方とも жены の形を持っていたと考えられます。

そこで文法家たちはこれは成句的表現で、古い複数対格の形であると説明していました。そして私自身もこの説明を初めて聞いたときには、疑問を感じることがありませんでした。

しかし後になって、 жён の形がかなり古くから文献に見えていますので、この説明はなんだか変でよくわからないと感じるようになりました。またハレムを作るわけでもないのに、どうして複数を使うのかも疑問でした。

しかしこれを概念を表すために複数にしたのだと考えればよく説明ができると思います。もし概念を表すために複数にしたのであれば、これは活動体になる必要もなかったと考えられるからです。

§77 同じような事情は造格補語のばあいにも見られるように思われます。「任命する」などの動詞も、古くには第二対格をとっていました。たとえば中世ロシア語では、「彼は彼を主教に任命した」というのは、

постави и епископъ

「彼は任命した 彼・単数対格 主教・単数対格」

のようになっていました。しかしこれはすでに епископомъ というように、単数造格で表すこともありました。

この現象はやはり「主教」を代表元とする集合に変えることによって、違和感をなくそうとしたのだと考えることができます。

「呼ぶ」、「名付ける」というような意味の言葉も造格補語をとります。中

世ロシア語でもたとえば *нарекъ мя тъщерью* 「私を娘・単数造格 と呼んで」 (ПБЛ 17 verso) のような例が見られます。これもたとえ単数の人でも、ある人に名前を付けるというのは、具体的な人物を、その名前を持つカテゴリーに入れることになりますから、名前の方はカテゴリー名になると思われます。「になる」というような意味のばあいにも同様ですが、このばあいは自動詞ですから主格形すなわち第二主格が用いられることになります。

序でに言えば、「呼ぶ」、「名付ける」という構文の「名前」に立つ名詞の格は、文法ではわざわざ「主格」であるといっていますが、そう考えた理由は、おそらく「イヴァン」が人名ですから、「呼ぶ」という動詞の造格要求を無視するとしても、せめて対格でなくてはならない。そうすれば対格は *Ивана* とならなければならない、と考えたからだろうと推察されます。文法家の面目躍如といったところでしょ。

しかし先に述べた *взял ее в жёны* のように、概念を表すばあいには活動体対格をとらなくてもよいと考えれば、この *Иван* も実は不活動体対格なのではないかと、ひそかに考えています。

§78 先に少し触れましたが、be 動詞に当る第二主格がどうしてあるばあいには主格のままであり、あるばあいには造格になったかという問題についても、同じ原理で説明できると思われます。

今私が「先生」という職業をもっているとします。このとき、私は何某という名前を持った人間でもあり、観点を変えれば「先生」でもあります。

確かに「先生」というのはカテゴリー名ではありますが、現在のばあいには実体と結びついています。このようなばあいには「私 = 先生」という等式が成り立ちます。

しかし未来のばあい、たとえば「私が先生になったら」というばあいには、現在「私」は先生でない、すなわち先生のカテゴリーに属していないことは明白ですから、自然な言い方は、「私が将来先生のカテゴリーに属するようになったときには」ということになりましょう。

そうすればこれはイコールにおくことができませんから、造格をとって、「先生」を代表元とする集合を指すということになります。

一方過去のばあいはどうかといいますと、これには二つのばあいがあると

思われます。

一つはたとえば「私が以前先生だったとき」というようなばあいです。このときには今「私」が「先生」のカテゴリーに属していないことは明白です。ですから同じ理由で対格補語が造格補語に変わったと考えられます。

もう一つは「プーシキンは偉大な詩人だった」というようなばあいです。

これは、「プーシキンは偉大な詩人です」ということもできます。すなわちこれは、「プーシキンは過去には偉大な詩人であり、今でもそうである」ということを表しています。

このばあいには、たとえ過去であっても「プーシキン」と「偉大な詩人」とをイコールにおいても、何の支障ありません。

このようなばあいには主格のまま補語になります。もしこれを造格補語に変えたならば、「プーシキンはかつては偉大な詩人だったが、今はヘボ詩人だ」という意味を含むことになるかもしれません。

この仮説に基づいていろいろな例を見てみますと、あまり反例があがってきません。もし反例が見つければ、この仮説は修正するか、あるいは棄却しなければならいでしょう。

第 七 話

インテルメッツォ — 格に関連する一章

準他動詞 — 対格と関連して

§79 他動詞の意義を追いかけているうちに、他動詞といわれているものには、本来の他動詞と、必ずしも他動詞とはいえないものがあることがわかってきました。これまで他動詞と自動詞の違いは、目的語をとるかどうかによると考えられてきました。

そのさいに、意味的には主体の行為が何かの対象に及ぶのが他動詞の意味だと教えられてきました。だからこの対象を示さなければ、何か意味が完全にならない、言い足りないものが残るという説明がされてきました。

しかし、他動詞といわれているものの中には、どうみても行為が他の対象に及ぶと考えられないものも、実際に存在しています。

たとえば「橋を渡る」という文の「渡る」という動詞は、目的語をとらないと、意味が完成しません。しかも実際にその光景を思い描いてみますと、「渡る」主語の行為は「歩く」と違いはありません。

まだ「渡る」という行為のばあいには行為が「及んでいる」と考えられる「橋」という対象があるという反論もあるかも知れません。しかし「通り過ぎる」、「やり過す」、「避ける」などの「行為」のばあいには、どのような「行為」も対象に及ぶことはありません。

それだけではありません。明白に行為が及んでいると考えられている動詞でも、よく考えれば必ずしもそうではないと考えられるものが数多くあることが知られてきました。

これが意味しているのは、言葉というものは、現実をそのまま言語化するのではなく、言語ごとに、それぞれが現実の要素を集めて、パターンを作るのだということ、従ってパターンの作り方は言語ごとに異なるものであるということなのです。

これはプロシアの有名なヴィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt (1767-1835)、アメリカの人類学者ベンジャミン・リー・ウォーフ

Benjamin Lee Whorf (1897-1941), 人類言語学者エドワード・サピア Edward Sapir (1884-1939) などの名前をとって、「フンボルト・サピア・ウォーフの仮説」あるいは単に「サピア・ウォーフの仮説」といわれているものです。

さらにアメリカではコージブスキー Alfred Habdank Skarbek Korzybski (1879-1992) や ハヤカワ Samuel Ichiyé Hayakawa (1906-1992) などの主唱する「一般意味論」General semantics といわれているものがあります。

これは現実と言語などの記号との関係と、その反映におけるゆがみ、またこのゆがみが人に与える影響についての考察を行うもので、この考え方によってさまざまな問題が明らかになってきました。

たとえば前にも述べましたが、「愛する」という動詞は英語では他動詞とされ、日本語でも「を」格をとります。しかし Jack loves Jill. というとき、ジャックの愛がジルに及ぼされているというのは、現実を正しく反映したものではない、というのが、井筒俊彦先生の指摘でありました。

ジルの挙動や声、表情などがジルに当たった光線によって照らされ、それがジャックの網膜に像を造ることでジャックの頭がおかしくなったのだ、ということです。

そうとすれば、本当の「行為者」はジャックではなくてジルなのだ、ということになります。それなのにジャックが加害者の汚名を着るに至ったのは言葉が現実をそういう風に言語化した結果なのだ、と先生はいわれるのです。

§80 このような考え方、すなわち「フンボルト・サピア・ウォーフの仮説」は、言語学、特に一般言語学に携わっているものには、ほとんど常識になっていると思われます。現在では、興味はむしろ、この仮説がどの程度まで適用されるのか、という問題に絞られてきているということが出来ます。

こういう考え方があるということを頭に置いてみれば、現実に見られるさまざまな現象に対してそれがどのように言語化されているのか、あるいは逆にある言語現象が現実の現象をどのように様式化しているのか、を明らかにすることが必要になってきます。

さて、先ほどの「渡る」という動詞に話を戻しますと、さきほど言いましたように、行為そのものは「歩く」という自動詞が指すものと違いはありません。違うところは、歩く主体が歩いている途中である事物あるいはある地

点との相対関係が変化したという点にあると考えられます。

言いかえれば、この相対関係が変化するということが、この動詞の意義に組み込まれているということになります。このためにこの相対関係が変ることに関わる事物あるいは地点の表示が必要になり、それが目的語という形で表示されることになったのだ、ということになります。

このような関係は、ロシア語では前綴 = 接頭辞で表されます。перейти < пере- + -ити (cf. L. trans-eō) です。

いずれにしても、このように、客観的な行為としては自動詞に分類すべきものが、関係概念が意義の中に組み込まれることによって目的語でその関係概念の一方の項を表示する必要が生れた、いわば「見かけ上の他動詞」を「準他動詞」ということにします。

§81 さて、この準他動詞は、本来の他動詞と比べると、行為が目的語には及ばないところにその特徴があるということが出来ます。そうしますと、目的語と動詞との意味上の結びつきは、本来の他動詞に比べて弱いということが出来ます。

なぜならば、たとえば「木を切る」というような本来の他動詞のばあい、目的語で表されているものに行為が及んでいることは明らかだからです。「木を」で表される「木」が二つにならなければ、いいかえれば行為の結果、「木」に変化が生じなければ、「切る」という行為は成立できないでしょう。

「見る」、「聞く」をあらわす知覚動詞 *verba sentiendi*、「知る」のような認知動詞 *verba cognoscendi*、「言う」などを表す、いわゆる *verbs of speech* (*verba declarandi/loquendi*) などは、上に述べたような準他動詞に属しています。

準他動詞は目的語との意味的依存関係が弱く — これを他動性が弱いと定義します — 自動詞と意味的に近いために、形の上で自動詞との間に動揺が生じてきます。

たとえば *перейти мост* 「橋を渡る」という表現は、目的語 *мост* を伴っていますので、形式的には他動詞ですが、一方では *перейти через мост* のように、*через* = *through/across* という前置詞を伴うこともあり、このばあいには形式的に自動詞ということになります。

英語はギリシア語、ラテン語、サンスクリットのような古典語、ドイツ語やスラヴ諸語のように、前綴を伴って動詞の基本的な意義にさまざまな関係概念を組み込み、新しい動詞を作るという、いわば伝統的なインド・ヨーロッパ語とは異なって、異なった単語を用いる傾向を持っているという点で、極めて特異な言語であるということが出来ますが、英語のばあいでもやはりたとえば meet 「出会う」に対する meet with 「(たまたま) 出会う、遭遇する」のように、関係概念を表に出す例が見られます。

このような対を調べてみると、微妙に意味のニュアンスが異なったり、使用の仕方が違ったりすることが、しばしば見受けられます。ロシア語のばあい、たとえば、

1. услы́хатъ но́вость 「ニュースを聞く」 / услы́хатъ про но́вость 「ニュースについて聞く」
2. узнáть знако́мого 「知人であると分る」 / узнáть о знако́мом 「知人のことを知る」
3. сказа́ть сло́во 「ことばを言う = 一言いう」 / сказа́ть о чём 「何かについていう」

このようなときに、たとえば услы́хатъ は「聞く」を意味し、услы́хатъ про は「ついて聞く」だと言っても、問題の解決にはならないでしょう。これらの間の違いはどのようなものなのか、またそのような違いがどうしてできてきたのかが、問題なのですから。

§82 一般にいつてこのような微妙なちがいは、多くのばあい、直接に対格に立つ目的語をとるか、それとも前置詞を介して名詞と結びつくかという違いによって表されます。

ポテブニャ Алекса́ндр Афа́насьевич Потебня́ (1835-1891) という学者は、前のものを「近い対象」をあらわすもの、後のものを「遠い対象」を表すものだとしました [40, I-II, p.296].

また 1980 年出版のアカデミーの『60 年ロシア文法』では、前のものを「直接的意義」direct meaning, 後のものを「思索的意義?」deliberative meaning と名付けています。

ポテブニャもこのような相違が現れるのは, *verba cognoscendi, verba sentiendi, verba declarandi* においてであるといっています。

しかし彼はどうしてこの種の動詞にこういった現象が現れるのかについては, 何も言っていません。したがってポテブニャの命名も, アカデミーの文法の命名も, 結局は印象的なものに過ぎませんでした。

しかし既にいいましたように, これらの動詞が「準他動詞」に属するものであることが分れば, この現象は, 準他動詞というカテゴリーと何らかの関係があるのではないかという疑いがでてくるのは, 当然でしょう。

この問題を考えるために, 歴史を遡って見れば, この種の動揺は歴史的なものであることが分ってきます。

すなわち, 歴史を遡れば, それだけ動揺が少なくなってくるのです。そして今いいました二つの意義は古代語のばあいには未分化でありました。したがって, この時代には話し手の中でもこの二つの違いについて全く意識されてはいなかったと思われます。

たとえば年代記の中世ロシア語では, 次のような例が見られます。

- (1) пошелъ бѣхъ Гюрги в Русь, слышавъ *смерть* *Изяславу*.

ギュルギ(ユリー)はルシに行った。イジャスラフの死を聞いて

(イパチ一年代記)

- (2) Михаилъ же увѣдѣвъ *приятъе киевское* и бѣжа.

ミハイルはところでキエフの占領を聞いて, 逃亡した(同)。

- (3) и помышляшеть же *мчнѣе* и *страсть* *сѣго мчнка* Никиты...

彼は聖受難者ニキータの苦難と受難を思って.....

(ボリス・グレーブ伝説)

これらは現代語でも何の変哲もない文章のように思われます。

しかしこの時代はたとえば(1)の文「イジャスラフの死を聞いて」というのは, 「イジャスラフが死んだのを聞いて」という意味も持っていたと思われます。(2)の文の「キエフの占領を聞いて」というのも, 「キエフが占領されたことを聞いて」という意味も示しています。(2)のばあいには, 現代語では

後の解釈の方がより適当であると思われます。

§83 これらがどうして二つの解釈を許すかという点については、次のようなことから推測できると思われます。

たとえば次のような例を見てみましょう。

- (4) повѣдаша ему володимера въ черниговѣ а изяслава у стародувѣ. (イパチー年代記)

「彼らは物語った 彼に ヴラヂーミルを チェルニゴフの中に また イジャスラフを スタロドゥプの近くに」

- (5) услышавше псковичи князя великого въ Новѣгородѣ, и послаша пословѣ. (プスコフ第一年代記)

「聞いて プスコフの人々は 大公を ノヴゴロドの中に そして 送った 使者を」

例 (4) のばあいには、「チェルニゴフの中にいるヴラヂーミル大公を (または大公について) 物語った」とは考えられません。現代語ならばこのようなばあい、「ヴラヂーミル大公がチェルニゴフにいることを彼らが物語った」とならなければ、意味をなさないでしょう。すなわち、副文章を使わなければこの内容は表現できないのです。

例 (5) はもっとはっきりしています。услышать「聞きつける」という動詞は слышать と同じく、対格に立つ目的語が人を表すときにはこの目的語の表す人の「いうことを聞く」という意味になるからです。これはちょうど英語の to hear him のような表現と同じです。

しかし (5) は「ノヴゴロドの中にいる大公の言うことを聞いて」という意味ではありません。正しい意味は「プスコフの人々は大公がノヴゴロドにいることを聞きつけて、使者を送った」のです。この意味も現代語では副文章を使わなければ、絶対に表現できません。

このように副文章を使わなければ表現できない関係、すなわち「遠い対象を表す意義」も、古代の人々是对格を動詞に直接につけることによって表現することができたのです。これが、古代の人々がこの二つの意味を形の上で

は区別していなかったと推定する根拠なのです。

§84 それでは例 (5) のようなばあい、「近い対象」と「遠い対象」の違いは何でしょうか。

これは結局のところ、「B である A を C する」ということと、「A が B であることを C する」との違いだろうと思われます。そうすると、前のものは現実の事態をそのまま表現することであり、後のばあいは話し手あるいは主語が現実の事態について「A が B である」と判断した結果を示すものであるということができるでしょう。

文というのは述語を持ち、判断を表すものであると考えれば、これが文の形で表されることが必要だということになります。副文章も、それが文の形をもっている限り、このような判断を含んでいると考えられます。

古代の人も、この二つの違いを漠然と感じていたに違いありません。次のような例が現れてくるのは、そのためだと思われます。

(6) пришедъ же въ единъ днь видѣ прквѣ стою ветхоу сущю.

(プスコフ第一年代記)

「やって来て ところで、ある日 彼は見た 聖なる教会を 古い(対)
ありつつある(対)」

= 「ところで彼はある日やってきて、聖なる教会が古いのを見た。」

ここで「ありつつある」と訳したのは分詞(ロシア語の形動詞)の女性対格形で、「教会」にかかっています。これは形の上では直接に動詞につく対格を使いながら分詞を補うことによって、これが「古い教会を見た」のではなく、「教会が古くなっているのを見た」という意味を表そうとしたのだと考えられます。

be 動詞以外のばあいにも、同じことがいえます。

たとえば、

(7) услышавше же Всеволодъ полоненоу женоу и з дѣтми... печаленъ быс велми.

(ラウレンチー年代記)

「聞いて ところで フセヴォロドは 捕われた(対) 妻を そして
子供たちと一緒に.....悲しんだ 大いに」

= 「ところでフセヴォロドは妻が子供たちと一緒に捕われたことを聞いて、大変悲しんだ。」

このようなことが起るのは、主文の動詞が準他動詞であって、対格に立つ目的語が動詞の表す行為とあまり密接に関わっていないからだといってもいいでしょう。

もし密接に関わる純粹の他動詞のばあいならば、たとえば「捕われた妻を奪う」というようになり、副文章の必要はなくなります。

ロシア語以外の古い言語にも同じような現象が見られますから、多少の違いがあっても、副文章というものはこのような道筋でも作り出すことができた、ということができると思われます。

第 八 話

否定の構文 — 生格と関連して

1. 概説

§85 ロシア語には他動詞が否定されると対格に立つ目的語が生格に変えられるという現象があります。また存在を表す動詞が否定されると主語がなくなって非人称文になり、肯定文で主語になっていたものが生格になるという現象もあります。

たとえば、

(8) Я не писа́л писа́ма.

「わたしは手紙を書かなかった。」

(9) У меня нет кни́жки.

「私のところには本がない」

= 「私は本を持っていない。」

というようなばあいです。

この二つはふつう区別されないで「否定生格」genetivus negationis と呼ばれています。確かにこの二つの「否定生格」は同じ原理に基づいていると考えられるのですが、存在動詞ではほとんどのばあいが否定生格を用いるのに、他動詞のばあいにはかならずしもそうではありません。

そこでこの二つは一応区別して、「否定生格」と「存在否定の生格」としておきたいと思います。

2. 存在否定の生格

§86 存在を表す構文は多くの言語において、外の文章の構文とは違ったものを使う傾向があります。

たとえば英語では there is/are のような構文を使いますし、ドイツ語では geben 「与える」という動詞を使って、es gibt という非人称構文を用います。またフランス語では avoir 「持つ」という動詞を使ってやはり非人称の構文 Il y a のようにします。

ドイツ語のように「与える」を意味する動詞を使うのは珍しいのですが、「持つ」という動詞と「ある」という動詞とは多くの言語で使用されています。英語のばあいでも、たとえば *We have much snow in Japan.* のように、have 動詞を使うこともありますが、be 動詞による表現の方が普通だということができます。

さて、これらのいくつかの言語について、肯定と否定という面から見てみると、たとえば英語のばあいには *there is/are* と *there is/are not* というように、両方とも be 動詞が使われています。フランス語のばあいにも、*Il y a* に対する否定文は、部分冠詞といわれる *de* を伴いますが *Il n'y a pas de* のように、have 動詞に当るものが使われています。

このように、肯定と否定とが同じ動詞によって表現されるばあいを、仮に「対称的」使用ということにします。

一方、たとえばポーランド語のばあい、肯定文はたとえば *Tu jest twoja książka.* 「ここに君の本がある」というように、*być* 「存在する」という動詞を使います (*jest* は三人称単数現在)。

しかし否定になりますと、*Tu nie ma twojej książki.* 「ここには君の本はない」というように、*mieć* 「持つ」という動詞を使い、かつ非人称構文になります (*ma* は *mieć* の三人称単数現在)。従ってこれは非対称だということになります。

§87 さらに人称文と非人称文という面から見ますと、存在動詞を用いるばあいには人称文ですが、「持つ」という動詞、および「与える」という動詞を用いるばあいには非人称になります。

ただし、ロシア語のばあいには、その例外で、否定において存在動詞を使いますが、非人称文を用います。すなわち、ロシア語の否定の存在文に用いられる動詞 *нет* は、もともと *нѣтъ* の縮約された形なのですが、この *нѣтъ* は *не-е-тъ* であり、さらにこれは否定の *не-* に存在動詞 *быть* の現在形 *есть* の語幹部分 *е* に「ここ」という場所を表す副詞 *туть* がついた形なのです¹。

¹より正確に言えば、*e* は **est* の語末の二子音が脱落したもので、スラヴ語の歴史音韻論から見れば、完全に規則的な変化をしています。ラテン語の *est* などに見られるように、これは印欧祖語のいわゆる「二次語尾」**-t* が現在形に使われている、印欧祖語の古層を示す残余である

フランス語の存在文の *Il y a* も、「持つ」を意味する *avoir* の3人称現在の形は *a* ですが、*y* はやはり場所を表す小詞です。

さらに英語の *there* を考えて見れば、*there* というのは場所を表す副詞です。

こういう風に考えて見れば、「存在」という概念には、何か「場所」というものが、本質的な構成要素になっているような気がします。インド・ヨーロッパ諸語とは全く異なった構造を持つ、アフリカの大語族であるバントゥー語族に属するスワヒリ語には、特定の場所を表す接辞要素 *po*、不定の場所を表す *ko* のほかに、場所の内側を表す *mo* があります。これにたとえば人称を表す接辞要素 *ni* をつけて、*ni-po* といえば、「私はある」*tu-mo* 「私たちは中にいます」などという意味になります。また *yu-ko?* といえば、「彼はいますか？」という意味になります。

§88 そこでいま存在ということの事実関係を考えてみましょう。

何かが存在しているということは、その何かがある場所の構成要素となっていることでなければなりません。そうでなければ、ものが具体的に「存在している」というイメージは作ることが難しいはずです。そこで「存在」という観念には、ある対象がその一部となっている場所の観念が必要であるという仮説を立てることにしてみましょう。

次に「存在しない」という事態を考えてみましょう。

これはなかなか厄介な問題です。ないものをあたかもあるように考えて、その存在を否定する、ということの意味しているからです。

なぜなら、私たちは寝そべって空を眺めながら、わたしは「ねむっていない」とも、「立っていない」とも、「歩いていない」ともいうことができます。「寝そべって」いるのでなければ何を想定してもいいわけです。ものについても、がらんとした部屋の中で、ここには「本がない」とも、「ソファがない」とも自由にいうことができます。言葉というものには、そういう性質があるのです。

否定という現象の難しさはまさにこの点にあります。

このようにしてみれば、何かが「存在しない」というのは、「存在する」ということよりも、遥かに難しいことがわかります。第一段として、何かを「あ

とされています。

たかもそれが存在しているかのように」想像しなければならないからです。

数学のばあいを考えて見れば、存在する例を一つ挙げれば存在の証明はすみますが、存在しないことを証明するためには、帰納法によるのでなければ、すべてが存在しないことを証明しなければならないのです。

これを手っ取り早く証明するには、ある場所を限定して、ある対象が「少なくとも」その構成要素にはなっていない、ということが必要でしょう。そうすれば、場所の観念は、存在否定のばあいにより必要性が高いということになります²。

§89 これが単なる仮説にすぎないかどうかを検証するためには、もう一つの仮説が必要になります。非人称の意味です。しかしそのためには、あらかじめもう一つ、「主語」というものについて考えてみる必要があります。

たとえばここに「犬」という動物がいると考えてみます。この犬が私の左手から右手に移動したとします。私がこの動物を見ているすべての瞬間において、見えるものは「犬」でしかありません。しかしそのときに私は「足」と呼ばれる4本の突起が交互に忙しく動くことも同時に観察しています。これを私たちは「歩く」あるいは「走る」という「行為」とであると認識するのです。

この考えがもし正しければ、「行為」というのはそれ自体、何か客観的現実の中に独立に存在するものではなくて、たとえば「犬」というものの状態の変化を基礎にして私たちが認定するものだ、ということになります。

そうとすれば、「行為」というものは「行為」と認定する対象の状態の時間的変化の「様式化」なのであって、その状態の変化の担い手である対象とは切り離すことができないものだ、ということになるでしょう。

「行為」に「主語」が不可欠であって、主語を欠くと意味をなさなくなるのはこのためだと考えられるのです。

こう考えると、非人称文のばあい、状態の変化の担い手になる、すなわち主語に当るのは何か、という問題が生じてきます。もしそのようなものがないということであれば、今述べた主語についての仮定は間違っているこ

² 存在文と存在否定文については、かつて筆者が論じたことがあります。「存在文と存在否定文について」『言語研究』第75号 昭和54(1979)年, pp.1-30. 再録: 古代ロシア研究 特別号『ことばの構造とことばの論理』1998, pp.235-259.

とになるでしょう。

そのばあいには非人称の「主語」に当るものは、どのようなものと考えられるでしょうか。

私は非人称の「主語」となるのは、場面そのものだと考えています。

この仮説の当否を決定するためには、もっとほかの例証が必要ですが、今は一つの例だけを挙げるにとどめます。

これは一般意味論の問題でもあるのですが、日本語で「雨が降る」というのは「同語反復」 tautology だということです。すなわち、「雨」というものは現実には存在しないのです。存在しているのはたくさんの「水滴」にすぎません。この水滴が空から降ってくるとき、私たちはそれを「雨」というのです。

したがって「雨」という概念には、すでに「降ってくる」というプロセスの概念が含まれているのです。ですから、「雨が降る」というのは、いわば「降ってくる水滴」が降る」となって、同語反復になる訳です。

そうとすれば、英語やフランス語、ドイツ語、ギリシア語やラテン語のように、動詞で表すことが正しいということになります。

たとえばラテン語で「雨が降る」は *pluvit* といい、ギリシア語では *húei ũei* または *brékhei bréchei* といって、共に3人称単数の形を取っています³。

そのばあい、人の認識の仕方を考えて見れば、ある空間に水滴が降るという過程が行われるという場面によって、雨が認識されると考えることができます。

これを非人称とは、ある場面そのものを基礎とするものだ、と考えるのです。すなわち、これが場面という隠された主語のために、見かけ上主語のない、非人称文になる理由だと考えるのです。

§90 ロシア語のばあいには現在では *Дождь идёт*. というように、「雨」は日本語と同じように名詞になっていますが、古くにはやはり非人称動詞であつたらしく、*дѣждитъ*. という形が見えます。また *моросить* 「そぼ降る」という動詞は、人称形にも非人称形にも用いられるようです。

³ギリシア語のばあい、*Zeus ũei* あるいは *Zeus bréchei* 「ゼウスが雨降らす」という言い方が辞書にあります。サンスクリットのばあい、*bréchei* に対応するのは、おそらく *vr̥ṣ- varṣati* だと思われますが、これにも「インドラ神が雨降らす」という表現があると辞書にあります。ここからインドヨーロッパ語では古くには「雨を降らす」という意味だったのだと言う人もいます。

たとえば, Как сквóзь сýто, моросýл протýвный осéнный дóждик. (Чех.) 「篩いを通したように厭な秋雨がそば降っている」と辞書に見えます。

この語源についてはさまざまな説があつて、はっきりしませんが、先に挙げたギリシア語の brékhei に関係づける学者もいるようです。

以上のことから、非人称動詞というのは、この動詞によって表される過程が生じる対象が、場面であると考えられるのです。すなわち、たとえば「死ぬ」という動詞のばあい、その過程がふつう主語とされている生き物の体の上に起るわけですが、そういう過程の起る場所をある場面の全体と考えるのです。

この仮説の論証には、すべての非人称の使用について考察する必要がありますが、ここでは省略します。ただ、私がこの仮説に到達したのは、逆に非人称構文を考察した結果なのです。

§91 以上の仮説に基づけば、たとえばポーランド語のばあいのように、存在文のばあいには存在動詞「ある」による人称文が用いられるのに、存在否定文になると非人称の「持つ」が用いられるのはよく理解できます。

場面を主語にすることによって、その場面はある対象を持っていない、すなわちある場面にはその対象は存在しないことを確実に示すことになるからです。

言い換えればこれは場所の観念を暗黙の中に前提しているということができましよう。

存在否定の生格についていえば、生格というものがもともと関係を表す格であると考えられることから、本来存在しないものについて、それが存在すると仮定すること、すなわち「ある対象についていえば」というほどの意味になると考えるのです。現実には存在しているものはある場所に存在しているが故に、主格によって示されるのが当然でしょう。

これが存在否定の本質だと考えるのです。

§92 ここでは存在文における否定生格だけを問題にしていますが、たとえば日本語で「本が机の上にある」といいます。この否定文は通常ならば「本は机の上にはない」となります。

日本語のばあい「ガ」格は主語を示し「ハ」格は主題を示す、というのが

有力な説となっています。その根拠となっているのは、いわゆる「二重主語」と呼ばれる構文です。その典型的なものはたとえば「象は鼻が長い」というような文です。このばあい主語は「鼻」であって、「象」は主題を表すのだ、という訳です。言い換えればこの文は「象に関していえば、鼻が長い」ということになります。

日本語の存在文は、肯定文のばあいには、例えば「本が机の上にある」といいますが、否定文の時には、「本は机の上にはない」と言います。

このように日本語の存在文が、肯定文と否定文で「ガ」格と「ハ」格という、非対称を示すのは、存在否定文のばあい、存在していないものをあたかも存在しているかのごとく想定するために、主題としてこれを提示するのだと考えれば、よく理解できます。

もしそうとすれば、これはロシア語の否定生格と根底において通じるものがあるということになります⁴。

序でに逆のばあいを考えてみましょう。「本は机の上にある」と「本が机の上にはない」というばあいです。

最初のばあいは本が話題となっているときに、「本についていえば、(それは)机の上にある」という意味だと考えられます。したがってこのばあい、「本」は具体的に存在し、この場面で問題にされている、特定のものに違いありません。英語ならばこのばあい定冠詞がつくことでしょう。

逆に「本が机の上にはない」というばあいにも、「本」の実在性については疑われていません。したがってこの「本」は机の上にはないけれども、そのほかのところにあることを、言外に物語っています。

したがってこれは真正の存在否定文ではなく、存在文の変種であるということが出来ます。「限定的非存在文」とでも名付けることができるものです。

3. 否定生格

§93 それでは肯定文で対格に立つ目的語を否定文では生格におくという、一般的に否定生格と呼ばれているもののばあいはどうでしょうか。

⁴ハとガの相違については、いろいろな学者がいろいろな説を唱えていると聞いています。専門家ではないので多くはいいませんが、私は「ハ」はある事物を取上げて、述語を「排他的に」限定するものであり、「ガ」は述語を「集中的に」限定するものではないかと、私かに考えています。

ロシア文法ではこの条件を満たす文が必ずしもすべて否定生格を持つとは限らないことが知られています。どういうときに生格にならないで、対格のまま否定文に用いられるかについては、文法で色々細かい条件を付けています。しかしどうしてそうなのかについては、余りよく分かりません。かなり場当りな説明がされているのが実状です。

ところで他動詞による構文の否定というのは、どういうものでしょうか。これは存在の否定とどの点で同じで、どの点で異なっているのでしょうか。このことを明らかにすることによって、否定一般の性格づけと他動詞否定構文の特殊な性格が明らかになるかも知れません。

そういうわけで、この問題を一般的に考えてみることにします。

他動詞否定構文のばあい、通常は動詞が否定されます。たとえば Я читáл кнѳгу. 「私は本を読んでいた etc.」 → Я не читáл кнѳги. 「私は本を読んでいなかった etc.」

この時、一般的には「私」は「本を読む」という行為以外ならば何をしていてもよいということが出来ます。実際には「私」は「ケーキを食べていた」かも知れませんが、「居眠りをしていた」かも知れません。ただ「私」は「本を読んでいた」ということだけは言ってはならなかったのです。

上に挙げた否定構文は、実際にはそういつているに過ぎないのです。これは自動詞を用いるものであれ、他動詞を用いるものであれ、否定構文一般を通じて言えることだろうと思います。

§94 しかし目的語に注目してみると、ここには二つのばあいがあることが分ります。

一つは動詞で表される行為が否定されるに伴って目的語の存在も否定されるばあいです。「私」が実際には「ケーキを食べていた」のに、「私は本を読んでいた」といったとすれば、本の存在は行為の否定に伴って否定されます。本などは初めから存在していなくても、そういうことはできるし嘘ではない(すなわち真理値が True である) ことになります。

一方、行為の否定にも拘わらず目的語の存在が否定されないばあいも考えられます。

たとえば Я читáл эту кнѳгу. 「私はこの本を読んでいた」 → Эту кнѳгу

я не читал. 「この本は私は読んでいなかった、読んだことはなかった etc.」のようなばあいです。この時には行為そのものは確かに否定されていますが、ここで指されている「本」は、現実存在しているのです。

このようなことが起るには、今挙げた例のように、「この」などというような指示代名詞によって修飾するばあいが考えられます。

このことから、自動詞を述語とする自動詞構文の中で、なぜ存在を表すものだけに限って述語が否定されると主語が生格になるかも、うまく説明できます。存在を表す動詞のばあい、これが否定されると、必然的に主語で表すものの存在も否定されるからです。

§95 否定について比較的詳しく述べているのは、いわゆる80年文法です[26]。従って、以下ここで述べられていることについて、今述べた観点から見ていくことにしたいと思います。

まず、быть 以外の存在を表す動詞を考えてみます。その典型的なものは существовать 「存在する」です。この種の存在動詞 verba existentiae が否定されたとき、主語で示された対象の存在そのものが否定されることになりますから、быть と同じく主語が生格になり、非人称文になることは当然と思われまふ。たとえば、

Проблём не существуёт. 「問題などはない」。

80年文法は「義務的」な性格を持つものと、「選択的」な性格をもつものとに分け、次のように述べています。

1) 義務的な否定(生格)をもっている文は不定あるいは一般化された主語について述べることが多い。Без потерь войны не бывает.(Симон.) 「損害のない戦争はない。」 А лёгкого нам не обещано.(Симон.) 「我々の行く手は容易ではない。」 Таланта ради таланта не существует.(Тендр.) 「才能のための才能などは存在しない。」

選択的な否定(主格)をもっている文は特定で既知の主語について述べることが多い。Между тем положенный срок прошёл, и апелляция не была подана.(Пушк.) 「そうこうするうちに約束の期日が過ぎ、上告はなされなかった。」 Он знал, что его лучшая картина ещё не написана.(Пауст.) 「彼は彼の代表作が未だ書かれていないことを知っていた。」 Ни одна из этих книг не была написана полностью, до конца.(Исак.) 「これらの書物のただ一つ

として、完全に、最後まで書かれてはいなかった。」

2) 義務的な否定 (生格) をもっている文は主語の非存在について述べる人が多い。一方選択的な否定 (主格) をもっている文では、主語の存在は排除されない。Нé было написано ни стрóкí.(Леон.)「一行も書かれていなかった。」Нé было скáзано ни слóва.(Пауст.)「一言も言わなかった。」Однáко к концú вторóй недéли Нíна чúвствовала себя на стрóйке такóй одинóкой, как и в пéрвый день — друзéй у неё не появилóсь.(Ант.)「しかし二週目の終りになっても、ニーナは建築現場で最初の日と同じように自分が孤独なのを感じていた。彼女のもとに友達は何も現れなかったのである。」および, Но врéмя шло, казаки не появлялись.(Зощ.)「しかし時間は過ぎていくのに、コザックたちは (いるのに - 引用者) 現れなかった。」Стихотворéние не сохранилось, и я не помню ни однóй стрóчки из негó.(Исак.)「その詩は残っていない。そして私はその中の一行も覚えていない。」Статья егó не появилáсь в печáти.(Е. Пермитин)「彼の論文は (できているのに - 引用者) 印刷されなかった。」[26, II, p.403]

§96 以上のことから、80年文法は、特定・不特定という基準と、存在・不存在という基準および既知・未知の基準の三つで、自動詞的な否定文を分類していることが分ります。

ここで?としているのは80年文法では明確な言及がないことを表しています。

構 文	特定性	存在性	既知性
義務的否定	—	—	?
選択的否定	+	±	+

80年文法をも含めて多くの文

法が、用語の定義を明確にしないで使っているばあいが多くありますが、存在性というのは話し手が考えている一定の場面 (あるいはこの世の中) に実在していること、と考えてもよいと思われます。

それでは特定性というのは何を意味しているのでしょうか。『言語学事典』によれば、定性・不定性は次のように説明されています。

発話の意味のカテゴリーの一つ。その機能は名詞の現実化 актуализация および確定 детерминизация、描写する状況においてそれが唯一のものであることを示すこと (定性)、あるいはそれに類似した諸現象のクラスと名詞が関係し

ているとの表現 (不定性) である [45, p.349]⁵。

印象としては、これは同じあるいは同じようなもの (同一のクラス) からある具体的な個物を区別 (同定) することだと考えられます。しかしたとえば「一年生のうち、サクラ組だけは動物園ではなくて植物園に行くそうなの」というとき、「サクラ組」は特定ではないでしょうか。

もしこれを特定な対象と考えるとすれば、上に引用した『言語学事典』の説明の後半は正しくはないことになります。これが「類似した諸現象のクラスと名詞が関係していること」を不定性の定義としているからです。

このようなことを考えて、「定性」の定義を、ある名詞が指すことのできる外延に所属する個別的な要素、あるいは部分クラスと関係づけること、としたらどうなるでしょうか。このばあいには「サクラ組」は特定なものになりますが、同時に「日本人は自己主張が弱い」という文章の「日本人」も特定のものということになります。

これは私たちの言語感覚から何かずれているような感じかもしれませんが、たとえば *The eagle is the king of birds.* あるいは *The rich should help the poor.* のような英語の総称用法といわれる *the* を説明するのには適しています。

§97 「定性」をとりあえずこうしておき、「不定性」は「定性でないもの」としておきます。

そうすると次に問題になるのは「既知」と「未知」の問題です。

これは「定性」・「不定性」のカテゴリーと密接に関連しているように思われます。既に特定できているものは既知であると考えられるからです。これには前に既に述べられている事象も含まれると考えられています (既言及性)。

しかし一方ではたとえば「この事件の犯人は未だ特定できていない」という文章が考えられます。この文章は正しい文章だと思われそうですが、このとき「この事件の犯人」は特定できていないという点で「不定」と考えるべきでしょうか。あるいはまた、未だ捕まっていないので「未知」だと考えるべきでしょうか。

⁵ одна из категорий семантики высказывания; функция ее — актуализация и детерминизация имени, демонстрация его единственности в описываемой ситуации (определенность) либо выражение его отношения к классу подобных ему феноменов (неопределенность).

私はおそらく言語はこのようばあい、「この事件の犯人」を「特定」で「既知」のものとして分類しているのではないかと思います。もしそうとすれば、この文は内部で矛盾してしまうように見えます。

私がこれを「既知」ではないかと考えるのは、「既知」であるか「未知」であるかは、話し手と聞き手の間で、何について話しているのかが了解されているかいないかだと考えるからです。すなわち「この事件」がどういう事件について話しているのかは話し手も聞き手も分っていると考えられますし、また誰かは特定できていないにせよ、犯人がいなければ「この事件」が起らなかったことも了解済みだと考えられます。

もしそうだとすれば、「既知」であるというのは「犯人」が具体的に誰であるかを特定するかどうかではなく、「犯人」が存在するということの了解だと考えることができます。

言い換えれば「既知」というのは、ある集合の内包(98 ページ参照)についての、話し手と聞き手の了解であると考えられます。「名付ける」という動詞と関連して述べましたように、固有名詞の時のように、要素が一つしかない集合を考えることができるとすれば(101 ページ参照)、このことは「犯人」のばあいにも妥当だと考えられます。

もしそうとすれば、犯人が未だ「特定できない」というばあいの「特定する」ということは、今述べたような「既知」の内包である犯人の外延が未だ特定できないということ、言い換えれば集合は既知のものとして特定されているけれども、それに含まれている要素が特定できていないということであって、レベルが異なっていると考えられます。

そうすれば、この文は内部的な論理的矛盾を含むものではないということになりましょう。

§98 こういう考え方の一つの傍証になるかもしれないと思われるのは、ロシア文法で「不定」とされている -нибудь, -то および -либо という接辞です。

80 年文法ではどういう訳か余り触れていませんが、チェコ版のロシア文法[37]では不定代名詞について次のように述べられています。

不定代名詞はそれと相関する実質、性質、状況などが話し手の観点から不定

である、即ち具体的な特定を行わないことを表すか、あるいは話し手が所与の現象のより詳しい規定あるいは具体化を行うことが必要でないと考えていることを表す。不定性という一般的意味によって不定代名詞は疑問代名詞と接点を持つが、予測される答え、即ち聞き手の側からの不定性の除去を目指していないという点でこれと異なっている [37, II, p.362]⁶。

チェコ版ロシア文法はこのような一般的な説明に続けて、さらに不定代名詞の種類について述べていますが、上に述べた -нибудь, -то, -либо については、次のように説明しています。

(1) -нибудь を持つ代名詞に結びついているのは「不定性」と「具体性の欠如」という特徴である。Ему просто хотелось перед кем-нибудь высказаться. 「彼はただ、誰かに自分の思っていることを言いたいと思った。」 — Что-нибудь придумаем. 「何か考えましょう。」 — Трудно было что-нибудь различить. 「何かを識別するのは難しかった」など。同様の特徴は -нибудь を持つ形の多少とも文章語的な変種である、小詞 -либо を持つ代名詞にも存在している。Пусть кто-нибудь / кто-либо зайдёт туда. 「誰かあそこに立寄らせよう。」

(2) -то を持つ代名詞は「不定性」と結びついているが、「具体性」という特徴に関しては多少とも無標的である。より狭義にはこれらは具体性を前提とする。На стене кто-то писал мелом. 「誰かが壁にチョークで書いている。」 — Чем-то это напоминало Москву. 「これは何かしらモスクワを思わせた。」 — Я что-то пробубнил. 「私は何かをぶつぶつ言った」など。一方別の文脈ではこれらは -нибудь を持つ代名詞と重なり、具体性の欠如を表す。Надо же было кому-то / кому-нибудь брать на себя тяжёлую заботу о больных. 「誰かが病人を看取するという難しいことを引受けなければならなかった。」 またある意味では逆の現象も見られる。即ち -нибудь を持つ代名詞が具体性の存在を排除しない文脈で用いられることである。Не знаю, про какие слова он упоминал. Померещилось ему что-нибудь. 「彼がどういう言葉のことを言ったかは分らない。彼の頭に何かが浮んだのだ。」 — Я решил, что она хочет еще что-

⁶ Неопределённые местоимения выражают, что соотнесённые с ними субстанции, признаки, обстоятельства и т.п. являются с точки зрения говорящего неопределёнными, т.е. не поддаются конкретной спецификации, или же говорящий не считает нужным приводить более подробное определение или же конкретизацию данного явления. По общему значению неопределённости неопределённые местоимения соприкасаются с вопросительными и отличаются от них ненаправленностью на предполагаемый ответ, т.е. на устранение неопределённости со стороны адресата.

нибудь сказа́ть мне. 「彼女がもっと何かを私に言いたいのだと思った」など。このようなばあいには事件の存在についての叙述が後者にある程度の蓋然性を付与し, мо́жет быть 「おそらく」, должнó быть 「きっと」, веро́ятно 「おそらく」などのような表現が明示的に, あるいは少なくとも暗示的に存在していることを前提とする [37, II, pp.363-364]⁷。

§99 チェコ版ロシア文法は, これらの不定代名詞を「定性・不定性」と「具体性・具体性の欠如」という基準で特徴づけようとしているように見えます。

-нибудь はもともと кто ни будь 「たとえ誰であっても」という句から作られたもので, 「不定性」と「具体性の欠如」によって特徴づけられると言うのは, その限りではよく理解できます。しかしこれに対して -то を持つものが「具体性・具体性の欠如」という基準に関して無標的であるというのは理解に苦しむところです。これは例に挙げられているように, -то が -нибудь と競合して, 「具体性の欠如を表す」ばあいを想定したためかも知れません。

しかしもしそうだとしたら, -нибудь を持つものが「具体性の存在を排除しない」ばあいには -то を持つものと競合するのに, なぜ「具体性の欠如」によって特徴づけられるのかが, 問題になりましょう。この説明は内部的な整合性を欠いていると言わなければならないと思われます。チェコ版ロシア文法も, この矛盾を何となく感じていたのではないかと思います。

「おそらく」とか「きっと」という意味が明示的あるいは暗示的に含意されているという説明はこのためだと考えればよく理解できます。

§100 これらの小詞を持つものは代名詞に限らず, 疑問詞にはすべて付くことができますから, -то を持つものを -то グループということにすれば, このグループは, 例えば現在あるいは過去の出来事については, これが指すものが原則として実在していたことを示すと言ってもよいと思われます。

たとえば Я уви́дел когó-то у окнá. 「私が誰かが窓の側にいるのを見た」, Ктó-то стучи́т в дверь. 「誰かがドアをノックしている」などと言うとき, 誰かは分からないとしても, それが実在していたことは確実なのです。

⁷ 例文のアクセント, 日本語訳は筆者。

時間や場所についても、たとえば Я когда-то слышал эту песню. 「私は以前にこの歌を聴いたことがある」、Я где-то потерял карандаш. 「私はどこかで鉛筆をなくした」などと言うとき、その場所や時間は特定できないとしても、そういう場所あるいは時間が実在していたことは確実です。

従ってこのグループは実在性を主張するばあいにも使われると思われます。例えばおとぎ話で Жил-был король когда-то. というとすれば、これは導入部ですから新しい情報なのですが、話の実在性が когда-то によって主張されます。元来 -то というのは指示詞と同源のものだと思われるから、そのはたらきは話し手がそれを知っていることを保証し、あるいは知っていることを相手に同意させるはたらきを持っているのではないかと思われるのです。

§101 これに対して -нибۇдь グループはこの特徴をもっていません。従って今述べた文脈で -то グループに代えることはできないのです。

-нибۇдь グループが過去あるいは現在の出来事に用いられるときには、原則として疑問になります。たとえば Вы с кем-нибудь говорили? 「貴方は誰かと話してみましたか」というとき、話した人がいるかも知れないし、誰とも話をしていないかも知れません。実在の保証がないのです。Вы когда-нибудь были в России? 「貴方はロシアに行かれたことがありますか」というばあいも同じです。

従って平叙文のばあいには未来の出来事について言われることが普通になります。たとえば, Я когда-нибудь поеду в Москву. 「私はいつかモスクワに行くんだ。」

過去のばあいでもその実在性に疑いがあるときにはこのグループが用いられることになるとされます。上に挙げられている Я решил, что она хочет еще что-нибудь сказать мне. 「彼女がもっと何かを私に言いたいのだと思った」のような例はこれに当たります。

著者がここに蓋然性の存在を見たのは正しいと考えられます。

§102 以上のことから -то グループは話し手がそれが指すことがらが実在していることを知っており、その意味で話し手にとって既知ですが、そこに含まれる要素を特定しようとしないうか、あるいはできないことを示している

のに対して、-нибудь グループは実在するかしないかについて話し手が未知であり、したがって当然そこに含まれる要素の特定はできないか、あるいは蓋然性の形でしか示すことができないものを示す、と考えることができそうです。

別の言い方をすると、既知であるか未知であるかというのが実在性に基づいているとすれば、これはチェコ版ロシア文法の言う「具体性」に当たります。また要素を特定することができないかしないという意味で、ここでいう「不定性」は「特定性」・「非特定性」の範疇に属するものとなります。しかしこれらが同じ平面でどう結びつくかで区別されるというのではなく、その間に階層があるのではないかというのが、主張したいことなのです。

言い換えれば、-нибудь グループのばあい、「実在するかどうかは分らないけれど、実在するとすれば」という条件文の形で非特定性が問題になるのだと思うのです。したがって「不定性」というのは、具体的な事象を直接に指すのではなく、その内包と外延の関係を指すものであると考えるのです。

言い換えれば、ある事象がある内包(概念)の指す外延(集合)に属するかどうかははっきりしないということを意味するともいえましょう。そうすればこの関係は、前に述べた「この事件の犯人は未だ特定されていない」という例文の構造とよく似たものとなります。

§103 もう一つ述べていないものに -либо グループがあります。この小詞 *либо* は *любить* と同根の語で、もともと「好きな」という意味を持っていたと思われます。これまで述べてきた言い方をすれば、ある実在する集合を指定して、その要素のどれでもよい、言い換えればどの要素も選択される同じ蓋然性を持っていることを表すものだと思っています。これについてはチェコ版のロシア文法は、上に引用したように、-нибудь グループと余り区別をしていません。その理由はおそらく、選択という概念が不定代名詞一般に共通するものだと考えているからだだと思います。たとえば、

「選択の可能性」という特徴は、「不定性」という特徴に結びつき、「具体性の欠如」という特徴に関して有徴的であるかあるいは無徴的であるすべての代名詞によって暗示的に伝えられる [37, II, p.365].

これが -нибудь グループと重なることが多いのは当然ですが、ある集合の

存在が前提とされるという意味で -нибѹдь とは異なっていると考えられます。上で述べた言い方を使えば、ある内包が示す外延に属する要素について、その内のどれが選択されるかが決っていない(不定である)ということになります。この点が -нибѹдь グループと -либо グループの根本的な違いであると考えられます。

§104 さてそれでは対格補語を持つ動詞が否定されたときの話に戻ることにしてしましましょう。ポーランド語では動詞が否定されると対格補語がほとんどのばあい否定生格をとることになっていますが、ロシア語のばあいにも中世には、すべてにわたってではないにしても、否定生格を取る強い傾向がありました。

著名な文法学者のブスラーエフ Федор Иванович Буслаев (1818-1897) はこれについて次のように述べています。

最も古いスラヴ語のテキストでは、聖書は後代よりも誠実にまた恒常的に、否定を伴った能動の動詞に生格を用いるというこの規則を守っていた。後になるとギリシア語の統語論に従って、時として生格は対格に代えられることがあった。例えば、オストロミール福音書 *не нмашн ꙗсти съ мѣномъ...* 「(イエスは彼に答えられた。もしわたしがあなたの足を洗わないなら) あなたはわたしと何の関わり(単数生格)もなくなる⁸」(ヨハネ 13,8)。オストロミール福音書では *да не прѣтъкнешн ѿ камень ногы твоѣю* 「あなたが足を(生格)石に打付けられないように」であるが、異本では *в испр.* ギリシア語の *τὸν πόδα* (対格)と同じく *ногѣ твою* 「足を(対格)」(マタイ 4,6)となっている。.....古代ロシア語では, *города не възъѡша ниодиногѡ*。「(彼らは)一つの町も(生格)奪わなかった」(Новг. лет., 1,10); *Мнѣ было выкупити у нихъ мое деревни не мочно*。「私は彼らからこの村を(生格)買戻すことはできなかった」(Юрид. акт. 1511).....しかしながら古代ロシア語や民衆語でも、また最近の作家たちによっても、時に対格も用いられた。例えば, *приде не успѣвъ ничто же*「(彼は)何も(対格)得ることができずに帰り着いた」(Новг. лет., 1,7); *Не покину веру христианскую*「キリスト教の信仰を(対格)(私は)捨てない」(Дух. стих, 2,79); *кисель куры не клюют*「雄鶏はキセーリ(乳酸飲料)を(対格)ついばまない」(Бессон., Детск. песн., 188); *Близъ лѡжа там*

⁸原文は Ἐὰν μὴ νίψω σε, οὐχ ἔχεις μέρος μετ' ἐμοῦ。で μέρος 「運命」は単数対格です。

во мраке но́чи/ сиде́л он *не* смы́кая о́чи 「彼は夜の闇の中で寝床のそばに/
目を(対格)閉じることなく坐っていた」(Пушк., II, 305). 歌謡では, *не* ше́й
ты мне, ма́тушка,/ *красный сарафа́н*, 「お母さん, あなたは私のために赤い
サラファンを(対格)縫わないで下さい」(Цыг., 28)[29, p.462 footnote].

§105 ブスラーエフはこのほか「最近の」作家たちは特に否定された動詞が回説的な形を持つときに対格を用いることが多いとして, *не хочу, не могу, не стану* 「したくない, できない, しない」etc. の例を挙げています。

これは述語動詞の不定形を伴うので, 後で述べるように, 80年文法で「間接的な」否定とされているものに当たります。彼の挙げている例を見ておきましょう。

не хочу́ ви́деть *мою́ комеди́ю* предста́вленною пре́жде не́жели... 「.....より前に上演される私のコメディーを(対格)(私は)見たくない」(Ф. Виз.); *чтобы́* восхища́ться им, *не* на́добно име́ть *глубо́кие све́дения* в иску́ствах 「それに有頂天になる為には, 芸術に深い造詣を(複数対格)持つ必要はない」(Бат., I, 327)などの外, 特にプーシキンに用例が多いとして, *я сча́стие твоё не мог* устро́ить 「私は君の幸福を(対格)用意できなかった = 君を幸福にできなかった」(I, 303); *не мог* приве́сти в по́рядок *мы́сли*, сму́щенные столь ужа́сными впечатле́ниями 「こんな恐ろしい印象で乱された思いを(=心を)(対格)整理することができなかった」(VII, 179); *я сме́ю* взять на себя́ столь *вели́кую отве́тственность* 「こんなに大きな責任を(対格)身に引受けることを私はできなかった」(VII, 179); *не ста́ну* опи́сывать *оренбу́ргскую оса́ду* 「オルレンブルグの包囲について(対格)話すことはやめよう」(VII, 180); *не могу́* изъясни́ть *то*, что я чу́вствовал 「私が感じたことを(対格)説明することはできない」(VII, 212)。

ブスラーエフはこのような回説的な構文に生格形も用いられるとして, *не уме́ет* уби́рать *поко́ев* и учрежда́ть *по́рядка* 「彼は安寧を(生格)やめさせて秩序を(生格)建てることはできなかった」(Бат., I, 284); *не в си́лах* Ле́нский снести́ *уда́ра* 「レンスキーは打撃を(=に)(生格)耐えることができない」(Пушк., I, 142); *никто́* в на́шем полку́ *не усомни́лся* подста́вить *ему́ своёй голо́вы* 「私たちの連隊の誰も, 彼のために自分の頭を(生格)捧げ

ること (= 命を投出すこと) を疑う者はいなかった」(Пушк., VIII, 18) などを挙げています。

§106 更に, *ли, уже ли* 「はたして」のような小詞が用いられるときには, 対格も生格も用いられるとして, *не терпит ли он холод? / не чувствует ли голод?* 「彼は本当に寒さを (対格) 我慢してはいないのか? / 本当に飢えを (対格) 感じてはいないのか?」(Дмит., III, 26); *Сие беспокойство — желание — предприимчивость — не означали ли великую душу и нечто необыкновенное?* 「こうした不安 — 願望 — はやる心 — は大きな魂 (対格) と何か常ならぬものを (対格) 意味していたのではなかったか」(Бат., I, 70); *не позабыл ли ты старой должности?* 「君は古来の義務を (生格) 忘れたのではないのか」(Пушк., X, 21) などを挙げています [29, pp.462-463].

§107 プスラーエフの説明を見れば, この時代以前には否定生格が主流になっていたこと, そして対格がこの時期 (19 世紀) に用いられ始めたことが分ります。

このことから述語が否定されたときに, 否定生格を取りにくい条件をより強く持つものから, 少しずつ対格形が用いられるようになってきて, 現在に至っているということが出来ます。

このような否定生格を取りにくい条件というのが, 動詞述語が否定されても目的語の存在がそれに伴って否定されることのないようなときではないか, というのが, ここで検証しようとしている仮説なのです。

もう一つ言えば, このような過程が未だ完成していない段階では, どのようなときに生格が用いられ, どのようなときに対格が用いられるかは, 一つの傾向としてしか現れてこないだろうということです。

古い文章語で否定生格の使用が一般的であったとすると, 同じような文脈のばあいでも, より文章語としての性格がつよい作品では生格の使用が残り, 口語あるいは口語としての性格が強く感じられるようなときには対格が使われるというように, 文体による影響が見られるであろうことも, 容易に理解

できます。

§108 さて、現代のロシア語でこの仮説が正しいかどうかを、80年文法の記述に従って見ていきましょう。

まず生格しか使われないばあいについて考えてみます。もし仮説が正しいならば、これは否定生格が一番取りやすいものでなければなりません。このようなものとしては *иметь* 「持つ、有する」 が考えられます。

「ある」という動詞と、「持つ」という動詞は存在に関して「表」と「裏」の関係にあると考えられます。「ある」というのは自動詞で、「持つ」というのは他動詞だということが違うだけだと言えるからです。

近年になって自動詞と他動詞の区別を持たない言語類型(活格言語類型)があることが分ってきましたが、このような言語では当然「持つ」と「ある」の区別はありません。このような言語では「持つ」の意味は「誰そのところにある」とか「誰それと共にある」というような言い方をすると報告されています。日本語でも「持つ」という動詞は比較的限られたばあいにしか使われません。

ロシア語のばあい、中世には *иметь* は非常に頻繁に使われていましたが、現在ではやはり限られた日本語で言えば「有している」というような、文語的なニュアンスを持って使われます。

このことから、この動詞に否定生格が用いられるのは、この動詞が文章語的な性格を持っているためだ、という説明が聞かれることがあります。

しかしこれは正しいとは言えないと思います。この動詞が否定生格をとるのを止めなかったこと、口語的な文脈で使われなくなったことの結果として、否定生格に文章語的な色彩が感じられるようになったので、話が逆だと思われるからです。

それではこの動詞がどうして生格を取ることを止めなかったのかを考えてみますと、この動詞が否定されると、目的語そのものの存在も否定されることになるからだと思います。

80年文法ではこれについて次のようにいっています。

動詞 *не иметь* との結合するすべてのばあいに(生格が用いられる). *не имеет права* 「権利を持つ」, *значения* 「意義」, *смысла* 「意味」, *намерения* 「意

図」, понятия「理解, 了解, 知識」 влияния「影響」; не имѣет дома「家を持たない」, денег「お金」, машины「自動車」, брата「兄弟」, друга「友人」, сведений「情報」 [26, p.416].

§109 次に никакой「いかなる～も」, ничей「誰の～も」, ни единый「ただ一つの～も」, ни малейший「全く～も」, ни... ни「～も～も」, ничто「何も」, ниなどと共に用いられるばあいがあります。たとえば, Я слава богу, заслужила, могу сказать, всеобщее уважение и *ничего непримичного* ни за что на свете не сделаю.「ありがたいことに私は皆の尊敬を受けているといえます。だからどんな不作法なことも(生格)決してしません。」(Тург.); Лиза подняла на него свой глаза. Ни *горя*, ни *тревоги* они не выражали.「リーザは目を挙げて彼を見た。その目は悲しみも(生格)不安も(生格)表してはいなかった。」(Тург.); Наверно, «Волга» шла в город, но теперь ни он, ни я не сделали *никакой попытки* остановить её.「きつと『ヴォルガ』は町に行きつつありました。しかに今となっては、彼も私もそれを止めようとするどのような試みも(生格)しませんでした。」(Быков) など [26, II, p.416].

80年文法によれば、通例に反してこの構文は間接的な否定のばあいにも生格を取るといいます。たとえば, *Никакого заказа и никакой работы* не смела взять на себя без позволения старухи.「老人の許しがなければ、どのような注文も(生格)どのような仕事も(生格)引受けることはできませんでした。」(Дист.) [26, II, p.414]

これらは存在の欠如が強調されていると考えられますから、生格が使われていることは当然と考えられます。

§110 これに対して対格の使用が規範的なものとして、80年文法は「対象の特定性と具体性と結びついているばあい」を挙げています [26, II, p.417]. これは次のような構文のばあいだとしています。

- 1) 文中に対象の特定性を示す代名詞が存在するばあい。

Эту песню не задушишь, не убьёшь.「この歌は(対格)窒息させ、殺すことはできない。」(Ошанин); Не гляди с таким укором! Не

хваля́ свои́ дары́! 「そんな非難する目で見ろな、自分の才能を (対格) 自慢するな」 (Р. Рожд.); Стары́к Лавре́цкий до́лго не мог прости́ть сы́ну его́ сва́дьбу. 「ラヴレツキー老人は長いこと息子の結婚を (対格) 許すことができなかった。」 (Тург.) etc.

- 1') 対象の特定性が接続詞 *ко́торый* による副文章によって示される
とき.

Он не прочита́л кни́гу, *ко́торую* вы ему́ да́ли. 「彼はあなたが彼に貸した本を (対格) 読み通してはいない。」

- 2) 対象が活動体名詞あるいは固有名詞によって表されるとき.

Со вре́мени моего́ конду́кторства я не люблю́ *Лесну́ю у́лицу*. 「私が車掌になって時間がたつにつれて、私はレスナヤ通りが (対格) 嫌いになった。」 (Пауст.); Но Су́ровцев уже́ понима́л, что уи́ти, не пови́дав *Вёру*, не в си́лах. 「しかしスロフツェフはすでにヴェーラに (対格) 会わずに去ることはできないことを悟った。」 (Чак.)

80 年文法はこの第二の用法は古い文章語でも見られるとして、次のような例を挙げています。このことから、このようなばあいに生格をとることが難しい強い理由があったことが分ります。

Вы не зна́ете *Асю́*. 「あなたはアーシャを (対格) ご存じない。」 (Тург.); Я не отверга́ю *престу́пную же́ну*. 「私は罪深い妻を (対格) 拒んでいるのではない。」 (Л. Толст.)

第三のばあいとして 80 年文法が挙げているのは、次のような条件です。

- 3) едва́ не 「ほとんど～せんばかり」, чуть не, чуть чуть не のように否定の *не* が小詞の中に含まれているとき.

Едва́ не урони́л *стакáн*. 「すんでにコップを (対格) 落すところだった。」; Чуть бы́ло не потеря́л *биле́т*. 「すんでのところで切符を (対格) 失くすところだった。」 etc. [26, II, pp.417-428]

この条件は動詞を否定しているのではないために、厳密には否定文というわけではないばかりか、Едва́ не урони́л *стакáн*. のような例から明らかな

ように、却って目的語の表している対象の存在が強く意識されると言えるでしょう。

こういうわけでこれらすべてが、目的語の示す対象の存在が保証されているばあいであることは、明らかなと思われます。

§111 80年文法では、いわゆる間接的な否定のばあいには対格の使用が普通だ (нормален) として、

Но говорить об этом она себе не разрешила, не желая портить ему настроение перед дорогой. 「旅の前の彼の気分を (対格) 損うことを望まなかったのも、彼女はこのことを話すことを自分に許さなかった。」 (シモン.); Она не решился сообщить матери и Оле правду о своём несчастье. 「彼女は母とオーリヤに自分の不幸について本当のことを (対格) 告げる決心が付かなかった。」 (Полев.); Мне школы не удалось закончить. 「私は学校を (対格) 卒業できなかった。」 (И. Грекова); Мне говорить неправду не положено. 「私は嘘を (対格) つくことを許されていない。」 (газ.)

などを挙げながら、一方では「しかしながら同様のばあいに生格も普通である」として次のような例を挙げています。

Анна знала, что ничто в мире не может принести ей утешения. 「この世の何も彼女に慰めを (生格) もたらしてはしないことをアンナは知っていた。」 (Пауст.); И брденнов своих с собою им не положено иметь. 「自分の勲章も (生格) 帯びることは彼らには許されていない。」 (シモン.); Не хотелось читать правоучений. 「教訓を (生格) 読む気にはなれなかった。」 (газ.) [26, II, p.418]

この記述は説明そのものが矛盾していますが、どういふばあいに対格が「普通」でどのばあいに生格が「普通」なのかについては何も述べていません。

しかし両方の使用の仕方を比べてみると、対格のばあいはそれが示す事象が存在していることが確実だと思われる文脈に使われていることが分ります。「旅に出る前の気分」、「自分の不幸」、「私に対して吐いた嘘」、「私の学んでいた学校」などが存在していたことは確かなのです。

これに対して後のばあいは、述語動詞が否定されるに伴って、生格に立つ名詞の示す対象の存在も否定されると考えられます。

иметь の否定でもこのことは示されますし、また правоучений が「教訓など」という一般的カテゴリーを表す複数であることも、この考えを支持すると思われます。

§112 この他, некому 「だれも～ない」, негде 「どこにも～する場所がない」, некогда 「～する時間がない」のような「否定述語」をもっている否定文のばあいにも対格形を用いることが多いとされています。

たとえば Некому показать работу. 「作品を(対格) 見せるべき人がだれも居ない。」; Негде публиковать статью. 「論文を(対格) 発表する場所がどこにもない。」のようなばあいです。

これらのばあいには存在が否定されるのは「否定述語」の表す対象で、目的語の存在はむしろ当然の前提となっています。

さらに、生格と対格の間の競合が見られるばあいには、文章語的な色彩の強い文章の中では、対格がよく使われる傾向があるなど、文体との関係についても触れられていますが、その中に生格が好まれるものとして, видеть 「見る」, слышать 「聞く」, чувствовать 「感じる」, замечать 「認める」, понимать 「理解する」, знать 「知っている」, помнить 「思い出す」などのような、感覚あるいは思惟に関する動詞が否定されるばあいというのが挙げられています [26, II, p.417].

たとえば

Ответа полковника Григорий не слышал. 中尉の返事は(生格) グリゴリーには聞えなかった。(Шолох.); И опять Поля не поняла его ревнивого вопроса. 「そして再びポーリャは彼の嫉妬深い問を(生格) 理解できなかった。」(Леон.); Он стадиона не видел, не слышал, не помнил. 「彼はスタディオンを(生格) 見たことも、聞いたことも、理解することもできなかった。」(Р. Рожд.)

この種の動詞はこれまでのものと少し違うように思われます。これらの動詞が、スラヴ語では本来生格の補語を取っていたと考えられるからです。

たとえばブラホフスキー Леон Арсеньевич Булаховский (1888-1961) は次のように述べています。

永續する知覚を意味する動詞(稀には感官による知覚一般)は古代ロシア語で完全には把握されない対象の格としての生格を支配していた(完全な把握は以前

から対格によって表されていた)[27, p.292].

ここでブラホフスキーが「永続する知覚」といっているのは、実質的には「不完了のAspectをもっているとき」というほどの意味だと思われます。彼がここで挙げている例をいくつか引用しますと、次のようになります。

1. слúшать:

Слúшали мы в собóрной цёркви ... *всенóщного пёния*.

(Дело Ник., № 36)

私たちは本山教会で徹夜の祈り (生格) を聞いた。

cf. и вы тоё náшу цáрского велíчества *грáмоту* вы́слушали.

(Гра́м. ц. Мих. бухар. царю Надар Магомету, 1645)

あなた方は皇帝陛下のこの文書 (対格)(を読むのを) 聞き終えた。

2. ча́ять (= слúшать):

А *побёгу* де их ча́ять с каза́ками на Дон.

(Мат. Раз., ИИ, № 43)

彼らがコザックとドンへ逃亡した (生格) のを聞いて

3. смотре́ть(смотре́ть):

всегда́ в торго́у смотре́ти *всякого запáсу*.

(Домострой)

常に市場であらゆる蓄え (生格) に注意を払うべし。

このことから、これらの動詞の否定構文に用いられる生格の補語は、本来否定生格ではなく、むしろ部分生格であったと推定できます。これらの動詞が肯定形で対格補語を取るようになって、否定構文の生格補語が否定生格と意識されるようになったのだらうと思われるのです。

第 九 話

活動体と不活動体

1. 現代語における活動体と不活動体

§113 ロシア語も含めてスラヴ語には活動体と不活動体という区別があります。特にロシア語ははっきりしていて、植物を除く生物は活動体に属し、対格が生格と同じ形を持っています。また不活動体は対格が主格と同じ形を持っています。それで活動体の対格形を生・対格形、不活動体の対格形を主・対格形などと呼ぶこともあります。

この区別はとてもはっきりしていて、疑いのないもののように見えますが、境界線上にあるようなものは、必ずしもそうではありません。たとえば покойник「故人」とか мертвец「死人」というようなばあいです。

「故人」とか「死人」というのは不活動体になったときにそう呼ぶことができますわけですから、活動体であるわけではありません。しかし文法上はれっきとした活動体なのです。それなのに、同じように不活動体になることによってその呼名がえられる труп「死体」は不活動体なのです。どうしてこのような不合理なことが起るのでしょうか。

それを探るために、80年文法を繙いてみると、次のような記述が目につきます。

名詞の活動体と不活動体との区別は、世界に存在している生物と無生物の区別と完全に対応してはいない。第一に樹木や植物の名前 (сосна「松」、дуб「樫」、липа「菩提樹」、болярышник「サンザシ」、крыжовник「スグリ」、ромашка「カミツレ」、колокольчик「ツリガネソウ」)、第二に生物の集合体 (народ「民衆」、войско「軍隊」、батальон「大隊」、толпа「群衆」、стадо「(家畜、鳥、魚などの) 群」、рой「(ミツバチなどの) 群」) は活動体に属していない。вирус「ウィルス」、микроб「細菌」および труп「死体」、мертвец「死人」、кукла「人形」などのようなタイプの語については § 1130 を参照 [26, II, pp.462-463].

§114 そこで § 1130 を見ますと、次のように書かれています。

- 1) 日常的なものの考え方で生きていると思われないもの (微生物の名前: вирусы,

микробы, бактерия),あるいは逆に連想によって生きた対象と同一視される対象を表す名詞(мертвец, покойник, кукла). 初めものは不活動体として用いられる傾向があり,後のものは活動体として用いられる.....[26, II, pp.465-466]

- 2) 不活動体で人物あるいは生き物に使用されるものは, 形態論的に活動体の特徴を持つ. これは мешок「袋 — ぐず, のろま, まぬけ」, дуб「樫の木 — でくの坊, まぬけ」, пень「切株 — とんま, でくの坊, 唐変木」, колпак「円錐形の帽子 — お人好し, まぬけ」, тюфяк「マットレス, 敷き布団 — 無気力な人」のような否定的に特徴付けをする名前で, 通常形容詞長語尾形の修飾語を伴う. нашего мешка обманули「あの間抜けが騙された」, в этого дуба (пня) ничего не втолкуешь「この馬鹿にはなにも教え込めない」, видел я этого старого колпака, этого тюфяка「私はこの老いばれの馬鹿を見た」
 - 3) 「崇拜する人物」という意味での идол「偶像, アイドル」および кумир「偶像」は.....活動体として用いられる. смотреть с восторгом на своего идола「歓喜して自分のアイドルを眺める」, обожать своего кумира「自分の偶像を崇拜する」.....「崇拜するもの, まねするもの, 理想」の意味での кумир は活動体としても, 不活動体としても用いられる. делать кумира из этого старого человека (Л. Толст.)「この老人を偶像にする」に対する Как Дездемона избирает Кумира для сердца своего (Пушк.)「デズデモナが自分の心にとっての偶像を選ぶときに」.....「神として敬う彫像」の意味での кумир, идол は稀にしか活動体として用いられることはない. На берегу Дуная русские поставили деревянного идола.「ドナウの岸辺にロシア人たちは木の偶像を建てた」.....
- 人に関して罵りの意味で用いられる болван「偶像(古語) — でくの坊」, идол「偶像 — でくの坊, まぬけ」, истукан「偶像 — でくの坊, とんま」などの語は, 活動体として用いられる. И в кого такого идола уродила! (Шолох.)「このでくの坊は誰に似て生れたのだろう」
- 4) 人に対して用いられる語 дух「靈魂」, гений「天才」, тип「タイプ」は活動体として用いられる.....
 - 5) 活動体の対象を指す語が無生物に対して用いられるとき, 形態的に活動体の特徴を保つこともある. これに属するのは,
 - a) разведчик「斥候 — 偵察機」, истребитель「根絶者, 撲滅者 — 戦闘機, 駆逐艦」, бомбардировщик「爆撃手 — 爆撃機」, дворник「屋敷番, 掃除夫 — 路面清掃車, 風防ワイパー」
 - b) ある種のダンスや歌. казачок「コサックダンス」, камаринский「カマリンスキー(ロシア民謡)」.....гопак「ウクライナの二拍子の早いダンス」, трепак「足拍子を伴う急テンポのロシアダンス」
 - c) 自動車の型式の名前. Москвич, Тигр, Запорожец. これらは活動体としても, 不活動体としても用いられる.

- 6) ある種のゲーム, 特にカルタとチェスに使われる言葉. да́ма, ва́лёт, ко́роль, ко́нь, сло́н. ту́з, ко́зырь [26, II, pp.462-464].

§115 これらの記述を見ると, 駆逐艦など (5a), ある種のダンスや歌 (5b), 自動車の型式 (5c), 特定のチェスの駒やカルタの札 (6) などは別にして, その他のものは「連想によって生きた対象と同一視される対象を表す名詞」という範疇にはいることが分ります.

しかしここで「連想によって」と言っているのは曖昧です. труп でも「連想によって生きた対象と同一視されている」ということができると思われるからです. また逆に「人形」が連想によって生き物と同一視されているということはできないように思われます.

そこでこの「連想によって」というのを, 「人物と類似の形を持ち, 人と同じように個体認識できるような」としたらどうでしょうか. мертве́ц や по́койник はこれに該当しますが, труп というのは個体認識をしないという点で, これに当てません.

ку́кла はマネキンとか一般の人形を想像すれば, それぞれ個性がありますから, 個体認識ができます. 昔, 人形には特殊な魔力があると想像されることもしばしばでした. 日本でも丑の刻参りの藁人形も特定の人に擬したもので, これを使って呪いをかけたのでした.

もしそうしたら, и́дол や ку́ми́р などが, たとえ人を指すものでなくてもしばしば活動体名詞として扱われることができることを説明することができます. мешо́к や пень が特定の人物の性格付けに用いられるとすれば, それは強い個体認識を伴うと考えられますから, 活動体として扱われるのもよく分ります.

逆に наро́д 「民衆」, 「群衆」のように活動体を指すものであっても, 集合体のばあいには活動体名詞として扱われないわけも説明できます. 前に「数」について述べたように, 集合というのは個体認識ができなくなったということをも前提として成り立つ認識の形式だと思われるからです.

また微生物を指すものが不活動体として扱われるのも, これが微細であっ

て、個体認識が難しいからだと考えることができます。

§116 このように考えれば5)と6)を除いたものは、一応説明できるように思われます。

ビリヤードの玉を意味する шар や、トランプの туз 「エース」、король 「キング」、дама 「クイーン」、валёт 「ジャック」、кóзырь 「切札」、チェスの корóль 「キング」、слон 「ビショップ」、конь 「ナイト」、ферзь, -зя 「クイーン」(男性)なども活動体対格を取りますが、これについては80年文法の次のようなコメントがあります。

一般にゲームにおいては不活動体の対象を活動体と考えることが可能である。たとえばビリヤードでは играть шарá 「ビリヤードをする」、сделать шарá 「同上」という表現が知られている。《Такого шарá промáзали》— сказал студéнт с насмéшкой. Подóбно всем игрокáм, он склонял шар в родителъном падежé, как живóе существó, íбо ни одíн билиáрдист не мóжет застáвить себя вíдеть в шарé неодушевлённый предмёт, — так мнóго в нём чíсто жéнских капризoв, внезапного упрáмства и необъяснiмого послушáния. (Л. Славин) 「こんな球を打ち損じたんだ — と薄笑いを浮べて学生が言った。彼は遊び手の皆と同じように「球」を生き物と同じように生格に変化させる癖があった。というのはビリヤードする者には一人として球が不活動体のものだとは思えないからである。それは純粹に女の気まぐれ、突然強情になったり何か分らないけれども素直に従ったりすることがとても多く見られるからである。」[26, I, p.464]

この説明は説明としてはとても面白いものです。使い手の思いのままにならないで、勝敗の行方に大きく関係するようなもの、それは球であったり、チェスの駒の中で重要なはたらきをするもの、あるいはトランプのエース、キング、クイーン、ジャックなどの札であったりします。その意味では туз 「切り札」などもこれにはいるでしょう。これもやはり役割の重要性によって個体認識できるためではないかと思われます。

そういう意味で見れば、「駆逐艦」の類、自動車の型式の類も「個体認識」が常に為されるという意味ではこれと同等かも知れません。一つの仮説として提示したいと思います。

こういう風に考えるのは歴史的な経過も考えに入れているからですが、こ

れについては次に述べます。

2. 歴史的発展

§117 活動体と不活動体という文法上のカテゴリーは、決して初めからスラヴ語あるいはロシア語にあったわけではありませんでした。何世紀にもわたってだんだんと出来上って来たものなのです。

前にも挙げた 14 世紀に成立した「ノヴゴロド第一年代記」古輯で調べてみますと、まず特定の人を指す固有名詞があります。「人名」です。活動体には人を指すばあいと動物などを指すばあいがありますから、人を指すものを便宜上「指人名詞」ということにしますと、「人名」は「指人名詞」の一部(部分集合)になります。

「指人名詞」で「人名」以外のもの(補集合)は、いうまでもなく人を指す普通名詞ということになります。

また、現代語では男性名詞は、活動体名詞では対格形が生格と同じ形をしており、不活動体名詞では主格と同じ形をしています。

単数では-a, -я に終る女性名詞は独自の語尾を持ちますが、-у に終わるものは、中性名詞と同じく、単数では活動体名詞および不活動体名詞ともに対格形が主格と同じで、区別がありません。しかし複数のばあいには男性名詞と同じように対格は活動体のばあいには生格と、不活動体のばあいには主格と同じ形になります。

生格と同じ形をしている活動体名詞の対格は「活動体対格」あるいは「生・対格形」といわれます。同じように不活動体名詞の対格は「不活動体対格」または「主・対格形」といわれます。

これで用語についての定義は終わりました。

(1) 人名

§118 この文献に用いられている人名の主・対格形と生・対格形の分布は、次の表のようになります。

固有名詞のばあい、圧倒的多数が生・対格形を取っていることが分ります。複数形が 1 例ありますが、固有名詞が複数形を取るのは極めて特別なばあいですから、一応無視してもかまわないと思われれます。

しかしこの1例が主・対格形であるから複数形は生・対格を未だとるようになっていなかったという訳にはいかないでしょう。例が少なすぎるのです。また前の節で言いましたように、女性名詞と中性名詞は単数で生・対格を取ることはありませんから、ここで挙げられている人名はすべて男性の人名です。

人 名			
形	主・対格	生・対格	計
単数	8	386	394
複数	1	0	1
計	9	386	395

序でに言いますと、年代記というのは、僧院などの公の権力に近い人々が書き記したものですから、公や教会の偉い人のばあい以外に固有名詞が記されることは極めて稀なことでした¹。

(2) 普通名詞

§119 それでは指人普通名詞はどうかといえば、次のような分布が見られます。ここで活動体とっているのは、指人名詞以外の活動体名詞です。

集合数としたのは、例えば гость「外国商人」、плѣнь「捕虜」のようなものですが、これは生・対格を取ってはいません。また双数は生・対格を用いる例が全くありません。これは双数が当時既になくなりつつあったことと関係があると思われます。

こうしてみますと、指人普通名詞は、単数のばあい人名ほどではありませんが、かなりの程度に生・対格形が広がっていることが分ります。しかし活動体名詞には単数・複数を通じて生・対格形は全く広がっていませんでした。

また複数のばあい指人名詞でも生・対格形はやっと少し広がりかけている段階だったことが分ります。

¹ノヴゴロド年代記のばあいには他の年代記に比べて公や市長官、貴族以外の市民の名前もいくらか多く見られますが、これはこの時代のノヴゴロドが、ちょうど日本の堺のように、民会から選ばれた「市長官」によって治められていたことによると思われます。民会には当時この町を支えていた自由民の職人たちも参加していたのです。それでこの政治体制を「封建的民主体制」と呼ぶ人もいます。もしこの都市国家が外国と条約を結んだりするときには、Господин Великий Новгород すなわち, Lord (Mr.) Great Novgorod という名称を使いました。いわば法人として町が人格を持っていたのです。序でに言えば紀元前の共和制ローマも同じように民会 comitia があり、貴族たちからなる元老院がありましたが、対外的には国という概念が未だありませんでしたから, Sēnātusque populus Rōmānus「元老院とローマの人々」という名称を使っていました。ノヴゴロドのばあいは、当然のことかも知れませんがこれよりも進んでいたということが出来ます。

指人普通名詞として年代記に現れるのは、その大部分がやはり кѣнязь「公」とか例えば архиепископъ「大主教」、архимандритъ「大僧院長(掌院)」, митрополитъ「府主教」とかいって、教会関係の高い地位にある人々でした。

一方社会的に高い位置を持っていないと考えられる指人普通名詞、たとえば отрокъ「小姓(下級従士)」, рабъ「奴隸」、возники「馭者」、конюси「馬丁」、мастеры「職人」、наимиты「賃金労働者」、холопы「農奴」のように、「社会的に完全な権利を持たない人物」[36, p.118]を表すばあいには生・対格形を取らないというクズネツォフの説に合致する傾向があるといえます。

このことと関連しているのは、複数形に生・対格形が広がりにくかったことです。

「数」のところで言いましたように、複数というものが個体認識がもは

やできなくなって、集合としてしか認識できないほどに個別性が弱まってしまった集合名詞のばあいと異なって、個体認識は未だできるけれども単数名詞ほどには個別性が強くない、いわば単数名詞と集合名詞の間にあるのが複数名詞だとすれば、これらに生・対格形が広がりにくかったのは、個別性が弱かったからだと考えられます²。

活動体と不活動体という文法カテゴリーは、こういう過程を経ながら発達してきました。その底には名詞が指すものの個別性の大小という認識の問題が隠れていたと考えられるのです。

普通名詞					
形数	主・対格		生・対格		計
	指人	活動体	指人	活動体	
単数	53	1	263	0	317
双数	6	0	0	0	6
複数	211	11	27	0	249
集合数	40	2	0	0	42
計	310	14	290	0	614

²細かい論証については「ノヴゴロド原初年代記シノド(宗務院)本における活動体と不活動体の区別について」[62, pp.35-59]を参照して下さい。

第 十 話

インド・ヨーロッパ祖語の知識 I

印欧語の破裂音と母音

1. 前置き

§120 ロシア語の属するスラヴ語派はインド・ヨーロッパ語族(印欧語族)に属します。語族というのは共通の祖語から分れてできた言語群を指す名前です。ロシア語のいろいろな現象を理解するためにはこの印欧祖語の知識が必要になることがあります。それでここで印欧祖語のごく概略をまとめて述べておく必要が出てきます。

2. 語幹形成母音

§121 印欧語族に共通する問題として語幹の問題があります。名詞、形容詞、代名詞などの名詞類 *nominales* や動詞のように変化する語は、原則としてその中心に意味をになっている部分である語根があります。

たとえば「足」を意味するラテン語の *pēs*, ギリシア語の *pous* (πούς) は語根として **ped-* あるいは **pod-* をもっていました。この語根に直接に語尾が付くことによって語ができるというのが、最も単純な語の構造でした。

たとえばラテン語の *pa* あい, 単数主格は **ped-* に語尾 **-s* を加えることによってできていました。

この **-s* という語尾は、初めは主格を表すものだと考えられてきましたが、後になって行為者を表すのではないかという考え方が出てきました。更に最近では活格言語の能格の語尾ではないかという説も見られるようになっていきます。

ともかく、こうしてできたラテン語の **ped-s* あるいはギリシア語の **pod-s* は二つの子音が語末に立つために語根の **d* が脱落し、その代りに母音が延ばされました。これを代償延長 *Kompensationsdehnung* といいます。子音を一つ落したので、語全体の長さがその分短くなるために、これを補おうとして母音の延長が起るのだと考えられています。

ところが単数属格は語尾自体が母音をもっていますので子音の脱落が起り

ません。たとえばラテン語 *ped-is*, ギリシア語 *pod-os* となります。

このよう な子音の脱 落はそれが 語根の部分 に起ったば あい、大変 具合が悪い ことになり ます。意味	格	ラテン語	ギリシア語	
		主 人	人	
	主格	<i>domin-us</i> (<*-os)	ἄνθρωπος	<i>anthrōp-os</i>
	呼格	<i>domine</i>	ἄνθρωπε	<i>anthrōp-e</i>
	対格	<i>dominum</i> (<*-om)	ἄνθρωπον	<i>anthrōp-on</i> (< *-om)
	属格	<i>dominī</i> ¹	ἄνθρώπου	<i>anthrōp-ou</i> (< *-oo?)
	与格	<i>dominō</i>	ἄνθρώπῳ	<i>anthrōpō(i)</i>
	従格	<i>dominō</i> (< *-ōd)	—	—

をになっている部分に変化が起るからです。

このようなことを避けて、語根の形を安定させるために、印欧語は「語幹形成母音」thematic vowel というものをつけるようになりました。

名詞や形容詞のばあい、これは通常 *e または *o の形をしています。たとえば単数主格では *-o-s というようになり、後に主格の語尾として *-os になりました。このように語幹形成母音の支えがあれば、図のように語幹の変動がなくなるわけです²。

このように語幹形成母音をもつ名詞をテマティック名詞、もっていないものをアテマティック名詞といっています。

序でに言えば、動詞のばあいにも同じ現象があり、テマティック動詞とアテマティック動詞の区別があります。

3. 母音交替

§122 語幹形成母音についてこれを *e または *o であるといいましたが、実はこれは格あるいは人称によってどちらかが使われます。このことからこれは実は同じもので、ばあいによって *e になったり、*o になったり交替するものだと考えられています。

語根のばあいにも、たとえばラテン語では「足」は *ped-, ギリシア語で

¹この語尾についてはさまざまな説があります。トロンスキー Иосиф Моисеевич Тронский (1897-1970) はこれをインドイラン語の副詞の語尾 *i* と関係があるかも知れないとしています [41, p.146].

²図の中の属格の?については [5, pp.37-39] 参照。

は *pod- というようになっていますが、これも同じように同じ語根で、その中で *e と *o とが交替しているのです。

このような交替があるばあいに、慣わしとして *e をもっている形で語根を表します。語幹形成母音は普通 *e/o のように表します。

一般に印欧語は次のような母音交替をするとされています。

	母音度		
	E 階梯	O 階梯	ゼロ階梯
短母音	e	o	—
長母音	ē	ō	ə

この交替は元々は品詞のような語彙的な区別、あるいは変化などの文法的な区別に利用されていたのではないかと考えられています。

たとえば *leikʷ- 「残す」という語根を持つ動詞は、ギリシア語のばあい次のように変化しました。

現在	現在完了	アオリスト
leip-ō λείπω	le-loip-a λέλοιπα	e-lip-on ἔλιπον

*印欧語の *kʷ- はギリシア語では p (π) になりました。

このような母音の交替現象が存在していることから、今でもこれを語彙や文法に利用しているセム語族と印欧語族とが、祖先を同じくしていると信じる学者もいます。

§123 この母音交替はまた接尾辞のばあいにも見られます。

たとえば *-eu- という接尾辞は *-eu-/*-ou-/*-u- のような形を取ります。

いずれにしてもこの母音交替はやがて忘れられ、母音度の違った形は異なった語と考えられるようになりました。あるいはまた、言語によってはある母音度の形だけが受け継がれるようになりました。

たとえば *bheudh- という語根はスラヴ語では блюсти < *бюдти 「見守る」「守る」となりました。

これに対して使役の接尾辞 **-éyo-/*-ī-* をつけるときには母音度 *o* になり, **bhoudh-ī-* のようになりますが, これはスラヴ語では будить 「目覚めさせる」「起す」になりました。

さらに状態を表す接尾辞 **-ē-* を持つときには語根はゼロ階梯となり, **bhudh-ē-* になります。これはスラヴ語では бдеть < бѣдѣти 「起きている」「目覚めている」になりました。

4. 語根の構造

§124 印欧語の変化する語は語幹と語尾からなりますが, 語幹は最も複雑なものは接頭辞, 語根, 接尾辞または語幹形成母音からなります。語幹形成母音はやがて融合して語尾の一部になります。

(接頭辞)–語根–(接尾辞)

語幹

ところで印欧語の語根は一定の規則に従った構造を持っていると言われます。メイエ Antoine Meillet (1866-1936) はこれを次のようにまとめています [17, pp.174-175]³。

- 1-1 無気有声破裂音で始まり, 無気有声破裂音で終る語根はない。例えば **bheu-dh-*, **g^wenduh*, **bheid-* など。
- 1-2 有気有声破裂音で始まり, 無声破裂音で終る語根はない。またその逆もない。ただし **s* + 無声破裂音で始る語根は, 有気有声破裂音で終ることができる。例えば **steigh-*。
- 2 母音交替を行う母音を間に挿入できない二つのソナントあるいは二つの子音で始まり, あるいは終る語根はない。例外は語根の始めの位置に立つ **st-*, **sp-*, **sk-* だけである。

³メイエのこの本は印欧比較言語学の古典的なもので, それまでの比較言語学の成果を明快に整理したものです。今ではクリモフ Григорий Андреевич Климов (1928-1997) が集大成した内容的類型学の発達によって, これを比較言語学に応用したガムクレリゼの「喉音理論」глуттальная теория が, 従来の比較言語学の姿を大きく変える理論を提唱しています。クリモフの著書は 1992 年に大阪外国語大学の石田名誉教授が訳しています [48]。

3 一音節のどのような語根も *e, *o, 零の母音だけで終ることはない。例えば *ei-, *pekʷ-, teu-.

この規則の中に、ソナントという言葉があります。これは *y, *w, *r, *l, *m, *n を指しています。

子音は con-sonant といいますが sonant というのは「音を立てる」を意味する動詞 sonāre の能動分詞です。con- は「共に、一緒に」の意味ですから、consonant は「何かと一緒に音を立てる」もの、言い換えればそれだけでは音を立てることができないものを意味しています。

ところが sonant はそれ自身で歌うことができます。つまり、ソナントは母音と子音の間にあるもので、位置によって子音として働くことも母音として働くこともできます。

*i, *u は母音として働くときの *y, *w を表しています。しかしこれ以外のソナントには母音として働くばあいの表し方がないので、普通 *r, *m のように、下に丸をつけて表します。

印欧祖語の体系ではこういうわけで *i, *u が母音でなくなりましたから、母音は *a, *e, *o および *ā, *ē, *ō になります。

§125 この他にメイエの体系では *ə も母音と考えられていたと思われるが、ヒッタイト語の解読以後提唱されるようになったラリングル理論 Laryngeal theory によって、いまでは喉の音の一種であるラリングルといわれる音と考えられています。しかしこれを述べると問題を複雑にするので、今は触れません。

いま有声有気の破裂音を Dh, 有声無気の破裂音を D, 無声無気の破裂音を T で表すことにし、ソナントを R で代表させることにすると、規則の 1-1 は D-D という形をした語根はない、と言い換えることができます。

従ってこの規則によって印欧祖語の語根は Dh-Dh, D-Dh, Dh-D のどれかだということになります。

規則の 1-2 は Dh-T あるいは T-Dh という形の語根はないというものです。ただし sT-Dh は例外です。

規則の 2 は TT-, RR-, -TT, -RR という形の語幹はないというものです。規則の 1-2 の sT-Dh に当る *st-, *sp-, *sk- は語根の始めの位置にだけ許

されます。

規則の 3 は Dhe, De, Te のような語根はないことを述べるものです。

5. 印欧語の音韻とその対応

§126 印欧祖語の音韻とそれがこの語族のそれぞれの言語に伝えられた結果どう変化したのかを表にしたものを、対応表と言います。

まず破裂音はどうかといいますと、メイエによれば次のようになります [17, pp.84-86].

無声無気破裂音

IE	Hitt.	Tokh.	Skr.	Av.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
*p	p	p	p	p	p	p	h(w) ²	π	p	ø	f(b) ⁵
*t	t	t(c)	t	t	t	t	th	τ	t	t	p(d) ⁵
*k ₁	k	k(ç) ¹	ç	s	s	š	s	χ	c	c	h(g) ⁵
*k ^w	ku	k	k(c) ¹	k(č) ¹	k(č,c) ¹	k	kh	π(τ) ³	qu	c ⁴	hw(w) ⁵

説明

- 1) 印欧語の *e, *ē と *i の前でトカラ語 ç, サンスクリット c [tʃ], アヴェスタ語 č, スラヴ語 č (ч) になる。印欧語の二重母音 *oi および *ai から生じたスラヴ語の ě (ѣ) の前で c (ч) になる。
- 2) 語頭でアルメニア語の h, 母音間で w (v) になる。
- 3) ギリシア語の大部分の方言で ε, η の前で τ となる。
- 4) ゴール語, ブルトン語で印欧語の *k^w は p になる。
- 5) 母音またはソナントの間, 前の音節が語頭のばあい, 音調を持たない時, 有声化する。語頭の音節にないばあい, これらの有声音の取扱いは複雑で, 場合によってはよく分らないことがあるとされる。

例

*p

*ped-/*pod- 「足」: Gr. pous < pōs, podos ποὺς < *pod-s 「足」, Lat. pēs < *ped-s, pedis (cf. E. pedal, pedestrian, R. пьедестал), Skr. pad-, Got. fōtus (cf. E. foot).

*tep- 「暖い」: Lat. tepeō 「暖まる」, Skr. tapati, OCS теп-лый. cf. топить

< *top-.

*t

*ten- 「延す」: Lit. tėvas 「薄い, 細い」, Skr. tanúḥ 「薄い, 細い」, Gr. tanaós ταναός 「長い」, Lat. tenuis 「薄い, 細い」, ТЕНЬКЪ < *t^onu-ko-. cf. E. tender.

*pet- 「飛ぶ」: Lat. petō 「ある方向に向う, 落ちていく」, Gr. petomai πέτομαι 「飛ぶ」, Skr. patati 「飛ぶ, 急ぐ, 落ちる」. cf. Skr. patra- 「羽毛, 翼」, OHG fedara (< *pet-rā) 「羽毛」, OE feðer 「羽毛」, (E. feather), Lat. penna < *pet-nā 「翼, 羽毛」 (> E. pen.).

*k¹

*kerd-/*kṛd- 「心臓」: Gr. kardia καρδιά 「心臓」, Hom. κῆρ, Lat. cor, cord-is, Ir. cride, Lit. širdis, СРЪДЦЕ > сердце.

*ekwos 「馬」: Lat. equus Got. aihwa-tundi 「茨, キイチゴ. クロイチゴ」 (< 馬の・齒), Skr. aśvaḥ 「馬」 (cf. E. equestrian).

*k^w

leik^w- 「残す」: Gr. leípō λείπω, Lit. lėkù, Skr. ri-ṇá-kti, Lat. re-li-n-quō, 分詞 relictus, Arm. elikh 「彼は残した」 (-n(o)- は接中辞).

*k^wein-/*k^woin-: Gr. peisai πείσαι 「支払う」, Av. kaēnā 「懲罰」, Gr. poinē < poinā ποινή 「身代金, 血の代金」, OCS ЧѢНА < *kēnā 「値段, 価値」.

§127 有声有気破裂音の対応表は, 次の通りです [17, pp.86-88].

有声有気破裂音

IE	Hitt.	Tokh.	Skr.	Av.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
*bh	p(b)	p	bh	b	b	b	b	φ	f(b) ³	b	b ⁴
*dh	t(d)	t	dh	d	d	d	d	θ	f(d) ³	d	d ⁴
*g ₁ h	k(g)	k	h	z	z	ž	j(z)	χ	h	g	g ⁴
*g ^w h	ku(gu)	k	gh(h) ¹	g(j) ¹	g(ž, dz) ¹	g	g(j) ¹	φ(θ) ²	f(u) ³	g	(?) ⁴

説明

- 1) 印欧語の *e, *ē と *i の前でサンスクリット h, アヴェスタ語 j, スラヴ語 ž アルメニア語 j になる。

- 2) ギリシア語の ε, η の前で θ となる.
- 3) 母音間の位置ではラテン語で b, d, 子音の u (すなわち v — ラテン語では元々 v も u も区別しないで u と書いていました.) になる.
- 4) 母音間の位置で b, d, g, は破裂音ではなく, 摩擦音 *b̥, d̥, g̥* を表している.

例

***bh**

*bher- 「運ぶ」: Skr. *bharāmi*, Gr. *ferō* φέρω, Lat. *ferō*, Got. *baíra*, OCS *ѣрѣ* 「取る」. cf. Lat. *fūr* < *fōr, Gr. *fōr* < *bhor- 「泥棒」 (cf. E. *bear*).
 *nebh-: Skr. *nábhaḥ* 「雲」, Gr. *nephos* νέφος 「雲」, Hit. *nepiš* 「空」, OCS *нѣбо* 「空」. cf. Gr. *nephelē* νεφέλη 「雲, 靄, 霧」, Lat. *nebula* 「靄, 霧, 水蒸気, 霞」, OSaxon *nebal* 「雲」 (cf. E. *nebula*, *nebular*, *nebulous* etc.).

***dh**

*dhūm-: Skr. *dhūmāḥ* 「煙」, Lat. *fūmus*, Lit. *dúmai*, R. *дымъ* (cf. E. *fume*, *fumigate*).
 *medhu 「蜜」: Lit. *medūs*, Skr. *mádhu* 「蜜酒」 > *mádhuḥ*, *madhurāḥ* 「甘い, 甘美な」, Av. *maðu-* 「蜜酒」, Irl. *mid* 「酒」, Gr. *methu* μέθυ, OHG *metu* (cf. E. *mead*).

***g₁h**

*gheim- /*gh(i)em- 「冬」: Gr. *kheimōn* χειμών, Lat. *hiems*, Lit. *žiema*, OCS *зимѧ*, Skr. *hēman* (所格「冬に」).
 *wegh- 「(乗って) 行く, 運ぶ」: Lat. *vehō* 「運ぶ」, Got. *ga-wigan* 「動く, 振る」, OHG *wegan* 「行く」, Av. *vazaiti* 「旅行する」, Skr. *vāhati* 「乗物で行く」, OCS *вѣзѣ* > *везу*, (cf. E. *vehicle*, *wain*, *wag(g)on*). O 階梯: Gr. (w)okhos ὄχος 「(通常複数で) 戦車」.

***g^wh**

*g^when- 「打つ, 殺す」: Gr. *theinō* < *theniō *θείνω* 「打つ」, Hit. *kuen-* 「打つ, 殺す」, Skr. *hánti*, *ghnánti* 「打つ」, Av. *jainti* 「打つ」, OCS *гнѧти*

< *g^wōnā-, ЖЕНА < *g^wen-ōm 「追う」. cf. Gr. phonos φόνος 「殺人」.

§128 更に有声無気音は次のようになります [17, pp.88-89].

有声無気破裂音

IE	Hitt.	Tokh.	Skr.	Av.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
*b	p(?)	p(?)	b	b	b	b	p	β	b	b	p
*d	t	t(c)	d	d	d	d	t	δ	d	d	t
*g ₁	k	k	j	z	z	ž	c	γ	g	g	k
*g ^w	ku(?)	k(ç)	g(j) ¹	g(j̥)	g(ž,dz) ¹	g	k	β(δ) ²	u(gu)	b	q

説明

- 1) 印欧語の *e, *ē と *i の前でサンスクリット j, アヴェスタ語 j, スラヴ語 ž になる.
- 2) ギリシア語の ε, η の前で δ となる.

例

*b

この類はほとんど欠如しています.

*belo- 「強い」: Skr. balam 「強さ」, Gr. bel-teros βέλτερος 「より強い, よりよい」, OCS бѡлѣиѣ 「より大きい」, Lat. dē-bilis 「弱い」.

*pibe- 「飲む」: Skr. pibati, Lat. bibit < *pibit.

*d

*domos 「家」: Gr. domos δόμος, Lat. domus, Skr. dāmaḥ, OCS дѡмъ, (cf. dome, domestic etc.).

*sed- 「坐る」: Lat. sedeō 「坐っている」, Gr. hezomai < *sed-y- ἕζομαι 「坐る」, Skr. asadat 「坐った」, Got. sitan, OCS сѣдѣти.

*g₁

*agros 「畑, 野原」: Gr. agros αγρός, Lat. ager, Skr. ajraḥ, Got. akrs. cf. E. agri-culture, acre etc.

*genu / *gonu 「膝」: Gr. gonu γόνυ, Lat. gonu, Skr. jānu.

*g^w

*g^wiwo- / *g^wiwo- 「生きている」: Gr. bi(w)os βίος, Osc. bivus, Got. qius, OHG quek, cwic > E. quick 「生きている人, 生身」, Ir. beo, Skr. jīvāḥ, OCS живѣ.

*g^wem- 「行く」: Got. quiman, OHG queman > coman, Lat. ueniō 「来る」, Gr. bainō < baniō βαίνω. cf. E. come.

*g^wen- 「女」: Gr. gynē γυνή, Got. qinō, qēns (> E. queen), Skr. jani- 「女, 妻」, Ir. ben, OPrus. genna, OCS жена.

これらの対応表を見れば一番目につくのは喉音と喉唇音の扱いです。

サンスクリット, アヴェスタ語, スラヴ語, リトアニア語などが喉音を s 類の音にしているのに対し, その他の言語は喉音の性質を失っていません。

喉音の性質を保っている言語をラテン語の 100 を意味する centum を使ってケントゥム語群といい, 喉音の性質を失っている言語を同じくアヴェスタ語で 100 を意味する satəm によってサテム語群といいます。

これは印欧語が分れる前にあった方言の差異を反映するものではないかという考えがあります。

ロシア語の属するスラヴ語はサンスクリットと同じくサテム語群に属しています。そのためこれらの言語は音の面に関して, よく似ている点を持っています。たとえば数詞はロシア語では один, два, три, четыре, пять, шесть, семь, восемь, девять, десять のようになっていますが, サンスクリットではこれは eka, dvi, tri, catur, pañca, ṣaṣ, sapta, aṣṭa, nava, daśa というようになります。

以上で破裂音は終りです。それでは無声有気音はどうなったのでしょうか。

これは当然の疑問ですが, これまでの印欧語比較文法ではこれに

従 来 の 体 系

	無声無気音	有声無気音	有声有気音
唇音	*p	*b	*bh
歯音	*t	*d	*dh
喉音	*k	*g	*gh
喉唇音	*k ^w	*g ^w	*g ^w h

当る例が極端に乏しいので, この系列は本来は存在しないと考えられていました。そうすると印欧語の破裂音の体系は図のようになります。

ガムクレリゼの体系

§129 これは不思議な体系です。どうしてかと言えば, ph のような無声有気音が欠けているのに, 逆に bh のような有声有気音があるからです。逆に ph があって bh のない言語は多くの言語に見られるものです。

	喉門閉鎖音	有声音	無声音
唇音	*ʔp	*b ^(h)	*p ^(h)
歯音	*ʔt	*d ^(h)	*t ^(h)
喉音	*ʔk	*g ^(h)	*k ^(h)
喉唇音	*ʔk ^w	*g ^{w(h)}	*g ^{w(h)} h

たとえば朝鮮・韓国語もそうですし, 中国語もそうです。ギリシア語でもそうです。しかし印欧祖語の体系と考えられているものと同じ体系は普通見あたりません。

そのほかいくつかの理由でガムクレリゼ Тамаз Валер Гамк्रेлидзе (1929-) はこの体系は類型学的に見て正しくないと考えて, 新しい体系を考えました [31]。

[ʔ] というのは喉門閉鎖音で, 喉門を閉鎖してから p, t, k を発音するものです。その例はたとえば朝鮮・韓国語に見られる濃音といわれているものです。

また有気・無気は音韻的に対立するのではなく, 同じ音素の異音だと考えられます。

この理論は伝統的な印欧語比較文法が指定していたものと形が非常に違うので, 多くの学者が戸惑い, そのために最初は反対も多かったのですが, 論理的であることと, これによって説明できることが色々あることから, 次第に支持者を獲得しつつあるとされています。

§130 母音の体系は次のようになります。まず短母音のばあい,

短母音の対応表

IE	Gr.	Ital.	Celt.	Germ.	Lit.	OCS	Arm.	Hitt.	Ind.-Iran.
*e	ε	e	e	e(i)	e	e	e	e	a
*o	o	o	o	a	a	o	o	o	a
*a	α	a	a	a	a	o	a	a	a

例

***e**

*es- 「存在する」: Lat. est, Gr. esti ἐστὶ, Skr. ásti, Av. asti, Lit. ėsti, Got. ist (> Germ. ist, E. is(t)), OCS естъ.

*sekʷ- 「従う」: Skr. sácate, Gr. hepetai (本来ならば *hetetai) ἑπεται, Lit. sekù, Lat. sequitur, Irl. -sechetar (3p.pl.).

***o**

*oktō 「八」: Lat. octō, Gr. oktō ὀκτώ, Skr. aṣṭā, Got. ahtau, OCS ѡсмѣ (< *ѡсмѣ) > R. восемь.

*owis 「羊」: Gr. ois < *o(w)is ὄϊς, Lat. ovis, Skr. aviḥ, Lit. avis, OCS ѡвѣ-ца.

***a**

*ag- 「導く」: Lat. agō, Gr. agō ἄγω, Skr. ajāmi 「導く, 駆る」, Av. azāmi, Isl. aka, Arm. acem.

*atta/*tata 「父」: Skr. tatāḥ, Gr. tata τᾱτα, Lat. tata; Hit. attas, Lat. atta, Irl. aite 「養父」, Got. atta (フン族の王 Attila という名もこれに由来するという説もあります [58]), OCS ѡтѣцѣ.

長母音の対応は次のようになります。

長母音の対応表

IE	Gr.	Lat.	Celt.	Germ.	Lit.	OCS	Arm.	Ind.-Iran.
*ē	ῆ ¹	ē	ī(ē) ²	ē	ė	ě	i	ā
*ō	ω	ō	ā(ū) ²	ō	ũ, o	a	u	ā
*ā	ᾱ ¹	ā	ā	ō	o	a	a	ā

例

***ē**

*dhē- 「置く」: Gr. tí-thēmi τί-θημι, Skr. da-dhāmi, Av. da-dāiti, Lat. fēcī 「行った, 為した」, Got. missa-dēds (mis-deed), OCS дѣти, дѣла.

*sē-men 「播く」: Lat. sē-men 「種」, Got. mana-seths 「人間, 世界」, OHG sāmo > D. samen, E. seed, OCS сѣмя.

*ō

*gnō- 「知る」: Gr. gi-gnōskō γι-γνώσχω, Lat. gnōscō, nōvī, Skr. jñāta-, OCS знати.

*dō- 「与える」: Gr. di-dōmi δι-δωμι, Skr. dá-dhāmi, Av. da-dāiti, OCS дати.

*ā

*mātē(r)- 「母」: Gr. mātēr (Att. mētēr) μήτηρ, Lat. māter, Skr. mātār-, OE mōdor(> mother), OCS мати, матер-, Lit. mótė 「女, 妻」.

*bhrātēr 「兄弟」: Gr. phrātēr φράτηρ 「同じ氏族などの一員」, Lat. frāter, Skr. bhrātar-, Irl. brāthir, Got. brōþar, Tokh. pracar.

母音について目に付くことは、スラヴ語が *o と *a, *ō と ā とを混同して、前のものを o, 後のものを a としていること、リトアニア語が逆に前のものを a, 後のものを o としていることです。

これはたとえば спросить の多回体 спрашивать が語根の母音を a に変えていることに見られるように、もとは多回体のばあい強調するために母音を延長して *ō としたものであることが分ります。

またスラヴ語の ē となっているのは ъ です。ゑは、このように印欧語の ē に遡ります。この文字はロシア語では e と同じになってしまったために、革命直後の文字改革でなくなりましたが、語源的な意味を持っています。

たとえば *dhē- という語根は「置く」という意味ですが、スラヴ語では дѣтъ (cf. о-дѣтъ) と書かれていました。

第十 一 話

インド・ヨーロッパ祖語の知識 II 印欧語のソナントと二重母音

1. ソナント

§131 ソナントには子音としてのソナントと、母音として働くソナントがあることは既に述べましたが、そのほかにも母音の前に立ち、従って当然子音として働く筈の位置にあるにも関わらず、母音として働くものもあります。その理由はよく分ってはいませんが、対応が微妙に異なっています。

(1) 子音として働くソナント

§132 まず子音として働くソナントは、次のような対応を持っています。

子音としてのソナント

IE	Skr.	Av.	Arm.	Sl.	Lit.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
*y	y	y	?	j	j	ε, ∅	i	∅	j
*w	v	v	g, v	v	v	F	u	f	w
*r	r	r	r ¹	r	r	ρ ¹	r	r	r
*l	r, l	r	l	l	l	λ	l	l	l
*n	n	n	n	n	n	v	n	n	n
*m	m	m	m	m	m	μ	m	m	m

説明

- 1) 語頭の *r はギリシア語とアルメニア語では a, e, o などの母音を前におく。

例

*y

*yek^wrt 「肝臓」: Lat. iecur, Skr. yakṛt, Gr. hēpar ἥπαρ.

*yugom 「くびき」: Skr. yugám, Lat. iugum, Got. juk (> E. yoke), Gr. jugon ζυγόν, OCS иго < *jigom.

*w

*woida 「知っている」: Skr. vēda 「吠陀」, Gr. (w)oida 「知っている」 οἶδα, Got. wait (cf. G. wissen), OCS вѣдѣ (cf. Бор вѣсть).

*newos 「新しい」: Lat. novus, Skr. navaḥ, Gr. ne(w)os νεός, OCS новъ < *nowos < *newos.

***r**

*reudh-/*rudh- 「赤い」: Gr. e-reuthō 「赤くなる」, e-ruthrós 「赤い」 ἐρεύθω, ἐρυθρός, Lat. ruber, Lit. raũdas, OCS рѣдѣти 「赤くなる」.

*dhwer- 「ドア」: Lat. forēs, Gr. thura θύρα, Got. daur, OHG tor, Lit. durys, Skr. dvāraḥ, OCS двѣрь. cf. E. door.

***l**

*leuk- 「輝く」: Gr. leukos λευκός 「白い」, Lat. lūx 「光」, lūceō 「輝く」, Got. liuhaþ 「光」, Skr. rōcatē 「輝く」, OCS лѣгъа 「光」.

*plu-/*pelu- 「多くの」: pīlnas 「一杯の, 満ちた」, Prus. pilnan, Skr. pūrṇaḥ, Av. pərəna-, Got. fulls; Gr. polus 「多くの」 πολύς, OCS пълънъ > полный.

(2) 母音として働くソナント

§133 母音として働くソナントは次のようになります。

母音としてのソナント

IE	Skr.	Av.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
*i	i	i	ѣ	i	i	ι	i	i	i
*u	u	u	у	u	u	υ	u	u	u
*r̥	ṛ	ərə	ръ	iĩ, uĩ ¹	ar	ρα, αρ ²	or	ri	aúr ⁴
*l̥	ḷ	ərə	ль, лъ ¹	iĩ, uĩ ¹	ał	λα, αλ ²	ul	li	ul
*n̥	a	a	н(ъ) ¹	iĩ, uĩ ¹	an	α	en	注 ³	un
*m̥	a	a	м(ъ) ¹	iĩ, uĩ ¹	am	α	em	注 ³	um

説明

- 1) 古代スラヴの лъ, лъ など, およびリトアニア語の iĩ, uĩ, iĩ と ul あるいは iĩ と uĩ, iĩ と uĩ のどちらが選ばれるかという条件は不明。

- 2) ギリシア語で $\rho\alpha$, $\lambda\alpha$ となるか $\alpha\rho$, $\alpha\lambda$ となるかという条件は正確にはわからない。
- 3) アイルランド語の $*m$ と $*p$ の扱いは極めて複雑で、表にまとめるのは難しい。
- 4) ゴート語の $aúr$ はゲルマン共通語の $*ur$ に由来する。

例

$*k$

$*krd$ - 「心臓」: Gr. *kardia καρδία*, Lat. *cor, cordis*, Ir. *cride*, Lit. *širdis*, OCS *сръдѣѣ*; $*kerd$ - > Got. *hairtō*, OE *heorte* (E. heart). cf. *electrocardiograph, cardioscope* etc.

$*l$

$*wlk^{os}$ 「狼」: Skr. *vṛkaḥ*, Lit. *vilkas*, Got. *wulfs*, OCS *вѣлкѣ*.

$*n$

$*n$ /*ne- 「否定」: Skr. *a-(jñātaḥ)* 「知られない」, Gr. *a-gnōtos ἄγνωτος*, Lat. *ig-(nōtus)*, Irl. *in-(gnad)*, Got. *un-(kunþs)*, Arm. *an-(canawth)*.

$*m$

$*kmtom$ 「百」: Skr. *śatám*, Av. *satəm*, Gr. *(he-)katon ἑκατόν*, Lit. *sim̃tas*, Got. *hund*, Lat. *centum*, Irl. *cēt*, OCS *сѣтъ*.

(3) 母音の前で母音として働くソナント

§134 母音の前で母音として扱われるソナントの対応は次のようになります。

母音の前のソナント

IE	Skr.	Av.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
$*^o r$	<i>ir, ur</i> ¹	<i>ar</i>	<i>ьр, ѣр</i> ²	<i>ir, ur</i> ²	<i>ar</i>	<i>αρ</i>	<i>ar</i>	<i>ar</i>	<i>aúr</i> ⁴
$*^o l$	<i>ir, ur(il, ul)</i>	<i>ar</i>	<i>ьл, ѣл</i>	<i>il, ul</i>	<i>al</i>	<i>αλ</i>	<i>al</i>	<i>al</i>	<i>ul</i>
$*^o n$	?	?	<i>ьн, ѣн</i>	<i>in, un</i>	<i>an</i>	<i>αν</i>	<i>an, in</i> ³	<i>an</i>	<i>un</i>
$*^o m$	?	?	<i>ьм, ѣм</i>	<i>im, um</i>	<i>am</i>	<i>αμ</i>	<i>am, im</i> ³	<i>am</i>	<i>um</i>

説明

- 1) サンスクリットの i と u は前の子音に大きく左右される。
- 2) バルト語派とスラヴ語の i, ъ および u, ъ の現れる条件ははっきりしない。
- 3) ラテン語の in, im は次の音節に i があるとき。
- 4) ゴート語ではゲルマン共通語の *u が *r の前で aú になったためである。他の言語では ur となった。

2. 二重母音

§135 さて、次は二重母音です。二重母音と言えば ei とか au とか ou とかを思い浮べます。これらに二重母音をよく見てみると、始めの音は印欧語という狭義の「母音」なのですが、後ろの要素は実はソナントだということが分ります。

印欧語の二重母音は実は「母音 + ソナント」でできているのです。ところが印欧語では *l も *r も *n も *m もソナントですから、*el, *ar, *om などとも皆二重母音なのです。二重母音の扱いはどの言語でも大切なものですが、スラヴ語でも、この対応は極めて重要なものです。

印刷の都合でこれを三つの部分に分けて示すと、次のようになります。

*e を主要素とする二重母音

IE	Skr.	Av.	OPers.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	OHG
*ei	e ¹	aē, ōi	ai	и	ẽ ² , eĩ	(?)	ei	i ³	ē, īa	ī
*eu	o ¹	ao, ǝu	au	ю	jaũ	oy	eu	ū ³	ō, ūa	eo, iu
*er	ar	ar	ar	pǝ ⁵	eř	er ⁶	ερ	er	er	er
*el	ar	ar	ar	лǝ ⁵	ẽ	eř	ελ	ul	el	el
*en	an	an	a(n)	Λ	eñ	in	εν	en	(en)	in
*em	am	ǝm	am	Λ	eñ	im	εμ	em	(em)	im

例

*ei

*(s)neig^wh- 「雪が降る」: Gr. neiphei νεῖφει, OLat. nīuit, OHG snīwan.

*ei- 「行く」: Gr. ei-si < *ei-ti εἶσι, Lat. it, Skr. éti, Lit. eit(i), OCS итъ.

*eu

*deuk- 「導く」: Lat. dūcō, Got. tiuhan.

*er

*wert- 「回す」: Lat. uertō, Skr. vārte 「回る」, Got. wairþan 「に成る」, Lit. vėřsti 「回す」, Irl. fertas 「糸巻き」.

*el

*el はロシア語を含む東スラヴ語群では、母音重挿 (164 頁参照) の際に、IE *el > OCS ѡѣ > R. -olo- になりました。先行する子音が ч, ш, ж のときは、もし後に続く子音が硬ければ -elo- に、軟らかければ -ele- になりました。

*mel- 「挽く、粉にする」 > R. мелю, молотъ: Irl. melim, OCS МѢЛѢ, МЛѢТИ; cf. Lit. malù, máliti, Lat. molō, Got. malan, Arm. malem 「砕く」, Gr. mullō μύλλω 「細かくする」.

*melg- /*mlg- 「乳を搾る」: Lit. mėlžu, OCS МЛѢЖѢ, OE melcan; Gr. amelgō ἀμέλω, Lat. mulgeō; OCS МЛѢКО, R. молоко.

*en

*kwentō: Lit. šventas 「神聖な」, Prus. swenta-, Av. spənta-, Skr. çvāntáh 「繁栄している」, OCS СВѦТЪ.

*em

*memso-(*menso-?) 「肉」: Prus. mensā, Got. mimz, Skr. māṁśám, OCS МѦСѦ.

§136 *o を主要素とする二重母音は、次の通りです。

*o を主要素とする二重母音

IE	Skr.	Av.	OPers.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	OHG
*oi	e ¹	aē,ōi	ai	ǫ(и) ⁴	ẽ ² ,aĩ	ē	oi	ū ³	oe	ai,eĩ,ē
*ou	o ¹	ao,əu	au	y	aũ	oy	ou	ū ³	ō,ūa	au,ou,ō
*or	ar	ar	ar	pa ⁵	aĩ	or ⁶	op	or	or	ar
*ol	ar	ar	ar	ла ⁵	aĩ	ol	ol	ul	ol	al
*on	an	an	a(n)	ѡ	aĩ	un	ov	on	(on)	an
*om	am	əm	am	ѡ	aĩ	um	om	um	(om)	am

例

***oi**

*oinos 「一」: Gr. oinē 「さいころの一」 οἶνη, Lat. ūnus, Got. ains, Irl. oin.

*(s)noig^whos 「雪」: Prus. snaygis, Lit. sniėgas, OCS снѣгъ, Got. snaiws.
cf. E. snow.

***ou**

*loukhsno-: Lat. lūna 「月」, Prus. laōxnos(pl.) 「星群, 星座」, Av. raoxšna- 「きらめいている」, OCS лѣна; Gr. lukhnos < *lukhnos 「光, ランプ」, λύχνος.

***or**

*wort-i- 「回す」: Lit. vartýti, Skr. vartáyati, Got. fra-wardjan 「損う, だめにする」, OCS вратити. cf. R. воз-вратить.

***ol**

*sold- 「麦芽」?: Lit. saldús 「甘い」, OCS сладѣкъ 「甘い」¹.

***on**

*pont(h)-: Skr. panthāḥ 「道」, Av. pantā-, Prus. pintis, Arm. hun 「渡し」, Lat. pons, pontis 「橋」, Gr. póntos πόντος 「海路, 海」, OCS пѣтъ 「道」.

***om**

*gombh-: Lit. žaĩbas 「尖ったもの」, Skr. jámbhaḥ 「齒」, Gr. gomphos 「杭」 γόμφος, Alb. dhəmp 「齒」, OHG kamb (> E. comb), OCS ꙗмѣ, R. зyb.

§137 *a を主要素とするに重母音は, 次のような対応を示しています.

*a を主要素とする二重母音										
IE	Skr.	Av.	OPers.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	OHG
*ai	e ¹	aē,ōi	ai	ǎ(и) ⁴	ẽ,ai	ay	αι	ae	ae	ai,ei,ē
*au	o ¹	ao,əu	au	oy	au	aw	αυ	au	ō,ūa	au,ou,ō
*ar	ar	ar	ar	pa	ar	ar ⁶	αρ	ar	ar	ar
*al	ar	ar	ar	ла ⁵	al	ał	αλ	al	al	al
*an	an	an	a(n)	ѧ	an	an	αν	an	an	an
*am	am	əm	am	ѧ	am	am	αμ	am	am	am

¹H. Bräuer はこのように主張している [2, I, p.81] が, ファスマーはこれを *sals соль 「塩」と関係づけている [42, III, p.713].

説明

- 1) サンスクリットの e と o は古ペルシア語に残っているインド・イラン語派の二重母音 ai, au に由来している.
- 2) レット・リトアニア語の ë(ie) と ei, ai の変化の条件は分っていない.
- 3) 紀元前 3 世紀末のラテン語の碑文には,, まだ二重母音のままの形がみえる.
- 4) いくつかの場合に *-oi, *-ai が -i になる条件は決定できない.
- 5) スラヴ語では *er, *el, *or, *ol などは言語によって色々な扱いを受けている.
- 6) アルメニア語ではいくつかの場合, 特に n の前で er, or, ar になる.

例

*ai

*laiwos 「左」: Lat. laevus, Gr. lai(w)os λαίος, OCS лѣвъ.

*au

*sausos 「乾いた」: Skr. śōṣas < sōṣas, Lit. saūsas, Alb. thanj 「乾かす」 (< *sausunyō), OCS сѡхъ.

*(s)tauros 「ヨーロッパ野牛²」: Gr. tauros 「成熟した雄牛」 ταῦρος, Lat. taurus 「雄牛」, Got. stiur 「雄牛」, Prus. tauris 「ヨーロッパ野牛」, Lit. taūras 「ヨーロッパ野牛」, Av. staōra- 「角のある大型家畜」, OCS тѡръп 「ヨーロッパ野牛」.

*ar

*gard-: Lit. gaĩdas 「柵, 障害物」, Skr. grhás 「家」, Alb. garθ 「囲い, 垣根」, Got. gartexthtp 「家」, OCS грѣдѣ (> R. город) 「町, 砦」.

*al

*kal(a)ma: Gr. kalamos, kalamē 「茎, 藁, 葦」, Lat. culmus 「藁しべ, 茎」, Prus. salme 「藁」, OHG hal(a)m 「藁しべ」, Tokh. kulmänts 「葦」, R. солома 「藁」.

*an

*angu: Skr. aṁhús 「狭い」, Arm. anjuk, Got. aggwus, Lit. aĩkštas, Lat.

² Auerochs. 17 世紀に絶滅した牛の一種.

angustus 「狭い, 窮屈な」, angor 「恐れ」, Av. ązah- 「窮乏」, OCS азъкъ, R. узкий.

*am

?

§138 さて、以上の外に母音として働く長いソナントというものが考えられます。メイエはこれを *rə のようにソナントと *ə との結合によるものと考えました。

これは結局は *ə の脱落による代償延長の現象ですが、セメレニイは他の子音の脱落によっても代償延長は起るとして、長いソナントを独立させました [21, pp.49-50]. これは考え方にもよるので、この二つの説の長短は一概に言えないと思われます。

しかし長いソナントを指定すれば、ことがかなり簡単になることは確かですから、一応ここに述べておきます。

長い母音のソナント

IE	Skr.	Gr.	Lat.	Celt.	Germ.	Lit.	OCS
*ǵ	ā	ṽā	nā	nā	un	in	А
*ǵ̃	ā	ṽā	mā	mā	um	im	А
*ṛ	īr, ūr	ṛā	rā	rā	ur	ir	Ьр
*ṛ̃	īr, ūr	ṛā	lā	lā	ul	il	ЬА

例

*ǵ

*gǵtos 「生れた」: Skr. jātaḥ, Lat. gnātus, Gaul. Cintu-gnātus, Got. airþa-kunds 「大地から生れた」.

*ṛ̃

*wṛ̃nā 「羊毛の」: Lit. vilna, ORuss. вълна, Got. wulla < *wulna, Av. varənā, Skr. ūrṇā < *wūr-, Lat. lāna < *wl-, Gr. lānos, lēnos λᾱνος, λῆνος.

*pṛ̃nos 「一杯の, 満ちた」: Skr. pūrṇaḥ, Lit. pilnas, Got. fulls, Irl. lān, OCS плънь. cf. E. full.

*t̥

*g^wītōs 「喜ばしい, 歓迎する」: Skr. gīta-, Lat. grātus, Lit. girtas 「賞賛される」.

*gīnom 「挽いた」: Lat. grānum (cf. E. grain), Irl. grān, Got. kaurn (cf. corn), kaurnō 「穀粒」, Lit. žirnis 「エンドウ豆」, OCS зѣрно 「穀粒」.

*pīwo- / *pīmo- 「前, 一番目」: Skr. pūrva-, Lit. pīrmas, Got. fruma, OE forma, OCS ньрвѣ.

3. スラヴ語要素の話

§139 スラヴ語に関していえば, ъ は *ē の他に二重母音 *oi, *ai から生じます. たとえば *k^woin-ā はスラヴ語で цѣна 「値段」になりました. これは *k が前舌母音の前で *c に変化したためです.

このことから *k > c は *oi > ъ に変化した後だということが分ります.

ギリシア語でこれに対応する言葉は poine (ποινή) で, これは人を殺した人が罰金として死んだ人の身内に支払うお金を意味していました. なお語尾の ā が ē になっているのは, アッチカ方言の特徴です.

それから *or, *ar と *ol, *al がスラヴ語で ra と la になっているのは, 一つには母音の対応表から分りますように, スラヴ語が *o と *a とを混同したためです. だから始めは *or, *ol になったに違いありません.

この順序がひっくり返った (これを metathesis といいます) ときに, おそらく母音の延長が起って, *rō, *lō になったのでしょう. 前にもいいましたように, スラヴ語では *ā と *ō も混同されて *a になりましたから, 結果として ra, la になったのだと思います.

同じようにして *er, *el も metathesis に依って母音が延長され, pѣ, лѣ になり, 東スラヴ語群では ере, еле になりました. ただし еле の方は ело/оло となることもありました.

この ra と la (および後で述べる pѣ, лѣ も) 東スラヴ語群では更に oro, olo という形になりました. ブルガリア語, セルビア語, クロアチア語のような南スラヴ語群も, ポーランド語, チェコ語などのような西スラヴ語群ではこの現象は起きませんでした. これを母音重挿 полногласие といいます. *el

については 160 頁も参照して下さい。

§140 スラヴ人の最初の文章語は聖書を訳した古教会スラヴ語で、その後セルビア、ロシアなど、土地の言葉を取入れた教会スラヴ語が主として宗教的な文書に用いられるようになり、これがロシア語にもさまざまな形で入り込み、語彙や文法に影響を与えてきました。

これは宗教的な用語や言回しだけでなく、抽象的な概念、学術用語、詩などの「高尚な」文体にも用いられました。そのためロシア語には母音重挿を持つものと持たないものとが混在したり、少し異なった意味を持って用いられるようになっています。

たとえば *gard- 「囲い?、囲われたもの?」を予想する語は、リトアニア語 *gaĩdas* 「囲い」、ゴート語 *gards* 「家」、アヴェスタ語 *gərədō* 「洞窟」、更にはサンスクリットの *gr̥ha* 「家」に対応するといわれますが [42]、これはスラヴ語では metathesis で *градъ* となり、ロシア語では母音重挿によって *гóрод* になりました。

このスラヴ系の *град* はたとえば *Сталингра́д* のような、都市の名前に使われましたが、詩語としてもよく使われました。

Прошлó/ сто лéт,/ и ю/ный гра́д/,
 Полнó/щных стрáн/ красá/ и дй/во.
 Из тьмы/ лесóв,/ из то́пи блáт/ (i.e. бóлот)
 Вознёс/ся пы́ш/но, гор/дели́/во; (Пушкин)³

その外 *глас/* *гóлос*, *влас/* *вóлос*, *мраз/* *морóз* などこれに類するものはたくさんあります。

§141 語の意味が変化したもののばあいには、教会スラヴ語起源のものは、一般に抽象的あるいは学術的な意味合いを持つものが多いと考えられます。

たとえば *глава́* は詩語として「頭」に使われる以外は「教会の丸屋根」、「指揮者」、「章」などに使われます。*kerd- に由来すると考えられる *срѣд-/* *серед-* (cf. Gr. *kardia* *καρδία* 「心臓」) は *середина́* 「真ん中、中央」の

³これは abab という交替韻をもったいわゆる iambic tetrametre の詩形を持ち、1, 3 行が男性韻、2, 4 行が女性韻という定型詩で、プーシキンが最も好んだ詩型です。

ような、日常的な意味の語に使われていますが、宗教的な意味合いの濃い曜日の名としては *срѣда* (水曜日) が用いられました。

教会スラヴ語とロシア語の音韻の上の違いはそれだけではなく外にもあり、これを手がかりにして教会スラヴ語起源の語をかなりの程度に見分けることができます。

母音重挿があるかないかはその手がかりの中で一番はっきりとしたものですが、たとえば **tj*, **dj* がスラヴ語では *щ*, *жд* になるのに、ロシア語では *ч*, *ж* になるというようなものもあります (cf. *между* / *межа́*, *межу́*, *нужда́* / *ну́жный*, *стоящий* / *стоя́чий*)。

そのほか音韻上は関係のない別の語を用いる場合もあります。

たとえば *уста́* / *рот*, *лани́та* / *щека́*, *пе́рси* / *грудь*, *перст* / *па́лец* などです。これらは多くは詩語として使われます。

教会スラヴ語とロシア語の関係は、ロシアの文章語の歴史の問題と深く関わっていますが、これはむしろ言語文化史の問題なので、ここではこれ以上述べることはしません。またこれまで述べてきた比較言語学の説明も、必要最小限の知識に過ぎないことを、断っておきます。

4. ウムラウトの規則

§142 ロシア語の初級文法を学ぶときに、名詞変化や形容詞変化などに色々な例外規則があって、初学者はしばしば悩まされます。その一つに *e* > *ë* の変化があります。これは「アクセントのある *e* がある場合に *ë* となる」と説明されています。しかしどういう「場合」なのかについては何も述べられていないのが普通です。

だからこそ、例外規則にされているのでしょう。歴史的にはこの変化は最初「本来的に」軟らかい子音の後、硬い子音の前で、アクセントを取ったときに起りました。(「硬い」音と「軟かい」音については、既に学びました 16 ページを参照してください)。すなわち、

- 1) *ш*, *ж*, *ч*, *ц*, *j* + *é* + 硬子音という環境で起ったのです。たとえば *ше́пот* > *ше́пот*, *же́ны* > *же́ны* のような場合です。
- 2) その後これが「位置によって」軟らかい子音の後にも生じるようになりました。たとえば *се́стры* > *се́стры* のような場合です。

この規則には例外があります。一つはたとえば *тётя, несёте, на берёзе* のような場合です。これらは皆、軟らかい子音の前に来ています。

チエルヌイフ Павел Яковлевич Черных (1896-1970) はこれを *тётка, несёт, берёза* などの類推によるものと考えています。

もう一つはたとえば *щёлка, честный* のように、1) または 2) の条件を満たしているのに、*ё* にはなっていないものです。

これはやはり *щёль, честь* による類推だと説明されています [43, p.129]。

これらの場合はいずれも語幹の内部で起っているものですが、語尾の場合、たとえば *путём* のように単数造格で起った場合を考えてみますと、これは既に述べましたように *пѣт-емь* に遡りますから、規則の例外と考えなければなりません。あるいはまた *земля* の単数造格は *землѣй* となりますが、これも例外になります。語末は軟子音ではありませんから、硬子音の前の位置と考えれば、*всѣ* は規則 2) に当てはまります。

もしそうとすれば、どうして *весь* の男中性単数造格は *всем* なのに単数前置格は *всѣм* となるのでしょうか。造格形は *вѣсѣмь* に、また前置格形は *вѣсѣмь* に遡る形です。もしもはアクセントをとっても *ё* とはならないとしても、それならば *всем* も元々 *мь* が軟らかいのですから、*ё* とならないはずです。

§143 このように考えれば、語尾の場合は語中の場合に比べて遥かに不規則の程度が大きいことが分ります。

また *ь* についていえば、軟子音語幹名詞の主格形 *ь* は歴史的に *я* に変化しました。たとえば *землѣ > земля* のような場合です。この変化も音韻的に見れば必然性が感じられない変化なのです。

しかしそのおかげで、女性名詞軟変化の語尾 *-я* は硬変化の *-а* に対応することになり、*-я* にならなかった *-ь* は硬変化の *-ь* に対応するようになりました。その結果軟変化名詞の語尾 *e < IE *e* は硬変化名詞の語尾 *o* だけに対応するようになりました。

<i>-ь</i>	→	<i>-я</i>
	↘	<i>-е</i>
<i>< IE *e/*-jo</i>	→	<i>-е</i>

以上の観察から何が言えるでしょうか。ロシア語は名詞類の変化において硬変化の *o* に対応する軟変化の *e* はアクセントを取ったときには *ë* になるという規則を本来の音韻レベルの規則を無視してでも作り上げてきたと結論できるのです。

ロシア語の *e* は、既に見ましたように IE **e* に遡るものもありますが、スラヴ語の歴史の中で、**jo > e* となったものがあります。特にこれは軟変化の場合に一般に見られました。その結果 **o/ *jo* という綺麗な対応が、音質の違いによる対立 *o/ e* に変化してしまいました。

これは音韻のレベルの法則に従ったものですが、ロシア人は無意識のうちに失われた綺麗な対応を取戻そうとしたのだと思います。

こうして次のような形にまとめることのできる法則を作り上げてきたのです。

硬変化の語尾が *o* をもつ格に対応する軟変化の語尾 *e* は、アクセントを取るとき *ë* となる。
硬変化の語尾が *e* をもつ格に対応する軟変化語尾の *e* にはこの規則は適用されない。

たとえば стол-óm/ словарь-ём, жен-ой/ земл-ёй, слóв-о/ ружь-ё, стол-óв/ кра-ёв, том/ всём etc. ですが、硬変化 *e* に対応する軟変化 *e* をもつものは、стол-é/ словарé, жен-é/ земл-é, тем/ всем となります。

よく知られているように、ロシア語の正書法規則は初級文法の始めに習う規則の一つです。この場合 ж, ч, ш, щ の外 ц の後に *ë* が来ると、この *ë* は *ó* になるという規則を付け加えると、表のような形になり、*ë* にはなりません。

修正正書法規則			
喉音	Г, К, Х	Ы, Я, Ю	→ И, А, У
上顎音	Ш, Ж, Ч, Щ	Ы, Я, Ю, Ё	→ И, А, У, Ё
上顎音	Ц	И, Я, Ю, Ё	→ Ы, А, У, Ё

格	硬変化	軟変化
主格	женá	землá
生格	жены́	земли́
与格	женé	землé
対格	жену́	зёмлю
造格	женóй	землёй
前置格	женé	землé

この修正によって事態はどう変わるのでしょうか。

たとえば марш/ мáрш-ем — карандаш/ карандаш-óм, япо́нец/ япо́нц-ем — о́тец/ отц-óм, со́лнце — лиц-ó, бо́льш-его/ больш-óго など、例外規定を設けなくて済むようになります。

以上のことから、言語というものは決して音韻法則にただ従って変化するに任せているのではなく、無意識のうちにある体系を作り上げるために、音韻法則をさまざまにねじ曲げたり、無視したりすることも敢えてしているのだということが分ります。

それは最初はあちらこちらに不規則という形で現れますが、やがて全体としてある方向に向って動き始めます。

言語学ではこの現象をしばしば「体系の強制」Systemzwang と呼んでいます。私たちも言語の歴史を学ぶときに、説明できないようなさまざまな現象をみて、それが本当は何を意味しているのかを読みとることが大切だと思うのです。

第十二話

名詞の語幹と変化

1. 印欧語の名詞変化語尾

§144 印欧語の名詞の変化語尾は、語派によって少し異なっていたり、細かく見れば色々な問題があつて必ずしも例外がないというわけではありませんが、全体としては割合ははっきりしています。

これらの語尾がさまざまな語幹と融合して、実際の変化語尾を作ると考えられます。たとえば語幹形成母音をもつ O 語幹名詞の場合には、単数主格は *-os *wĺkos > ВЛЫКЪ「狼」(*-os > -Ъ), 単数与格は *-o-ei > *-ōi, cf. Gr. philos φίλος「友人」, 与 philō(i) φίλωとなります。

しかしスラヴ語は -ōi の代りに *-ōu を用いていたらしく oy となります。

単数生格は印欧語の中で色々な語尾が使われていて、はっきりしませんが、スラヴ語の場合には奪格の語尾 *-o-ōd > *-ōd > -d が使われていたとされています。たとえば из, от などのような、「分離」(~から)の意味を持つ前置詞が生格を取ることも、このことと関係があると考えられています。奪格がもともと「~から」という意味を持っていたからです。

名詞変化語尾

格	単数	双数	複数
主	*-s	?	*-es
生	?	*-ou(s)	*-ōm
与	*-ei	*-ma	*-mos
対	*-m	?	*-ns
造	*-mi	*-ma	*-ōis
所	*-i	-ou(s)	*-i-su
呼	*-Ø	?	
奪	*-ōd		

2. U 語幹名詞と O 語幹名詞

§145 第十話で述べましたように、語根に語幹形成母音をつけて語幹を安定させたものが、広く使われるようになりましたが、ロシア語ではこれは男性名詞と中性名詞に受け継がれました。第一変化といわれている規則変化がこれです。

印欧語学ではこの類を O 語幹名詞と呼んでいます。一般に語尾は後でロシア語の変化でもみますように、色々複雑な発達をしますので、印欧祖語の語

尾をそのまま受け継いでいるとは言えないのですが、おおよその区別はつけることができます。

この外に接尾辞 *-eu- を持つものと、*-ei- を持つものが広く見られました。

これらは先に述べた母音交替によって、*-ou-, *-oi- あるいは *-u-, *-i- のような形を取ります。

まず接尾辞 *-eu- を持つものには、たとえば *sūnus 「息子」があります。これを U 語幹名詞といいますが、スラヴ語ではこれらの変化は O 語幹名詞と大きく異なっていました。

右上の表は O 語幹名詞です。*włk-os 「狼」(cf. Lit. vilkas, Skr. vṛkas, Got. wulfs, Alb. ulk) > ВЛЫКЪ となっているのは規則的です(*-os > -ъ)が、この l > ь, ь > ь, ь > ь はロシア語では ь, ь, ь となります。したがって, ВЪЛКЪ > ВОЛК となります¹。生格は印欧語の奪格と混同して奪格の語尾 *-ōd > -a を取りました(語末の子音は脱落します)。

このような O 語幹名詞に対して U 語幹名詞は右の表のように変化します。主格は *-u-s > -ъ となり、結果として O 語幹名詞と同じ形になりました。

これが直接には O 語幹名詞と U 語幹名詞の混同の引き金になったと考えられています。単数生格の語尾は印欧語では *-ous と考えられています。

O 語幹名詞 (狼)

格	単数	双数	複数
主	ВЛЫКЪ	ВЛЫК-А	ВЛЫЦ-И
生	ВЛЫК-А	ВЛЫК-ΟΥ	ВЛЫК-Ь
与	ВЛЫК-ΟΥ		ВЛЫКОМЬ
対	ВЛЫКЪ	ВЛЫК-А	ВЛЫК-Ы
造	ВЛЫК-ОМЬ	ВЛЫК-ОМ-А	ВЛЫК-Ы
所	ВЛЫЦ-Ѣ	ВЛЫК-ΟΥ	ВЛЫЦ-ѢХ
呼	ВЛЫУ-Е		ВЛЫК-ОМ-А

U 語幹名詞 (息子)

格	単数	双数	複数
主	СЫНЪ	СЫНЫ	СЫНОВЕ
生	СЫНΟΥ	СЫНОВОУ	СЫНОВЬ
与	СЫНОВИ	СЫНЪМА	СЫНЪМЬ
対	СЫНЪ	СЫНЫ	СЫНЫ
造	СЫНЪМЬ	СЫНЪМА	СЫНЪМН
前	СЫНΟΥ	СЫНОВОУ	СЫНЕХЪ
呼	СЫНΟΥ		

¹ ь, ъ は jery еры といわれますが、これはスラヴ諸語で様々に母音化しました。ロシア語では「弱い位置」では消失し、「強い位置」では ь > [e], ъ > [o] になりました。「弱い位置」というのは 1) 語末, 2) 「強い位置」の jery の前で、「強い位置」は 3) アクセントを持つとき, 4) 「弱い位置」の jery の前です。вълкъ のばあいは、後の ъ が「弱い位置」、前の ъ が「強い位置」になります。

印欧語の与格の語尾はメイエによれば *-ei で、スラヴ語では i になりますから [17, p.294], *sūn-ou-ei > сынови になったとすれば、規則的だといえます。

複数生格は *-om/ *-ōm または *-on/ *ōn だと考えられています。スラヴ語はおそらく *om(n) であったと考えられ、そうすると *sūn-ou-om(n) > сыновъ になります。O 語幹名詞の場合には *wlk-on(m) > влъкъ になります²。

3. U 語幹名詞と O 語幹名詞の混同

§146 以上のことから、現代ロシア語の第一変化 (O 語幹名詞) の単数生格および単数前置格の異形語尾 -y が U 語幹名詞の変化を借用したものであることが分ります。

複数生格は規則的な形として -ов の語尾を持っており、異形として -ъ > ∅ の形を持っています。

たとえば человек 「人」 の複数生格はやはり человек です。異形を持つ名詞は крестьян-ин のように接尾辞 -ин を持つ名詞の外、軍隊の構成員を表す場合、あるいは民族名を表す場合に、かなり広く分布しています。また中性名詞には全く広がっていません。

このうち接尾辞 -ин- を持っている名詞は数の所でもいいましたように、集合に名前が与えられるもので、従って集合を構成する個人については個性が相対的に低い (個体認識がしにくい) という特徴を持っています。

また中性名詞の場合も当然個性が低いと考えられます。

複数生格形の человек も「人」を指す場合には люди, людѣй を用いますから、この語は単なる「助数詞」に過ぎないと考えられます。個性が低い訳です。

§147 60 年文法は複数生格が「零語尾」を取る男性名詞について、次のような場合を挙げています [25, I, pp.151-152].

² 語末における音韻の取扱いは語中の場合と異なって、話し手の注意や発音が曖昧になったり、他の変化などの類推や影響などを受けやすかったのだと考えられ、取扱いがこれまで述べてきた対応表とは異なる場合がしばしばあります。たとえばスラヴ語の場合、*-om/*-on は *-os と同じように -ъ になるのが普通ですが、O 語幹名詞の中性の主格および対格は *-om(n) であるにも関わらず、-o になっています。

- 1) ある種の民族名: абазин「アバザ人」, балкар「バルカル人」, башкир「バシキールジン」, бурят「ブリヤート人」, туркмен「トルクメン人」, түрок「トルコ人」, цыган「ロマ人」. この文法がこの規則の例外として калмыков「カルムイク人」, киргизов「キルギス人」, монголов「モンゴル人」, таджиков「タジク人」を挙げているのは興味があります.

この記述が不正確であるのは、これに属する民族名が「ある種の」 некоторые ものに限られてはいなくて、極めて多いということです. その中にはたとえば грузин「グルジア人」, осетин「オセッソ人」のように, ин の接尾辞を持つものも多くあります.

- 2) 兵種をあらわすもの. гренадер「榴弾兵」, гусар「驃騎兵」, драгун「龍騎兵」, кадет, кирасир「胸甲騎兵」, партизан「パルチザン」, солдат「兵士」など.

ただし кадет が帝政期の「陸軍幼年学校生徒」を表す場合は -ов と零語尾の揺らぎがありますが,「立憲民主党員」の場合には -ов を取るとあります.

- 3) 数詞と共に用いられることが多いもの. аршин「アルシン」, вольт, грамм, килограмм, миллиграмм, гран「グレイン」, раз「～回」, человек「～人」など.

- 4) ペアで用いられるいくつかの名詞. валенок「防寒長靴」, глаз「目」, пого́н「肩章」, сапо́г「長靴」, чуло́к「長靴下」など.

§148 以上のことから U 語幹の複数生格形は、個別性の強い対象を表す名詞において、古い零語尾を追い出す傾向があったといえることができそうです. 少なくとも現在、男性 O 変化名詞の複数生格形ではこの U 語幹名詞起源の語尾が圧倒的に優勢になっています.

このことから、U 語幹名詞を起源とする語尾が、一般的に個性の強い名詞に付く傾向があったといえるのでしょうか. それが言えないことは単数生格および前置格について見れば分ります. ここでは今述べたことと逆の傾向が見られるからです.

60 年文法では、単数生格形 *-y* について次のように述べています [25, I, p.142].

1. *-y* (*-ю*) に終る生格形を取るのは、いくつかの抽象名詞であって、一定程度の行為、状態、性質を表現するか、あるいはそれが完全には実現しないか発現しないことを表すときである。たとえば、次のように言い、書かれる。 *много*, *мало блеску* 「輝き」, *браку* 「不合格品, オシヤカ」, *вёсу* 「重さ」, *взбóру* 「たわごと」, *визгу* 「金切り声」, *жáру* 「熱さ」, *кри́ку* 「叫び声」, *ло́ску* 「光沢」, *простóру* 「広さ」, *разговóру* 「おしゃべり」, *свёту* 「光」, *спóру* 「言い争い」; *нагнáть стра́ху* 「恐怖を起させる」; *наде́лать шóму* 「大騒ぎをする」。
2. 抽象名詞、および個々の具体名詞が語尾 *-y* (*-ю*) を持つ生格を取ることができる。
 - a) ある場所からの分離、あるいは何かの原因を表すとき、前置詞 *из*, *от*, *с* の後に用いられる。たとえば, *упустить из виду* 「見失う」, *уйти́ из дому* 「家から去る」, *возвратиться́ из лесу* 「森から帰る」, *задохну́ться из ды́му* 「煙で息が詰まる」, *пры́снуть со́ смеху* 「吹き出す」 etc.
 - b) 何かの欠如を表す *без* の後に、たとえば, *рабо́тать без о́тдыху* 「休みも取らずに働く」; *брать без разбо́ру* 「手当たり次第に取る」, *без спрóсу* 「無断で」, *без счёту* 「無数に」; *торгова́ть без ри́ску* 「危険を冒さず取引する」, *без убы́тку* 「損害なしに」; *дви́гаться бес шóму* 「音を立てずに動く」。

§149 この説明は結局そういう風に言うというだけで、なぜそう言うのかという説明ではありません。しかし、少なくともこれらの名詞が個性を持つ対象を表すということはありません。

ただ、本来 U 語幹名詞に属していたものが、この語尾を好んで用いる傾向はあります。先ほど挙げた *сын* もそうですが、その外にこれに属するのには *домъ* 「家」, *волъ* 「牛」, *врьху* (верх) 「上部」, *грознь* 「ブドウの房」, *грѣхъ* 「罪」, *даръ* 「贈り物」, *длѣгъ* 「負債」, *ледь* 「氷」, *медь* 「蜜」, *полъ* 「半分」, *плодь* 「果実」, *родъ* 「縁者」, *радъ* 「列」, *садъ* 「庭」, *санъ* 「位」, *станъ* 「陣営」, *оудъ* 「肢体」, *чинъ* 「官位, 位階」, *ядъ* 「毒」 などがあります。

私の考えでは、この現象は語尾の「形の強さ」に依るものではないかと考えています。

すなわち、O 語幹名詞の複数生格が零語尾で、U 語幹名詞の語尾が -ob であったとすれば、音韻的に -ob の方が強いのは当然です。これが個性の強弱と結びついたに過ぎないと考えられます。

単数生格の場合には O 語幹名詞の語尾は -a で、U 語幹名詞の語尾は -y でした。この場合 a の方が y[u] よりも開口度が大きく、従って響きが強く、強い語尾と考えられますから、y は性格の弱いものを表す傾向を持つようになり、部分生格に近い機能を持つようになったと考えられます。

チェコ語は活動体と不活動体の区別を持っていますが、ロシア語ほどには徹底したものではなく、活動体の中でも人とそれ以外のものを区別しようとする傾向があると思われます。

この言語では U 語幹名詞の複数主格形 -ové および単数与格 -ovi を人に用います。これらの語尾は相対的に強い形式を持っていると考えられますから、これなどもロシア語と同じ傾向を示していると考えられます。

後で述べる I 語幹名詞や、今述べた U 語幹名詞を形造る、*-ei あるいは *-eu といったような接尾辞は、本来の意味が分らなかったもので、伝統的な比較文法では、遠い昔の接尾辞で、意味が磨耗してしまったために分らなくなってしまうのだと考えられてきました。

最近内容的類型学の発展の中で、印欧語がかつては活格言語であったという仮説が有力視されるようになり、また一般的に活格言語の前の言語類型についての議論の中で、活格言語が多分類言語から発展してきたのだという考えが出てきました。

こういう流れの中で、これら従来意味が分らなかった接尾辞は、実は多分類言語時代の分類子 classifier ではないかという考えが生れてきました。そして U 語幹は実は対をなすものの名前の分類子ではなかったかという説が提唱されるようになりました。

確かにラテン語の cornu 「角」とか ギリシア語の gonu (γόvu) 「膝」、ロシア語の полу- 「半分」のように対をなすものがしばしば見られることから、そうであるかもしれませんが、未だはっきり証明されたわけではありません。

4. ES 語幹名詞

§150 接尾辞 *es を取る中性名詞は、後で述べる子音語幹名詞の変化をし

ていましたが、O 語幹名詞と混同しました。

これに属するものには слово「言葉」、тѣло「身体」、небо「空」、чѹдо「奇跡」などがあります。

単数主格は *-os-ø >

ES 語幹名詞 (言葉)

*-os > -o (語末の子音の脱落) によって、O 語幹名詞中性形と形が同じになりました。これが融合の引き金になったと思われます。

格	単数	双数	複数
主	сЛОВ-о	сЛОВ-ес-ѣ	сЛОВ-ес-а
生	сЛОВ-ес-е	сЛОВ-ес-оу	сЛОВ-ес-ѣ
与	сЛОВ-ес-и	сЛОВ-ес-ѣмѧ	сЛОВ-ес-ѣмѣ
対	сЛОВ-о	сЛОВ-ес-ѣ	сЛОВ-ес-а
造	сЛОВ-ес-ѣмѣ	сЛОВ-ес-ѣмѧ	сЛОВ-ес-ѣ
所	сЛОВ-ес-е	сЛОВ-ес-оу	сЛОВ-ес-ѣхѣ

これらの es 語幹名詞は現在でも語構成の要素としては生き続けています。たとえば, словес-ный「言葉の」、тѣлес-ный「身体の」、дрѣвес-ный「木の」、небес-ный「空の」などです。

5. I 語幹名詞

§151 I 語幹名詞は接尾辞 *-ei- によって構成されます。これには男性名詞と女性名詞がありましたが、男性名詞は数が限られていました。

たとえば гость「客」< *gost-

I 語幹男性名詞 (道)

is. cf. Germ. Gast, Lat. hostis「よそ者, 異邦人, 敵」; огонь「火」< *agnis. cf. Skr. agnís, Hit. agniš, Lat. ignis < *egnis (Lit. ugnis は諸説あり); путь「道」< пѣть < *pontis. cf. Lat. pons pontis「橋」, OPers. paθ < *pnt-「道」; господь「主人」< hosti-potis? Lat. hospes, hospitis (*potis は「力のある」). *hostipotis は従って「客をもてなすことのできる」; голубь「鳩」< *ghlb-is?, Lit. gulbė「白鳥」(*gel- は「黄色い」. cf. yellow жел-тый); зять「婿」< зѣть < *gnētis? cf. Latv. znuōts「婿」, Gr. gnōtos γνωτός「親戚」, Skr. jñātīh「親戚」; тать「泥棒」< *tātis,

格	単数	双数	複数
主	пѣт-ѣ	пѣт-и	пѣт-иѧ
生	пѣт-и	пѣт-ию	пѣт-иѣ
与	пѣт-и	пѣт-ѣмѧ	пѣт-ѣмѣ
対	пѣт-ѣ	пѣт-и	пѣт-и
造	пѣт-ѣмѣ	пѣт-ѣмѧ	пѣт-ѣмѣ
所	пѣт-и	пѣт-ию	пѣт-ѣхѣ
呼	пѣт-и		

OIr. *tāid* < **tātis*; зѡбрь 「野獸」 < **gh(w)ēris*; Gr *thēr* θηρ (cf. Lat. *ferus* 「凶暴な, 野蛮な」, *ferōx* > E. *ferocity*).

§152 I 語幹の女性名詞は表に見られるように, 現代ロシア語とほとんど変ってはいません. 男性名詞は単数主格が O 変化名詞の軟変化と同じ語尾を持っているために, そちらに逃亡しました. 逃げ遅れたのは *путь* だけで, 単数造格が今でも *-ѣм* という形を持っています. これは *-ѣмь* に遡る形です.

こういうようにしてロシア語では性によって変化を別々にしようという傾向が, 非常に強く現れました. これを「性の原理」*rodový princip* (Karel Horálek) と言っています.

私はロシア語に特にこの原理が強く現れたのは, 内容的類型学という活格言語的なものへの先祖帰り現象の一つではないかと疑っています.

I 語幹の男性名詞が O 語幹の軟変化に移行したことによって, おそらく

軟変化の複数生格に, I 語幹名詞の語尾 *-ии*, *ий*, *ей* が入り込んだのだと思われます.

この I 変化は, やがて語幹が子音で終るアテマティック名詞に広がりました.

I 語幹女性名詞「骨」

格	単数	双数	複数
主	КОСТ-ѣ	КОСТ-и	КОСТ-и
生	КОСТ-и	КОСТ-иЮ	КОСТ-иИ/ѣИ
与	КОСТ-и	КОСТ-ѣмѣ	КОСТ-ѣмѣ
対	КОСТ-ѣ	КОСТ-и	КОСТ-и
造	КОСТ-иИѣ/ѣИѣ	КОСТ-ѣмѣ	КОСТ-ѣмИ
所	КОСТ-и	КОСТ-иЮ	КОСТ-ѣхѣ

6. 子音語幹名詞

§153 二つあるいは三つの語尾が書いてあるのは揺れが見られるものですが, 最初のものが本来の子音語幹の変化語尾です.

既に古教会スラヴ語の段階で, 既に I 語幹名詞の変化の影響が見られることが分ります.

古くにはあとで述べるように, 語末に *-men-* という接尾辞を持つ中性名詞の外, *-en-* をもつ男性名詞, たとえば *камы камене* > *камень* 「石」, *корень* 「根」, *олень* 「鹿」, *ремень* 「革紐」などもこの変化に属していました.

双数の場合に I 語幹の
変化語尾の影響が見られ
ませんが、このことから
既にこの時代に双数形は
口語では使われなくなっ
て来つつあったことが窺
われます。

子音語幹名詞（日）

格	単数	双数	複数
主	ДѢН-ѣ	ДѢН-Н	ДѢН-Ѹ/ѢΔ/НА
生	ДѢН-Ѹ/Н	ДѢН-Ѹ/НЮ	ДѢН-Ѣ/НН/ѸН
与	ДѢН-Н	ДѢН-ѢМΔ	ДѢН-ѢМѢ
対	ДѢН-ѣ	ДѢН-Н	ДѢН-Н
造	ДѢН-ѢМѢ	ДѢН-ѢМΔ	ДѢН-ѢМН
所	ДѢН-Ѹ/Н	ДѢН-Ѹ/НЮ	ДѢН-ѢХѢ

7. 接尾辞 *men を持つ

中性名詞

§154 表から明らかなように、これは ДѢНѢ と同じ子音語幹の変化をしています。接尾辞 *-men- を持つ中性名詞は主・対格で語尾を持ちませんから、*-men > -МА > -мя となりますが、語尾を取るときには -men- が現れます。

これに属するのは врѣмя「時間」< vrě-men < *wert-men, *wert- は「回る」という語根。cf. E. version, ani-versary, ani- は「年」；брѣмя「荷」*bher- は Lat. fer-o, Skr. bharāmi, Gr. pherō φέρω「運ぶ」。cf. E. bear, R. брать, берý < *bh°r-ā-, *bher-ōm; сѣмя「種子」< *sē-men, G. Samen *sē- は「播く」。cf. E. seed, сѣять; пла́мя「炎」< *pol-men. cf. Lit. pelenaĩ「かまど, 炉」, паліть < *rōl-i-, пе-пел; плѣмя「種族」< *pled-men, *pled- は「生む」？「満たす」？cf. Lat. ple-ō「満たす」, plē-bus「群衆, 平民」плод「果实」< *plod-; зна́мя「旗印」< *gnō-men, *gnō- は「知る」という語根。cf. Gr. gnōma γνώμα「印, 兆候, 意見」< *gnō-mṛ, E. know, Lat. (g)nō-scō, Gr. gi-gnō-skō γι-γνώ-σχω「知る」；тѣмя「こめかみ」< *tem-men? cf. тѣнѣ, тѣтѣ < *t°n-ōm, *tṛtēi *ten- は「切る」？；вѣмя「(動物の)乳房」< *udh-men, Skr. údhar/n「乳房」, Lat. uber「胸, 乳房」, Gr. outhar οὐταρ「(動物の)乳房」。cf. Lat. sūmen「豚の乳房」< *sū-udhmen (*sū は「豚」)。

この外に語源がよく分らない стрѣмя「鐙」があります。これはもが用いられていないので metathesis の結果ではないと考えられますから、*stre-men

という形が考えられます。

この構成を持つ名詞はロシア語には 10 語しかありませんが、いま述べたように、全体としては他の印欧語に対応を持ち、古い起源をもつ語構成だといえることができます。

接尾辞 *men を持つ中性名詞（重荷）

格	単数	双数	複数
主	БРѢМ-А	БРѢМЕН-Ѣ	БРѢМЕН-А
生	БРѢМЕН-Е	БРѢМЕН-ОУ	БРѢМЕН-Ъ
与	БРѢМЕН-И	БРѢМЕН-ЬМА	БРѢМЕН-ЬМЪ
対	БРѢМЕН-А	БРѢМЕН-Ѣ	БРѢМЕН-А
造	БРѢМЕН-ЬМЪ	БРѢМЕН-ЬМА	БРѢМЕН-Ы
所	БРѢМЕН-Е	БРѢМЕН-ОУ	БРѢМЕН-ЬХЪ

一方、*-men- をもつ男性名詞は単数主格で *-mōn の形を持ち、これは語尾の扱いに従って **мы** となりました。たとえば *ka-mon-s > *kā-mōn > **КАМЫ**。

単数対格の形は *kā-men-im > **КАМЕНЬ** となります。本来ならばこれは単数対格の形が *kā-men-ŋ となるはずですが。

印欧語には *ka- の語根 (OHG hamar, OIrl. hamarr 「槌, ハンマー」) には異形があり、*ak- の形を持っていました (cf. Lit. akmuō, -eñs, Skr. áśma, OPers. asman-, Gr. akmōn, -monos ἄκμων 「隕石, 金床」)。

ギリシア語のこの akmōn の単数対格は *akmen-ŋ > akmena です。

しかしスラヴ語では *kamen-ŋ は **КАМЕНЬ** か **КАМЕНА** のどちらかになるはずですが。そうではなくて -ь になっているとすれば、ここでも I 語幹変化の語尾 *-im を考えなければなりません。

この形はとにかく -men- という要素を語幹に持っていて、主格の **КАМЫ** ではこの要素は隠れてしまいますから、やがて単数対格の形が、単数主格にも借りられて、**КАМЕНЬ** のような形になりました。

8. A 語幹名詞

§155 以上の外、女性名詞を作る接尾辞 *-ŭ- で構成される Ū 語幹名詞 (たとえば **ЦЪРКЫ**, 単対 **ЦЪРКЪВЪ** 「教会」, **БЪКЫ**, 単対 **БЪКЪВЪ** 「文字」) など、接尾辞 *-ent **ТЕЛА**, 単生 **ТЕЛАТИ** 「子牛」のような変化もありますが、これらにも I 語幹名詞の変化が強く影響しています。

一番後回しになりましたが、スラヴ語では女性名詞に多く使われる A 語幹

名詞は、表のように変化します。

A 語幹名詞「女、妻」

格	単数	双数	複数
主	ЖЕН-А < *-ā	ЖЕН-Ѣ < ai < *-a-ī	ЖЕН-Ы < *-ā-s
生	ЖЕН-Ы < *-ās < *-ā-e/os	ЖЕН-ОУ < *-ou(s) ²	ЖЕН-Ѣ < *-ōm < *-ā-ōm?
与	ЖЕН-Ѣ < *-āi < *-ā-ei	ЖЕН-АМА < -ama	ЖЕН-АМѢ < *-ā-mos
対	ЖЕН-Ѧ < *-ām	ЖЕН-Ѣ	ЖЕН-Ы < *-ā-ns
造	ЖЕН-ОМ ¹	ЖЕН-АМА	ЖЕН-АМН < *-ā-mīs
所	ЖЕН-Ѣ < *-āi	ЖЕН-ОУ	ЖЕН-АУѢ < *-ā-su
呼	ЖЕН-О < *-ə	ЖЕН-ОУ	

1) -ом は代名詞の変化から借用されたと考えられています。

2) О 語幹変化からの借用。

§156 以上のことから、名詞の変化も決して単なる音韻変化の結果として自然に変化したのではなくて、いくつかの変化を統合して簡単にしていこうという傾向が無意識のうちに働いていたと考えられます。先に述べた I 変化の影響もそうですが、A 変化の場合は他の変化の複数の与格、造格、前置格に入り込みました。

このため、複数の変化が規則的なものになり、単純化したといえます。

第十三話

形容詞の問題 I

1. 印欧語の形容詞

§157 印欧語の形容詞は、名詞と同じ変化をしていました。そのため形容詞と名詞は区別されず、「名前」を意味する Gr. *onoma*, ὄνομα, Lat. *nōmen* と呼ばれていました。

形容詞変化

格	単 数			複 数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	bon-us	bon-a	bon-um	bon-ī	bon-ae	bon-a
呼	bon-e	bon-a	bon-um	bon-ī	bon-ae	bon-ae
対	bon-um	bon-am	bon-um	bon-ōs	bon-ās	bon-a
属	bon-ī	bon-ae	bon-ī	bon-ōrum	bon-ārum	bon-ōrum
与	bon-ō	bon-ae	bon-ō	bon-īs	bon-īs	bon-īs
奪	bon-ō	bonā	bon-ō	bon-īs	bon-īs	bon-īs

紀元前2世紀のアレクサンドリアの文法家トラキアのディオニュシオス Dionysios Thrāx (BC 170-90) になって、to *onoma epitheton* τὸ ὄνομα ἐπιθετον というように、形容詞をつけて「名詞」と区別するようになりました。この *epitheton* というのは「付加的な」という意味で、ラテン語には同じ意味の *adiectivum* という言葉で訳されました。nomen *adiectivum* です。

ヨーロッパの伝統を引継いでいるロシア文法も、この方式を踏襲していて、形容詞は имя прилагательное としています。

これに対して「名詞」は「実質的な」名前という意味で、nomen *substantivum* とされました。имя существительное というのがこれに当たります。

ただ形容詞は性や数の異なる名詞につかなくてはなりませんでしたが、名詞とは異なって同じ語が男性、女性、中性の変化をしました。これを *motio* といいます。

§158 ロシア語の場合にも形容詞は元々は名詞と同じように変化していま

した。この形容詞を時に「名詞形」имённая форма というのは、そのためです。これがやがて主に述語として用いられるようになると、主格以外の格は必要がなくなって使われなくなりました。修飾語としての役割を引受けたのはこの名詞形に *ji > и という「承前代名詞」anaphorique がついた形でした。これを「代名詞形」местоимённая форма というのはこのためでした。

たとえば *dhabros > добръ「善い」という形容詞は、これに承前形容詞の и がついて、ДОБРЪ-Н > ДОБРЫН > добрый のようになり、また男性単数生格は ДОБРА-ЕГО > ДОБРАДАГО > добраго > доброго となりました。

リトアニア語の変化 (男性)

gēras 良い				
数	格	名詞形	承前代名詞	代名詞形
単 数	主 属 与 対 具 所	gēras	jìs	geràsis
		gēro	jō	gērojo
		gerám	jám	gerámjam, gerájam
		gērą	jĩ	gērąjĩ
		gerù	juō	gerúoju
		geramè	jomè	geramjame, gerāyame
双 数	主 対 属 与/ 具 所	gerù	juōdu	gerúodudu
		geríem	jūdviejū	gerūjūjū
		geriēm	jíemdvíem/jiēmdvíem	geríemdvíem/geriēmdvíem
			juosèdviesè	
複 数	主 属 与 対 具 所	gerì	jiē	geríejì
		gerŭ	jŭ	gerŭjŭjŭ
		geríems	jíems	geríemsiems, geríesiems
		gerùs	juōs	gerúosius
		geraĩs	jaĩs	geraĩsiaĩs
		geruosè	juosè	geriōsiuose

このように二つの語が融合する過程は、形容詞のすべての形については必ずしも余りはっきりしてはいないのですが、スラヴ語派に最も近いバルト語派に非常に透明な形で見られることから、ほぼ確実だと考えられてきていま

す [39, pp.49-51].

現在短語尾形といわれているものは「名詞形」で、長語尾形と言われているものが、「代名詞形」に当たります。

2. 長語尾形と短語尾形

§159 古教会スラヴ語の段階だけでなく、古ロシア語の文献にも、まだ短語尾形は変化して名詞を修飾することができました。従ってこの段階には長語尾形と短語尾形が共に名詞を修飾したり、述語になったりすることができたのです。そこで問題が生れます。

1) 長語尾形と短語尾形とはその機能がどう違っていたのか、また 2) どうして短語尾形が述語としてだけ使われるようになったのか、という問題です。

これについては色々な説がありました。たとえば長語尾形は承前代名詞がついた形だから英語で言えば定冠詞 the がついたのと同じ機能を持っている、というようなものがあります。確かにエピテットといわれる、いわば日本語の枕詞のようなものに長語尾形が使われる傾向はあります。たとえば красное солнце 「赤い太陽」というような場合です。

これについては歴史的な検討が必要ですが、手始めに現代ロシア語においてどのような形容詞が短語尾形を持っているかを見てみましょう。

80 年文法ではこれについて次のように述べています。

短語尾形はすべての形容詞が持っているわけではない。その形成における制限は、形容詞の語彙的意味とも、またその形態的構造とも関係している [26, I, p.556].

ここでいう語彙的意味の制限というのは、第一に形容詞の種類を指していると思われます。初級文法では一般的に性質形容詞は短語尾形を持つが、関係形容詞はこれを持たない、といった形で述べられています。

しかしロシア語の形容詞の種類はそれだけではありません。この他にいわゆる「物主形容詞」притяжательное прилагательное といわれるものがあります。「物主」というのは日本におけるロシア文法の伝統的な用語として長く使われてきました。この同じ用語は мой, твой のような代名詞に対して、「物主代名詞」притяжательное местоимение という名で用いられてい

ます¹。

これらの語に対しては、他の言語の記述では一般的に「所有代名詞」という用語が使われていますから、形容詞の場合にも「所有形容詞」とするのが適当ではないかと考えています。

この所有形容詞の語尾については、長語尾・短語尾の区別について普通何もう述べられていませんが、その理由はこの種の形容詞が、主格を含むいくつかの格で短語尾形しか持たず、その他の格形では長語尾形しか持たないというように、同じ変化の中で異なった語形の分布をしているためであろうと思われる。

これがどうしてそうなったのかというのも、長語尾形と短語尾形の機能的意味の問題と関連して興味のあるところです。

3. 性質形容詞と関係形容詞 — 形容詞の種類と定義

§160 ここで形容詞のそれぞれの種類の定義を見ておきましょう。

まず性質形容詞 *качественные прилагательные* について、80年文法は次のように述べています。

性質形容詞は対象そのものに内在するか、あるいはその中に発見される、しばしば様々な強度によって特徴づけられる性質を表す。これに属するのは、色彩的、空間的、時間的など、直接感覚器官によって感知される性質、あるいはその他性格の質および知的な精神構造の評価に関わる特徴を表すものである [26, I, p.541]。

また関係形容詞 *относительные прилагательные* については、次のように述べています。

関係形容詞はある特徴を、対象あるいは他の特徴との関係を通じて示す。契機付けの基盤によって示されるのは(一定の)対象あるいは特徴であって、所与の性質がそれとの関係を通じて表象されるものである。……表される関係はさまざまである。これには材料による特徴 (*деревянный* 「木の」、*металлический* 「金属の」)、所属による特徴 (所有形容詞 *отцов* 「父の」、*рыбий* 「魚の」、*сестрин*

¹80年文法ではこの種の代名詞を「代名詞的形容詞」*местоименное прилагательное* としています [26, I, p.540] が、この用語は正しくないと思われます。後で述べと思いますが、代名詞と形容詞は変化形式が異なっており、*мой*, *твой*, *наш*, *ваш* などは明らかに代名詞変化をしているからです。

「姉妹の」, мўжнин「夫の」, мой「私の」), 目的による特徴 (дётская кнїга「子どもの本」, школьные посóбия「学校の参考書」), 特色 (осённые дожди「秋の雨」, вёчёрняя прохлáда「夕方の冷氣」) の表示があり得る [26, I, p.541].

ここでは所有形容詞も含めて広義の関係形容詞の定義がされています。その中の本来的な関係形容詞については、原則として短語尾形は存在しないという立場をとっているようです。このことが次の引用の前提となっていると思われるからです。

性質形容詞と関係形容詞の意味的な境界は相対的で変動しやすい。関係形容詞が性質の意義を発達させることもあり得る。そのばあい形容詞の対象との関係は、この関係の質的な特徴と共存している。たとえば *желе́зный* という語は関係形容詞としては「鉄を含んだ」あるいは「鉄でできた」(*желе́зная руда*「鉄鉱」, *желе́зный гвоздь*「鉄釘」) を持っている。この同じ形容詞は、一連の転義した、性質の意義をも持っている。「強い、堅固な」(*желе́зное здоро́вье*「強固な健康」), 「硬い、確固とした」(*желе́зная во́ля*「鉄のような意志」, *желе́зная дисципли́на*「鉄のような規律」) [26, I, pp.546-547].

および,

-янный, -яный, -инный, -овый に終る関係形容詞 (*оловя́нный*「鉛の」, *серебра́нный*「銀の」, *змеи́нный*「蛇の」, *прóбковый*「コルクの」) には短語尾形は特徴的なものではないが、可能ではある。この種の大部分の形容詞は短語尾形は形成しない。しかし個々の場合には文芸作品でその使用が認められる。Вóздух све́ж, *сте́клянен*「大気は新鮮でガラスのよう」(В. Шишиков); *Кры́лки их протя́жны и серебра́ны*, *Кры́лья их медли́тельно ги́бки*「それらの叫び声は長く後を引き銀のようで、それらの翼はゆっくりと撓む」(Солоух.) [26, I, p.558].

ここで挙げられている、「文芸作品ではあり得る」短語尾形の例が「材料を表す」関係形容詞であることに注意しましょう。

§161 80年文法は、形容詞がどのような語尾を持っているかという形態上の条件を第一にして分類し、その中で形容詞の意義について述べるという形を取っていますが、形態上の条件にさほどの意味があるとは思われません。

語尾が -ой の形を持つ形容詞についての分類の中で、80年文法は次のよう

に述べています。

長語尾形が一音節以上の語幹を持つ形容詞のうちで短語尾形を持つのは *дорогой* 「高価な, 大切な」, *молодой* 「若い」, *развитой* 「発達した」, *удалой* 「剛胆な」である。形容詞 *голубой* 「空色の」, *золотой* 「金色の」の場合は、稀に短語尾形が用いられる。 *плод осенний золот.* 「秋の果実は黄金色である」 (*Брюс.*); *Вода Алазани была не так светла и голуба́, как вода молодой сестры её Ара́гви* 「アラザニの水はその妹のアラグヴィの水のように澄んで青くはない」 (*Солоух.*) [26, I, p.559].

ここにおいても *золотой* が *золото* 「金」から派生し、材質を表す関係形容詞であることは、上に述べたことと一致しています。 *голубой* も元々は *голубь* 「鳩」から派生した関係形容詞と考えられますが、これについては次に述べます。ここではこれらは色彩を示しています。

§162 80年文法は、動物の毛並みの色を表すものは短語尾形を持たないとし、例として次のような形容詞を挙げています [26, I, p.557].

була́ный 「河原色の? 明るい栗毛で尾とたてがみが黒い (馬)」 *вороно́й* 「黒毛の, あおの (馬)」, *гнедо́й* 「赤茶色の (馬)」, *кау́рый* 「薄栗毛色の (馬)」, *пегий* 「斑の」, *савра́сый* 「鹿毛の (馬)」, *чуба́рый* 「まだらの (馬)」.

これらの形容詞は語源が、多くはチュルク系の言語からの借用語か、語源が不明なものです。

印欧語に遡ると考えられているものは、たとえば *вороно́й* < *вóрон* 「烏」, *пѣгий* < **poig-* (> *Skr. pi-ñ-jalas* 「人參色の, 明るい金色の」, *Lat. pi-n-go* 「描く」, *Gr. pingalos* πίγγαλος 「トカゲ」) で、借用語は、*була́ный* < 北チュルク *bulan* 「馬の明るい毛の色」, *кау́рый* < 北チュルク *kovur* 「(馬が) 褐色の」, *чуба́рый* < タタール語 *čubar* 「斑の」.

これらは従って多く外来語を派生原基としていて、特殊な関係形容詞と考えられます。

60年文法はこれらについて、「動物の毛色を表すもので、派生語か語源の明らかでない形容詞」は短語尾形を持たないとしています [25, I, p.285].

更に80年文法が長語尾形しか持たないものとして色を表すいくつかの形容詞があると述べて、*оранжево́й* 「オレンジ色の」 < *orange*, *па́левый* 「ク

リーム色の」 < Fr. paille [pa:j] 「藁」 (Преображѣнский は Fr. pâle [pa:l] 「蒼ざめた」 cf. E. pale と考えているようです), фисташковый 「ピスタチオの, 淡黄緑色の」 (< фисташка 「ピスタチオ」) を挙げています [26, I, p.557].

これらは -ов- の構成を持っていて, 外来語の派生原基を持つ, 関係形容詞と考えられます.

§163 以上のことから, 関係形容詞は原則として短語尾形を持たないと考えても良いと思われます.

60 年文法は「現代ロシア文章語において性質形容詞の意義をもっている多くの形容詞は, もともと関係形容詞であり, このことはこれらの名詞との語構成的な関係が示している. これらの形容詞は語構成がこれと同じ関係形容詞と同じように, 短語尾形を持たない」としています [25, I, pp.284-285].

しかし言葉の使用に対して「絶対ない」ということはできません.

80 年文法では関係形容詞が時に短語尾形を状況に応じて使う場合があることを述べて, たとえば Как хорошо показáлось нѣбо, как голубó, спокойно и глубоко! 「空は何と素晴しく, どんなに蒼く, 安らかに, 深く見えたことだろう」 (Л. Толст.); Переры́тая земл́я о́городов была́ лило́ва. 「菜園の掘返した地面は藤色だった」 (Фед.); Ска́терть, несмотря́ на пу́шки и на все это томлѣние, трево́гу и чепуху́, была́ и крах-мáльна. 「テーブルクロスは, ごまかしやこの悩みのすべて, 不安, くだらないことにもかかわらず, 糊が利いていた」 (Булг.); Тотча́с же физионо́мии этой ассамбле́и ста́ли ва́жны, ку́кольны́ и надме́нны. 「すぐさまこの集団 (の人々) の顔つきが重々しく, 人形のように, 傲然としたものになった」 (Леон.); Одну́ ва́шу вещь я отпра́вил вам о́братно... Она́ не годи́тся, потому́ что она́ совсем не фортепиáнна. 「あるあなたの作品を私はあなたに送り返しました.....それは適当ではありません. なぜならそれは全くピアノ風でないからです」 (С. Рахманинов); Там же «днѣвниковы́» и доверíteльны́ стихи́, говоря́щие о твóрчестве, о до́лге художника. 「そこでは芸術家の作品, 義務について語っている詩は日記的で親密なものでもあります」 (газ.) などの例を挙げています [26, I, p.558].

しかしこれらの例をよく見てみれば, голубó 「青色の」, лило́ва 「藤色

の」はどれも色彩に関する関係形容詞ですし、меден「銅の」は材質に関するものです。

крахма́льный「糊の利いた」は被動形動詞過去 крахмале́нный から派生した形容詞でまた別のカテゴリーに属しますが、その他の関係形容詞はどれも一時的な使用であるということが出来ます。

したがってこれらの例は大まかに言って、これまで述べてきた規則を大きく逸脱したものではないということが出来ます。

§164 稀に短語尾形が用いられるものとして上に挙げた、材質を表すものについては、中世ロシア語でも、短語尾形が多く用いられていました。

たとえば『ノヴゴロド第一年代記』では、

- 1) ...и церквии сърубиша 2 **деревяньѣ** на Търговищи... [14v.]
「.....トルゴヴィシチェに二つの木造の教会も建てられた」
- 2) ...и ядыху люди листь **липовъ**, кору **березову**... [12r.]
「.....そして人々は菩提樹の葉、白樺の樹皮を食べていた」
- 3) ...и то все **сребрьно**... [39r.]
「そしてこれは全部銀製であった.....」
- 4) ...свати церковь Новегородѣ Илья. ... а другую сватого Спаса на воротѣхъ сватого Георгия, **камяну**. [39v.]
「ノヴゴロドでイリヤが教会を.....そして聖ゲオルギー修道院の扉の上にあるもう一つの石造の聖救世主教会を清めた。」

これらの明らかに関係形容詞であるものがどうして短語尾形を取っていたのかは、後で考えることにします。

以上は形容詞の種類という、内容に関わった条件です。

4. 性質形容詞

§165 性質形容詞の場合には、原則として長語尾形と短語尾形の両方を持つと言えます。

しかし短語尾形は原則として現代ロシア語では述語の位置に限られていますので、この二つの形が競合するのも、述語の位置に限られることになります。

短語尾形が修飾語として用いられるのは、成句的表現あるいは特に詩の中で民衆語的なニュアンスを持つ場合であると言われています。

成句的表現として用いられるものとしては、80年文法ではたとえば *среди бела дня* 「白昼堂々と」、*ездить etc. по белу свету* 「この世の中を」、*Не по-хорошу мил, а по-милу хорош.* 「外見がいいから魅力的なのではなく、魅力があるから好い男なのだ」、*мал малá меньше* 「いずれ劣らず小さい」 *etc.* が挙げられています [26, I, p.557].

民衆的なニュアンスを持つものとしては、たとえば、
Ой, **синь тумáн**, ты — мой!

Ал **сарафáн** — пожáр, что девíчий загáр! (Блок)
「おお、青い靄よ、おまえは私のものだ。 / 深紅のサラフアンは — 火炎だ、乙女の日焼けだ」

以上の外、不定法文において主語が与格で示され、動詞が *быть* であって、この動詞が形容詞短語尾形の補語をとるときに、形容詞短語尾形が与格に立つことがあります。

これは現代ロシア語の統語論においてただ一つだけ、短語尾形の格変化が許されている場合ですが、この用法はもう既に古形と見なされています。ブラホフスキーはこれについて次のように述べています。

独立して非人称述語 *должно, нельзя, довольно* などと結合し、あるいは何らかの意味で名詞と結合する不定詞 *быть* につく形容詞 (および被動形動詞) 短語尾形は、19世紀のほとんど半ばまで、古い統語法に従って与格で用いられた。

.....

Какая́ польза *быть родством вели́ку, а делáми малу и ничто́жноу?*
(С. Глинка, Русская История, VI, изд., 3, 1818).....

「生れは高貴だが功績はわずかでつまらない者にどんな利点があるのか」

... По её мнёнию, молоды́м лю́дям *нельзя́ не быть влюблённым.*
(Жихар. Дневн., 1831)... [28, pp.329-330]

「彼女の考えによれば若い人々は恋をしないではいられないのだ。」

形容詞短語尾形の斜格は、文学作品において時に見られます。これは民衆語的なニュアンスを出すときに見られるといわれます。たとえば、

Как пошл́и на́ши ребя́та

В красной гвардии служить —

В красной гвардии служить

Буйну голову сложить.

(Блок)[26, I, p.557]

「私たちの若者たちが

赤衛軍に勤務するために、

赤衛軍に勤務するために、

猛る頭を横たえる (= 命を投出す) ために赴くとき」

5. 性質形容詞の長語尾形と短語尾形

§166 長語尾形と短語尾形の機能については、80 年文法では次のように述べています。

短語尾形は長語尾形と意義が異なっている。それは性質の状態という特徴、すなわち一定の時間に関係づけることのできるものを表す。従って恒常的ではない特徴を問題とするときには、述語に短語尾形の使用が選ばれる。Мальчик здоров. 「少年は健康だ」(今, 現在), Ребёнок весел. 「子どもは楽しがっている」(今), Девочка больна. 「娘は病気だ」

.....

その発現が時間における変化の可能性あるいは非恒常性と結びついていない特徴を表す形容詞は、通常短語尾形を持っていない [26, I, p.557].

60 年文法は長語尾形と短語尾形との使用を三つに分けています。すなわち

- 1) 短語尾形を長語尾形に代えることができないもの。
- 2) 短語尾形と長語尾形を交換できるもの。
- 3) 長語尾形を短語尾形に代えることができないもの。

それぞれの項目に属するものは、更に細かく分類されます。60 年文法の分類は重複していると思われるものも含んでいますので、だいたいはこちらに準拠しながら、分類してみると、次のようになります。

(1) 短語尾形を長語尾形に代えることができないもの

§167

- 1) 長語尾形と短語尾形の意義が異なっているもの。

これに属するのは、たとえば богáт 「豊富な」 / богáтый 「富裕な」, гол 「赤貧の」 / го́лый 「裸の」, ду́рен, -на́, -но 「醜い」 / дурно́й 「悪い」, крáток, -тка́, -тко 「簡略な」 / крáткий 「短い」, хоро́ш, -а́, -о 「美しい」 / хоро́ший 「良い」 などです。

2) 過度の特徴を示すもの,

たとえば, мо́лод 「若すぎる」, ве́лик 「大きすぎる」, ма́л 「小さすぎる」 などです。たとえば,

Рабо́тать хочу́, да не зна́ю, что и куда́, ма́л я...

— Че́го ма́л, ниче́го не ма́л

「私は働きたいのですが何をしにどこへ行けばよいか分かりません。私は小さすぎるというんです。小さすぎるって小さすぎることはないのに」 (Тихон.)

ここに属するのは寸法など、連続的に変化する量を表すものです。

3) это あるいは что が文全体を表すとき。たとえば

В семна́дцать лет вы расцве́ли преле́стно. Неподража́емо, **и это** вам **изве́стно**. Всё, **что недосяга́емо** для него́ тепе́рь, когда́-нибудь ста́нет бли́зким, поня́тным. (Чех.)

「17才の頃あなたは美しく、類いなく盛りをむかえていました。このことをあなたはご存じです。今彼にとって手の届かないこともすべて、いつか近い、理解できるものになるでしょう。」

4) 補語を取るとき。たとえば,

Способно́стями бог ме́ня да́рил. Дал се́рдце до́брое — вот **чем** я **лю́дям ми́л**.

「神様は私に才能をお恵みになりました。善良な心を下さいました — 私が人々に愛されるのはこのためです。」 (Гриб.);

Но знае́шь ли, **чем си́льны** мы, Басма́нов! Не во́йском, нет, не по́льской по́мощью, А **мне́нием** — да, **мне́нием** наро́дным

「私たちがなぜ強いのか、君は知っているだろうか、バスマーノフよ。軍隊によつてではない。そうではない。ポーランドの助けによつてでもない。意見によつて

て、そうだ、民衆の意見によつてなのだよ」(Пушк.)

(2) 長語尾形短語尾形の交換可能なもの

§168 60年文法はこれに属する短語尾形について次のように述べています。

述語に立つ形容詞短語尾形は特徴の絶対的な恒常性という一般的な意義を持つ、広い一般化、推論に用いられる [25, I, p.448].

その例として挙げられているのは、たとえば次のようなものです。

1) Земля велика́ и прекра́сна, есть на ней мно́го чуде́сных мест.

「大地は大きく、美しい。その上には多くの素晴らしい場所がある。」(Чех.);

Вели́кие исти́ны примити́вны, — споко́йно отве́тил Ка́мков.

「大いなる真理は素朴なのだ — カームコフは静かに答えた。」(Павл.)

この説明は「特徴の絶対的な恒常性」を主張しているという点で、明らかに80年文法と矛盾しています。

また次の項目は以下のような説明になっています。

述語に立つ形容詞短語尾形は、(それが) 示す対象の特徴がその (対象の) 特徴的な性質として開示され、しかもこの性質が基本的で主要なものとして示されて、文全体が断定的な陳述であるときに用いられる [25, I, p.448].

この例として挙げられているのは、たとえば、

2) Во́здух чи́ст и све́ж, как поце́луй ребёнка: со́лнце я́рко, не́бо си́не — чего́ бы, ка́жется, больше?

「大気は子どものくちづけのようにすがすがしくさわやかで、空は青い — それ以上何が必要だろうか」(Лерм.);

Вы сча́сливы... Это вели́кое сло́во. Впро́чем, это по́нятно: вы мо́лоды.

「あなたは幸せだ.....これは大いなる言葉です。だが、これは当然のことだ、あなたは若いのだから。」

これも「特徴的な性質」を表すという点で、80年文法の記述と矛盾していると考えられます。

第三に強調の意味を帯びている場合というのがあります。

述語に立つ形容詞短語尾形は、特徴の発現の程度を示すか、あるいは特徴の程度が大であることを強調する語 — すなわちこれに当る意義を持つ副詞、比較の言回し、名詞あるいは代名詞の斜格 — が述部にある場合に用いられる。

これに属するものとして挙げられているのは、たとえば、

3) Кто **так чувствителен**, и **вёсел**, а **остёр**,

Как Алексáндр Андрéич Чáцкий!

「アレクサンドル・アンドレーイッチ・チャーツキーほど繊細で、快活で、辛辣なものが居ようか」(Гриб.);

Ей казáлось, что она́ уже **недостáточно молодá** для меня́, **недостáточно трудолюбíва** и **энергíчна**, чтобы начать нóвую жизнь.

「彼女には、彼女が私にとってもう十分には若くなく、新しい生活を始めるには十分に勤勉でもなく、精力的でない、と思われた。」(Чех.);

И ты нрáвишься мне. Ёбо ты в мéру умён и в мéру глуп; в мéру добр и в мéру зол; в мéру чéстен и подл, труслив и храбр — ты образцóвый мещани́н!

「私は君が気に入った。だって君は適当に賢く、適当に馬鹿だからだ。適当に善良で適当に悪い。適当に誠実で適当に卑劣だ。怖がりで勇敢だ。つまり君は模範的小市民なのだ」(Горький).

§169 次の条件として挙げられているのは補語をとるときで、短語尾形が選ばれるということです。たとえば、

4) Когда́ ж пространствéешь, воротíшься домóй,

И дым отéчества **нам сла́док и приятен**.

「旅をして家に帰ってくると故郷の煙さえ我々には甘美で心地よい。」(Гриб.);

Твёрдость тво́я **для меня́ удивíteльна**.

「君の毅然とした態度は私にとって感嘆に値する。」(Пушк.)

次に一時的な特徴を表すときにも、短語尾形が用いられるとあります。す

なわち、

通常一時的、偶然的な特徴を表すときに述語として形容詞長語尾形よりも短語尾形が選ばれる。これは文中に特徴の現れる時間の指示がある場合には特に一貫して守られる。

すなわち、

5) Хотя **тяжело подчас** бремя, Телега на ходу легка.

「荷は時に重くとも、馬車は軽やかに進む」(Пушк.);

Весь этот день и следующий друзья и товарищи Ростова замечали, что он **не скучен, не сердит, не молчалив, задумчив и сосредоточен**.

「その日および次の日中、ロストフの友人や同僚は、彼が鬱々としているのではなく、怒っているのでもなく、黙っているのでもなく、物思いに耽っていることに気づいた。」(Л. Толст.)

この用法は80年文法と軌を一にしていますが、1) および2) の記述とは矛盾しています。

更に第六の用法として、主語が文法的にこれと一致する修飾語あるいは所有代名詞を伴っているときに、短語尾形が選ばれるという条件が挙げられています。たとえば、

6) Грустен лик её туманный 「そのおぼろな顔が悲しげであつた」(Лерм.);

Её **узкое лицо**... казалось печальным. Открытая шея **тонка и нежна**.

「ほっそりとした顔は.....悲しげに見えた。あらわな首筋はか細く、華奢だった。」(А. Н. Толст.)

この条件は先に挙げた長語尾形と短語尾形の選択の原則と理論的にどう関わるのか、不明です。60年文法はこの他にも長語尾形と短語尾形の競合する場合についての条件の記述を行っていますが、矛盾が多く見られます。80年文法でこの問題に関する記述が極めて簡潔になって、原則だけを述べているのは、このような矛盾の理論的解決が難しいためではないかと思われます。

6. 問題の整理

§170 私はかねてから長語尾形と短語尾形の違いは修飾語と被修飾語の間の関係のあり方ではないかと考えています。即ち、現代ロシア語で述語の位

置において競合が見られる場合は、主語と述語のあり方の違いに帰することができるということです。

長語尾形は主語と述語の関係が、聞き手にとって当然予期されるものであることを表し、これに対して短語尾形は主語と述語の関係が、発話の中で初めて設定される場合に使われると考えるのです。

これは仮説に過ぎませんが、理論というものが、説明力が大きければそれだけより正しいものであるとすれば(メタ理論)、問題はこの仮説の説明力がどのようなものであるかという点に帰着します。

この仮説に基づいて考えれば、短語尾形は長語尾形に比べて動詞的な性格が強いということになりましょう。動詞の場合形容詞に比べて発話の状況への依存度が極めて高いと考えられるからです。

そうとすれば、補語を取るとき、短語尾形が選択されるのも当然と考えられますし、程度を表す場合にも使われることになります。また意外性が強くなるために強い印象を与えることになり、強調に使われ、あるいは断定的な色彩を帯びることにもなります。一時的、偶然的な性質を表すのもまた当然といえましょう。

主語がこれと一致する修飾語あるいは所有代名詞を伴うときは、注意が主語によって表される対象に集中されていますから、述語は新しい情報であることが多いと考えられます。そうすれば、傾向として短語尾形が用いられることが多いのはよく理解できると思われます。

このように新しい情報を表す傾向が強いために、中世ロシア語では格変化を行って修飾語としても用いられていた短語尾形が、もっぱら述語として用いられるようになり、その結果格変化を失ったのだと考えれば、理論的にも整合性を持つことができるように思われます。

スラヴ諸語は理由は未だ不明ですが、過去のある時期までかつて印欧語がそうであったと考えられる活格言語類型への一定の先祖帰りの傾向を示していたと考えられます。

この傾向はポーランド語やチェコ語に見られるように途中で止まり、また対格言語的な性格を取戻すと考えられるのですが、ロシア語の場合には、先祖帰りの傾向は長く続いたと思われます[61, pp.139-142]。

活格言語類型では形容詞はなく、すべて動詞の形を持っていました。この

ことから短語尾形というのも、先祖帰りの傾向の一環として、動詞的な性格を持つようになったという、類型学的な意味があったのかも知れません。

しかしこの傾向はロシア語でも終りに向かい、ふたたび長語尾形が一般化しつつある段階にさしかかっているのではないかと考えられるふしがあります。

第十四話

形容詞の問題 II

1. 中世ロシア語の形容詞

§171 中世ロシア語のばあいには、前にも言いましたように形容詞短語尾形は格変化を持っており、修飾語の位置に立つことができました。従って長語尾形との競合は形容詞のすべての位置において可能でした。しかしこれらの位置において長語尾形と短語尾形のどちらを選択するかという基準あるいは原則は、余りはっきりしてはいませんでした。私はこれに疑問を持ち、「ノヴゴロド第一年代記」について、この問題を考えてみたことがあります [44].

現在もこの考え方に变りはありませんので、これに沿って説明をしてみたいと思います。

まず「ノヴゴロド第一年代記」には「古輯」Старший извод と「新輯」Младший извод とがあります。「古輯」は「宗務院本」Синодальный список とも言われ、14世紀に成立したと考えられています。ここであつかったのはこの「古輯」の言語です。

まずこのテキストの中で使われている長語尾形と短語尾形の使用頻度を見ますと、表のようになっています。明らかなようにおよその傾向は現代ロシア語に見られるものと一致しています。

長語尾短語尾両形の分布			
形容詞の種類	長語尾形	短語尾形	総計
1. 性質・関係形容詞	1028	351	1379
2. 接尾辞 -ск- を持つもの	368	16	402
3. 所有形容詞	34	238	272

それでも現代ロシア語では短語尾形でしか用いられない所有形容詞にも未だ長語尾形が使われていたり、長語尾形でしか使われない接尾辞 -ск- を持った形容詞に短語尾形があつたりというように、現代語とは少し異なっています。

また表には出ていませんが、関係形容詞のばあいにも、短語尾形が用いら

れるものがあります。このように現代語と違ったところに、両形の機能を探る手がかりがあると考えられます。

(1) 性質形容詞

§172 まず性質形容詞のばあいですが、これが短語尾形で修飾語の位置に立つばあいはどのようなものかを見ることがにします。

前にも言いましたように、現代ロシア語で形容詞の短語尾形が長語尾形と競合する唯一の位置である述語のばあい、長語尾形は主語と述語の関係が、聞き手にとって当然予期されるものであるのに対し、短語尾形は主語と述語の関係が、発話の中で初めて設定されるばあいであるという仮説を示しました(195 ページ参照)。

もしこの仮説が正しいとすれば、修飾語のばあいにも修飾語と被修飾語の間に同じ関係が成り立つ可能性があることになります。

そこで великъ「大きい、偉大な」という短語尾形の形容詞について、これがどういう名詞と結びつくかを調べてみました。この形容詞を観察したのは、この形容詞が頻繁に使われているためです。そうすると次のような結果が得られました。

великъ と名詞との結合							
I		II		III		IV	
бѣда	3	буря	1	възятие	1	名詞	4
горе	2	вода	5	въстань	1	баскакъ	1
жалоба	1	дороговъ	1	краморъ	1	князь	1
зло	1	дѣжгъ	1	кровопролитие	1	посѣлъ	1
пагуба	1	звѣзда	1	мятежъ	6	промыслъ	1
пакость	1	мразъ	1	сѣча	3	радость	1
скѣрбь	1	пожаръ	1			день	4
страхъ	1	снѣгъ	1			сила	4
туга	1	солнце	1				

§173 第1のグループに分類するものは、災難、悲しみのような意味を

持った語と結合するばあいです。たとえば、

- 1) Убиша Володимири князя Андрея свои милостьници:… И велик мятежъ бысть въ земли той и **велика бѣда**, и множество паде головъ, яко и числа нѣту. (39v)

「ヴラヂーミリで寵臣たちがアンドレイ公を殺した……そしてこの地に大きな災いが起り、数知れない人命が失われた。」

- 2) Мѣсяца априля 18, в субботу великую, въ час ночи, загорѣся на Варяжской улицы, и створися **горе велико**, по нашимъ грѣхомъ въздвижесе буря с вихромъ. (151r)

「4月18日、大いなる土曜日¹の第1刻にヴァリャースカヤ通りで火事があり、大きな災難が起った。私たちの罪によって旋風を伴った嵐が起ったのである。」

- 3) Томъ же лѣтѣ, на зиму, иде Всѣволодъ на Чудь; и створися **пакость велика**: много добрыхъ мужъ избиша въ Клинь новъ-городъць… (13v)

「同じ年冬にフセヴォロドはチュヂを攻めた。そして大きな悪行が行われた。(ノヴゴロドの)身分の高い人々が多くクリン²で殺された……」

- 4) И тако створися **пагуба велика**; одна на свѣтѣ богъ и добрии люди уяша; а злии чловѣци падоша на грабежи: что въ церквахъ, все разграбиша, бога не боячеся. (151r)

「こうして大きな不幸が起った。この世で神も良い人々もとどめることができなかった。悪人たちは略奪を始め、神を恐れないで教会の中のものすべて略奪した。」

§174 第2のグループは天候に関するものですが、これも結局第1のグループと同じく災厄を表すものです。たとえば、

¹復活祭の前日の受難週の土曜日。古輯ではこれは6780年、西暦1272年の項に記載されていますが、この年の復活祭は4月24日でその前日の土曜日は23日ですから記述と合いません。新輯ではこの記事は6807年、西暦1299年の項に記載されています。この年は復活祭が4月19日ですから、この年の事件であることはほとんど間違いありません。

²ノヴゴロドの州領。

- 5) Тои же осени наиде **дѣжгъ великъ** и день и ночь; на Госпожь-
кинъ день, оли и до Никулина дни не видѣхомъ свѣтла дни,
ни сѣна людѣмъ бѣше лѣзѣ добыти, ни нивъ дѣлати. (105v)
「その秋に昼も夜も大雨が襲った。生神女就寝祭³に起り、ニコラの日
まで晴れた日を見ることがなく、人々は干草を作ることも、畑を耕すこ
ともできなかった。」
- 6) Том же лѣтѣ бѣше князи и без новѣгородѣ Новѣгородѣ
бѣсть **пожаръ великъ**; загорѣся на Радятинѣ улици и сѣгорѣ
дворовъ 4000 и 300, а церкви 15. (77r)
「同じ年、公とノヴゴロドの人々が留守の間にノヴゴロドに大火があつ
た。ラチャチナ通りで4300戸の家と15の教会が焼けた。」
- 7) Поча Всѣславъ рать дръжати; и на западѣ явися звѣзда ве-
лика. (3v)
「フセスラフが軍勢を集め始めた。そして西に大きな星が現れた。」

これらの例から分りますように、**великъ** という語は災いについて用いら
れ、しかもただ大きいというだけでなく、極めて大きさが異常であるばあい
に使われていると思われます。

7) の「大きな星」というのは、ハレー彗星でしたが、こういう天の徴は、
年代記では良くない事件の前に記されていることが多いと言えます。

逆にいえば、良くない事件が起ったときだけ、天の徴について記述したと
も考えられるのです。7) の記事は6573(1065)年の項に記されているのです
が、次の6574(1066)年の項には「フセスラフが攻めてきて、女たちや子ども
たちを含めてノヴゴロドを占領した。そして聖ソフィア寺院の鐘を持去った。
ああ、この時の災いの大きかったことよ。」О, **велика** бѣше бѣда въ час
тѣи. という記事が続いています。

§175 第3のグループは人間が惹き起した災いに関する語です。たとえば、

³聖母マリア昇天祭。ユリウス暦8月15日。またニコラの日というのは春と秋とあり、春の祭日はユリウス暦5月9日、秋の祭日は同じくユリウス暦12月6日でした。このばあいは秋の祭日を指していると思われます。この記事は6736(1228)年の項に記されていますから、ざっと計算しますと113日間雨が降り続いたことになります。

- 8) Тѣгда же оканѣный дияволѣ, испърва не хотяи добра роду челоуѣчу и завидѣвъ ему...и въздвиже на Арсения, мужа кротка и смерена, **крамолу велику**, простую чадѣ. (108r)

「その時始めから人類に良いことを願うことのない呪われた悪魔は、彼をそねんで、温順で謙遜であり、素朴な人アルセニイに大きな奸計をたくらんだ。」

- 9) Опять приде Все(славъ) къ Новугороду; новгородци же поставиша пѣлкѣ противу ихъ... О, **велика** бяше сѣця Вожаномѣ, и паде ихъ бещисльное число... (4v)

「再びフセスラフがノヴゴロドを攻めてきた。ノヴゴロドの人々は軍を彼らに向けて対峙させた。.....ああ、ヴォヂの人々には大きな斬合いがあったことよ。彼らの数知れぬ数が倒れた。」

第4のグループは災いとは関係がないと思われるものですが、ここでも「大きさ」は始めから分っていたというような程度のものではないと考えられます。たとえば、

- 10) и придоша въ Новѣгородѣ съдрави вси. О, **великъ** е, братѣе, **промыслъ божии**. (86v)

「そして彼らはすべて無事にノヴゴロドについた。ああ、兄弟たちよ、神の思慮の何と大きいことであろうか。」

- 11) Приѣха князь Олександръ из Орды, и бысть **радость велика** в Новѣгородѣ. (152v)

「アレクサンドル公が(タタールの)本営から帰ってきた。そしてノヴゴロドには大きな喜びがあった。」

§176 以上に見られるように、短語尾形 **великъ** は、大きさが始めから聞き手あるいは話し手に始めから分っているようなものでないばあいに使われているということができそうです。

従って予想よりも大きく感じられるのは災いのような、良くないことに多いと考えれば、これが災いに多く使われることは当然だと思われます。良い

ことがらに使われているばあいでも、その大きさは予想を超えるものであったばあいが多いと思われるのです。

しかしこのような用法に当てはまらないで、本来ならば長語尾形が使われるのではないかと思われるものもあります。たとえば、

- 12) ... в Литвѣ бысть мятежъ, богу попушью на нихъ гнѣвъ свои: вѣсташа сами на ся, и убиша **князя велика** Миндовга свои родици свѣщавшеся отаи всѣхъ. (140г)

「リトヴァで騒擾が起った.....そして大公ミンドヴグを、彼の親族が密かに謀り、殺した。」

- 13) и бяше ту **баскакъ великъ** володимирьскыи, именемъ Амраганъ. (147v)

「そしてそこに名をアムラハンという、ヴラヂミリの大バスカクがいた。」

- 14) ... ту же приѣхавше **послы великы** от свѣиского короля и докончаша миръ вѣчныи съ княземъ и с Новымъгородомъ по старои пошлинѣ. (163г)

「.....そこにスヴェイ人の王から大きな使節団がやってきて、公およびノヴゴロドと、古くからの習わしに従って和平を結んだ。」

これらはすべて **великъ** が異民族に対してつけられた例です。13) の例のばあいはよく分かりませんが、12) のばあいは、リトヴァの人々に神が怒りを降されて公を殺すように仕向けたのですから、ノヴゴロドの人々の同情は公の上にあります。

また 14) のばあいは和平を結びに来た大きな使節団には好意的であったと考えられます。

このような状況を考えますと、これらのばあいにもたとえば「ミンドヴグは偉い公だったのだが」とか、「使節団はなかなか大規模なものだったが」というように、語結合が新しい情報をもたらすものであったと考えても良いのではないかと思います。

12) のばあいによく似た状況を持つものに次のような例があります。

- 15) Того же лѣта роспрѣвшеся убоици Миндовгови о товарѣ его, убиша **добра князя** Полотьского Товтивила. (140г)

「同じ年ミンドヴグの弑逆者たちは彼の財産について仲違いを起し、ボロツクの善良な公トフチヴィルを殺した。」

このような例は、12) について述べたことを裏付けるものと思われます。

(2) 関係形容詞

§177 現代ロシア語の関係形容詞の短語尾形として80年文法が挙げているものの中に、材質を表すものがあることを述べました(185ページ参照)。

中世ロシア語でも、材質を表すものはしばしば短語尾形で現れます。たとえば、

16) ...и церкви сърубиша 2 **деревянѣ** на Търговищи... (14v)
「.....そしてトルゴヴィシチェに二つの木造の教会を建立した。」

17) ...и ядяху люди листь **липовѣ**, кору **березову**... (12r)
「.....そして人々は菩提樹の葉や白樺の皮(までも)食べたのであった。」

18) ...а то все **сребрьно**... (70r)
「.....しかもそれは全体が銀でできていた。」

19) ...святи церковь Новогородѣ Илья... а другую святого Спаса на воротѣхъ святого Георгия, **камяню**. (30r)
「.....イリヤがノヴゴロドで教会の清めの式をした.....そしてもう一つ、聖ゲオルギー修道院の門の上の石造りの救世主教会の清めの式をした。」

したがって材質を表す形容詞は関係形容詞ではあるが、何か短語尾形をとり易い理由を持っていると考えられます。

(3) 所有形容詞

§178 接尾辞 -o/ев- によって構成される所有形容詞は現代語では余り使われなくなりましたが、男性・中性の主格、生格、与格、対格および、女性の主格、対格、複数の主格は、短語尾形しか持っていません。

この傾向は既に中世ロシア語でもはっきり現れていましたが、逆に長語尾形を取るばあいも少数ではありますが、存在しました。

これはある男性の人物の夫人あるいは稀に娘などの下級親族あるいは「手の者」などを表すばあいに限られていました。たとえば、

- 1) Въ то же лѣто прѣстави́ся княгиня Всеволо́жая. (72v)
「この年にフセヴォロドの公妃がみまかった。」
- 2) ... князь пусти к нимъ жены Борисовую, Глѣбовую, Мишиную... (116r)
「.....公はボリスの妻, グレーブの(妻), ミーシャの(妻) を彼らのもとに行かせた。」
- 3) ... идоша новгородъци къ Дръюцьку съ Святославом, съ Олго́вомъ вѣну́комъ. (44v)
「.....ノヴゴロドの人々はオレグの孫スヴァトスラフと共にドゥリュツクに行った。」
- 4) ... и иде въ Русь стави́ться къ митрополиту съ новгородъскими мужи и съ всѣ́воложими. (63r)
「.....そして彼は府主教に任命されるために、自分の手の者と、フセヴォロドの(手の者) と共にルシに行った。」
- 5) ... на томъ победи́ши Гюрге́выхъ и Яросла́лихъ вои паде́ бещисла. (86v)
「.....その戦場で、ユリー(の) およびヤロスラフの無数の軍勢が死んだ。」
- 6) А на Яросла́влихъ любви́щихъ поима́ша новгородци ку́нь мно́го. (108r)
「そしてノヴゴロドの人々は、ヤロスラフの寵臣たちから多くのクナ⁴を徴収した。」

⁴クナは古代ロシアの貨幣単位。

これらの例から、所有形容詞の長語尾形が帰属が明確であるか、帰属によって特徴づけられる対象を示すばあいには用いられることが分ります。

従ってこれは、所有形容詞が示している対象と、これがつくことによって表される対象との関係が、発話以前に確定しているばあいであるということが出来ます。

以上のことから、長語尾形と短語尾形の機能についての仮説はおおよそ証明できたと思われます。

残っているのは、性質形容詞、関係形容詞、所有形容詞というような、意味に基づく類別がどのようにして長語尾形、短語尾形と関係しているかという問題です。この問題は次に考えることにしましょう。

第十五話

形容詞の問題 III

1. 品詞としての形容詞

§179 ここで形容詞の種類と長語尾形および短語尾形の関係を考えることにします。形容詞の種類というのは形容詞の意味に関係しているものですから、結局これは広い意味での形容詞の意味(範疇的意義)と語尾との関係ということができます。

ここで問題になるのは、これまで見てきておおむね妥当だと考えている長語尾形と短語尾形の機能の意味と、形容詞の範疇的な意義との関係が、理論的に説明できるかどうかということです。もしうまく説明することができなければ、これまでの仮説そのものを再検討する必要があるからです。

この問題については、私は以前に考えたことがありますので[62, pp.60-72], 以下にはこれに従って述べていくことにしたいと思います。

以上の線に沿って考えてみる前に、もう一つ必要なことがあります。

それは形容詞とは一体どのような意義を持つものなのだろうか、という問題を考えておくことです。

古典の時代からいわゆる品詞の区別がされてきて、たとえば名詞は「もの」を表すものであるとか、あるいは形容詞は「性質」を表すものであるとかいうことがいわれてきました。詳しいことは今述べませんが、ある言語がこういう品詞をいくつ持っているか、あるいはそれぞれの品詞をどう区別するか、ある品詞に共通する意義は何かというような問題を研究する学問を「品詞論」といいます。

前にも一寸触れたかと思いますが、品詞の区別というのは最初からはっきりしてはいなかったようです。

古典文法で品詞が確立したのは紀元前2世紀、アレクサンドリアのトラキアのディオニュシオスであったといわれています。この時の品詞の数は8でありましたので、この数を守るためにその後の文法学者たちはいろいろと無理をしてきました。

たとえばギリシア語には冠詞があり、これが品詞の一つになっていました

が、ラテン語には冠詞がありません。しかし品詞は8個でなければならないというわけで、ラテンの文法家は間投詞を加えることでこの問題を解決しました。

近代になってそれぞれの民族の言語の文法がギリシア・ラテン文法の規範を脱してそれぞれの言語の特殊性を認めるようになって、品詞の数も8個に限定しなくなっています。

一般的に言って、たとえば名詞はどういうものかと聞かれると、もの、事象などを表すという答が返ってきます。それでは形容詞は、と聞かれると性質、状態を表すと答えるでしょう。

しかしよく考えて見れば、名詞でもたとえば「白」というように性質を表すこともあります。また「睡眠」のように状態を表すこともあるでしょう。「歩行」という語は行為を表しています。形容詞が表すという状態も、「横たわる」というように動詞で表すこともできます。こう考えれば品詞というのは何か、という疑問がわいてきます。

こういう困難さを認めて、品詞を形の上から区別しようという試みも、以前から見られました。

しかしそうするとたとえばロシア語の順序数詞は数詞なのか形容詞なのかという問題が出てきます。80年文法はこれを形容詞に含めているようです。つまり、形の上だけでも品詞を決定することは意外に難しいのです。

§180 私がかつてこのような状況を考えて、上に述べたような矛盾は、品詞、たとえば名詞を、それが指示するものの性質によって定義しようとするところから生じるのではないかと考えました。それではこれに替ることのできるような定義の仕方はどのようなものになるでしょうか。私はこれを対象を認識するときの、認識の仕方に範疇的な違いがあるのではないかと考えました。

たとえば名詞というのはそれが指すものが「もの」、「現象」etc. だから名詞だというのではなくて、外のものから切り離して、それだけを完結した、独立したものとして認識する仕方をもつものだと考えるのです。

これに対し形容詞は何か名詞によって表されるものに帰属するものとして認識する形式だと考えられます。

比喩的に言えば名詞はたとえば 6 とか 8 とかいう、それだけで自立したものであるのに対し、形容詞は操作概念を含んだ $6\times$, $8\times$ とかいうものだといってもいいでしょう。それ自身では完結しないのです。

こう考えればたとえば white snow と White of the snow というばあいのように、言語外的な現実の同じ現象を異なった品詞で表すのは、決して矛盾したことではないということになります。認識の仕方が違うのです。

そうすればたとえば動詞の認識の仕方はどういうものかということも問題になります。これについての私の仮説は、機会があれば述べることにして、今は名詞と形容詞に問題を限ることにします。

§181 このように考えたばあい、名詞の意義はどういう風に決定されるかという問題を、極めて一般的に考えてみましょう。

言語学では音素がいわゆる弁別の特徴 distinctive features の束として考えられ、定義されています。たとえば /t/ という音素は「無声」、「破裂音」、「歯音」という弁別の特徴によって定義されます。

もっともこれは普遍的なことではなく、朝鮮・韓国語のように、[t] と [d] とが音素 /t/ の位置による異音 allophone で、音素 /tʰ/ および /ʔt/ と対立しているような言語では、「無声」(「有声」) は弁別の特徴ではなく、代りに「無気」(「有気」), 「喉門非閉鎖」(「喉門閉鎖」) が弁別の特徴になります。

この弁別の特徴による定義というのは、たとえば「歯音」の性質を持っている音素の集合と、「破裂音」という性質を持つ音素の集合の交わった部分に属する音素が、この二つの性質を持つことになる、という手続に基づいています。

いま「歯音」の集合を A , 「破裂音」の集合を B とすれば、交わった集合は $A \cap B$ として表されます。論理学ではこの関係を $a \wedge b$ (a カツ b) のように表します。更に無声音の集合を C としますと、[t] に対応する音声の集合は $A \cap B \cap C$ で、論理学の表し方では $a \wedge b \wedge c$ となります。

語の意義についてもこの同じ考え方が適用されます。意義素 semanteme という考え方です。

たとえば「鯨」というのは「動物」、「海中生物」、「哺乳類」……のような「意義素」からなると考えられます。もちろん「動物」などは更に下位の「意

義素」の列によって定義されるでしょう。現実にとこまで明確に定義できるかは別にして、少なくとも理論的には有限個の「意義素」の列によって定義されるはずでず。

このばあい名詞の意義を $\mathfrak{N}$, 意義素を s_i ($1 \leq i \leq n$) であらわすと、これは次のようになると考えられます。

$$\mathfrak{N} = s_1 \wedge s_2 \wedge \cdots \wedge s_n = \bigwedge_{i=1}^n s_i$$

これに対して形容詞の意義のばあいはどうなるでしょうか。

既に上で述べたことから明らかなように、もし仮説が誤っていないとすれば、形容詞の意義 $\mathfrak{A}$ は次のようになるでしょう。

$$\mathfrak{A} = s'_1 \wedge s'_2 \wedge \cdots \wedge s'_n \wedge = \bigwedge_{i=1}^n s'_i \wedge$$

明らかなように、このばあい意義はそれ自身では完結しません。

2. 形容詞の種類と長語尾・短語尾形

(1) 性質形容詞

§182 たとえば今「赤い花」という語結合を考えてみます。このとき「花」の意義素の中には「赤い」という属性は含まれていません。紫であっても黄色であっても花にかわりはないのです。

従ってこのようなばあい「花」に与えられることのできる多くの属性の中で選択が行われ、「赤い」が現実の「花」を特徴づけるものとして選ばれるのだと考えられます。

このような選択の可能性を [] で表し、名詞と形容詞の結合を $\circ$ で表すことにすれば、これは次のようなものとなります。

$$[\mathfrak{A}_1, \mathfrak{A}_2, \mathfrak{A}_3 \dots \mathfrak{A}_n] \circ \mathfrak{N}$$

これが性質形容詞の基本的な図式だと考えられます。

(2) 関係形容詞

§183 関係形容詞のばあいは性質形容詞に比べてかなり複雑ですが、関係形容詞の派生原基である名詞の表す対象の一部分を示すばあいが多しと考え

られます。たとえば городьныи ворота「城門」, стена градьяная「城壁」 столпы кивотныя「聖像壇の柱」などというばあいです。

次に名詞が形容詞の派生原基の一面を示すばあいがあります。これも今述べたものと基本的には異なったものではないと思われます。

たとえば, божья благодать「神の恩寵」, божия сила「神の力」, прѣмудрость божия「神のいと深き智恵」, крестьяная сила「十字架の力」など。

明らかなように、これらのばあいは性質形容詞と異なって、名詞で表されるものは、既に派生原基の名詞の属性の一つとして、これに含まれているようなものなのです。たとえば「神」には「恩寵」があり、「力」があり、などということです。それらの既に備わっているものの一つが、時とばあいによって顕在化してくると考えられるのです。

このことはこの形容詞と名詞の語結合の一方を除くという操作によって、どちらを除いた方がもとの意味をよりよく保つかというテストをすれば、はっきりと確かめられます。たとえば、

1) ...и побѣдиша я божиею помощю. (139r)

.....そして彼らは彼らを神の助けによって打負かした。

これを一方を省いて「神によって打負かした」と「助けによって打負かした」という文を作ってみると、後のばあいは原意が大きく歪められていることが分ります。

§184 また関係形容詞の派生原基が名詞によって示されるものと事実上同じものと考えられるばあいで、一方が他方の比喩的な表現であると思われるばあいがあります。

たとえば каль грѣховный「罪の泥沼」(125v)のようなばあいです。これはいわば「罪」=「泥沼」で、「泥沼」は「罪」の比喩的表現と考えられます。同じようなものとして、たとえば царствие небесное「天の王国」(113r;119r), царство небесное(90r)があります。

この類の表現における関係形容詞は上に述べたものと原則的に異なっていないとは思われません。

これと矛盾しているように見えるのは、関係形容詞の原基が意味上の目的語になっているばあいです。たとえば *голольный ловци* 「鴨の猟師」(148r), *заячий ловци* 「兎の猟師」(148r), *зажжение градное* 「町の炎上」(66v), *крѣстное цѣлование* 「十字架への口づけ」(112v;162v), *церковное зѣдание* 「教会の建立」(42v) のようなばあいです。

гогольный ловци, *заячий ловци* における「鴨」や「兎」の意義は *ловци* 「猟師」の意義の中に含まれてはいませんし、また逆に「鴨」や「兎」の意義の中に「猟師」の意義が含まれているわけでもありません。

むしろ「猟師」の可能な選択の中に「鴨」や「兎」があるわけですから、この意味でこの類はむしろ性質形容詞に近い役割を果していると考えられます。

しかし、その他の例をみるとたとえば、

- 2) ... и нача здати церковь... а всего дѣла **церковнаго зѣдания** днии 70. (42v)

「.....そして彼は教会を建て始めた.....そして教会の建立の仕事のすべては70日であった。」

というようになっています。

ここで重要なのは単なる家の建築ではなく、教会の建立であります。このことは、前と同じ手続きで「教会の仕事」と「建築の仕事」を比べ、原意の歪曲の程度をみれば、はっきり分ります。

以上のことから、基本的には関係形容詞は、次のような基本的図式を持っていると考えても良いと思います。

$$\mathfrak{A} \circ [\mathfrak{R}_1, \mathfrak{R}_2, \mathfrak{R}_3 \dots \mathfrak{R}_n]$$

すなわち特定の関係形容詞に対して、その原基の意義に含まれる対象のどれを選ぶか、顕在化するかという選択が、名詞の側に存在するのです。

§185 関係形容詞に含まれるもののうち、材質を示すものについて考えれば、これは少し本来の関係形容詞とは異なった基本的図式を持っていると思われる。

たとえば「木の机」という表現を考えてみましょう。「机」というのはある対象を機能の面で捉えたものに過ぎません。機能の面を捨象して材質という点で考えれば、それは「木」でしかありません。

しかし「机」は「木」でないといけないということはありません。象牙でも何でも良いのです。一方「木」でできたものは、何も「机」に限られるわけではありません。「家」でも「機」でも構わないわけです。

そう考えれば、このばあい形容詞の側にも名詞の側にも選択の可能性があります。そうとすれば「木の机」において「木」と「机」とが結びつく蓋然性は「赤い花」というよりももっと低いかも知れません。

そういうわけでこの結合は次のような基本的図式を持つと考えることができます。

$$[A_1, A_2, A_3 \dots A_m] \circ [R_1, R_2, R_3 \dots R_n]$$

いわゆる所有形容詞のばあいにも、基本的な図式はこれと変わらないと思われます。

§186 形容詞短語尾形が、発話の時に新しく名詞との結合が行われるばあいに使われるとすれば、少なくとも形容詞の意義の側に、選択の可能性がないといけないと考えられます。そうでないと形容詞が一意的に決ってしまうからです。

もしそうとすれば、この条件を満たすことができるのは性質形容詞、および関係形容詞の材質を表すもの、並びに所有形容詞ということになります。

所有形容詞の中でこの条件を満たさないものは、所有形容詞の派生原基の「所有」乃至少なくとも「勢力下」にあると考えられるもの、すなわち「妻」などの近親、臣下などを指す名詞のばあいであると考えられます。このばあいには関係形容詞と同じ基本的図式を持つことになるでしょう。

このように考えれば、形容詞の種類と長語尾・短語尾形の関係がうまく、斉一的に説明できると思われるのです。

第 十 六 話

言語類型学 I

古典的な言語の類型

1. はじめに

§187 これまでロシア文法の名詞、形容詞などのいわゆる「名詞類」nominals について考えてきました。その中で、ロシア語がインド・ヨーロッパ語の一員として、この言語の古い状態を継承していることから、古い状態の知識が必要になってくるために、印欧語比較文法のごく簡単な説明を行いました。

そのほか、20 世紀の終りに近くなって、「内容的類型学」という考えが生れてきました。これはまだまだ若い学問ですから、今後多くの研究が成されなければなりません。現在の段階でも、従来説明が難しかったり、単なる仮説の域を出なかったものが、色々と分って来つつあります。この知識は、たとえば名詞の「性」、「活動体」と「不活動体」などの問題に関連してごく必要なことに限定して部分的な説明をしてきました。

§188 しかし、動詞は名詞類に比べると格段に複雑な文法的カテゴリーをもっていますから、これを説明するには、更に「内容的類型学」のある程度の体系的知識が必要になってきます。そこで動詞について考えるに先立ってこの「内容的類型学」についての、大まかな説明をしておきたいと思います。これがここで内容的類型学の説明に話を切り替える理由です。

ところで「類型」という概念は内容的類型学の成り立するはるか昔に、既に存在していました。内容的類型学の特徴を明らかにするためには、まずそれ以前の「言語類型学」から話を始めることが必要だと思われます。

2. 概念の発生

§189 言語の類型という概念が初めて言語学に現れたのは、おそらくヴィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt (1768-1835) によってだと思われます。

フンボルトはプロイセンの政治家であり、学者であって、フンボルト大学

の創立者でありました。言語についての知識も極めて広く、西はバスクの言語から日本語、中国語、ビルマ語、タイ語を含む太平洋全域の言語、アメリカ先住民の諸語に及ぶ広大な空間の言語についての知識を持っていました。

主著としては『ジャワ島のカヴィ語について』[10]がありますが、特に重要でもあり、大きな影響を与えたのは、序文としてこの著作につけられた、『人間言語の種々相とその人類の精神的発達に及す影響について』[11]という論文です。

この序文はやがて独立して扱われ、言語学はもとより、哲学、文学にも、大きな影響を与えましたが、その影響は現在に至っても、強力な形で残っています。これには亀山健吉による邦訳『言語と精神』[57]があります。

この中でフンボルトは中国語を例にしてこれが「(思考の) 範疇を指示することが欠けてしまっている」ものだとして、このような言語を孤立語 *isolated languages* としています。

これに対立するものとしては、たとえばラテン語のように、本来の屈折をもつ語 *flective languages* があるといえます。

彼はこれ以外のものはないが、ただひとつありうるものは、「複合」という方法で文を作るものだといえます。「複合」というのは、彼によれば、「本来の屈折を目差しながらも十分には完成されなかった屈折」であって、実際は「機械的な接着にすぎず、純粋な有機的付加形成ではない」として、「どっちつかずの混血児」だということです。そしてこのような方法は「近頃膠着という名称で呼ばれている」といいます [57, p.186]。

いいかえれば、膠着語 *agglutinative languages* というのは屈折語になりたかったのになれなかった言語だということになります。このようなフンボルトの考えには印欧語の優越性と、その他の言語に対する蔑視という、当時のヨーロッパ人たちの偏見が強く感じられます。

§190 それはさておき、ここで述べられた屈折語、膠着語、孤立語という区別は、その後長い間言語学者の中に受け継がれてきました。

孤立語としてあげられているのは中国語ですが、中国語では「走」といっても、それだけでは「歩く」という動詞なのか、それとも「歩行」という名詞なのかわかりません。こういう品詞の区別は、文の中でこの語がどうい

位置を占めているかによるのです。

これに対して屈折語というのは、語尾変化をもつ単語のばあいには、語尾が時称、人称、格など、その単語が文の中でもつ働きを示すものです。ロシア語などもそうですが、たとえばラテン語のばあい、*dominus* 「主人」という名詞は、単数で *dominus*, *domine*, *dominum*, *dominī*, *dominō*, *dominō*, 複数で *dominī*, *dominōs*, *dominōrum*, *dominīs*, *dominīs* というように変化します。

この変化を通じて変らない *domin-* という部分は語幹といい、「主人」という意味を支えています。これに対して *domin-us* の *-us* のように変化する部分は語尾といい、文法的な意味を示します。たとえば *-us* は男性、単数、主格をあらわしています。

しかし逆に *-us* という語尾はいつも男性、単数、主格をあらわしているとは限りません。

たとえば *domus* 「家」という語は単数・主格ではありますが、女性名詞です。あるいは *vir* 「男」という単語は語尾をもっていませんが、男性、単数、主格をあらわしています。これはほかの格にもいえることなのです。

つまり、屈折語のばあいには語尾は格、数、性のようないくつかのカテゴリをあらわしますが、それはどの語幹につくかによって変わってきます。また語尾のどの部分が性をあらわし、どの部分が数、あるいは格をあらわすということもできないのです。従って語尾は語幹と一体になって初めて意味を持つということになります。

§191 これに対して膠着語はたとえば日本語の「私」という語は文法的な関係をあらわす部分をもっていません。いわばラテン語の語幹の部分だけをあらわしています。文法的な意味はたとえば主語ならば「が」という付属語(助詞)をつけて「私が」といえばよいということになります。またこれはどの名詞についても同じ主語をあらわすという役目を持っています。

さらに、「私たちが」、「猫たちが」というばあい、「たち」は一応複数をあらわし、「が」が主語をあらわします。

こういふように、膠着語のばあいには、付属語または言語によっては語尾の、どれが数をあらわしどれが「格」に当るものをあらわすかがはっきりし

ています。屈折語の語尾を多機能的というとするれば、膠着語のばあいには付属語または語尾は単機能的だということができるでしょう。

このように考えれば、膠着語の方が明晰で優れているとさえ思われてきます。フンボルトの母国語がもし膠着語だったら、膠着語の方が優れているといったかもしれません。

§192 さて、現代の言語類型学の先駆けになったのは、アメリカのエドワード・サピア Edward Sapir (1884-1939) でありました。

この人は人類学者のフランツ・ボアズ Franz Boas (1858-1942) の弟子でアメリカ先住民の言語に精通していました。アメリカ先住民の言語はいくつかの語族に分れていますが、そのどれもが当時知られていたヨーロッパやアジアの言語とは大変に違った構造をもっていました。

これらの言語の知識および人類学の素養によって、サピアは言語に価値の優劣がないという考えにすでに到達していました。彼は次のように述べています。

なぜ言語の分類が結局概して無駄な企てとなってしまったかを示すものとして、ここに第四の理由がある。……前世紀の中葉に至るころ、社会諸科学にしみこんだ進化論的偏見がすなわちそれである。……実はこの偏見には、その大きい先駆をつとめた、もっと人間的な偏見が入りまじっていたのである。これまでの大多数の言語理論家たちは、だいたい一定の型に属する言語を話していた。彼らにとって、この型の言語のうちで最も完全に発達したものといえ、その幼少のころ習ったラテン語かまたはギリシア語であった。従って熟知しているこれらの言語は、人間のことばの到達し得た＜最高の＞発達段階をあらわし、他の型はすべて彼らの愛する＜屈折的＞な型に至る中間段階にすぎないと信ずることは、彼らにとってむずかしいことではなかった [19, 邦訳 p.123].

ここからサピアは次のようにいいます。

言語というものをその真の内面性において理解しようとするならば、優先的価値観の迷蒙を解いて、英語とホッテントット語¹とを、同じ超然たる態度で、

¹ホッテントットというのは現在では差別語であるとして用いられてはいません。現在ではこれにかわってコイサン語というようです。

冷静に、しかも興味を持って、観察する習慣をつけないといけない (*ibid.*).

§193 サピアは言語の類型というものを厳密に区別できるとは考えていませんでした。彼はこれについて次のようにいいます。

厳密に言えば、地球の上で話される数千の言語と方言の特異性を十分公平に扱いうるような、有限の数の類型を立てることの不可能さははじめからわかっている [19, 邦訳 p.121].

それにもかかわらず、サピアは、言語をできるだけ厳密にいくつかの類型に分類しようと考えました。

先に述べた「孤立」, 「膠着」, 「屈折」という概念と並んで当時用いられていた, 「分析的」 analytic, 「統合的」 synthetic, 「複統合的」 polysynthetic という分類概念も吟味しました。

「複統合的」な言語という類型を挙げたとき、サピアはアメリカ先住民の言語を頭に思い浮べていたのではないかとされます。先住民の言語には、いろいろな意味を持った単位が高度に統合されて文を作っているために、形の上では文と単語の区別が付かないものがみられるからです。

サピア自身の挙げている例を引用すれば、次のようになります。

チヌークの言語では、inialudam という「文」は、はじめの a にはっきりしたアクセントをもっていて、形の上では一つの単語と見なすことができます。しかしこれを分析すれば、次のようになるといいます。

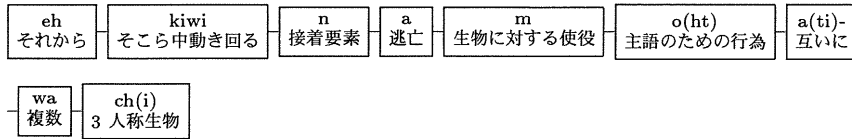
i-	n-	i-	a-	l-	u-	d-	am
近過去	私は	3 人称	彼女を	間接目的	話手からの分離	与える	特定目的で来る/行く

したがって、全体の意味は「私は (-n-) 彼女に (-a-l-) それを (-i-) 与える (-u-) ために来 (-am) た (-i-)」というようになるといいます。

あるいはまたアルゴンキン語族に属するフォックス語では、同じように、

ehkiwinamohtatiwach(i)

という「文」は次のように分析されるといいます。



従ってこれは「それから (eh) 彼ら生き物は (chi) ある生き物に (m) 彼ら自身の (oht) 相互 (ati) から逃れて (a) さまよわせた」=「それから彼らは一緒になって (彼を) 自分たちのもとからずっと追払っていた」という意味になるといいます。

しかしこのように形式の面からの類別は、言語の構造が千差万別であるために、どこかに線を引くことが難しく、学問的な意味を持つことができませんでした。

このため、言語の類型という考え方は、言語学の中でほとんど意味を持たないと考えられるようになりました。

3. 言語的普遍

§194 形式面からの言語の類型の問題は、別の角度からの研究によって息を吹き返しました。それは「言語的普遍」language universals という考え方でした。これはすべての言語を通じて普遍的にみられる法則性を探ろうとするものでした。

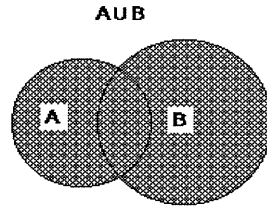
これに理論的な基礎を与えるきっかけになったのは、グリーンバーク Joseph Harold Greenberg (1915-), ジェンキンス J. Jenkins, オズグッド Ch. H. Osgood (1916-) という、三人の署名のある論文「言語的普遍に関する覚書き」*Memorandum concerning language universals* [8] でありました。

これによれば、言語的普遍というのは、 $\forall x(x \in L \supset \dots)$ という形をしているものであると定義されています²。

集合については第四話で述べたのですが、講義の都合もあってここでもう一度説明しますと、次のようになります。

² グリーンバークの表現では次のようになっています。For all values of X , if X is a language, then, if it contains some feature α , it always contains some further feature β , but not vice versa (*ibidem*). $\forall x(x \in L \supset \dots)$ というのは、「すべての x について ($\forall x$), もし x が L (言語の集合) に含まれている ($x \in L$) ならば ($\supset$)」を意味しています。

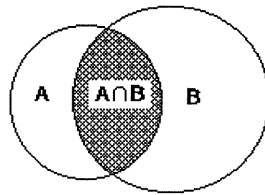
いまある集合 A と、別の集合 B とがあると
き、集合 A か、あるいは集合 B のどちらかに属
している (両方に属していてもよい) ものの集合
は集合 A と B の「合併」(join), または和集合
といい、 $A \cup B$ とあらわします。記号 $\cup$ の形か
らこれを $A \text{ cup } B$ ということもあります。



たとえばいま集合 A を淡水にすむ生き物の集合とし、集合 B を塩水にすむ生き物の集合としたとき、その合併集合は水中にすむ生き物の集合ということになります。

つぎに集合 A と集合 B の両方に属している元の集合は集合 A と B の「交わり」(meet) あるいは積集合といい、 $A \cap B$ であらわします。

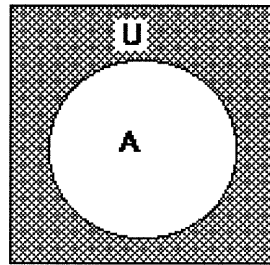
記号 $\cap$ の形から、これを $A \text{ cap } B$ というでもあります。たとえば A を哺乳類の集合とし、 B を水中にすむ動物の集合としたとき、 $A \cap B$ は水中にすむ哺乳類の集合になります。従って、ここには鯨やイルカ、ジュゴン、河馬などが属することになります。



さらに、すべての元の集合を普遍集合といい、 U であらわすことにします。

これと任意の集合 A とを考えたとき、普遍集合に属してはいるが、集合 A には属していない元の集合を A の「補集合」といい、 $\bar{A}$ であらわします。

たとえば生き物の集合を普遍集合と考え、 A を動物の集合とすると、その補集合は植物の集合ということになるでしょう。

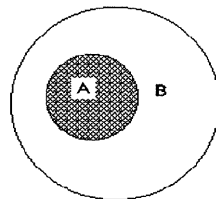


§195 $\forall$ というのは「全称記号」universal quantifier といわれるもので、 $\forall x$ というのは、「すべての x について」という意味をもっています。 $x \in A$ というのは、 x という元 (要素) が集合 A に属することを意味しています。上の定義で L というのは、言語の集合をあらわしています。

また $A \subset B$ というのはもともと集合 A が集合 B に含まれているということをあらわすものです。

別の言い方をすれば、集合 A は集合 B の部分集合だということもできます。

このとき集合 A に属している元はすべて集合 B の元です (逆は正しくありません)。したがって $x \in A \subset B$ というのは「もし x が集合 A の元であったら、 x は集合 B の元である」、ということになります。



たとえば集合 A を犬科の動物の集合とし、 B を哺乳類の集合としたとき、集合 A に属するもの、従ってたとえば狼のような犬科の動物は必ず集合 B に属することになります。すなわち哺乳類に属しているのです。

いいかえれば、これは「もし A ならば B 」ということを意味しています。

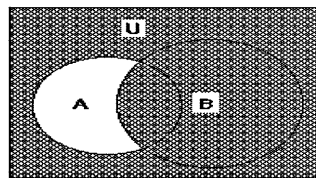
したがって「～ならば～である」というのは、包含関係 implication を前提としています。結果として上の式は「すべての x について、もし x が言語ならば、～である」という条件を満たすもの、ということになります。

たとえば「すべての言語は母音と子音から成る」というのは、明らかにこの条件を満たしていますから、言語的普遍だということができます。

§196 第二のものとしては、単なる因果関係を持つものがあります。これは $a \rightarrow b$ すなわち「もし a ならば b 」という形をもっています。これは先に述べた表し方によれば、次のようになります。

「もし a ならば b である」というのは、集合で考えると、 $\bar{A} \cup B$ となります。どうしてそうなるのでしょうか。実は今挙げた式は $\bar{A} \cap \bar{B}$ という式を変形したもののなのです。

A ならば B ということは、「 A であって、かつ B でないことはない」すなわち A であれば、必ず B である、ということの意味するからです。



これを集合の形で表せば、右の図のようになります。そうすると $\bar{A} \cup B$ というのは、「 A でないか、あるいは B である」ということをあらわしているといえます。

このことから、「もし a ならば b である」という文章は、一見奇妙にも思われますが、実は論理の上では「たとえ a でなくても b である」というばあい
を除外しないことがわかります。

彼らによれば、これはたとえば「もしある言語に双数があれば必ず複数がある」とか、「複数があれば必ず単数がある」というようなばあいだといえます。もう少し解説すると、「もし『ある言語に双数がある』(a) ならば『その言語に複数がある』(b)」というとき、双数があってもなくても、つまり a が成り立っても成り立たなくても、「複数がある」つまり b が正しかつたら、この命題は成り立つ(正しい)ということなのです。したがってこの二つの命題は、単数と双数しかない言語はないと主張するものです。

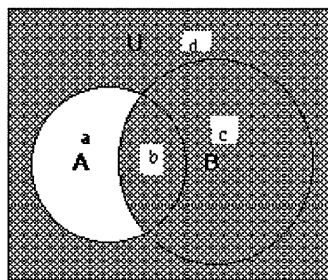
双数というのは「数」のところで述べたことですが、言語によっては一つ
のものをあらわすのは単数ですが二つ以上のものをあらわすときにすぐ複数
を用いるのではなく、二つの時には双数という形を使い、三つ以上になって
初めて複数を使うようになるというばあいがあることを指しています。

印欧語は古くには一般に双数をもっていましたし、スラヴ語でもたとえば
ソルブ語は現在でも双数をもっています。

したがってこの主張自体は経験的に確かなものに思えます。

しかしグリーンバークなどのいっている
 $a \rightarrow b$ というのがこのばあい正しいかどうかについては、疑問に思えるところがあり
ます。

くどいようですが、なぜそう考えるかとい
えば、さきに $a \rightarrow b$ は集合でいえば、右
のような真理集合になるといいました。こ
のばあい b は $A \cap B$ に属していますから、
「 a ならば b 」というのは成り立ちます。



それでは d はどうでしょうか。これは A にも B にも属してはいません。

しかしこのばあいにも「 a ならば b 」はなりたっています。なぜかといえば、
「 d は A に属していないから B にも属していないのだ」といえるからです。

また a のばあいにはこれが成り立たないことは明らかです。

そこで問題になるのは c のばあいです。このばあい c は A に属してはいま

せんが、 B に属しており、しかも B の影のつけられた部分に属していますから、「 a ならば c 」が成り立っているはずで

いいかえれば「 a ならば c 」というのは、ある元 c が A に属していなくても c が B に属していれば正しいということになるのです。

もしそうとすれば、「もしある言語に複数があれば、単数がある」という主張を $a \rightarrow b$ だとすると、複数がなくても単数があれば正しいということになってしまうのではないのでしょうか。

したがってこれもトリヴィアルな意味で正しいといえますが、これが言語学的に何らかの意味を持ち得るようには思えません。たとえば日本語について、「日本語は言語であるから複数があるとすれば単数を持っている」という主張は、論理的には正しいのですが、言語学の立場からすれば、これは正しいことではなく、むしろ「複数がなければ単数もない」というのが正しい主張です。

いいかえれば、「日本語には文法的な数の概念はない」というべきなのです。

これは私たちの直感にかなっていません。グリーンバーグたちの主張が少し変なのではないかというのは、こういう理由なのです。

もしこれを第一のばあいのように、部分集合と全体集合のような包含関係だと考えれば、常に正しいことになりましょう。もちろんグリーンバーグなどが全称記号などを使って数理論理的にあらわさなければ、こんな面倒なことをいう必要は全くないのですが。

そこで $a \rightarrow b$ というものがすべての a について成り立つばあいを考えてみますと、それは集合 $\bar{A} \cup B = U$ すなわち集合 A の普遍集合 U に関する補集合 $\bar{A}$ と B の合併集合が普遍集合に等しいばあいだということが分ります。

これは直感的には上に述べた $\bar{A} \cup B = U$ の白抜きの部分を零にすることですから、結局 $A \subset B = U$ ということになります。これは $a \rightarrow b$ が成り立つための十分条件に他なりません。式で書けば $\forall x(x \in L \subset \forall a \exists b(a \rightarrow b))$ ということになりましょうか³。もっと簡単に言えば、「 a ナラバ b 」というのは、言い換えれば「 a であって b でないものはない」ということを意味して

³ $\exists x$ は「存在記号」existential quantifier といい、ある命題を成り立たせるような x が存在するということを表します。

います。

§197 さてグリーンバーグらの挙げている第三の種類の言語的普遍は、 $a \rightarrow b$ と $b \rightarrow a$ の両方が成り立つものです。

これは一般に「反対称律」antisymmetric relation と呼ばれているものですが、たとえば関係 $\leq$, $\geq$ などがこれに当たります。もし $a \leq b$ と $b \leq a$ とが同時に成り立つと、 $a = b$ が成り立つ、というものです。

グリーンバーグの挙げている例では、「側音のクリックをもつ言語は、歯音のクリックももっていて、その逆もいえる」というものがこれに当たります。側音 laterals というのは、舌の横側から空気がでるもので、[l] がその代表的なものです。また歯音 dentals というのは舌と歯とが接触して破裂を起す [t], [d] など、同じく摩擦をおこす [s], [z], [θ], [ð] などがその典型的なものです。

またクリック click というのは「舌打ち」をするばあいのように、肺の吸気とは関係なく、口の中だけで外からの空気を呼込むことで立てる音で、「吸着音」とも訳されます。アフリカのブッシュマン Bushman のことば、コイサン Koisán のことば、ズールー語 Zulu などではこのような音が言語の正式な音韻になっているといわれます。表記は人によっていろいろですが、国際標音記号 IPA (International phonetic alphabet — いわゆる「音声記号」) では、吸着音の中の歯音は [ɖ], 反り舌音 retroflex⁴ は [ɟ], 軟口蓋音は [ɕ], 側音は [ɺ] によってあらわされます。

グリーンバーグたちは、このほか第二、第三の主張に蓋然性の概念を導入して、第四、第五の言語的普遍を定義しようとしています。

彼らはまず第四について、これが「すべての言語において、事象 a をもつ可能性が、他の事象をもつ可能性よりも大きい」という形をしているといいます。

そして第五のものは、「もしある言語に事象 a があるとすれば、事象 b があるばあいが、ないばあいよりも大きい」という形をしているといいます。

しかし言語的普遍というものが、論理的なものであるとすれば、ここに蓋

⁴ 「反り舌音」というのは、舌の先をあげて後ろにそらして発音する音で、ロシア語の ш, ж は反り舌音です。反り舌音はたとえばサンスクリット (梵語) には規則的にみられる音で、[ɖ], [ɟ], [ɺ], [ɻ], [ɹ] のほか、有気音 [ɖʰ], [ɟʰ] があります。

またこのほかに言語によれば [ɺ] および [ɻ] もみられるといいます [56, p.145]。またこの後にあげている「軟口蓋音」といわれるのは [k] とか [g] とかが代表的な音です [ibid. p.151]。

然性を入れてくるということには、疑問を感じないわけにはいきません。皆さんはどうお考えでしょうか。

§198 グリーンバーグらの言語的普遍という考え方はこれを用いて言語を分類する基準になると考えられるようになりました。たとえば双数をもつ言語ともたない言語というような分類です。近年特にアメリカでこの考え方が広まっていました。

しかしこれは言語の外面的な形を基準にして言語の類型を考えようという点では、フンボルトやサピアの方法と、原理的に変ったものではありませんでした。

もしこれを用いるとすれば、まず第一に問題になるのは、言語のどのような外形的な特徴を基本的な特徴としてとらえるかということです。

ところが言語にはいろいろな特徴がありますから、どれを取るかという基準がなければなりません。特徴を比較してこれがより本質的なものだと決定する基準が必要になるのです。

しかしそのようなものは人によってさまざまで、合意を求めることは困難でした。

言語的普遍による類型学の決定的な欠陥は今述べたような基準が理論の内部で用意できないというところにあったと思われるのです。

第 十 七 話

言語類型学 II

ロシアにおける類型学的研究

1. 先駆者たち

§199 ロシアにおいてはポテブニャ Александр Афанасьевич Потебня (1835-1891) や、ボドゥエン・デ・クルテネ Jan Ignacy Baudouin de Courtenay (1845-1929) という言語学者がいました。

ポテブニャは、フンボルトの思想に強い影響を受けましたが、彼自身もまた、現在に至るまでロシアの思想、言語学などに強い影響を与えています。

またボドゥエン・デ・クルテネは、ロシア言語学において、ペテルブルグ学派、モスクワ学派と並ぶ、カザン学派の祖となった人です。ボドゥエン・デ・クルテネ Бодуэн де Куртене というのはロシア語の読みですが、綴りから分りますように、フランス系の名前です。それでフランス風にボードゥアン・ドゥ・クルトゥネと呼ぶ人もいます。

フランス系のポーランド人であったこのボドゥエンの考えは、機能主義的なものといわれ、後に機能的構造主義言語学を標榜したプラーク学派に受け継がれました。

このような学問的な雰囲気の一つの特徴として、言語の意味の問題や、言語と思惟の関係などに考察の重点があったといわれています。

例えばポテブニャは、言語を「もの」ではなく「働き」であるとするフンボルトの考えを受け継ぎ、もしそう考えれば、品詞などは人間の活動から切り離されて独立した、ア・プリオリなカテゴリーではなく、人間の活動の中で形成され、発達するものだと考えていました。そしてこういう文法的なカテゴリーが変化すれば、やがてその全体としての文も変化しないわけにはいかないのだというのが、彼の考えでした。

したがって、思惟の変化と言語の諸カテゴリーとの変化は、一つの歴史的な段階に応じたものだということになります。

このことから、ロシアにおいては、言語と思惟の構造との関係に絶えず注

意が払われていたということが出来ます。

§200 一方ロシアは帝政時代にカフカスの諸民族を征服しましたが、この地域の諸民族の言語が、ロシア語をはじめとするヨーロッパの言語とは非常に違った構造を持っていることに、ロシアの言語学者たちは、極めて早い時期から注目していました。その中で最も有名なのがウスラル Пётр Карлович Услар (1816-1875) でした。彼はカフカスのナフ・ダゲスタン諸語の記述を行いました。これらの言語は、後に「能格言語」 ergative languages とよばれるようになった構造を持っていました。

彼は、これらの言語が動詞の能動形を持っておらず、中動と受動の形しかないこと、主語が具格の働きも持っていること、動詞が文法的に一致するのは主語とではなく、目的語とであること、などを述べています。

§201 これらの観察は、現在では修正しなければなりませんが、印欧語しか知らない当時の人には、これは驚くべきことでした。

中動相というのは、印欧語の古い段階に、能動相と共にあったカテゴリーです。たとえば古典ギリシア語のばあい、*lúō lúō* は「洗う」という意味ですが、中動相 *lúomai lúomai* といえば、「自分の身体を洗う」というような意味になります。行為をする人と目的語とが同じであることから、中動相というようになったのです。

サンスクリットではこれは「自分に対する」「ことば」 *ātmane-pada* といい、梵語学では「為自言」と訳されます。能動相は「より遠い、対立する」「ことば」 *parasmāi-pada* といい、「為他言」と訳されます。

かえって印欧語の受動相は、色々な点から見て、後になってできて来たものだと思います。ギリシア語などに見られますように、印欧語では英語の *be* 動詞に当る連辞に英語の過去分詞に当る受動分詞をつけて作られる複合的な受動相は、はじめ完了系 *perfect system* の受動相として作られるようになりましたが、不完了系 *imperfect system* の受動相は、中動相と同じ形をしていました。というより、ばあいによっては中動相の形をかりて、受動相を表すようになったといえるのです。

そのためこれらの中動相は、中・受動相 *medio-passive* と呼ばれることも

あります。これらは次第に複合的な形によって取換えられ、やがて消滅してしまいます。

中動相が本来もっていた色々な意味は、たとえば受動の形をとったり、ロシア語の *ся* 動詞とか、フランス語の「代名動詞」のように、印欧語の「自分自身」を表す **se* (cf. E. *self*) に由来する要素をつけて語彙的に表したりすることで、その記憶をとどめています。

§202 たとえば、ギリシア語で「恐れる、怖がる」に当る動詞には能動の形はなく、常に中動の形をもっています。phobéomai φοβέομαι 「私は怖い」。ラテン語でもこれに当る動詞は受動の形で表されます。vereor です。ロシア語では先に述べましたように、*ся* という要素をつけて боя́ться といいます。

この動詞には *ся* のない形はありません。英語ではこれは be afraid of として表されますが、この afraid はもともと今は使われなくなった affray の過去分詞で、本来は受動形だといえます¹。

おもしろいことに、ギリシア語の φοβέομαι もラテン語の vereor も、またロシア語の боя́ться も、みな英語の所有格に当る属格 (ロシア語ではこれを「生格」といいます) を要求しています。

「犬が怖い」というとき、ロシア語では「犬」собака の生格 собаки をつけて боя́ться собаки とします。ラテン語では「犬」は canis ですが、英語の目的格に当る対格 canem または属格 canis をとります。ギリシア語ではこの動詞は対格をとることが多いのですが、属格をとることも報告されています。もしそうとすれば、ギリシア語では「犬」κύων は φοβέομαι κύωνος ということができるでしょう。英語でも be afraid of のように of が使われますが、これも印欧語のシンタクスの名残りかもしれません。フランス語では「怖い」というのは名詞 peur を使います。ここでも avoir peur de のように、of に当る de が使われているのです。

2. 活格言語と能格言語

§203 ウスラルがどうしてナフ・ダゲスタン諸語に中動と受動しかないと

¹今は名詞として使われている affray は breach of the peace, caused by fighting or riot in the public place 「公共の場における戦いや反乱によって起された安寧の破壊」という意味だそうです。これも afraid と近縁の語です。

いったかということを考えると、能格言語では、格の標識を何も持たない「絶対格」は、「自動詞」の主語にもなり、またこれに「能格」が加わって意味上の主語となると、「他動詞」の目的語を表すことになりました。後に「活格言語」として「能格言語」とは異なる言語類型であると考えられるようになった諸言語も、文の構造については、能格言語とあまり変りがないように思われていました。活格言語が能格言語の変種に過ぎないと長い間考えられてきたのはこのためでした。

今、能格言語に関して、括弧をつけて「自動詞」と「他動詞」というように書きましたが、これは厳密に言えば、今の対格言語の他動詞や自動詞の区別とは違っています。能格に立つ名詞と共に用いられる動詞は「能格動詞」といわれ、また絶対格に立つ動詞と用いられるものは「絶対格動詞」といわれます。そして「能格動詞」には他動詞の他に自動詞も含まれているのです。

しかし一方では、能格動詞に意味上の「他動詞」が多く属しており、絶対格動詞に意味上の「自動詞」が多く属していることも確かですが、意味上は自動詞でも能格動詞に属するものもあり、またその逆もあります。

活格言語のばあいには、意味上の「自動詞」と「他動詞」の区別はもっと曖昧で、「活格動詞」には、自動詞も他動詞も含まれていました。これに対して「絶対格動詞」には、自動詞しかありませんでした。従って当初には、活格言語と能格言語の違いは、原理的なものではなく、量的なものに過ぎないと考えられていたのです。しかしたとえば「横たわっている」という意味の動詞にしても、「立っている」という動詞にしても、生物が立っていたり横たわっていたりするばあいと、無生物のばあいとは、しばしば異なる動詞が使われていました。そして生物に関するものは「活格動詞」に、無生物に関するものは「絶対格動詞」に属していたのです。

意味上の他動詞になれるのは、活格動詞に限られていました。無生物に関する動詞というのは、状態動詞か、私たちのいう形容詞に当る、性質を表す動詞でした。従ってはじめは活格言語には形容詞に当る品詞は存在していなかったのです。

このようなことから活格言語は能格言語とは原理的に異なる類型であって、その原理は「生物」と「生物でないもの」を区別するところにあると考えられるようになったのです。

また能格言語には、活格言語のばあいと同じように、同じ動詞が他動の意味にも自動の意味にも用いられるものが数多くあります。これをクリモフは *diffused verbs* と名付けています。

前にもいいましたが、印欧語のような対格言語を話す人々にとっては、活格言語や能格言語の絶対格のように、同じ格が主語になったり目的語になったりすることは理解できない、常識に反したことがらでした。それでウスラルは、

能格	+	絶対格	+	能格動詞
次郎によって		太郎が		殺される
		絶対格	+	絶対格動詞
		太郎が		死ぬ

という二つの構文を考えてみて、能格動詞、すなわちウスラルのいう「他動詞」は受動形しかもっていないと考えたのだと思います。

たとえば「他動詞」のばあいには「太郎が次郎によって殺される」→「次郎が太郎を殺す」となると考えたのだと思います。

そうすれば「太郎が死ぬ」という文と同じように、「太郎」が同じ格形をもつことが矛盾なく説明できることになります。更にそうすれば「主格が具格の働きももつ」ということもよく説明できます。

「具格」*instrumentalis* というのは、行為の道具を表したり、行為者を表したりして「～によって」という意味をもつことが多くあります。格の名前もそういうことからつけられたのですが、ロシア語ではこれに当る格は「造格」といいます。何かを作る格という意味です。したがってこれは能格動詞の受動説にとって都合のよい考え方になります。

この「能格受動説」はかなり広く信じられ、有力な学者たちでこの説に賛同する人も見られたといえます。

3. 包含事象と随件事象

§204 しかし能動と受動というのは、セットになってはじめて意味をもつもので、片方が欠けているときに能動とか受動とかいうことはできないはずで

たとえば「上」という概念がないときには、「下」という概念もまた、存在することはできません。能格受動説は、その後能格言語についての研究が進んでいく中で、やがて克服されていきます。

§205 ここで今し方述べた能格言語と活格言語の関係をまとめ、それに従って内容的類型学において極めて重要な概念について説明しておきましょう。

活格言語は動詞を他動詞と自動詞とに分けるのではなく、生きものの行為あるいは状態を表すかどうかによって区別することを原則にしていました。生きものに関係する動詞を「活格動詞」、ものに^{もの}関係するものを「絶対格動詞」といいます。

ところが能格言語のばあい、能格と共に使われる「能格動詞」の中には意味上の「他動詞」に当るものが多く見られ、「絶対格動詞」の中には、意味上の「自動詞」に当るものが多くなっていました。

しかし diffused verbs のように、活格言語のばあいと同じく、意味上の自動詞にも、また意味上の他動詞にも用いられる動詞も数多くありました。

これは何を意味するのでしょうか。活格言語は生きものであるかないかを言語の構造の前提としていと考えられますから、活格動詞には生きものに関係する動詞があり、そうでない絶対格動詞にも^{もの}に関係する動詞が集っているという分類の仕方は、活格言語の原理にかなったものだといえます。

どうしてかといえば、生きものに関係する活格動詞は、当然のことながら自分で行動する意味上の自動詞に当るものも、また自分以外のものに行為を及ぼす他動詞のようなものも含むと考えられるからです。逆に絶対格動詞が無生物に関係するものだとするれば、これは「石が大きい」というような状態動詞か、「石が転がる」というようなものしか考えられません。

このように言語の成り立ちに基づく類型の原理にかなったものを、クリモフは импликация implication と呼びました。私はこれに「包含事象」という訳語を当てています。

§206 一方、能格言語のばあいにはすでに見ましたように、この類型に属する言語では、意味的な他動詞と意味的な自動詞の分化がかなり進んでい

ます。

この過程は、後に触れますように、まず「眠る」、「ふるえる」、「泣く」、「忘れる」といったような、生物の行う行為ではありますが、生物の恣意で左右することのできない不随意的行為が、生物と関係する活格動詞から絶対格動詞へと移ることによって始ったのではないかと思います。

そうすると全てを生きものか生きものでないかという原理に立っていた活格言語は、その原理を変えることになります。能格言語の発生です。一方能格言語には、そのほかに *diffused verbs* があります。また文の構造は活格言語とあまり変りがありません。

このような能格言語のもっている構成原理は、どのようなものでしょうか。

おそらくは行為を他に及ぼすという意味での積極的な行為者であるかどうかというのが、その構成原理になったのだと思います。そのために、この行為者を表す能格と共に用いられる能格動詞に、意味的な他動詞が属することが多くなってきているのだと思うのです。

しかし一方ではたとえ意味的な自動詞であっても、生きものに関わり、随意的な行為を表すものは、全部ではないにしても、なお能格動詞にとどまっていたと考えられます。

もしある意味上の他動詞と意味上の自動詞との区別が、かなりの程度に能格動詞と絶対格動詞の区別と重なり合うことになれば、たとえば「殺す」のように、積極的に他に行為を及ぼす動詞と、「死ぬ」のように不随意的行為を表すものとは、語彙のレベルにおいても分化してきたと考えるのが自然でしょう。

もしそうだとすれば、意味上の他動詞が能格動詞に移っていったために、絶対格動詞には意味上の自動詞が増えることになったでしょうし、また生物に関係はしているが、意味上は状態動詞や自動詞であるものが、生物であるかないかという原理が薄れて来るにつれて、新たにここに移ってくるようにもなったでしょう。

このように考えれば、能格動詞と絶対格動詞という分類は、生きものであるかないかという原理が弱まり、代りに積極的な行為者という概念が強化さ

れることによって、成立したものだといえることができます。

§207 しかし他動詞と自動詞の区別が文法的カテゴリーになっていない段階では、能動相と受動相の区別もまた存在することはできないでしょう。従ってこのカテゴリーが能格言語に欠けているのは、能格言語の包含事象であるといえます。

§208 それでは diffused verbs といわれる動詞群はどうでしょうか。

これは先に見ましたように、自動詞と他動詞の区別のないものですから、能格言語の原理からは説明できません。包含事象ではないのです。これを説明できるのは、活格言語の原理からでなくてはなりません。

このように、ある言語類型の基本的な構成原理から説明はできないが、この言語類型に属するいろいろな言語にしばしば見られるものを、クリモフは *фреквенталия* frequentary と名付けました。この言葉の語源と考えられるのは、ラテン語の *frequēns* で、「しばしば見られる」というような意味をもっています。私はこれに「随件事象」という訳語を与えました。

今説明したことから分るように、「随件事象」は、多くのばあい、ある言語類型の言語が前の類型の言語から受け継いだものだといえることができます。言語というものは連続して変化するものですから、類型が変化したからといって、前の類型に用いられていたものがすぐに無くなるということはありません。そんなことがあったら、年寄と若い人との会話が成り立たなくなるに違いありません。しかしこれらの受け継いだものは、未だしばしば使われてはいても、新しい類型の中心原理からは説明できなくなります。

このような随件事象は、以前の類型に属する言語から受け継いだものばかりだとは限りません。例えば活格言語に属するある言語や能格言語に属するある言語のように、後期の発展段階にあるものに、しばしば「持つ」という動詞が現れて来ます。「持つ」という意味は、非常に「奇妙」なものです。なぜかといえば、これは状態動詞なのに「他動詞」に属しているからです。他動詞と自動詞を区別しない活格言語や能格言語では原理的に説明できないものです。そこでは「ある、存在する」と「持つ」という意味は同じことだと考えられているからです。日本語は「持つ」といういい方を避ける傾向の言

語ですから、「私はその本を持つ」という言い方よりは、「その本は私のところにある」という言い方が自然に感じられます。他動詞と自動詞の区別が強い言語のばあいほど、「ある」と「持つ」を区別する傾向が強いと考えられます。

このように、随件事象には過去の類型から受け継いだものばかりではなく、未来の類型を「先取り」したものもあることが分ります。もちろんこれらはその言語の中心的な論理から説明することはできません。しかしむしろそのような「先取り」したものが増えることによって、言語の類型が次第に変化していったのだと思われます。

このことの持つ理論的な意味は極めて重大です。なぜならば、「随件事象」というものがあることは、異なる言語類型の間に時間的な発展段階の違いがあることを意味しているからです。

逆に、ある類型の前の類型は何かということは、「随件事象」の性質を調べることによって決定できることになります。

§209 どうしてこのことがそんなに重要なのかといいますと、今まで知られている言語の歴史の中で、その言語の類型が変化したことを直接に示す例が全くないからなのです。

サンスクリットもヴェーダも、またホメーロスのギリシア語も、歴史に現れたときには、すでに対格言語でありました。このことから、言語の類型の発展というのは、気の遠くなるような長い時間をかけて行われて来たものだと考えられています。ですから随件事象は、これらの言語の前の類型は何だったのかを知る、手がかりの最も重要なものといえます。

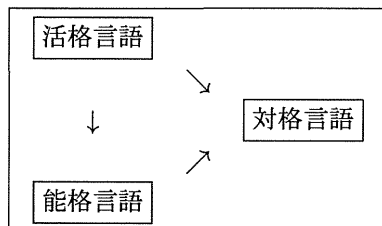
§210 いずれにしても、このようにして、活格言語と能格言語、及び対格言語という三つの言語類型についての、発展に関する関係がだんだん明らかになってきました。

内容的類型学の現在の段階では、活格言語は能格言語に発展するか、あるいは能格言語を経ずに直接に対格言語に発展する可能性があるということ、また対格言語には能格言語から発展することもあるということが、いわれています。

そして現在のところ印欧語は活格言語から直接に発達したという説が有力です。

このような事情で、印欧語比較文法が再び脚光を浴びようになってきました。

しかし私自身は、活格言語が直接対格言語に発達したとしても、能格的発展段階を全く経なかったという考え方には懐疑的です。それは上で述べたように、活



格言語に見られる動詞の類別が、対格言語に見られる自動詞と他動詞に再編される過程には、どうしても能格言語に見られるような過渡的な段階を考えないわけには行かないからです。

もちろんこの過渡的な段階が極めて短い時間で終わった可能性はありますので、そのばあいには活格言語が直接対格言語に移行したといっても、事実はさほど違ったことにはならないでしょう。

§211 先ほど述べたように、随件事象は多くのばあい一つ前の段階の言語類型がそのまま受け継がれて、まだ新しい言語類型の中に構造的に組み込まれていないといいましたが、随件事象にはもう一つのばあいが考えられ、言語類型が次の言語類型に発達する前触れとして、次の言語タイプの包含事象となるものが、その言語タイプの内部に萌芽的に随件事象として発生するばあいも見られます。

以上をまとめれば、先に述べたように、「持つ」という動詞は自動詞と他動詞の区別を原理とする対格言語においてはじめて存在が可能になる動詞だと考えられ、事実多くの活格言語、能格言語はこのような動詞を持っていませんが、能格あるいは活格の言語タイプの後期に当ると考えられる言語が、この動詞を持っていることが報告されています。言い換えれば、これらの言語においては、来るべき未来の類型である、対格言語に導く先駆けとして、このような現象が活格あるいは能格言語の内部に胚胎していたとみることができるのです。

§212 未来のことというのはそれに類するものが存在しないために、予測

が難しいのは当然です。実際対格言語類型が全く存在しなかった大昔の人が、もし対格言語を学んだとしたら、何という変な言語だろうと思うに違いありません。たとえば印欧語の他の言語では、Jack gave Jill a book. という文を受身にこなさいといわれたら、普通の印欧語のばあいには A book was given to Jill (by Jack). という言い方しかできません。ところが不思議なことに英語では Jill was given a book (by Jack). という言い方もできます。

これが論理的でないことは明らかなので、何よりも文法家が困りました。そこで彼らは、これは「保留目的」retain object だといっています。

しかしどんな名前を付けても、この構文の非論理性を消し去ることはできません。これについては、以前にチェコのすぐれた言語学者で英語学者だったヴィレーム・マテジウス Vilém Mathesius (1882-1945) が、チェコ語と英語の主語を比較して、英語は主語と話のテーマを一致させようとする強い傾向を持っており、そのために少々無理だと思われる構文を作り出してきたと述べています。

ロシア語でもチェコ語でも語順は英語よりもはるかに自由ですから、無理にそうしなくてもテーマの連続性は保てます。たとえばチェコ語で Jan dal dívce knihu. (ヤン・主格 与えた・男性 女の子・単数・与格 本・単数・対格 = ヤンは女の子に本をあげた) というばあい、ヤンは主語で話のテーマですが、本をテーマにしたければ、語順を変えて Knihu dal Jan dívce. ということもできますし、女の子をテーマにしたければ、Dívce dal Jan knihu. ということもできます。

英語に変化がないことも、動詞の変化が少ないことも、他の印欧語の諸言語と異なった点ですが、こういう変った言葉は、もしかすると対格言語の後に来るべき、新しい言語類型の先駆けなのかもしれません。みなさんはどう思いますか。

§213 またロシア語でもそうですが、印欧語では動詞は主語と文法的な一致をするのが決まりです。たとえばラテン語のばあい *amō* といえば「私が愛する」という意味ですし、*amās* といえば「君が愛する」という意味になります。それが活格言語や能格言語に一般的に見られるように、主語とは文法的に一致しないで、たとえば「愛する」相手の人称や性などと文法的な一致をす

るというのは、考えられないことでした。

今ではこういうように目的語と文法的に一致をするものを「対象活用」 objective conjugation と呼んでいます。これに対して主語と文法的に一致するものは「主体活用」 subjective conjugation といいます。

詳しい話はここでする余裕がありませんので、いまいったような手探りに近い研究が 1920 年代から 1940 年代を通じて活発に行われ、その結果ソヴェトの言語学は、言語は主語・述語・目的語の関係のあり方によって、いくつかの類型に分類できるという結果に到達しました。我々の知っているヨーロッパの諸言語などは、そのような類型の一つに過ぎないことが分ってきたのです。

第十八話

内容的類型学の概要 I

1. 活格言語

§214 すでにいいましたように、活格言語、能格言語、対格言語という三つの類型を比べてみると、能格言語は活格言語と対格言語の中間に位置する言語類型だと考えられます。このため内容的な言語類型というものを考えるときには、活格言語と対格言語とを比較すれば最もわかりやすいと思われます。ここでまず活格言語を取り上げるのはそのためです。

もっとも対格言語に属するものが私たちに一番身近な外国語である英語やドイツ語、フランス語であるために、これまで言語とはそういうものだと思然と考えて来ましたが、こういう対格言語とは全く違う構造的な論理を持った言語があるなどとはとても考えられなかったために、かえって余りよく分っていないのが正直なところだと思います。

これからは活格言語や能格言語のように異なった類型に属する言語との比較によって、対格言語の特徴も、だんだん分つてくると期待されます。

内容的類型学は主語・述語・目的語の関係の型によって言語を分類するものだといいました。

活格言語の基礎になっている関係の原理は、大まかに言って生物であるか生物でないかという分類だと思われます。生物と考えられるのは動物と植物、生物ではないものはそれ以外のものです。

しかしこれにはヴァリエーションがあって、植物を生物ではない「もの」のクラスに属すると考えている言語もあります。活格言語ではありませんが、ロシア語はこのヴァリエーションが文法に反映しており、名詞は「活動体」と「不活動体」とに分類されます。

どうしてれっきとした印欧語に属するロシア語がこういう分類を持つようになったのかについては、分っていません。もっとも私なりの仮説はあります。

ただここで言うておかなければならないのは、この分類が例外を許さないような論理的なものではない、ということです。

たとえばロシア語では кукла「人形」は活動体に属しています。покойник

「故人」, мертвец 「死人」などは活動体でなくなったからこそその名を持つようになったはずですが, やはり活動体に属しています。

2. 名詞の性と格

§215 生物と無生物の区別を基本原則とすれば, 名詞の性は生物を示す活性とものを示す不活性とに分れることになります。

また活性のばあいには行為を他におよぼすことを表す活格と, 行為を受けることを表す格が区別されることになります。この後の格は特に標識を持たないことが多いので, 絶対格と呼ばれます。

これに対して不活性に属する名詞は, 行為を他におよぼすことができませんから, 絶対格の形しか持ちません。

印欧語では, 語幹を安定するために用いられると考えられていた幹母音 thematic vowel をもつ中性名詞は *-m という語尾を持っており, 主格と対格が同じ形をしていると考えられています。

たとえば *e と *o とが交替する O 語幹名詞のばあいは *dō- 「与える」という語根から作られた *dō-n-o-m > Lat. dōnum 「贈物」, dō-r-o-m > Gr. dōron δῶρον 「贈物」となります。

しかしたとえばギリシア語で不変化中性名詞の alphi ἄλφι 「挽割り大麦」は, 同じ意味の alphiton ἄλφιτον の元の形で, *-i は語尾ではないとされています。同じように女性名詞, themis θέμις 「置かれたもの = 慣習法」, も元々は中性名詞の *themi に *-s をつけたものだといえます。

*-u, *-r/n のような語末を持つものもこれと平行していて, 古い中性名詞だということです [3, p.7, pp.34-35]。

そうすると, 印欧語の中性名詞は古い時代には標識を持たない, 裸の形であった可能性が濃いということになります。いいかえればこれは活格言語の絶対格から発生したと考えられることを意味しています。

更にもしそうだとすると, 印欧語で中性名詞の主格と対格が同じ形だというのは, 実は活格言語時代の不活性名詞から中性名詞が生じたためだと考えることができるでしょう。なぜかといえば, はじめに言ったように不活性名詞は絶対格しか持たないからです。印欧語が対格言語に発展したときに, 主

格に対格の形を持ってきたと考えられます。

§216 ところで活格は行為を他におよぼすことを示す格だと考えられます。言い換えれば対格言語の他動詞の主語に当るものです。これは当然生物でなければなりません。したがって活格を持つことのできるのは、生物、すなわち活性に属する名詞だけということになります。

しかし逆に活性に属するものでも、行為を他から受けることはあります。このばあいには活性名詞は絶対格をとります。したがって活性名詞は、活格と絶対格の両方の形をとることができます。

印欧語が歴史の中にその姿を現したとき、これは既に男性、女性、中性という三つの性をもっていました。中性が活格言語の不活性を受け継いだものだとすれば、男性と女性も活性名詞から生じたと考えるほかはありません。

実際、印欧語に属している言語に、男性・女性に対して中性が異なった語幹を持つばあいがしばしば見られます。

たとえばラテン語の *ille* 「彼の」という遠称の代名詞は男性形が *ille*、女性形が *illa* であるのに対して、中性形は *illud* という形をもっています。

またギリシア語の定冠詞は、男性形 *ho ó*、女性形 *hē ħ*、であるのに、中性形は *to to* という形をもっています。これは印欧祖語の **so*, **sā*, **to* に由来するものです。

サンスクリットでは男性と女性は指示詞 *sa*, *sā*、後のものは 3 人称代名詞 *ta* となっています¹。

3. 動 詞

(1) 活格動詞と絶対動詞

§217 前にも言いましたように、活格言語では他動詞と自動詞という区別は、本来的に存在していません。

しかし動詞の区別はあります。普通活性と関係づけられる活格動詞と、不活性と関係づけられる絶対格動詞がこれです。

たとえば南米のトゥピ・グアラニ語族に属するカマユラ語では、活格動詞には *maraká* 「歌う」、*ha* 「行く」、*manó* 「死ぬ」、*jan* 「走る」、*juká* 「殺

¹ギリシア語では語頭の **s* は *h* の音に変化しました。またサンスクリットでは母音 **e*, **a*, **o* および **ē*, *ā*, *ō* はすべて *a* および *ā* になりました。

す」, nupá「叩く, 打つ」, kutúk「(方々) 刺して穴をあける」, 'atá「歩く」, wewúj「(流れに沿って) 泳ぐ」, wewé「飛ぶ」, apá「燃やす, 焼く」, k'aháp「知っている, 能力がある」, me'éŋ「与える」, momót「投げる, 捨てる」, pejú「(風が) 吹く」, potát「欲する, したい」, pəhák「持っている, 握っている」, 'u「食べる」, 'ú「(水を) 飲む」, u'ú「かみつく」, pətét「(乳房を) 吸う」などがあるということです。

ここで注目する点は二つあるといえましょう。一つは pejú「(風が) 吹く」のように、現在ならば生物に関係しないと思われる動詞が含まれていることです。

第二はたとえば manó「死ぬ」と juká「殺す」のように、意味的な自動詞と他動詞が異なった語で表されていることです [34] (邦訳 [48, p.68])。

最初のものは後でも述べることになりますが、一口に言えば animism, すなわち靈魂を持っていると考えられ、畏怖される対象を、活性に属していると考えた結果だと思われます。ロシア語でもたとえば дух「靈魂」, бог「神」のようなものは活動体に属しています。日本でも「神」は普通「神様」のように、生あるものとして扱われています。

第二のものは活格言語本来のものではありません。活格言語類型は本来他動詞と自動詞の区別を持っていなかったはずだからです。したがってこれは自動詞と他動詞の区別を行う対格言語に近づいている、随伴事象だということです。このことからカマユラ語は活格言語の後期の発展段階にある言語だといえるでしょう。

§218 活格動詞に対立するカテゴリーは絶対格動詞ですが、これは本来不活性と関係づけられるものだと思います。

不活性の名詞は、当然のことですが、行為を他におよぼすことを示す活格を持つことがありません。絶対格しかとることはないのです。

したがって不活性名詞を意味上の主語とするばあいにも、絶対格をとることになりますが、このようなばあいの述語はたとえば「長い」, 「大きい」, 「重い」というような、状態動詞になります。

これらの活格言語には本来形容詞はなく、後になって状態動詞から発生するといわれています。

したがって形容詞を独立の品詞として持っているたとえば印欧語などでは、別に述語動詞を使うことが必要になります。これが連辞 *copula* といわれるもので、英語の *be* 動詞がこれに当たります。

日本語のばあいには形容詞は終止形をとってそのまま述語になりますから、連辞はいらないのです。形容動詞といわれるものは、形容詞よりも述語性が高いと考えられますので、絶対格動詞は日本語の形容動詞により近い働きを持っているのかもしれません。

§219 一方、状態動詞でも、もっぱら活格名詞について述べるばあいがあります。このときは今述べた原理に従えば活格動詞でなくてはなりません。グアラニ語で、*nemboó*「立っている」(*a-nemboó*「私が立っている」), *wapó*「座っている」(*a-wapó*「私が座っている」), *ké*「眠っている」, *nenó*「横たわっている」(*a-nenó*「私が横たわっている」)のような動詞が活格動詞に入っているということです [48, p.144].

しかしこのような分類には言語によってゆれがあることが知られています。たとえば先に挙げたグアラニ語のばあい、明らかに生物に関係すると思われる状態動詞でも絶対動詞に属しているものがあります。*arərəí*「震える」, *asó*「痛い、病気だ」, *éra*「～という名である」, *anjwinó*「悪臭がする」, *karé*「びっこである」, *kurusú*「ちぢむ、短くなる」, *i?ái*「汗をかく」, *opewó*「まどろむ」, *pú*「音がする」, *saramí*「こぼれる、散らばる」, *wotayerá*「花が咲く」, *hāsé*「泣く」, *mandu?á*「覚えている」, *teseráy*「忘れる」, *uhéy*「がつがつする」, *ware'á*「ひもじい」, *apu?á*「丸い」, *gwasú*「大きい」, *mareté*「強い」, *pukú*「高い、長い」, *tuyá*「老いている」などがこれに属するといいます [48, pp.70-71].

§220 これらの動詞は意味上の主語が自由にできない、不随意の行為をあらわすものだということができるでしょう。こういう不随意行為が絶対格動詞に移ることによって、やがてほかの自動詞も絶対動詞に移動するきっかけを作っているということができましよう。他動詞の類と自動詞の類が完全に分離したのが対格言語だと考えられるからです。そしてその中間的な段階が能格言語だと考えられます。

もっとも対格言語といっても、他動詞と自動詞が理想的な形で完全に分離しているとは限りません。そこにはいろいろな問題も含まれています。

たとえば英語のばあい、「達する」という意味を表す動詞として arrive at と reach とがあります。そして arrive at は自動詞で、reach は他動詞です。現実には同じことをしているのに、自動詞と他動詞の区別があるのはおかしいのですが、これはこれらの動詞のたどってきた歴史が語彙の意味に反映しているからなのです。

さらに日本語で「角を曲る」といいます。日本語のばあいには自動詞とか他動詞とかあまりやかましくいいませんが、日本人の意識としてはこのばあい、他動詞と考えていると思われます。

英語のばあい to turn the corner といいます。他動詞です。しかし同時に Turn to the left at the first crossing. などともいいます。自動詞です。ロシア語では svernút' v pereúlok свернуть в переулок といい、やはり自動詞です。

よく考えてみれば「曲る」という行為は本来存在しなくて、現実に行われている「行為」はたとえば「ある人物」が「歩いて」いて、ある「地点」で右か左かへ、多くのばあい 90 度近く歩く方向を変えることを意味していますから、「曲る」という行為が「角」におよぼされることはないはずで、「曲る」ためには「角」が必要になるというだけのことなのです。

こういう問題を扱うのは意味論、特に一般意味論という分野ですが、内容的類型学で自動詞と他動詞が区別されているというのは、この区別が対格/目的格をとるという形で文法的な規則となっているという意味なのです。

(2) 相の問題

§221 ここで問題とする「相」というのは、voice のことで、英文法は「態」と訳していますが他の言語のばあい、多くは「相」を使っています。相は英語に見られるように、能動相と受動相の区別があります(受動相のことを「被動相」ということもあります)。

日本語でも英語とはちょっと違いますが「受身」という形があります。しかしこれは自動詞と他動詞の区別のある言語、すなわち対格言語に特有な文法カテゴリーだということがわかってきました。自動詞と他動詞の区別がな

ければ、受動相もあり得ないのです。

最初これに気付いたのはカフカスの諸言語を研究していた、主にロシアの学者たちであったと思われます。カフカスの諸言語は、後に能格言語といわれるようになった類型に属する特徴を持ち、したがって自動詞と他動詞は未だ完全には分離していませんでしたし、能格と絶対格の区別は活格言語の活格と絶対格と同じような分化の仕方をしていました。すなわち、絶対格は意味上の自動詞の主語および意味上の他動詞の目的語になることができました。これに対して能格は他動詞の主語の役割をもっていました。

これらの研究者たちはほとんどがロシアやヨーロッパの人々でしたから、自分たちのことばには当然あるはずの被動相が存在しないことに、当惑を隠せなかったようです。

そこで何とかつじつまを合せようと考え出されたのが、他動詞受動相説というものでした。これは自動詞は能動形で使われるが他動詞のばあいには常に受動相の形で用いられる、というものでした。

これはかなり長い間信じられていた説だといわれますが、この説は言い換えれば動詞には他動詞と自動詞の区別があるはずだという「信仰」に支えられていたといえることができるでしょう。

しかしたとえこの「信仰」を受け入れたとしても、この説には問題がありました。

本来能動相と受動相という区別は、互いに対になっているから存在することができるものでした。したがってこれは「数」のカテゴリーと同じだと考えられます。日本語のように「複数」がない言語では「単数」というカテゴリーも存在しないのです。

ですから能動形がなくて受動形だけを持つ言語などというのは、理論的に存在するはずがないのです。

(3) インディアンの言語に見られる version

§222 このことから、能動相、受動相というカテゴリーは、実は普遍的なカテゴリーではなく、対格言語にだけ特有なものであることが分ってきました。

ここで果して活格言語や能格言語には相のカテゴリーが全く欠けているの

かという問題が、新たに起ってきました。そこで私たちは何を相と考えているのか、対格言語において相というのはどういうものなのかを考えてみる必要に迫られてきました。

能動相、受動相といっても、その違いは言語の中にしか存在しないもので、現実には存在するのは同じ状況でしかありません。たとえば「次郎が太郎を殺す」という文が指し示す現実と「太郎が次郎に殺される」という文が指し示す現実とは同じものと考えられます。

逆に言えば、同じ現実の事態が、言語的に異なった表現をとるとき、その異なりを「相」というのだと考えられるのです。

活格言語の段階にあるアメリカインディアンの言語にはしばしば *version* といわれる現象が見られることが、以前から指摘されていました。これは生き物に関わる活格動詞に見られるものです。

活格言語は前にもいいましたように、自動詞と他動詞の区別はありません。ここでは「焼く」と「燃える」、「導く」と「行く」、「乾かす」と「乾く」、「咬む」と「咬まれる」などは同じ動詞でありました。

しかし自分から離れる方向に行為が向かうものと、自分の方に行為が向かうものとを文法的に示す手段があり、これが *version* と呼ばれているものなのです。したがってこれはまた *extrovert-introvert contrast* ともいわれてきました。平たくいえば、「焼く」は *extrovert* の形で、「燃える」は *introvert* の形なのです。

こうすると「何だ、結局自動詞と他動詞じゃないか」という人がいるかもしれません。しかしこれは語彙のレベルの話ではなく、文法のレベルの話なのです。

語彙のレベルではこれら二つの意味の区別がないということは、いいかえれば、これらの言語では「焼く」も「燃える」も同じ現実の事態と見なされているのです（もちろん他動詞と自動詞を区別する対格言語を話す人々にとっては「焼く」と「燃える」は全く違った現実です）。したがって *version* というのは、同じ現実の事態が言語面においてだけ違ったように表現されるものだということができます。これは対格言語における相の定義と全く異なったところはありません。

更にいえば、対格言語においても、能動相によって表されるものと、受動相

によって表されるものは、現実の事態としては確かに同じですが、事態を行為者の立場から見るか、被行為者の立場から見るかという、違いがあります。

そういう意味では、活格言語における異なった version の相違は、活格言語における同一の「言語外現実」の表現であっても、行為がどちらを向いているかという、方向性において異なっているといえることができるのではないのでしょうか。

たとえばカマユラ語では o-juká「彼は(彼を)殺した」に対して o-je-juká といえば、「彼は自殺した」となるといいます。同じように ere-kətsi「おまえは(彼を)切った」に対して ere-je-kətsi とすれば、「彼は自分を切った」となるそうです。求心相が -je- によって示されるのだといえます。

§223 さらに北アメリカのネズ・パース語では、人称接辞が次のようになっているといえます。

また意味上の自動詞の主語は絶対格に立ち、意味上の他動詞の主語は -m をとる所有格であるといえます。

人称	接辞	付加的意味
1 人称	ø-	
2 人称	ä-	
3 人称	hi-	行為者
	a-	被行為者
	pa-	3 人称から 2 人称への行為
	-m	2 人称から 1 人称への行為

たとえば ä a-npaysa「おまえは 彼を・とる」、hi-ø-npaysa「彼は・私を・とる」、ä hi-npaysa「おまえを 彼は・とる」ということになるそうです。

ところでこの npaysa という動詞語幹は、npisa という語幹と相関関係にあり、npisa が所属が決っていない対象に用いられるのに対し、npaysa は所属が明確に定まっている対象に用いられるといえます。したがってたとえば、次のようなことが観察されます。

1. ä sikäm-na a-pisa.

「おまえは 馬・不定 それを(= 馬を)・とる」

= 「おまえはその馬をとる」

2. ä sikäm a-npaysa.

「おまえは 馬 彼の・とる」

= 「おまえは彼の馬をとる」

どうしてそうなるかといいますと、もし 2. の npaysa の接辞 a- が「馬」を指しているとすれば、その馬は所属が明確にされていませんから、npaysa という語幹をとることと矛盾します。したがってこの a- は馬の所有者を表すことになるのです。

このようなばあい、語幹の違いは述語と意味上の主語、および意味上の目的語の関わり方の違いに関係しています。しかしその対立は現実とは異なっており、表現のレベルのことに限られています。そうすればこれもまた相の対立だということになります。

§224 こういう事実が明らかになってくるにつれて、相というものは何も能動、受動に限られたものではないということが分ってきました。

それまでロシア文法では能動相・被動相の対立を залогと呼んでいました。しかし相というカテゴリーがそんなに狭いものではないことが明らかになってきましたので、相一般を диáтезаと呼んで区別するようになりました。

диáтезаというのはギリシア語で「相」を表す diáthesis διάθεσιςを借りたものですが、この語は元々 disposition, arrangement すなわち「性向」、「態度」、「配列」などの意味を持っていました。序でにいえば dia- はもともと through の意味を持ち thesis は「置く」という意味を持っています。ロシア語では dia に当るものを за「向うに」で、thesis を лог「横たわる、置く」で置き換えたいわゆるカルク calque なのです。

とにかくこのような発見を通じて、相の本質あるいは活格言語や能格言語に対格言語に見られるような、能動・受動という相の対立がない真の理由が、明らかになってきたのです。

(4) 分離所有と非分離所有

§225 動詞の構成と密接な関係があると考えられるものに、活格言語に広く見られる「分離所有」organic posession と「非分離所有」inorganic posession という区別があります。

非分離所有というのは、名詞がいつも所有者の接辞を付けた形で用いられ、単独で用いられることのないものです。これは三つに分けられるといいます。

一つは人、動物、植物などの活性的名詞の一部分であるもの、第二は名前や

親族関係を表すもの、第三は人や動物との関係が密接なものだといいます。

第一のグループに属するものは、たとえば「頭」、「手」、「足」、「目」、「耳」、「心臓」、「木の葉」、「根」のようなものです。

第二のグループに属するものは、たとえば「父」、「母」、「祖父」、「兄弟」、「姉妹」などというものです。

第三のグループにはたとえば「影」、「足跡」、「夢」、「矢」、「きせる」、「家」、「獲物」、「巣穴」、「巣」などのようなものが属しているといいます。

§226 非分離所有というカテゴリーが活性に特有なものなのは当然ですが、多くの言語でこれにつく人称接辞が不活格を示す動詞接辞と同じものだというのは、意味深長だと思われます。

たとえばダコタの言語では *mi-taⁿtcaⁿ* 「私の身体」、*ni-siha* 「おまえの足」のように、不活格の 1 人称 *m(i)-*、2 人称 *n(i)-*、3 人称 $\emptyset$ - という接辞の系列が使われています。これはこの系列が状態や性質を対象から分離しにくいためだと考える学者も居ます。

アタバスカン語族のチリカファという言語では、非分離所有の *bi-tsii* 「彼(自身)の頭」に対して分離所有の *bi-'i-tsii* は、「彼のもっている、あるいは食用の頭」を意味するといいます。

第 十 九 話

内容的類型学の概要 II

1. 言語類型

§227 既に色々なところで述べてきたことですが、簡単に言語の内容的類型についての説明をしておきたいと思います。

これは帝政期ロシア、ソヴェト期を通じた研究者達の言語研究の成果として、1970年代に当時のソヴェトのクリモフ [33][34][35] を代表とする言語類型学が成立しました。簡単に言えばこれは言語が、「主語・述語・目的語」の関係の表現のあり方によっていくつかの類型に分たれることを示すものです。

そのような類型として「活格言語類型」、「能格言語類型」および「対格言語類型」が指定されました。そして能格言語類型はやがて対格言語類型に発展すること、並びに活格言語類型のばあいには、能格言語類型を経由して、対格言語類型へ発展するものと、直接に対格言語類型に発展するものがあることが示されました。

活格言語類型は、森羅万象を生き物であるかそうでないかに分類することを、その成立の原理にするものだといえます。

この原理はこの類型の構造の全体を貫くもので、たとえば動詞は「横たわる」という意味を持つものでも生き物に関して言うばあいとそうでないばあいとは語彙的に異なるというように、活格動詞と絶対動詞の区別を文法的にもっていること、生き物を指す名詞は行為者を表す格(活格)と被行為者を表す絶対格をもっているが、無生物を指す名詞は絶対格しかもたないこと、いわゆる自動詞と他動詞の区別はもたないこと、したがって能動と被動というような相の区別がないこと、などの特徴を持っています。

この種の言語には形容詞は無く、これに当る意味内容をもつものは、動詞として扱われています。したがって無生物でも意味上の「主語」になることは可能です。また行為を表すばあいでも、たとえば「石・動く」という文は、普通には意味を為さないかもしれませんが、これに生き物を表す名詞の行為者を表す「活格」が加わると、「太郎が・石・動く」という文になり、対格言語では「太郎が・石を・動かす」という文と同等の意味を持つことになります。

逆に生き物を表す語が、行為者を示さない「絶対格」として「死ぬ」という動詞に連結すれば、「太郎・死ぬ」という意味になりますし、これに生き物で行為者を表す「活格」が加われば、「次郎が・太郎・死ぬ」となり、対格言語の「次郎が・太郎を・殺す」と同等の意味を持つことになります。

すなわち、この種の言語では「絶対格」は意味上の自動詞の主語とも、意味上の他動詞の目的語にもなりうるのです。これに対して「活格」は行為者しか示しません。

一方対格言語は、文法的に他動詞と自動詞の区別をもち、主格と対格を区別します。主格は自動詞とも他動詞とも用いられ、自動詞と用いられるときには動詞の行為主体か、あるいは状態の持主を表します。言い換えれば、この種の

	活格言語	対格言語
A	活 格	主 格
S P	絶対格	
		対 格

言語では、主格は自動詞の主語にも、他動詞の主語にもなれますが、対格は絶対に自動詞の主語にはなれないのです。また他動詞と用いるときには、動詞の表す行為を対格で表される対象に及ぼすことを表します。したがって能動、被動という範疇は、対格言語類型の段階において初めて可能になったものです。

これを図にすれば、右のようになります。ここで S は Subject, すなわち意味上の自動詞の主語をあらわし、A は Actor, すなわち行為を他に及ぼすものを、P は Patient, すなわち行為を受けるものを表します。

2. 人称

§228 人称は通常三つで、1 人称、2 人称、3 人称を区別します。しかし人称が三つに限られなければならないという理由は一般に存在していません。

アメリカのナデネ語族に含まれるアタバスカン諸語に属するナヴァホの言語のように、4 人称をもっている言語もあると言われています。これはたとえば一族の「彼」と他の種族の「彼」とが有的时候に、これらを区別することができます。純理論的にいえば、例えば 2 人称から見た 3 人称は 1 人称から見れば何人称になるかとか、3 人称から見た 3 人称は 2 人称から見れば何人称になるかというように、多くの「人称」が指定できます。しかし人称の

数が多くなると、使い分けが極めて難しくなることは明らかです。三つの人称を区別する言語が多いのは、そのためであろうと思われます。

人称について活格言語に特徴的なものとして、1人称複数に包含形 inclusive form と排外形あるいは非包含形 exclusive form とがあります。その違いは、共に行為者であるか、あるいは共に被行為者であるという意味で範疇を同じくする「我々」の中に、聞き手を含めるかどうかという点にあります。相手が「我々」に含まれるときには包含形が、含まれないときには排外形が用いられるのです。

たとえばグアラニ語では yane-「(おまえを含めた) 我々」に対して ore-「(おまえを含めない) 我々」という形が対立しています。

上で述べましたように、活格言語は対象を生き物かどうかによって区別し、さらに生き物については、「行為者」であるかないか、すなわち「活格」に立つか「絶対格」に立つかを区別することを原理としています。

したがって相手が一緒に意味上の他動詞で表される行為を行うかどうかは、この原理に関わる現象だと考えられます。そうとすれば、これは活格言語の包含事象だということができます。この原則を持っている言語のばあい、それに伴って2人称のばあいには、行為に共に参加することは、原理的にあり得ないことになりましょう。行為に参加するとすれば、それはすでに1人称複数の包含形と認定されるからです。

§229 能格言語のばあいにも、先にいいましたように、能格動詞と絶対格動詞との区別はかなり対格言語の他動詞と自動詞に近くなってきてはいますが、生き物に典型的な行為には意味的には自動詞であっても、まだ能格動詞に属するばあいがあります。したがって未だ完全な自動詞と他動詞の区別は、この類型の言語には存在していなかったと考えられます。

また活格言語の包含事象であり、したがって活格類型の時代から受け継いだ、自動詞的にも他動詞的にも使われる diffused verbs も随伴事象としてもっています。

したがって格の体系も、能動的に行為を他におよぼすことを表す能格に立つかどうかという対立をもっています。このようなわけで、能格言語は、形の上ではまだ活格言語の格の体系に対応した体系をもっています。したがっ

て包含形と排外形の対立は、能格言語のばあいでも包含事象だということが出来ます。

§230 一方、印欧語比較文法では、印欧語の 1, 2 人称代名詞複数の祖形がよく分っていません。なぜ分らないかというと、さまざまな言語に現れるこれらの代名詞をもとに再構成をしてみると、*wei-, *mes- あるいは *mei-, および *ne- の形が得られますが、これらの形が言語によってさまざまな分布を示しているからです。

たとえば 1 人称複数はサンスクリットで vay-ám, アヴェスタで va-ēm, ヒッタイト語 weš, ゴート語 weis (英語の we, ドイツ語の wir) などに対して、プロシア語では mes, スラヴ語では мы (my) のようになっています。

ラテン語の nōs (フランス語の nous) は *ne- の語根にさかのぼると考えられます。またラテン語では *wei- にさかのぼる形の vōs (フランス語 vous) は 1 人称ではなく、2 人称の複数形です。

§231 ロシア語はスラヴ語ですから、基本的には形が同じですが、мы (my) の変化は次ぎの表のようになります。

このばあい、主格は *mei- にさかのぼる形ですが、斜格 (主語以外の格) はすべて *ne- にさかのぼる形だと考えなければなりません。

また 2 人称複数 は вы (vy) で、ラテン語やフランス語と同じく *wei- にさかのぼる形をもっていますが、同じことはドイツ語にもいえます。

1 人称複数の主格は上に述べたように *wei にさかのぼる wir をもっていますが、斜格は第 2 格 unser 第 3 格 uns 第 4 格 uns のように、*ne- にさかのぼる形をもっているのです。

さらに双数をもっているもののばあい¹, 1 人称双数はサンスクリット nau,

1 人称複数形		
格	綴り	ローマ字化
主格	мы	my
生格	нас	nas
与格	нам	nam
対格	нас	nas
造格	нами	nami
前置格	нас	nas

¹ 双数 dual というのは、以前に説明してあるように、二つの対象を指すときにとる形です。双数を持つ言語は 3 以上の対象を指すときに複数を用いることになります。印欧語は歴史に現れたとき、双数を持つものがありました。サンスクリット、ギリシア語、古教会スラヴ語をはじ

アヴェスタ *nā*, ギリシア語 *nō vōi* (*we two*, Dual Nom.-Acc.), スラヴ語 *на* (*na*) で **ne-* にさかのぼる形をもっているのに対し, 2 人称双数のばあいには, ヴェーダ *vām*, アヴェスタ *vā*, スラヴ語 *вѣ* (*vě*) のように, **wei-* にさかのぼる形をもっています。

ここでスラヴ語のばあい **ne-* に由来する形と **wei-* に由来する形の両方があげられていますが, これは表に上げた複数のばあいと同じように, 格によって異なっているためです。

1 ・ 2 人 称 双 数 形				
	1 人称双数		2 人称双数	
主格	вѣ	vě	ва	va
対格	на	na	ва	va
生所格	наю	nayu	ваю	vayu
与造格	нама	nama	вама	vama

§232 このように, 印欧語

の 1 人称および 2 人称複数および双数の形は, 言語によってさまざまな分布を示しているので, その本来の形がどのようなものであったかははっきりしないというのが従来の印欧語比較言語学の立場でした。

メイエ (Antoine Meillet 1866-1936) は, 「人称代名詞の形は言語ごとにあまりにも異なるために, 印欧語の状態を再構成することはできないが, いくつかの特徴は認められる」[17] としています。

印欧語比較文法に内容的類型学を全面的に導入したガムクレリゼとイヴァーノフは, 印欧語についても他の活格言語と同じように, 複数 1 人称に包含形と排外形の区別があるとして, **wei-* の形を包含形, **mei-/mes-* の形を排外形であると主張しています。印欧語が活格言語から発達したと考えれば, そしてまた包含形と排外形が活格言語の包含事象だとすれば, 印欧語に包含形と排外形の対立があった蓋然性は高いと考えられます。

しかし **wei-* の形を包含形とし, **mes-* の形を排外形とする根拠は乏しいと考えられます。

むしろここではこれら三種の語根の分布そのものについて, 考えてみる必要があるのではないかと思います。これは既に述べたように印欧語では 1 人

めとするスラヴ語派の多くの言語がこれに属しています。

称の双数と複数, 2 人称の双数と複数に分布しています。

§233 ロシア語の 2 人称複数形は次の表に見られるようになっています。

これら三つの表を眺めると, まずロシア語では *mei-/*mes- を語根とするものは 1 人称複数の主格 мы に現れるだけです。斜格はすべて *ne- にさかのぼる形です。

また *wei- の形は 2 人称複数および双数の諸格, 並びに 1 人称双数の主格に現れています。更に *ne- にさかのぼる形は 1 人称の斜格の他に 1 人称双数の斜格にも現れています。

これに対して *mei-/*mes- の形は 1 人称複数にしか現れていません。主格というのは斜格に比べて一般に変化を受けにくいことを考えれば, これが 1 人称複数に固有の形だと言ってもよいと思われます。

そう考えるもう一つの大きな理由は, 主格は活格言語の活格, 能格言語の能格に対応し, これから発展したものだと考えられるからです。そしてこれらの格は, いずれも専ら行為者を表すことをその機能としています。これに対して斜格は行為者を表すことはありません。その意味で主格と斜格との間には, 大きな性格の相違があると言えます。

一方 *wei- の形は 2 人称複数の諸格に現れており, その他に 1 人称双数の主格, 2 人称双数の諸格に現れています。そうとすればこの形は 2 人称の複数に固有の形であろうと思われます。

再びそうとすれば *mei-/*mes- と *ne- の形は 1

2 人 称 複 数 形		
格	綴り	ローマ字化
主格	вы	vy
生格	вас	vas
与格	вам	vam
対格	вас	vas
造格	вами	vami
前置格	вас	vas

3 形 の 分 布				
格	1 人 称		2 人 称	
	複数	双数	双数	複数
主格	*mei-/*mes-		*wei-	
生格				
与格				
対格				
造格				
前置格				

人称の複数に固有の形である可能性が高いと考えられます。

また *ne- の形は 1 人称双数には現れても 2 人称の双数にも複数にも現れません。

1 人称の双数に現れるということが話し手と聞き手をひっくるめるような状況において用いられる可能性が高いことを意味するとすれば、そしてこれが複数においても双数においても主格には現れないことを考えれば、これは古い絶対格に対応するものであることを示唆していると考えられます。

そうすれば *mei-/mes- という語根は活格に立つ対象を表すものであるということになるでしょう。

もし双数というものがこのような性質を持っていると仮定すれば、なぜ 2 人称の双数に *wei- の語根が一般化したかを説明することが容易になります。

活格言語あるいは能格言語の類型においては、包含形と排外形の対立は 1 人称複数に限られていました。そうすると生き物について述べる *mei-/mes- の語根に対応するものとして、*wei- が主格に借用されたとすれば、本来はこれもまた生き物を表すものであった可能性が高くなります。もしそうとすれば、これが 1 人称の双数を表すものとして借用されたのは、1 人称双数が 2 人称である対話者を組み込んでいる為であるかも知れません。これが他ならぬ人称代名詞に現れていることは、その蓋然性を高めていると考えられるでしょう。

逆に 2 人称のばあいは「おまえたち」ないしは「おまえたち二人」を意味し、話し手は含まれませんから、ここに *mei-/mes が混在する可能性がなかったと考えることもできるでしょう。

もし以上のことが成り立つとすれば、更に一步を進めて双数というカテゴリーが包含形に起源を持つということができるかもしれません。仮説として提示しておきたいと思います。

3. 数

§234 数の問題が出てきましたので、活格言語の数の問題に触れておきたいと思います。

活格言語には文法的な「数」のカテゴリーは未発達だったと考えられています。これは名詞に複数形がないことによっています。

しかしこのことから、活格言語が数の観念を持っていなかったということはできません。たとえばアメリカ先住民族のチヌークの言語では、単数のものを見るときは *el-kel* という動詞を使い、複数のものを見るときは *ē-taqL* という形を使うといえます。

能格動詞のばあい、たとえば古グルジア語では名詞は複数の要素をとることができですが、その際意味上の自動詞のばあいは主語が複数であるかどうか、意味上の他動詞のばあいには目的語、すなわち絶対格が複数であるかどうかによって、動詞が複数の形をとるといいます。これを *n concord* というそうです。たとえば

- daleč-n-a kalak-n-i* 「(彼は) 破壊した (複数) 町 (複数)」
 = 「彼は複数の町を破壊した。」
- moguc-na-a kac-n-i* 「(彼は我々に) 与えた (複数) 人 (複数)」
 = 「彼は我々に人々を与えた。」
- ganaxu-n-a tual-n-i* 「(彼は) 開いた (複数) 目 (複数)」
 = 「彼は両目をあけた。」

これらのことから、最初文法的な数については、述語である動詞に表示が付加され、これを説明する絶対格に立つ名詞には、数の表示はなかったと思われます。後になって名詞にも数の表示がつくようになったものが、古グルジア語に見られるような *n concord* であったと思われるのです。

序でに言えば、グルジア語で他動詞のばあいに複数の要素をとるのが、絶対格の数によるというのは、明らかに対象活用であり、活格言語、能格言語の包含事象と考えられます。

しかしこのような現象は活格言語あるいは能格言語だけに特有のものではありません。

たとえば英語でも *go* 「行く」、*come* 「来る」に対して *troop* といえば、「群をなして進む」という意味になり、主語が複数であることを含意しています。*kill* 「殺す」に対する *massacre* 「虐殺する」という語も、対象が複数であることを示しています。ただ異なるのはこれらの動詞が文法的に複数のカテゴリーを示すのではなく、語彙的な意味のレベルでこれを表しているにすぎないということです。

文法的なカテゴリーとしての数というものがどういう性質のものかという

ことについては既に見ましたので、ここでは言語の種類と数という観点からの観察にとどめることにします。

4. 態 (アスペクト)

(1) 態と時制

§235 ここで「態」というのは、ふつうアスペクト aspect, (独) Aspekt といわれるものです。

アスペクトというのは、動詞が続いている行為を表しているか、あるいは完了する行為を表しているかという区別だといわれています。

英語などの印欧語のばあいには多くのばあい、「時制」または「時称」 tense というカテゴリーが基本になっているように見えます。時制というのは、行為が「現在起っているか、過去に起ったものか、それとも未来に起るだろうものか」という区別です。

しかし実際には時制と態とは絡み合って複雑な体系を作っていることが多く見られます。

たとえば英語のばあい時制としては「現在」、「過去」、「未来」を区別しますが、これが態と組み合わせると、例えば「現在完了」、「過去完了」、「未来完了」のような形を作ります。

また英語には特にはっきりした「進行形」という形があります。これは行為が続くことを表しますから、態の一表現形式だと考えられます。これが時制と結び付いたものが「現在進行形」、「過去進行形」、「未来進行形」のような形を作ります。

こういうとんだかとても理論的ですがっきりしたカテゴリーのようにも思われますが、実際にはそんなにきれいなものではありません。

例えば英語の現在完了の表現 I have been in America. というと「私はアメリカに居終る」という意味ではありません。よく知られているように、これは「私はアメリカに居たことがある」という、「過去の経験」を表す表現なのです。

§236 印欧語の中で態のカテゴリーを著しく発達させた言語にスラヴ諸語があります。

例えばロシア語では大部分の動詞は完了体動詞と不完了体動詞とに分れています。例えば「書く」という意味を持つ不完了体動詞は *pisát'* писать ですが、完了体動詞は *napisát'* написать です。不完了体動詞は過去時称と現在時称と未来時称を持っていますが、完了体動詞は過去時称と未来時称しか持っていないといわれています。

本当にそうかという点については問題があると思っていますが、今は説明を簡単にするためにこの説明にしたがっておきます。

最近では外来語の動詞が多くなって、完了体動詞としても不完了体動詞としても用いられる両体動詞 *двувидовый глагол* が増えて来つつあります。

たとえば *analizírovat'* анализировать 「分析する」、*atakovát'* атаковать 「攻撃する」、*garantírovat'* гарантировать 「保証する」などがこれに当たります。

こういう方向に動く一つのきっかけになったのは、少数ではありましたが、本来のロシア語の語彙に両体動詞があったことだと思われます。

たとえば *velét'* велеть 「命令する」は過去形は完了体、現在形は不完了体で用いられます。また *rodít'* родить 「生む」は同じく完了体としても不完了体としても用いられます。

ロシア語では過去形は *-l -л* (男性), *-la -ла* (女性), *-lo -ло* (中性), *-li ли* (複数) という語尾を動詞の過去語幹に付けて作ります。*-t' -ть* というのは不定法の語尾ですが、これも過去語幹に付けられます。

したがっていくらかの不規則動詞はありますが、大部分は辞書に載っている不定法の形から *-t' -ть* を除いたものに過去の語尾を付けると過去形ができるわけです。

動 詞 過 去 形					
	不定法	男性	女性	中性	複数
不完了体	писать	писал	писала	писало	писали
完了体	написать	написал	написала	написало	написали

しかしロシア語のばあいにも先ほどの「理論」通りにはいきません。

たとえば

Тогда я писала письмо. = その時私 (女性) は手紙を書いているところだった。(過去の継続)

Тогда я написала письмо. = その時私(女性)は手紙を書き終えたところだった。(過去の完了)

Кто писал это письмо? = この手紙は誰が書いたのですか。(事実の確認)

Кто написал это письмо? = 誰がこの(こんな)手紙を書いたのですか。(結果の評価)

§237 動詞の現在変化は不完了体動詞のばあいには現在の意味を持ちますが、完了体動詞のばあいには未来の意味を持つといわれています。

これについてもいろいろ問題がありますが、ここでは簡単に説明するためにこの問題には触れないことにします。訳に注意して見てください。

不完了体動詞の過去は行為の継続の他、行為そのものがあつたかどうかを述べるときに使います。

また完了体動詞は過去時称はその行為が行われた時に生じた結果の評価を表すことがあります。完了体と不完了体の現在変化は上の表の通りです。

このようにロシア語を含むスラヴ語は一つの行為に対して完了体と不完了体という、使い方の違う二つの動詞が対応しますので、そのペアを覚えなければならぬという不便さがあります。

一言でいえば、態というのは結局行為をどのように見るかというものです。ラテン語の a-speciō (から・見る) から作られた aspectus という名前も、そういうところから作られたものだといえます。

人称	動詞現在形	
	писать 不完了体	написать 完了体
1sg	пиш ^{у́}	напиш ^{у́}
2sg	пишешь	напишешь
3sg	пишет	напишет
1pl	пишем	напишем
2pl	пишете	напишете
3pl	пишут	напишут

(2) アクチオンスアルト

§238 アスペクトに非常に近いものに、アクチオンスアルトというものがあります。

これはドイツ語の Aktionsart (行為の種類) をそのまま使っているもので、日本語でこれに対応する適当な訳はあまりないように思いますが、「行為の様態」というのが、内容的にもっとも近いように思います。

アクチオンスアルトとアスペクトとの関係は、厳密に言えば次のようにいえるでしょう。

アスペクトは前にもいいましたように、行為が完了したか、完了していないで継続しているかという、どちらかといえば抽象的な概念であるのに対し、アクチオンスアルトの方はもっと現実に根ざしていて、たとえば「通る」に対して「通り過ぎる」というように、具体的な行為の仕方を表すものです。

一方「通る」と「通り過ぎる」とは、動詞の性質が少し違っています。その違いは「通る」というのが「道を通る」とか「橋を通る」のように、通ったか通る最中なのかについて無限定で、両方の意味を持つことができるのに対して、「通り過ぎる」という方は、「ある地点を越える」という意味を持っている点なのです。

このばあい、「ある地点を越える」というのは一瞬のことです。したがってこれは「ある地点を越えつつある」というように特別な表現の形式をとらない限り、「越えてしまった」あるいは「越えてしまうだろう」というような意味合いを持つ可能性が非常に強いと考えられます。

このことから「通り過ぎる」という意味は、その具体的な意味から生じる完了のアスペクトをもっていることを意味しています。

更にこのことから、アスペクトというのは、アクチオンスアルトから抽象された概念であることが分ります。

(3) 活格言語のアスペクト

§239 活格言語のばあい、時制というより、このようなアクチオンスアルトの方が基本的なものだと考えられています。

活格言語を見れば、これに属するいろいろな言語の間に、アクチオンスアルトについて著しい共通性があることが分ります。たとえば、完了 perfectum と未完了 imperfectum, 継続 progressivum, 始発 ingressivum (～し始める), 反復 iterativum, 強調 intensivum, 願望 desiderativum, 希求 optativum などです。

なぜこのような「行為の様態」が活格言語にしばしば見られるのでしょうか。

私の考えでは、次のようになります。活格言語のばあい、たとえば「太郎・死ぬ」というばあい、「死ぬ」という述語の説明として裸の単語すなわち絶対

格に立つ名詞が置かれます。

「死ぬ」という過程が生じるのは他ならぬ「太郎」の身体においてです。「次郎が・太郎・死ぬ」というばあいでも、前にいいましたように、「太郎・死ぬ」という事態が起る原因があるならば、それは「次郎によって」であると考えられるときに限ります。「太郎」の上に「死のプロセス」が起らないならば、「次郎」は決して「太郎を殺す」ことはできません。そうすれば、「死ぬ」という述語にとって最も重要なのはこのプロセスが起る「太郎」なのです。

そうすれば、話し手の注意は「太郎」の上に「死のプロセス」が起りつつあるのか、起ってしまったのか、あるいはこのプロセスが終りに近づいているのかという点に集中されるというのが自然でありましょう。

このように考えれば、「行為の様態」すなわちアクチオンスアルトは、活格言語の統語的構造から、必然的に導き出されるものだということになります。

対格言語のばあいは「誰が」死ぬのか、あるいは「誰が」誰を殺すのかという構造をもっていて、「誰が」というのが一番重要なことになります。

そうすれば、死というプロセスがどういように起るかというより、主語の観点からそれがいつ起るかが重要になると思われます。

言語の歴史から、アスペクトあるいはアクチオンスアルトが時制より古いことは知られていましたが、なぜそうなのかは理論的に説明できませんでした。しかし内容的類型学の結果から、アクチオンスアルトが活格言語の包含事象であることが分ってきました。なぜならば、時制というのが対格言語の段階で確立されるカテゴリーであると考えられるようになったからです。

いいかえれば述語が中心的な役割を果す活格言語に対して、対格言語は主語が支配的な地位を占めますから、行為は主語の観点から表現されることになります。すなわち、主語にとってそれが既に起ったか、起りつつあるか、あるいは起るであろうかということが重要になると思われるのです。

これに対し活格言語では述語が中心にありますから、述語の表す過程がどのように実現されるかに注意が集中されると考えられるのです。

日本語のばあいにも、厳密に言えば印欧語のような時制の体系はありません。断定や完了とか推量とかいうようなものが、結果として時制の役割を果しています。これは明らかにアクチオンスアルトに属することがらです。

日本語がどういう類型に属しているのかは現在はっきり分っているわけではありませんが、少なくとも印欧語よりも古い構造をもっていることはできるかもしれません。

第二十話

内容的類型学の概要 III

1. 中動相

§240 活格言語に、英語やそのほかの印欧語に見られるような「能動相」activum 「受動相」あるいは「被動相」passivum というカテゴリーがないことは、既に述べました。古い印欧語はこのほかに「中動相」medium があったこと、そしてこれがやがて語彙化してカテゴリーとしての中動相がなくなっていたことも、すでに述べたとおりです。

ところで中動相については、ギリシア語の λúω líō 「洗う」の例を引いて次のように説明しました。主語の洗うという行為が他の対象に及んだときが能動相、他の人の洗うという行為が主語に及んだときが被動相であるのに対して、中動相のばあいは主語の洗う行為が主語 (の一部) に及んだときだということです。

しかしもし主語が複数の人だったときはどうでしょうか。殺伐な例ばかり取上げて恐縮ですが、今ここに A 君と B 君という二人の人が居て、互いに殴り合いをしていたとします。A 君は B 君を殴り、B 君は A 君を殴っている、というのがその内容です。

このとき A 君も B 君も同じ主語に属していますから、このばあいも主語の「殴る」という行為は明らかに主語に帰ってきます。したがってこのばあいも上に挙げた定義になっています。

§241 たとえば「戦う」という意味の動詞はギリシア語では μάχομαι mákhomai といいますが、これは中・受動の形しかもっていません。これは「戦う」という行為が敵味方をひっくるめた主語の内部で行われるからだと思われます。

事実たとえば κατὰ σφέας μαχέονται katà sphéas makhéontai 「彼ら自身で i.e. 互いに戦っている」(κατὰ σφέας は「互いに」の意味。μαχέονται は「彼ら同士戦っている」の意味。μαχέονται は μάχομαι のドーリア方言形 μαχέομαι の現在 3 人称複数の形) といった例が辞書に見えます。

ロシア語でもたとえば *бить* bit' 「打つ, 叩く」に対して *биться* bit'sya といえば「戦う, 打合う」の意味になります。

こういうように中・受動の形しかない動詞を *deponentia* 「形式所相動詞」といいます。前にもちょっと触れたラテン語の「恐れる」を意味する *vereor* も受動形しかもっていませんから, 形式所相動詞です。このばあいには「恐れる」というのが不随意的な行為であるために, 受動の形しか持たないと考えられます。

英語の *be afraid of* もそうでした。ロシア語の「恐れる」という動詞も *бояться* boyát'sya というように, *-ся* という要素をもっています。これは英語の *-self* の *se-* の部分と同じ語根に属していて, 「自身」を表しています。

この動詞の語根は **bhei-* のような形をしていたと思われますが, これと同じ語根をもっているギリシア語の *φοβέω* phobéō は「恐れさせる」という意味で, 「恐れる」というときには必ず中・受動の形 *φοβέομαι* phobéomai をとります (cf. *be shocked*).

これらのことから分かりますように, 形式所相動詞には, いろいろなものが含まれています。「戦う」はその一つのばあいにすぎないのです。

2. 中動相の起源

§242 前に動詞の「相」のカテゴリーについて述べたときに, 活格言語に見られる *version* が「相」に属するといいました (cf. 243 ページ)。

活格言語では他動詞と自動詞の区別がなく, 「焼く」も「燃える」も同じ動詞で表されます。

このことはこの言語で話す人にとっては, 「焼く」も「燃える」も言語外現実の同じ現象だと認識されていることを示しています。

こういう考え方に初めて出会うと, なかなか分りにくいものです。それでこういう例を挙げましょう。

たとえばアラビア語では「らくだ」を意味する語は 2000 ほどあるといわれています。年齢, 性別, 毛の色, 歯の状態等々によって細かく分れているのだそうです。これは砂漠にすむ人々にとって駱駝が命にも関わる重要性をもっているからだと思われます。

しかし日本人はせいぜい「一瘤駱駝」と「二瘤駱駝」ぐらいの区別しか付

きません。区別ができないということは細かく認識できないということを意味します。

逆に欧米の人が日本語を訳すときに困るのは魚の名前だといいます。単に種類によって分けるだけでなく、たとえば「ワカシ」、「イナダ」、「ワラサ」、「ブリ」とか、「オボコ」/「スバシリ」、「イナ」、「ボラ」、「トド」のように、俗に出世魚といわれるものは成長するにつれて名前が変わります。これは私たちがこれが「イナ」だとかそれは「ボラ」だとか区別できていることを示しています。

朝鮮・韓国語の [ph] と [p] が日本人には区別できないこともこれと同じで、言語に存在していないものは区別できない、すなわち同じものだと考えているのです。

だから「燃える」と「焼く」の区別がない言語を話す人にとっては、「燃える」も「焼く」も同じ現実の事態だと認識していると考えられるのです。

したがって求心的なバージョンの形をとれば「燃える」になるし、逆に遠心的なバージョンの形をとれば「焼く」ことになるというのは、同じ現実の現象を言語的な面だけで違ったように表現することになります。そうすればこれは立派な「相」になります。

「焼く」と「燃える」が客観的現実において異なった事態であると認識するためには、自動詞と他動詞がカテゴリーとして異なっていて、違った語で表している対格言語をもっていなければなりません。

このときには他動詞である「焼く」という事態を言語の上だけで「違ったように」表現する能動形と受動形は、明らかに相に属する現象だということになります。

§243 このように考えれば、中動相がギリシア語やサンスクリットなどのような古い印欧語に属する言語に見られ、しかもそれが歴史時代に急速に消滅してしまった理由を説明することが可能になると考えられます。

いま印欧語が活格言語から直接に対格言語に発展したと仮定します。活格言語時代の印欧語は、包含事象として求心的バージョンと遠心的バージョンを相としてもっていたと考えられます。

多くの活格言語の例から、大部分は求心的バージョンが有標的な形式であ

ることがこれまでに分っています。そうすれば中動相はその本質が求心的な行為を表しますから、活格言語時代の求心的バージョンを受け継いだ可能性が極めて高いと考えられます。言い換えれば、中動相が対格言語の随件事象だということになります。

実際ギリシア語では中動相をもっている時期には、中・受動といわれるほどに受動相は未発達で、実際には中動相のあるばあいに受動的な意味を持っていたにすぎないと考えられます。

その経緯は未だはっきりしていませんが、印欧語が対格言語になったとき、印欧語は少なくとも自動詞と他動詞の区別を、文法的なカテゴリーとしてもっていなければなりません。したがってたとえば「燃える」と「焼く」には違った語が与えられていたと考えられます。

そうとすれば、この時代に生きた「印欧人」は、既に「燃える」と「焼く」を現実の現象として異なったものだとして認識していなくてはなりません。再びもしそうとすれば、もともと「焼く」と「燃える」とが同じ現実を指しているという認識の仕方に根ざしている「中動相」が、他動詞と自動詞を区別する対格言語の包含事象として急速に発展を遂げる「被動相」の前に、その存立の基盤を失うことは明らかなことだといえましょう。

ニーチェのひそみに倣っていえば、活格言語という神が死に、「かくして中動相の偉大なる没落が始った」という訳です。このようにして文法的なカテゴリーとしての相としての地位を奪われた中動相は、その生きる道を語彙の領域に求めることになったのだと思えるのです。

もしこのような壮大なドラマがこの時期に起ったとすれば、印欧語が幾世紀の深い霧の中から歴史の光の中にその姿を現したときから未ださほど遠くない過去に、活格言語から対格言語への転換が起ったという推測が、真実味を帯びて来るようにも思われます。

3. 時称について

§244 先にアスペクトとアクチオンスアルトについて述べたときに、英語やフランス語などをはじめとする現在の印欧語は、過去、現在、未来といった時間の観念と、広い意味でのアスペクトの観念とが結びついて、実際の時制が作られているといいました。

たとえば英語のばあい、「have + 過去分詞」という形で完了系の諸時称が作られますが、これはアスペクトに関係しています。そして have の部分の変化で未来、現在、過去などの行為の行われる相対的な時間が示されます。

また英語には発達した「進行形」progressive forms といわれるものがあり、「be + 現在分詞」によって表されています。これもやはり広い意味でのアスペクトを表すもので、時間は be の部分の変化で表されます。

これらの形は、前にもいいましたように、単に時間とアスペクトがくみ合ったというような単純なものではありません。言語ごとにその表す内容はさまざまです。

たとえば英語のばあい、細江逸記は名著『動詞時制の研究』において、次の二つの文の中の waited と was waiting という動詞には長さの区別がないだけでなく、ばあいによっては waited の方が物理的には長い時間持続していることもあり得るといっています [59, p.112]。すなわち、

He waited until she came.

He was waiting until she came.

彼は、その違いは前者が事実をそのまま述べているのに対して、後者は注意を主語がとった「待つ」という行為に集中させているのであって、そこにいわば話者の「思い入れ」が込められているといえます (*ibidem*)。

細江はこの「思い入れ」を「低回性」といっています。感情を「思いを深くめぐらす」という意味だとしてもいいでしょう。細江は更にほかの例を使って次のように説明しています。

He was writing when I entered.

He entered while I was writing.

を比較して見ると、前者に於いては言者の注意の焦点は “was writing” にあって言者の思想はそこに低回し、後者に於いては叙述の要點は “entered” にあるが而も言者の注意は “was writing” に低回するのであって “entered” は只その中の一點景に過ぎないのである [59, p.113]。

§245 細江は英語の過去形が Imperfect を表すばあいと、Perfect を表すばあいがあるとして、Imperfect を表すばあいには「低回性」があると考え

ています。

このばあい Imperfect というのは、たとえばラテン語やギリシア語では特別な imperfectum という時称形を持っていて、通常は「過去において継続する行為」を表すとされています。フランス語でもこれは imparfait といわれる形に受け継がれています。

もう一つ誤解を避けるために注意しなければならないのは、細江がここで Perfect といっているのは、印欧語の perfectum のことではないということです。

印欧語で perfectum というのは、文字通り「完了した行為」でその結果が現在まで続いていることを表すとされているものです(これについてはいろいろ問題があるのですが、ここでは詳しく述べることはしません)。

imperfectum に対応するものはむしろギリシア語やサンスクリット、古ロシア語や古教会スラヴ語などに広く用いられたアオリストといわれているものだと思います。これには一般的真理を表す用法などもありますが、もともとは行為が確実に起る、あるいは起った、あるいは更に起るだろうということを示すものだといわれています。

ですからこれが過去に起った行為を表すことが多かったのだと考えられます。過去の行為はその生起がもっとも確実なものだからです。田中美知太郎・松平千秋の『ギリシア語入門』によれば、

アオリストは、ある事実が過去に於て一應片附いてしまったものとして言い表わす時稱である。未完了過去のἐπαίδευον (現在形は παιδεύω「教育する」—山口)が「教育していた、しつづあった」というのに對して單に「教育した」と言い切った表現である。未完了過去が繼續的描写的であるのに對して、アオリストは瞬間的、記述的であるともいえる。フランス語の passé simple の用法がアオリストのそれに似ている [54, pp.35-36]。

ついででなぐらいいますと、これはフランス語の imparfait「半過去」と passé simple「單純過去」の關係によく似ています。

ラテン語にはアオリストがありませんが、そのためでしょうか、現在完了形がちょうど英語の過去形のように、アオリスト的にも、完了的にも使われ

ました。

§246 さて細江は英語の過去形に、以上のような断りをつけた上での “perfect” と “imperfect” の違いがあると主張しています。

細江の言い方によれば、前者は「直断性の Past」で後者は「低回性の Past」ということになります。1) としたのは細江の挙げた perfect として使われた例、2) は imperfect として挙げられた例です。

- 1) Cocks crew, carts creaked, men shouted, women called, children yelled, mules brayed, fisherman hauling in nets execrated, dogs barked, hens laid, church bells rang; in short, day had arrived.

— Rose Macaulay, *Keeping up Appearances*, I, i.

(鶏が鳴き、車が軋み、男はどなり、女は大声を張り、子供等はわめき、驟馬は嘶き、網をたぐり入れる漁師達は罵り、犬は吠え、牝鳥は産卵を告げ、お寺の鐘は鳴った。つまり夜が明けたのであった。)

- 2) There was a sound of revelry by night,
And Belgium's capital had gather'd then
Her Beauty and her chivalry, and bright
The lamps shone o'er fair women and brave men;
A thousand hearts beat happily; and when
Music arose with its voluptuous swell,
Soft eyes look'd love to eyes which spake again,
And all went merry as a marriage bell.

— Byron, *Childe Harold*, III, xxi.

(夜は都にうたげの歓呼
舉國の美姫と勇士の集ひ
燭光燦と男女を照し
群がる人の心躍れり。
やがて奏づる音楽の
艶なる聲の高まれば、
心を語る眼と眼、
かくてぞつづく無限の歡喜。)[59, pp.93-94]

明らかなように、細江はこの“imperfect”として用いられた過去形に、彼のいう「低回性」を見ているのです。

§247 一方、細江は又現在形が過去形と競合する例をあげて、過去形そのものにもこの「低回性」を見ようとしています。彼の例を見てみましょう。

(1) Tot was mother's darling!
(おゝ可愛いものを)

(2) Faint heart never won fair lady.

— Proverb.

(懦夫にして美姫を得るものはあらず)

(3) Men were deceivers ever.

— Shakespear, *Much ado*, II, iii, 65.

(男は常にくわせもの)

(4) When wanton Wealth her mightiest deeds hath done,
Meek Peace voluptuous lure was ever wont to shun.

—Byron, *Childe Harold*

(放恣なる富その贅を盡せば、温和なる平和その豪奢を避くるが習ひ)[59, p.25, p.95.]

これらの例は普遍的真理に属する事柄の叙述ですから、これらのばあい現在形が使われる方がふつうであると思われるのですが、ここにあって過去形を使っているとすれば、それは細江のいうような「思い入れ」があると考えるのはあり得る想定だといえましょう。

いずれにしても時制の体系というのは、単純にアスペクトと時間で縦横に割り切れるものではないことは、明らかであると思われます。そこにはそれぞれの言語が引きずってきた長い長い歴史があると思われるのです。

4. 時称体系の発達

§248 それではこのような複雑な時制の体系はどのようにして生じたのでしょうか。

もし印欧語が活格言語から発達したとすれば、活格言語には原則として時制はありませんから、活格言語にある何らかの現象を基礎にして発達したと考えなくてはなりません。そこで印欧語の動詞について少し述べたいと思います。

§249 印欧語には古くから $\bar{O}$ 動詞と MI 動詞の区別があったことはよく知られていますが、どうしてこういう二つの系列があったのかは、これまで分ってはいませんでした。

$\bar{O}$ 動詞というのは、動詞に広く見られるもので、1 人称単数が $-\bar{o}$ で終るものです。これに対して少数ですが 1 人称単数が $-mi$ に終るものがあります。例えばギリシア語では次のようなものが見られます。

数	人称	$\bar{O}$ 動詞		MI 動詞	
単 数	1	φέρω		εἰμί	< *esmi
	2	φέρεις		ἔι	< *es(s)i
	3	φέρει	< *fereti	ἐστί	
双 数	2	φέρετον		ἐστόν	< *es(s)i
	3	φέρετον		ἐστόν	
複 数	1	φέρομεν(-μες;)		ἐσμέν	
	2	φέρετε		ἐστέ	
	3	φέρουσι	< feronti	εἰσὶ	

ここで φέρω < *bherō は「運ぶ」、εἰμί < *esmi は「ある」(cf. E. is) を意味しています。

言語によってはほとんどすべての動詞が $\bar{O}$ 動詞になったばあいもあり、また逆のばあいもあります。

例えばサンスクリットでは MI 動詞が一般化しました。右の現在形の表を見てください。*bher- はラテン語の ferō, ゴート語の baira, 英語の bear 「運ぶ」などのほか、ロシア語の「取る」を意味する brat' братъ < братьи のもとになった語根です。

数	人称	変化
単 数	1	bhārāmi
	2	bhārasi
	3	bhārati
双 数	1	bhārāvas
	2	bhāratas
	3	bhārati
複 数	1	bhārāmaṣ
	2	bhāratha
	3	bhāranti

このほかアルメニア語の *berem*, アヴェスタの *barāmi* などここに属します。

§250 これに対して印欧語には、前にも述べましたように中動相がありました。

これはギリシア語のばあい次のようになっています。例は中動相の説明のところを使った *λύω* 「洗う」に対する中動相 *λύομαι* 「自分の体を洗う」の現在形です。

現在形に使われる語尾は一次語尾といわれるもので、過去形などに使われる二次語尾とは少し異なっていますが、これについては今は述べません。

一方印欧語には *suppletism* 「補充法」といわれている現象が見られました。これは動詞の一部を他の語根で補うものです。

その典型的なものは存在動詞です。これは現在形は **es-* という語根から作られます。ギリシア語の例は上に挙げました。

ラテン語では *sum < s-om*, *es, est*, *sumus < *s-mos*, *estis*, *sunt < *s-ont* となります。しかしたとえば完了形では **bheuə-* という語根から作られた *fuī*, *fuis*, *fuit*, *fuimus*, *fuistis*, *fuērunt* のようになります。

英語のばあいには **bheuə-* は *be* となります。現在形の *am*, *art*, *is* など は明らかに **es-* から作られました。

以前にはどうしてこのようなことが起ったのかは分かりませんでしたが、一応の説明としては **es-* の語根は「存在する」という状態を表しているので現在には使えるけれども、「存在してしまった」というような過去形や、「存在するであろう」というような未来時には使えないので、「～になる」という意味の **bheuə-* が使われるようになった、というのがありました。

要するにこの二つの語根はアスペクトが異なっていて、**es-* が「不完了」のアスペクトをもっているのに対して、**bheuə-* は「完了」のアスペクトを

数	人称	変化	
単 数	1	λύομαι	< <i>*-esai</i>
	2	λύῃ	
	3	λύεται	
双 数	2	λύετον	
	3	λύετον	
複 数	1	λύόμεθα	
	2	λύεσθε	
	3	λύονται	

もっているのです、このような分布が起ったのだ、ということです。

§251 しかし、このような suppletism 以外にも、基本的な動詞にきわめてよく似た意味を持つものがあることが分ってきました。たとえば、

*ses- 「横たわる、寝る」; Hitt. šeš-zi 3p.sg. 「眠る」, Skr. śásti 「眠る」.

*kei- 「横たわる」; Hitt. kittari 3p.sg.med. 「横たわる」, Gr. keítai χεῖται 「横たわる」, Skr. śete < *keitai 「横たわる」.

*stea- 「立つ」; Gr. histēmi ἵστημι < si-stea, Skr. tīṣṭhati, Av. hištaiti 「立つ、立っている」.

*or- 「立つ」, 「起きる」; Hitt. arḥaḥari, Gr. ōrto ὄρτο 「起きる、立上る」, Lat. orior 「起きる、立上る」 (cf. E. Orient).

*es- 「座っている」; Hitt. eš-zi, Skr. āste.

*sed- 「座っている」; Skr. sasāda < *se-sēd- pf.

そうとすれば、*es- と *bheua- も、このようなペアに属するのではないかと思われてきました。

これらのペアの初めのものは通常の MI 動詞ですが、あとのものは形式所相動詞、正確には中動相の形をもっています。

一方、生き物であるかないかという区別を基本原理とする活格言語では、同じような意味を持つ動詞も、生きものに関わっているか、ものに関わっているかにしたがって違う動詞が用いられていました。

たとえばナヴァホの言語では生きものが存在するという意味では t'í が、ものが存在するばあいには t'él が用いられるといえます。日本語では「居る」と「ある」がこれに当るのでしょうか。

同じように、「横たわっている」は tiⁿ (生きもの) : -'a (もの); 「動く」は hááh, -ya (生きもの) : kèès (もの) となるといえます [31, I, p.294].

そうとすれば、印欧語に見られるものも、もとは生きものに用いられるかどうかによる区別だった可能性があります。

§252 一方、上に挙げたような形式所相動詞が完了形と近い関係にあることは、以前から知られていました¹。印欧語にはたとえば「見る」を意味す

¹高津は既に完了の単数 1 人称の語尾は *-a で、3 人称は *-e であるとのべて、さらに脚注において、「Hitt. ḥi 動詞の 1.sg. šaggahḥi (šak-, šek 「知る」), arḥi (ar- 「到達する」) の

る *weid- という語根 (cf. Lat. videō, Gr. (w)eidō εἶδω, видеть など) の O 階梯 *woid- から作られた (w)oid-a oīδα「知っている」, Skr. veda「知っている」などがあります²。

ガムクレリゼとイヴァーノフも、これらの完了形の語尾が *-Ha, *-t-Ha, *-e であったと考えています³。そしてこの語尾をとる動詞が *-m(i), *-s(i), *-t(i) をとる動詞と対立していたと考えるのです。

もしそうとすれば、完了形はある行為が行われたあとの状態を表すのが原義ですから、*-Ha 系列のものが元々無生物に使われていて、やがて完了形に転用されたと考えるのは、筋の通った考え方だと思います。

たとえばホメーロスに見える éoika εοῖκα「似ている」, ódōda ὀδῶδα「匂っている」などが例として挙っています。ガムクレリゼとイヴァーノフは、この種の動詞はものの状態を示し、元々人称を持たなかったこと、したがって語尾としては *-e しかなかったと考えています。

他方、この系列の動詞は、動詞の中動相あるいは形式所相動詞と密接に関連していることが知られています。

たとえば hístēmi ἵστημι < *sə-stā-「立てる、置く」の中動相 hístamai ἵσταμαι「立つ」に対応する héstēka ἑστήκα「立っている」, egeíro ἐγείρω「起す」に対する egrégora ἐγρήγορα「起きている」などに見られるとおりです。

先に MI 変化と Ō の変化の二つの形式が動詞変化にあることがなぜ分ら

-h(h)- の存在より察するに、pf. *-a は更に古くは laryngeal *h(=ə) + e に由来するものであろうか (?). 3.sg. šakki, ari で -i を有するが、之も亦 mi- 動詞形の -zi < *-ti と相対して、他の印欧諸語の形 *-e と関係あるものの如く思われる。完了の 1.3.sg. の最古の形は *-ə₂e, *-e か」と述べています。卓見というべきでありましょう [49, p.297].

²印欧語の完了形の語幹は O 階梯をとるのが通則でした。

³ここで H で表しているのは、laryngeal といわれる一種の喉音で、印欧語の古い時代にありましたが、その後全く消失してしまったと考えられた音です。そういう音がかつて存在したと考えなければ、印欧語の母音組織が齊一的に説明できないことを主張したのが、若き日のフェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913) でした。しかしあまりにも時代に先駆けた説であったために、言語学会からは黙殺されてしまいました。その後 1906 年にトルコのアンカラの近くのボガズキョイ Boğazköy から、くさび形文字の書かれたおびたしい粘土板が発掘されました。これはヒッタイト帝国の王たちが記したもので、紀元前 1500-1200 年くらいの間に作られたものとされます。これを 1917 年、チェコのプロズニー Bedřich Hrozný (1875-1952) が解説し、これが印欧語に属するものであることが分かりました。これによってヒッタイト学の端緒が開かれたのです。1927 年以降ポーランドの印欧語学者クリャヴィチ Jerzy Kurylowicz (1895-1978) がこの言語に見られる h の音がソシュールの予言した位置にあることを示したこと、ソシュールの説の正しさが明らかになり、laryngeal 理論が一般に受け入れられるようになりました。laryngeal に属する音の数については諸説がありますが、最も多く見られるのは、*ə₁, *ə₂, *ə₃ の三種を指定する説です。

ないといいました。

基本的には MI 変化は語幹を安定させる役割をもっている幹 (形成) 母音 *e/*o (*e と *o とが交代することを示します) を持つテマティック動詞 thematic verbs のばあいには $\bar{O}$ 変化が、これを持たないアテマティック動詞 athematic verbs のばあいには MI 変化が使われたということそのものは分っているのですが、なぜ二つの変化形式がなければならなかったかが分らなかったのです。

$\bar{O}$ 変化の 1 人称単数の語尾は - $\bar{o}$ ですが、これは *oH を予想させます。したがってこれは完了形のもとになった *-Ha 系列から発生した可能性があります。ただしそのプロセスについては現在のところ全く分ってはいません。

5. 動詞の文法的意味の形成

§253 ガムクレリゼとイヴァーノフによれば、動詞の文法的意味の形成要素は語幹末を第 1 順位として、膠着的に付加されていったといえます。接続法の要素 *e および希求法の要素 *e または *ieH/*iH は第 2 順位で、そのあとに人称語尾がつきます。

なお *m, *s, *t の後に要素 *i がついたものは一次語尾といい、現在時称などにつけられます。接続法、希求法には通常 *i のつかない二次語尾が用いられます。

1. アテマティック動詞のばあい

a) 直説法

eĩ-m(i) 「行く」, *eĩ-s(i), *eĩt(i)

Skr. émi, ési, éti

b) 接続法

eĩ-oH, *eĩ-e-s(i), *eĩ-e-t(i)

Skr. áy-ā(ni), áy-a-s(i), áy-a-ti

c) 希求法

s-ieH-m 「ある」, *s-ieH-s, *s-ieH-t

Skr. syá-m, syá-s, syá-t

Old Lat. s-ie-m, s-iē-s, s-ie-t

2. テマティック動詞のばあい

a) 直説法

bher-oH 「運ぶ」, *bher-e-si, *bher-e-ti

Skr. bhārā(-mi), bhār-a-si, bhār-a-ti

Gr. φέρ-ω, φέρ-ε-ις < *-ε-σι, φέρ-ε-ι

b) 接続法

bher-ē-oH, *bher-ē-si, *bher-ē-ti (*ē < *e-e)

Skr. bhār-ā(ṇi), bhār-ā-s(i), bhār-ā-t(i)

c) 希求法

bher-o-iH-m, *bher-o-iH-s, *bher-o-iH-t

Skr. bhāreyam, bhāres, bhāret

ラテン語の存在動詞 *esse* の未来形もこの接続法に由来するといわれます。

*es-oH > *erō*, *es-e-s > *eris*, *es-e-t > *erit*.

第二十一話

動詞の意味

1. はじめに

§254 これまで私は (1) 動詞の意味とはどういうものなのか, (2) なぜ動詞には必ず主語が必要なのか, (3) あるいは他動詞はどうして目的語がないと「何か言いたらない」感じがするのか, (4) あるいはどうして動詞の意味には時間が本質的なものとして含まれていると考えられているのか, というようなことを考え, これらの問題を統一的に考えてきました¹.

どうしてこんな「くだらない」ことを色々考えてきたかといいますと, 次のようなことになります.

まず第一に, たとえば「走る」というのは動詞で, 行為を表すとされていますが, 「走行」というのもやはり行為を表しているにもかかわらず, 品詞としては名詞です. そうとすれば名詞と動詞の違いはどこにあるのが問題になります.

また動詞を考える時に今言葉のない状態を想像してみるとどうでしょうか.

いまここに「犬」と名付けられたものがあるとします. この物体は私の左から右へ「足」と名付けられた突起状のものを動かして移動します. 確かに位置は変化しますが, どの瞬間にもその物体が「犬」であることには変わりありません. 「足」と名付けられた突起の往復運動が「歩く」という行為なのでしょいか.

とてもそうは思えません. それでは「足」の往復運動と犬が「歩く」とい

¹cf. A Consideration on the Category of Transitivity in Russian, 『人文』第20集, 昭和49年1月 pp.44-54, 再録『ことばの構造とことばの論理』(退官記念号) 古代ロシア研究特別号, 1998年7月 pp.171-182; 「準他動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』第8号, 昭和51(1976)年10月, pp.1-12, 再録『退官記念号』pp.183-194; 「状態動詞について」『古代ロシア研究』第12号, 1978年 pp.57-62, 再録 op.cit., pp.228-234; 「運動の動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』第11号, 1979年10月, 再録 op.cit., pp.260-271; Remarks on the Meaning of Russian Verbs *Japanese Slavic and East European Studies* vol.1, 1971 pp.1-14, 再録 op.cit., pp.287-301; 「スラヴ語の行為名詞 -nie, -tie の機能について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第2巻第2号 昭和56(1981)年6月 pp.103-123, 再録 op.cit., pp.347-356; 「ロシア語における再帰動詞の意義構造について」『人文』第30集 昭和59(1984)年3月 pp.99-113, 再録 op.cit., pp.388-397; 「完了時称の機能」『古代ロシア研究』第18号, 1991年 pp.75-102, 再録 op.cit., 469-496.

うこととの間にはどんな違いがあるのでしょうか。

更に、今、仮に「犬」が「歩く」という行為が定義されたと仮定します。そして「橋」と名付けられるところの、人為的な建造物があるとします。この時、観察者から見て「橋」の向う側に「犬」が現れ、定義されたように「歩いて」「橋」のこちら側に来たとします。

この時人は「犬が橋を渡る」といいます。一体それでは「渡る」というのは行為なのでしょうか。

もし行為だとすればそれは「歩く」という行為とどう違うのでしょうか。

また、人が「犬が渡る」といったとしたら、これを聞いた人は「何を渡ったんだ?」と聞くに違いありません。どうして「渡る」という行為には「何を」という表示が是非とも必要なのでしょうか。

§255 前節では四つの問題をあげ、なぜそれが問題になるかについて、最初の三つについて説明をしました。最後の問題は どうして動詞の意味には時間が本質的なものとして含まれていると考えられているのかというのですが、これは一応別にしておきます。

そこで第二の問題の説明を考えてみます。これは上に挙げた例でいえば、犬が「歩く」という「行為」と足が「往復運動をする」ということとの関係はどういうものか、というものでした。犬の立場からすれば足を動かすことでエネルギーを消費しますから、「犬」の運動だということはできるでしょうが、純粹に観察者の立場からすると運動しているのは「足」で、「犬」は厳密な意味では運動をしてはいません。「足」の運動の結果「犬」の空間的な位置が変化しているに過ぎないのです。

それでは「足」が運動をしているとして、観察者が運動をしていると思うのは、どういう時でしょうか。

おそらくこれは「足」が時間の推移に従って、その状態を変えることを感知するからだと思われます。このばあい状態を変えるもの、すなわちここでは「足」がなければ、状態の変化は存在できないことは明らかです。

一方「犬」のばあいにも足の運動の結果としての位置の変化があります。位置の変化もやはり状態の変化ですから、このばあいには「犬」の状態の変化だということができます。このばあいにも「足」のばあいと同じように、「犬」

がいなければ状態の変化はあり得ません。

一方「犬」の位置の変化の仕方と、「人」の位置の変化の仕方とは、同じではありません。「雀」の位置の変化の仕方も明らかに「犬」や「人」とは異なっています。

このばあい変化を起すものの違いによって違う行為が起ると考えれば、対象毎に違った名前を行為に与えなければならないでしょう。そうすれば「歩く」という行為を表すのに、無限の動詞が必要になります。これでは言葉は機能することができません。

§256 それほど極端ではありませんが、これによく似たものに動物の鳴声があります。一般にインド・ヨーロッパ語のばあいには、対象毎に異なった動詞を宛てる傾向があります。

たとえば英語のばあいには bark という動詞は犬が鳴くことを表し、mew あるいは meow は猫が鳴くことを表します。更に馬は neigh, ろばは bray, 豚は grunt, ネズミや兎は squeak, 羊は bleat, 雄鶏は crow で雌鶏は cluck, ひよこは peep といった具合です。

ロシア語のばあいでも事情は同じです。

たとえば犬は лаять, 猫は мяúкать, 牛は мычáть, 馬は ржать, 羊, 山羊の類は блéять, 鶏は кукарéкать, 蛙は квáкать, 鷺鳥は гоготáть, 小鳥は чирикáть などとなります。つまり鳴く対象毎に違った名前が与えられているのです。

日本語のばあいにはこれらすべてに対して「なく」という言葉で声を出す行為を表します。これはどんな音かということを表すときに用いる「びよびよ」とか「わんわん」などという擬声語が日本語で発達していることによると思われますが、私たち日本語を母語とするものには、こういうヨーロッパの言語の使い方は大変に面倒なものに思われます。

面白いことにヨーロッパの言語を母語とする人はそれぞれの動物がどういう風に鳴くかという擬声語についての質問をすると、すぐには思いつかないことが多く見られるようです。

私も昔チェコの人と話をしているときに、たまたま擬声擬態語についての話になり、動物の鳴声について質問しました。その人の話によると、子ども

の時の絵本などには擬声語があるそうですが、大人になるとそれぞれに違う動詞を使うために、擬声語は忘れてしまうとのことでした。

実際に色々な擬声語についての質問をしてみました。ネズミがどう鳴くかはどうしても思い出すことができず、次に会ったときに思い出したと言って教えてもらいました。それによるとチェコのネズミは *i, i, i* と鳴くのだそうです。

2. 動詞の意義

§257 今述べたことから、状態の変化の担い手の違いによって動詞を使い分けることが、コミュニケーションにとって大きな負担になることが分ります。

だから動詞が意味する行為は、状態の変化の担い手を、たとえば x のような変数として取りあえず組み込んで置くのだと思います。このためにこの変数に「犬」とか「その人」というような「定数」を入れてやらなければ意味が分らなくなるのだと思います。

これが動詞には主語がなければならない理由だと考えるのです。

次に「橋を渡る」という行為を考えてみましょう。

先に「渡る」という「行為」は状態の変化としては「歩く」という「行為」と異なるところは全くないといいました。またこれまで述べたことから、状態の変化の担い手が変数の形であらかじめ「歩く」あるいは「渡る」という意味の中に組み込まれていると考えられます。

だから具体的な状況においては、これに定数を代入してやらなければなりません。すなわち、主語を特定してやらなければならないのです。

それなのにたとえば「私は渡る」というと、必ず「何を渡るの?」という質問が返ってくるはず。これはどうしてなのでしょう。

私の考えでは「渡る」という「行為」は、状態の変化から導かれる「歩く」という「行為」の外に、状態の変化の担い手である対象とこれとは異なるある対象との相対的位置の逆転を伴うことが、条件になっているからだと思われます。

平たくいえば、ある人がたとえば「橋」の一方の側にいたのが、「歩く」という「行為」の結果「橋」の別の側に移ったとき、この「人」と「橋」との

相対位置が逆になります。この時、私たちは「渡る」という「行為」が起ると考えるのだと思います。

この時、「橋」は状態の変化を起すでしょうか？ 微視的には磨耗するというような変化が起るかも知れませんが、私たちが感知できるような巨視的な変化は起りません。

そうすれば「橋」は厳密に言えば状態の変化の担い手ではなく、「行為」の一部ではありません。それにもかかわらず、「橋」の存在は「歩く」と「渡る」を区別する本質的な特徴なのです。

§258 言い換えれば、「渡る」という「行為」の中には、行為の担い手と、ある対象との空間的な相対的位置の変化という、直接行為自身とは関係のないものが、やはり変数の形で組み込まれているのだということが出来ます。

だから具体的な状況の中で「私は渡る」といったとき、変数に定数が入れないままになるので、意味が分らなくなるのだと思います。

この例が端的に示していますように、「歩く」という「行為」と「渡る」という「行為」とは現実に「行為」として異なっているのではなく、状態の変化の外にそれ以外の条件を組み込むか組み込まないかの違いだということが出来ます。

言い換えれば、純客観的には「渡る」という行為は存在していないのだということが出来ます。それなのに私たちの言語が「渡る」という動詞を持っているために、私たちは知らず知らず「歩く」とは全く違う「渡る」という行為が現実に存在していると信じ込んでしまうのです。

このことから、既に名詞について述べたように、言語が客観世界の同型写像 iconic mapping ではないということは明らかです。

§259 上に挙げた例はかなり分りやすいものですが、今度はこれと少し違ったばあいを考えてみましょう。

たとえば「切る」という行為です。このばあい「ある人」が「斧」を手に握って上下(あるいは左右)に腕を往復させるという運動を行っていると考えられます。

この状態の変化はたとえば「振る」という「行為」として表されます。こ

の時手の中にある「斧」は「腕」の状態の変化に伴って、位置に変化を生じます。しかし一般的に言えば手に握っているのが「斧」に限られるわけではありませんから、何を握っているかは変数として組み込まれていると考えられます。

つまり、状態の変化はある対象だけに起るのではなく、その対象とは別の対象(このばあいには「斧」)にも起っています。

この両方を考えて「振る」という行為が成り立つと考えられます。

他動詞といわれているものの多くは、このような意味の構造を持っていると考えられるのです。

ところが、もしこの人が何も手に持っていないときはどうでしょうか。「私は振る」といったとしたら、やはりきっと「何を振るのか?」という問いが返ってくるに違いありません。そして答はきっとたとえば「手を振る」ということになると思われます。

しかしよく考えて見ればこのばあい「手」はこの人の身体の一部で、しかも状態の変化の担い手そのもののなのです。このばあいに「胴体」は全く状態の変化を行わないか、少なくともその変化は考慮に入っていない。

これは前に述べた「犬が歩く」というときの「犬」と「足」の関係によく似ています。実際に往復運動をするのは「足」であって、「犬」はその結果として位置の変化を生じるに過ぎません。それなのに私たちは「犬が歩く」といい、「足が往復運動をする」とはいいません。

§260 このばあいには二つの問題があると考えられます。一つは「焦点」の問題です。すなわち、ある場面において着目するものが「犬」であるか「足」であるかの違いです。「足」に焦点があるばあいも可能ですが(言語的にもそういう表現は可能)、大多数のばあいには焦点は「犬」にあります。

もう一つは「行為」の成立の条件です。「歩く」ばあいには歩行器官として「足」がほとんど独占的な位置を占めているという事実です。言い換えれば「足で」歩くことが暗黙の前提条件になっているのです。

ですからこのばあい変数を組み込むことなく、自動詞として扱うことができます。

ところが「振る」という行為は、何も持たないばあいでも、「手」の外に「振

る」ことは可能です。従って「振る」という「行為」の対象を明示する必要が出てきます。

しかし「手」であれ「足」であれ皆身体の一部なのですから、理論的には自動詞であるべきだと思います。ロシア語のばあい、身体の部位を表す時は対格ではなく限定の造格を用いるのが通則になっているのは、このためだと思われます。

たとえば, махать рукой / крыльями 「手/翼(造格)を振る」, качать головой 「頭を(造格)振る」, кивнуть головой 「頭で(造格)うなづく」, пожать плечами 「肩を(造格)すくめる」, скрежетать зубами 「歯を(造格)きしらせる, 歯ぎしりする」, топтать ногами 「足で(造格)踏む, 地団駄を踏む」など。

これらの動詞も、身体の部分でないときには対格を取ります。たとえば качать колыбель 「揺りかごを(対格)揺する」, пожать его руку 「彼の手を(対格)握る」, топтать тараканов 「ゴキブリを(対格)踏みつける」など。

бросать 「投げる」も体の投げる動作が意識されるときには身体の一部でない対象のばあいでも造格を取ることがあります。たとえば бросать камнем 「石を(造格)投げる」 cf. бросить якорь 「碇を(対格)投げる」。

§261 先ほどの「振る」という「行為」に戻りますと、もし「斧」を手にして「振っているとき」斧がたとえば「木」のような別の対象に接触したとき、その人は「斧で」「木」を「打つ」ということになるかも知れません(e.g. бить топором дерево 「斧で(造格)木を(対格)打つ」)。あるいはその結果「木」が二つの部分に分れたとき、言い換えれば「木」の状態の変化が生じたとき、これは「切る」という「行為」だと考えられるでしょう(cf. топором рубить дерево 「斧で(造格)木を(対格)伐る」)。

しかし「振る」, 「打つ」, 「伐る」のばあい、ある対象の上に起る「振る」という状態の変化は客観的には全く変わっていないことができます。これらの「行為」を区別するのは、行為そのものではなくて、それに付加された

条件あるいは他の対象の状態の変化なのです。

3. 動詞の意義構造

§262 以上のことから、「行為」というのは、純客観的な世界に独立して存在しているものではなく、ある着目する対象の上に生じる状態の変化に、あるばあいには別の対象の上に生じる状態の変化や、その他の直接には状態の変化にかかわらないさまざまな条件を考え合せて、ある言語がある「行為」とであると認定するものだ、ということができそうです。

しかしそのばあいにも問題が出てきます。たとえば現象としては「ある人」が「斧」で「木」を「打つ」という「行為」を行っていても、私たちは「彼は木を伐っている」と認めることがしばしばあります。現在形のばあいには、ほとんど全てのばあいにこのことがいえます。

それはどうしてでしょうか。おそらく周囲の状況から、彼が木を伐ろうとしているのだと判断したからに違いありません。逆にいうと言主がそういったとすれば、彼は周囲の状況をそういうことと判断したのだということが、動詞の使い方でも分るともいえます。

こういう判断はとっさのことですから、極めて短い時間になされるに違いありません。私はこれを「行為の認定に必要な時間」と考え、 Δt で表しました。

たとえば「歩く」のような自動詞のばあい、歩いている人というような、ある着目する対象は前にいいましたように変数として動詞の意味に組み込まれていると仮定しましたから、これを x とし、この人の状態の変化を S_x とし、表しますと、認定に必要な時間を今いいましたように Δt とし、その間の S_x の変化を ΔS_x とすれば、比喩的に $\Delta S_x / \Delta t$ として表すことができるだろうと考えました。

この Δt は先にもいいましたように、極めて短い時間と考えられますし、かつ意義というものは一種の「結晶」のようなものでなければならぬと思われれますので、 t 時における x の状態を $S_x(t)$ としたとき、 Δt の間の状態の変化 ΔS_x を想定すれば、これも比喩的に $\lim_{\Delta t \rightarrow 0} \Delta S_x / \Delta t$ 、すなわち、 Δt を限りなく零に近づけたもの（極限といいます）が動詞の意義だと考えました。

そうするとあくまで比喩に過ぎませんが、これは対象の状態の変化を時間

で微分することになります。これを簡単に表すために余り厳密ではないのですが、仮に dS_x と表すことにしました。

§263 しかしこれを直ちに自動詞の意義の一般式だと考えるのは問題があります。たとえば「歩く」と「走る」の違いはどう考えるのか、ということがたちまち問題になるからです。

おそらく「歩く」というのは片方の足が地面から離れているときは他方の足が地面に着いていなければならないという制限があると思われます。この条件は状態の変化として捉えた「行為」そのものにはかかわっていません。

このような付加的な条件も考慮に入れて「歩く」と「走る」とが区別されているとすれば、一般的にある条件の集合 K の存在を仮定する必要が出てきます。もちろんこれは空集合であっても構わないわけです。

そこで自動詞の意義 $V_{itr.}$ を dS_x と K との組であるとする、次のように簡単に表すことができると考えました。

$$V_{itr.} : (dS_x, K)$$

このばあいには自動詞ですが、動詞の語彙的意味の構造をこのようなものと考えれば、第一になぜ動詞には主語が必要かという問題、第二にさまざまな付加的条件も考慮に入れて動詞の意義が成立するということが説明できるほかに、極限という形で時間が意義の形成に本質的なものとしてかかわってることが説明できると考えました。

そしてもう一つ重要なことは、このような仮定によって、動詞が名詞とは全く異なった認識の仕方を持っているということ、言い換えれば品詞の相違というのは、語が指す対象の相違によるのではなく、認識の仕方の範疇的な相違に依存しているということを主張することになるのです。

§264 他動詞のばあいも同じように考えることができます。「木を伐る」のように、着目する対象の状態の変化の外に、別の対象の状態の変化も考えに入れなければならないときには、その対象の状態の変化を dS_y とすれば、次のようになります。

$$V_{tr.} : (dS_x, dS_y, K)$$

この他先に挙げた「渡る」という動詞のようなものがあります。これは「歩く」のように、本来自動詞なのですが、付加的な条件の中にある対象 (たとえば橋) を示す変数との関係が含まれているために、その対象を特定しなければいけないというばあいです。

このように y で表される対象が全く状態の変化を示さないものを、私は準他動詞 *quasitransitiva* と名付けました。これは一般的に次のように考えることができます。

$$V_{qtr.} : (dS_x, y, K)$$

「渡る」というばあいには次のように考えることができるでしょう。

$$V_{qtr.} : (dS_x, y, \{xRy \rightarrow yRx\} \cup K)$$

ここで xRy というのは x と y との間に R という関係があるということを表しています。 $\{xRy \rightarrow yRx\}$ というのは x と y との関係 R が逆転することを表し、この条件が K の中に含まれていること ($\cup$) を明示的に示しています。

4. 状態動詞

§265 これまで動詞は行為と状態を表すとされてきましたが、この状態はまた形容詞によっても表すことができるといわれてきました。

そうすると動詞によって表される「状態」と、形容詞によって表される状態とはどこが違うのか、という疑問が湧いてきます。

私は状態動詞の意義は一定時間観察していてもその状態に変化がないということが形容詞の表す「状態」と動詞の表す「状態」との違いではないかと考えています。そうすればこれによって示される状態は時間の観念を抜きにしては考えられないことになります。

言い換えれば、自動詞の状態動詞のばあい、 t_0 という時点におけるある対象の状態と、 t_1 の時点でのこの対象の状態とが同じと考えるのです。そこで仮にこの関係を前に考えました表記法に従って次のように表すことにしました。

$$V(stat.) : (dS_x, (S_{x(t_0)} = S_{x(t_1)}) \cup K)$$

ここで $S_{x(t_0)}$ としたのは、 t_0 時における x の状態 S を表しています。こ

れと $x(t_1)$ 時における状態とが同じという条件が付加的条件の集合 K の中に含まれている (U) と考えるのです。

§266 私はこのような考えに立って状態動詞を調べてみようと思いました。そこで手がかりとして比較言語学の助けを借りてインド・ヨーロッパ語の状態動詞についてみると、その代表的なものに $*\bar{e}$ - という古い接尾辞があることがわかります。

これはたとえばラテン語の「持つ」を意味する *habēre* < $*ghab\bar{e}$ - に用いられています。ロシア語では同じように *имѣти* < $*om\bar{e}t\bar{e}i$ によって「持つ」という意味を表しています。

この接尾辞を手がかりにして状態動詞を探してみますと、たとえば *бдѣть* < $*bhudh\bar{e}$ - 「起きている」、「目覚めている」、あるいは *рѣть* < $*rudh\bar{e}$ - 「赤くある」、*белѣть* < $*bh\bar{e}l\bar{e}$ - 「白くある」など、数多くの動詞がみられます。

「目覚めている」の $*bhudh\bar{e}$ - という語根はゼロ階梯の母音度を持つ形で、現在形などは一般的に E 階梯の形 $*bheudh\bar{e}$ (> *блуду* 「起きる」、「目覚める」) を持っています。つまりインド・ヨーロッパ祖語では、語根に含まれている母音が、一定の法則で $zero : e : o$ または $\bar{a} : \bar{e} : \bar{o}$ という交替を行っていたと考えられているのです。 $*rudh\bar{e}$ - も同じように母音度がゼロ階梯です。

$*bh\bar{e}l\bar{e}$ - 「白くある」のばあいはゼロ階梯ではありませんが、これは動詞語根 $bh\bar{e}$ - (< 梵語 *bhāti* 「輝く」) に拡張子といわれる $*l\bar{e}$ - がついて名詞あるいは形容詞の語幹 $*bh\bar{e}l\bar{o}$ - (> 梵語 *bhālam* 「輝き」) が作られ、それから二次的に動詞が作られたためとも、考えられます。

また、軟母音の後や $*k$, $*g$, $*[x]$, などの後に $*\bar{e}$ が立つとき、先行する喉音や歯音をいわゆるシュー音に変化させ、自分は $*\bar{e} > a$ という変化を受けるという歴史的な変化(第一次口蓋化)がありましたので、見かけ上 $*\bar{e}$ を持っていないように見える形もあります。

たとえば、 $*dhrgh\bar{e}$ - 「保持する」> *дрѣѣти* > *держать*, $*st\bar{a}\bar{e}$ - 「立つ」> *стоять* (cf. $*st\bar{a}\bar{e}$ > Gr. *ἵστημι* 「立つ」) などがこれに当ります。

このほかこの接尾辞を持つ極めて多くの状態動詞の語根がゼロ階梯の母音度を持っていることから、この接尾辞は原則としてゼロ階梯の語根を要求し

ていたと考えることができます。

§267 さらにこの接尾辞 *-ē- を持っている動詞を集めてみますと、おもしろいことがわかってきました。明らかに静止している状態を表す状態動詞ではないものにも、この接尾辞をとるものがあることが分ってきたのです。たとえば *вьртѣти² 「回る」、кыпѣти 「沸騰する」、кысѣти 「発酵する」、горѣти 「燃える」、полѣти 「炎をあげて燃える」、шумѣти 「ざわめく」、кричати 「叫ぶ」、скрипѣти 「きーきーと軋る」などが挙げられます。

たとえば、今述べた вьртѣти のばあい、回される対象も、「行為」を行う人も、共に状態の変化を伴っています。しかし「回している」という点では、一定の定常状態を保っているということが出来ます。これらの動詞はいずれも「行為」とも、また「過程」とも考えることができます。これらの動詞が状態動詞を表す接尾辞 *-ē- を持っているというのは、極めておもしろいことです。これらは「行為」と「状態」とをつなぐ、中間の位置を占めているといってもいいでしょう。

この種の動詞には、このほか *pr̥s-ē-tei 「撒かれる」 > пр̥шѣти 「雨降る」(cf. Cz. prší 「雨降る」)などのほか、擬声擬態語 (onomatopoeia) に属する бльштатися 「稲妻が光る」、льштати 「ぴかぴか光る」、пищати 「ピーピー鳴く」、трещати 「パチパチ音を立てる」などがあります。

このように「状態動詞」の構成をもつものに、二つの種類があることが分ってきましたが、そうすると、この二つを区別するために、何か名前が必要になってきます。そこで仮に本来の状態動詞を「本来的状態動詞」*stativa propria* あるいは「絶対的状态動詞」と名付け、後のものを「相対的状态動詞」あるいは「非本来的状態動詞」*stativa non propria / non per se* ということにします。相対的(定常)状態動詞は「定常状態動詞」といってもいいかもしれません。

§268 このように、私たちが「状態動詞」と考えているものの中に、印欧語では実は二つの種類があることが分ってきます。そうすると、これらの動詞の意味の構造はどうなるでしょうか。

²アスタリスクの付いているのは、現在では単独で使われることがなく、前綴(接頭辞)と共に使われるものです。

たとえば「独楽が回っている」というとき、私たちは長い時間ではないにしろ、しばらく見ていて、一定時間の間にほとんど同じ運動を繰返していることを認めて、その繰返しの仕方に注目して「回っている」と判断するのだと思われます。この判断に要する一定時間を Δt としますと、これは t_0 という時点から t_1 という時間の間、すなわち区間 $[t_0, t_1]$ の間の時間、すなわち $\Delta t = t_1 - t_0$ という関係にあります。この区間は更に小さい時間の系列に分割できます。 $t_0 = t'_1, t'_2, t'_3 \cdots t'_{n-3}, t'_{n-1}, t'_n = t_1$ というのがこれに当たります。

このような時点の系列が存在するとき、その各々に対応する対象 y (このばあい独楽) の状態 $S_{y_{t_x}}$ がすべて等しいとき、すなわち $S_{y_{t'_1}} = S_{y_{t'_2}} = \cdots = S_{y_{t'_n}} = S_{y_{t'_n}}$ が成り立つとき、 y は相対的定常状態にあるということができてでしょう。しかしこういう書き方はあまりにも煩雑なので、自動詞のばあい x の状態 S が反復するという意味で、 $Rep(S_x)$ とし、また他動詞のばあいには、対象 x と y の状態の間の関係 R 、すなわち $R(S_x, S_y)$ が反復する、という意味で、 $Rep(R(S_x, S_y))$ という表し方をしておきます。

そうすると着目する x 「子ども」あるいはそれに加えて別の対象 y 「独楽」(子どもが独楽を回すばあい) の状態、及びそれらの「反復の仕方」(回っているのか、波打っているのか、繰返しさえずっているのかなど) についての情報、及びその他の情報の「束」あるいは「集合」 K を総合的に考えて、ある相対的定常状態動詞で表される「行為」が起ったと判断することになります。したがって「反復の仕方」も、その他の付加的条件の集合に含まれていなければなりません。すなわち、

$$\begin{aligned} V(itr.stat.nps) &: [\Delta S_x, (Rep(S_x)) \cup K] \\ V(tr.stat.nps) &: [\Delta S_x, \Delta S_y, (Rep(R(S_x, S_y))) \cup K] \end{aligned}$$

これが相対的な定常状態動詞の意味構造の枠だと思うのです。

このような仮定に基づいて動詞の意義の構造を考えることによって、従来明確でなかった色々なことが明らかになってきました。しかしここで全く新しい問題が起ってきました。それは先に述べたように、クリモフによって集大成された内容的類型学が出現したことにかかわっていますが、これについては章を改めてお話しすることがあると思います。

ここでは動詞というものの本質についての考えを述べるにとどめます。

第 二 十 二 話

時間というもの

(1) はじめに

§269 従来言語学に関係する文献においては、時称についてはほとんどのばあい物理的な時間と言語における時称の関係を論じたものしかありませんでした。いいかえれば物理的な時間というものの存在については疑いのない、したがってあらかじめ与えられたものと考え、それが言語にどのように反映したかという観点から考えてきたのだといえます。その中で日本においてよく知られているものはデンマークのオットー・イエスベルセン Jens Otto Harry Jespersen (1860-1943) の『時間と時制』[13] があります。

ここで少し視点を変えて、時間とはどんなものなのかをまず考えてみたいと思います。こう考えることになったきっかけは、渡辺慧という物理学者の書いた『時』という書物 [65] を読む機会を得たことです¹。『時』は物理学者であるだけに知識のないものには分らないところが多々ありますが、言語学の知識からうなずけるところも非常に多いので、分る範囲でこれを参照しながら考えてみたいと思います。

(2) 時間概念の発生

§270 渡辺慧は時間についておおよそ次のようにいっています。

大人の文明人が持っているような時間の「概念」が、子どもや未開の人々にないことは明らかです。それをよく表しているのは、子どもや未開の人々の言葉に過去や未来のないことでありましょう。しかしこれは、概念としての時間が無いということであって、そのことから必ずしも、未開の人々や子どもが現在と過去、現在と未来との区別を全然思い浮べることができないということではないと思われまふ [65, p.61].

ここで彼が「未開の人々」ということばを使っているのは、言語に優劣を認めることにつながるという点から正しいとはいえませんが、言語によって

¹この人は東京大学の物理学科を卒業後フランスに渡ってハイゼンベルグ、ニールス・ボーアなどに師事してフランス国の理学博士を得た後、帰国してやがて東大助教授になりましたが、やがてアメリカのいくつかの大学に勤めたという経歴の持主です。物理学者ではありますがきわめて該博な知識を持って認識の問題などにも造詣の深い人物です。認識についてわかりやすく解説したものに岩波新書の『認識とパタン』[66] があります。

は過去、現在、未来という区別が形の上に表されないばあいには、しばしば見られます。早い話、日本語のばあいでも、「犬が走った」という文は、確認の意味をもつ「た」をもっているにすぎません。「犬が走る」というのは「いきり」の形で、現在とは直接に関係がないのです。さらに、「犬が走るだろう」というのは、もともと推量の意味をもっているといえます。日本語もまた時間を表す形式をもってはいないのです。しかし、このことから日本語が未開の人々の言葉だということはできません。

§271 著者はさらに動物の意識における時間について、次のようなことを言っています。

下等動物には「現在」しかないということはおそらく事実でしょう。ごく下等な動物には記憶がありません。もちろん細菌が環境により自分を変えたり、昆虫に学習能力があることなどは記憶の始まりでしょう。しかしそれがすぐに「過去」を持っているということではありません。哺乳動物のような高等な動物の記憶でも、それは、人間の記憶とは異なるものだと思われれます。

ギユイヨー Jean Guyau (1854-1888) はこんなことを書いています。「象は数年前自分を鞭で打ったことのある人に突然跳びかかることがあります。...中略...かつてうけた鞭打ちが今なお生きいきとしていて、いま起っているような心象と目の前の人の心象とが重なって、ちょうど二つの噛み合っている歯車のように回り出します。いわば、その人が現在打ちかかっているように想像するわけです。...中略...したがって動物には時効というものはないのです」と。(井上勇氏訳『時間観念の創造』より。— 文責引用者)

ベルクソン Henri Bergson (1859-1941) は、人間における記憶と、犬における記憶とのちがいを論じました。「犬のばあいには、記憶は常に知覚の虜となっています。同じような知覚が、同じ光景を再現して記憶を呼戻すまで、記憶は目を醒めさせません。記憶が目覚めるのは、記憶そのものが実際に再生するためではなく、現実の知覚が見覚えあるものとして再認される—しかもそれは自分の反省としてではなく、自動的に目の前に見せられたものとして再認される—ことによって現れるのです。これに対して人間では、勝手な瞬間に、現実の知覚とは無関係に、思うように記憶を呼び起すことができます」というのです。こういう主張をどうして実証できるかは問題ですが、とにかくこれが我々を信じさせるような何かをもっていることは、事実です。(『創造的進化』原著一九六頁 — 文責引用者) cf.

[65, pp.62-63]

動物における「記憶」についてギュイヨーとベルクソンの言っていることは、ほとんど同じです。ここから渡辺は「記憶が再現されるとき、過去と現在が混ざり合っているということから、動物には、人間のばあいのようにはっきりと現在から区別された過去というものがない」のであって、「動物では過去は現在に「融合」されているのに対し、人間のばあいには過去は現在に含まれてはいるけれども、過去を現在から区別しているののであって、発生的には過去は現在が分裂してできたものだ、と結論づけています。[65, pp.63-64]

§272 それでは未来とはどういうものと考えられるのでしょうか。渡辺慧はこれについてはおおよそ次のように述べています。

本能によって動いている動物は、未来をよく予見しているように見えます。簡単な例でいえば、ほとんど全ての動物が、冬の食料を夏の中に貯蔵しておくというようなばあいがこれです。しかしこれは、未来に実現したい状態、つまり冬に食料をもっているという「目的」を意識してその準備をしているのではないのは明らかです。

もし、それが目的を意識した行為だったら、それは今貯蔵しておかなければ後でこまるという可能性も思い浮べて、取捨選択して行動を決定したということの意味します。「意識」というものは、一般にこういう選択に関するものです。ベルクソンも言っているように、「意識とは生体が行う多くの可能な行動あるいは想像上の行為の全体の中に照り渡る光です。意識は躊躇または選択を意味するものです。」(『創造的進化』一五六頁 — 文責引用者)。

知性と本能は、同じ問題を解く二つのすじ道ですが、前者は意識へ向き、後者は無意識へ向けられているというベルクソンの考えに反対することはできません。

このばあいの無意識というのは、無生物にみられるような意識の不在ではなく、中和された意識、睡っている意識であります。この意識は行動がずらずらと行き、ちょうど我々が習慣的な行為を機械的にやっているときとか、夢遊病者が夢を実行している時のように、行動が障害に出あわぬ限り目覚めることはありません。行動が取捨選択に直面した時に、意識はその本来の役割に目覚めるのです。現代の流行語でいえば、意識の起りはコンフリクトであるということもできます。

本能的な行為に未来がないということは誤っています。本能的行為ほど未来に適合した行為はないのです。本能的な行為は未来を現在に含んでいます。下等動物のばあいには、人間のように、未来が現在と異なったものなのではありません。彼等には、現在であり未来である一つの行為があるにすぎないのです。(文責引用者) cf. [65, pp.64-65].

§273 このような意識と本能の分析から、渡辺慧は次のように結論づけています。

したがって、未来というものは意識された行為、つまり取捨選択の前に立たされた行為によって、現在から分離されます。その意味は、現在の行為の選択によって未来に実現される状況が異なるということを認識し、目的すなわち未来に実現することが望ましい状況を生みだそうとする行動が現在において選ばれるのです。

こういうふうに、「未来」の発生は「目的の意識」および「因果関係の認識」と同時に発生します。因果関係とは原因が結果を生むというものですが、意識された行為のばあいには「目的」が「結果」として生じるような「原因」を作るのですから、ここでは「結果」が「原因」を生んでいることになります。したがって意識された行為のばあいには目的すなわち結果と原因すなわち対策の一方が他方を生じるという、円環運動になります。

これは知性的な分析によって生じる「分極」ではありますが、盲目的な行為のばあいにはこの二つが融合しています。本能的な行為のばあいには未来が現在と一つになっているというのはこういう意味なのです。

以上のことから意識された行為が未来を生むということことが明らかになります。過去が現在から分裂して生じるのと同じように、未来も現在から分裂して生じたものです。これらすべての源泉には現在における行為があるのです(文責引用者) cf. [65, p.66].

つまり渡辺は未来というものが、可能な複数の行為の中からある目的を選択し、そこに到達しようとして、その原因になる行為を主体的に選択することによって生れると説いています。そのために重要なのは「目的の意識」であり、また「因果関係の認識」の存在だということです。これはまた望んだ目的に到達した時点を主にして考えれば、主体的選択は過去に行われたことと

なり、過去もまた現在から分離することになります。

(3) 動物のばあい

§274 先にいいましたように、渡辺は「下等な動物」のばあいには「記憶」がないといっています。「記憶」がなければ当然時間の観念も存在できないことは明らかです。それでは人類ではない「高等な動物」のばあいはどうでしょうか。渡辺はパヴロフの条件反射について、次のように述べています。

犬を台にのせて、脚に電氣的接触点を当て、電氣的な刺激を与えられるようにしておきます。そして犬が脚を曲げるとそれが記録されるようにしておきます。

刺激を与えると犬は無条件反射として脚を曲げます。次に刺激を与える前に必ず 10 秒間ベルを鳴らすことにします。初めのうちはもちろんベルを鳴らしても犬は反応を示しませんが、同じことを繰り返すと、犬はベルを聞いただけで脚を曲げるようになります。条件反射が成立したのです。このときベルは「信号」の役割をします。ところがさらにこの実験をくりかえしているうちに、犬はベルが鳴りはじめただけでは脚を曲げず、信号の終わり近く、すなわち 10 秒の終わり近くになって初めて脚を曲げるようになります。

ところが、犬の脚の筋肉の電位をはかっていると、これは信号の進行とともに上昇して刺激の後に正常に戻ります。これは実験を何度も繰り返して、信号期間中に脚を曲げることがなくなっても消えることはありません (文責引用者) cf. [65, pp.69-70].

§275 このような事実を、渡辺は次のように解釈しています。

まず、無条件反射で脚を曲げるのは、われわれが目近くになにかがきたときに瞼を閉じるのと同じような、本能的な防御行為です。……無条件反射は本能的な、無意識な、しかし合目的な行為であるといえましょう。ここにはもちろん時間はありません。

次に条件反射の成立は、信号と刺激の痛さという、二つの表象の必然的な連合であり、この点に因果的な思考の原型が認められます。……

しかしここで強調したいのは、因果の原型である条件反射は、利害を離れた連合ではないということです。先に述べた実験でいえば、さけたい結果を生み出す原因がなにかを知ることです。食物を用いる実験のばあいには、望ましい結果を生じる原因を知ることです。そしてそのことは直ちにこの因果連合が行動の忠告者あるいは道具になるということと関わっています。つまり、信号が始まると

そのことによって防御行為が始まるのです。また食物を用いる例では、これは唾液分泌というような、合目的な/目的になかった(無意識な)行為の発動になります。

このような因果連合に基づく行動のばあいには、多少とも目的と対策という意識が目覚めるのではないかと思われます。もちろん、唾液実験のようなばあいには、意識がどの程度目覚めるか疑問ですが、犬に関する多くの経験事実は、因果連合から目的と対策の意識が目覚めることを暗示しています。私の飼っている犬は、彼の食物を入れる鍋に特有の音を知っていて、その音を聞けば、あらゆる可能な対策を用いて、その鍋のあるところに行こうとします。……

そしてここに信号によって意識が呼び出され、したがって原因と結果の分離が成立します。これは、時間の未来と現在への分離を意味するものです。

単に時間的な前後関係が呼び出されるだけでなく、計量的な時間が、信号→刺激の間に呼び起されることを実験は示しています。すなわち犬は、10秒の信号の期間の初めにもがいても何の役にも立たないことを知ると、初期にもがくことをやめて10秒の信号の終わり近くになってもがき始めるのです。10秒の信号期間は犬にとって利害関係のない、どうでもよいものではなく、近づきつつある刺激の襲来のために意識の緊張が生じつつあるのです。まさにこの緊張した意識のために、犬は時間を計ることができるのです。利害関係のない無意識な状態においては、犬は時間を計ることはできないでありましょう。

因果連合が自由選択ということと結び付いていることも、この実験は示しています。すなわち、信号が来たときに脚を曲げて曲げなくてもよいのです。最初因果連合が成立するときには、ある束縛的な反射でしょうが、その反射によるもがきが無益なものであると知ると、このような反射は消えてしまいます。逆に、最初に脚を動かすと刺激が避けられると知ると、今度は脚を動かすようになるのです。このことは、因果連合による反応は自由の前に立たされたときの選択であることを示していると思われます。……(文責引用者) cf. [65, pp.70-72]

(4)cogito ergo sum の意味

§276 渡辺慧は、物理学において「時」の観念は、量子論の出現以来革命的な革新を蒙ったとして、これを「常識人」Aと「物理学者」Bの対話という形で平易に解説しています[65, pp.104-146]。以下その概要を引用してみようと思います。まず初めに渡辺は「我」ということと「観測」ないしは「観察」ということとの関係について論じています。以下は我々の「時間」というものの性質についてのきわめて本質的で重要な議論でありますから、長さ

をおそれずに、特に重要と思われる点に限って、引用してみたいと思います。
なお、小見出しは引用者が勝手につけたものです。

B 我々物理学者は量子理論発達以来「観測」という過程そのものを注目し始めたのです。今までは、観測された結果を客観的実在と見て、その結果と結果との間の関係を調べていたのです。すなわち、観測されるものは、全然観測という過程と無関係に独立に経過発展するものと信じていたのです。これは相対性理論でも同じことです。物理的な対象は、観客がいくらわめいても泣いても何らの影響を受けずに進行する舞台面のような「客観的」な存在であったのです。ところが舞台面がだんだん小さくなって来て一人の役者が一人のお客を相手に芝居をする、という大変ですが、一個の電子を観測するのに一個の光の粒子を以てするということになって来ると話はだいぶ変わって来ました。役者が観客の一瞬^{ひん}一笑によって影響されるようになります。このようにして観測という過程から切り離された物理的对象というものは厳密には考えられなくなりました。これがいわゆる観測というものをやかましくいいただいた理由です。

A しかし、観測という以上観測する者と観測される者とがあり、両者を結びつけるのが観測過程でありましょう。今のあなたのお話では、被観測者と観測過程のことは問題にしておられるようですが、観測者そのものについても反省してみる必要はないでしょうか。

B それは物理学そのものの対象ではありません。物理学の対象はやはり観測されるものです。観測過程なるものの重要性は認められましたが、観測過程そのものは物理学の対象とはなりません。なぜなら、観測過程を観測しようとするればそれは観測過程ではなくなってしまうからです。我々は観測者と被観測者という第三者から見れば切断できないものを切断することに、いわゆるハイゼンベルクの不確定性関係が密接に関係していることを知っています。そして、観測過程そのものが物理学の対象でない以上に、観測者という観測過程をあやつっている者は、物理学の対象ではありません。.....

A それでは観測者とは何のことでしょう。

B 観測者とは結局一言でいえば「われ」ということでしょう。

A 「われ」というものは何でしょう。たとえば私は考える、それゆえ私が存在するということをいいますが、あなたのいう「われ」というのはそういう意味に近いのですか。

B ただいま私は観測者とは「われ」とであると申しましたが、それは説明ではなくむしろ定義です。観測するところの者、それを私は「われ」と称したいのです。

.....

² 「口をしめる」という意味。

少し詭弁のようですが、考えるというのは結局見るのが眼球の内を感じるように頭脳を感じているのではありませんか。考える内容は結局広い意味で感覚の残した「残像」またはその組合せでしょう。感覚による経験を持たない頭脳は考える能力がないでしょう。その意味で、考えることも観察でありましょう。考えるということそれ自身が「我」であるようにいう人がありますが、それはおかしいではありませんか。眼球そのものも、また眼球の作用そのものもあなたの我でないように、頭脳そのものも、また頭脳の作用の一つであるところの考えること自身もあなたの我ではないでしょう。あなたの我はこれらの作用の主体、動詞の主語でしょう。こういう意味では、考えるということも観察の一種といってよいではありませんか。……

……ただいま零時零分にこの部屋のこの位置で私が一つの観察をいたします。それから何分間の後、私はあの室隅で他の観察をすると仮定しましょう。そう致しますと、我々の定義により二つの観察の主体として二つの我が定義できたわけです。ところがこの二つの我が同一の我であるということは、我々の定義から出てまいりません。これでは常識的には我というものの定義としては何か欠けているところがあることになります。

A …… いったい何時何分などという時刻を知るのはあなたの言葉でいえば、ある観測の結果ではありませんか。ですから、観測者としての我を定義する上には何の縁もないことです。あなたの定義に従って観察するものとしての我それ自身には時刻だの時の経過などのあるはずがありません。我というのはあなたのいう観測という行動によって定義されているので、その我には位置だの時刻だのという性質はありません。それですから私の我はただ一つであります。たまたまこの私の私の観測という行動が発動して、ある特定の測定を行えば、初めて空間だとか時間とかが現れるのです。ですから私が時計を見て、一回は零時零分であり他の一回は零時五分であったからといって、この二回の観測をした主体が別物であろうと心配するくらい馬鹿げたことはありますまい。

B …… なるほど、あなたのいわれるとおりです。時刻などというものは、確かに観測の一種を行った結果に外なりません。観測者そのものには時刻などはありません。「我が在る」というのは、そのことだけでは「或る地点に或る時刻に我が在る」ということを意味しません。物理学者のみならず、世上一般に何でも存在することを時空という枠のある点に存在することだと思いたがりますが、これは無意味です。時空は観測、しかもある特殊な観測の結果あらわれるもので、初めからすべてが時空というものの内に浸っているとは申せません。この考え方は、物理学的な考え方にも一向に反しないどころか、むしろきわめて物理学的な考え方です。

A 「我」には時刻がないということは、我は常に「現在」に在りということと同意義だといえましょう。……古今東西を通じて「現在」という牢屋から抜け出た人はありません。

……

あなたの言葉を用いれば、「我観察す、故に我在り」ですね。時間とか空間とかいうのは観察の結果であるゆえ、我には時間とか空間とかいう性質はない、我は時空を超越し我の所在は常住的に「今」であることになりました。しかし我は「今」に在りということは、我は観察するということと同意義であるのですね。

……

このように簡単にものがいえるのは、あなたが「考える」ということをも「観察」の内にに入れてしまったからです。あなたのいうところの我というのは、時空的性質を持たないのみならず、個人的内容も持たない我です。なぜなら考えの内容をあなたは観測の内容と同列においてしまったゆえ、考えるという観察行動の主体たる我には考えの内容により定まる個性はないわけです。ですからあなたの我はいわば抽象的な我ですね。この抽象的な我には具体的な記憶もなければ具体的な意欲もありません。これに対して、私どもがふつう我と称するものは考えの内容をもその性質の内に含めております。これはいわば現実的な我です。抽象的な我にとっては考えの内容も「外界」との交渉（観察操作）の結果でありましたが、現実的な我は考えの内容をも内界へ取り入れたものです。この現実的な我は、抽象的な我と同様観察を致しますし、また考えも致します。しかし一番大きな相違は現実的な我においては考えるという観察をするときに観察するものと観察されるものが同一物であるわけです。次に、現実的な私の観察は抽象的な私の観察と異なって私の内に観察の結果が記されるのです。

B なるほどそういわれてみればそうです。凡ゆる種類の観察の主体、すなわち単に観察者として被観測者とならない我というものは、言葉の上では考えられても実際にはありませんね。現実的な我は、真に自らが観測を行うという事実をまた観察（すなわち知ることが）できるのですね。観察せよと命じ（すなわち観察を予知し）、観察を観察し、観察の結果を知るという二重人格的奇芸を行います。もちろん観察せんことを予知すること、また観察を観察すること、また観察の結果を知ること、それらはまたすべて考えるまたは観察という行動の一種ですから、私どもが初めにいった以外の作用を現実的な我が持っているわけではありません。しかし、現実的な私の特質は今いう二重性にあるようですね。己の観察を自らまた観察し得るというのが、我々の直接体験する我を特徴づけるもののようです。そしてこの観察の観察をまた観察できるという限りない堂々めぐりがはじまりましょう。この堂々めぐりを、我々の現実の我といえるでしょう。そしてこの堂々めぐりには特別な色彩があって、その色彩が、我々のいわゆる情緒という

ものではないでしょうか。……

(5) 時間と我の流れ

B ところで、さきほどあなたは我は現在に在りということを申されましたが、これはあなたの現実的な我においてはどうなりましょう。

A これが最も面白い点であるように思われます。現実的な我も、現在という牢屋から抜け出られないことはなによりも我々自身の体験で知っております。ところが、抽象的な私の現在と現実的な私の現在とは大きな相違があります。前者の現在は静止した現在であり、後者の現在は動く現在です。なぜかと申しますと、後者においては観察の結果が記されるからです。その記される内容がただ一つではないのです。ただ一つでないことを現実の我は知ります。ところがそのただ一つでないものが、ただ一つの「現在」に積み重なります。これは文字面では矛盾したことのようにですが、現実の我は一向に矛盾のように感じないで、そのことを動くとか流れるとかいうふうに感じるのです。

……

この運動を私は「我の流れ」と申してもよいでしょう。我々が直接体験する「時」はこの私の流れです。ところで、この運動をあなたは物理学上の運動と比較されましたが、もちろん動くという点では類似するところもありますが、一方非常な相違があります。それは、私どもの私の所在である現在の特別な性質によると思えます。

……

物理的な時間というのは、二つ以上の物理的な運動を比較するために、何か一つの運動を基準にして、その空間的な位置の差で時間を計測するのです。ところで、これと同じことを私の運動に適用できるでしょうか。厳格に同一の手段を応用することはできません。第一に、物理では二つの運動を比較しますが、私は二つありません。一つの私が我ならば他の我は我ではなくなるからです。ですから、せいぜい一つの私の流れの内の二つの部分を比較しなければなりません。次に、物理では何か一つの運動を基準にして、その空間的な変化で計るのですが、私の内には空間はありません。空間は観察結果だからです。それですから、私の流れの内では何か空間的なものでない変化を基準としなければならないで

しょう。しかしかかる基準は物理的な基準ではありませんから計測することはできません。いまかりに、このような種々な難点を黙認して物理的な時間に類似するものを導入するとすれば、まず心理的時間とでもいうべきものを得ましょう。しかし、このような不徹底な概念は今日は別に追求するのを止めましょう。それより私の流れの最も大きな特徴をなすところのものを一つ考えてみましょう。それはその流れの一方性です。というのは、この流れは逆に戻すことができないのです。物理的な時間、もちろんあなたのいわゆる古典的な時間なのでしょうが、この時間は本質的に空間的なものですから、左と右とを交換して考えることができるように、思考の上ではとにかく逆に流してみることができるはずで

B そのとおりです。古典的な時間は逆に流して考えることができます。そのことはまた後で申し上げます。実際あなたのいわれるとおり、我々の体験する「私の流れ」を逆に流すということは、いくら考えようとしても考えられないことです。それは一体どういうところから来るのでしょうか。

A 私の考えではそれは現在というものの性質だと思います。現在というものは単に動く質点のようなものではありません。第一に動く質点は自分のすでに通った点をまた外へ棄てて行きますが、「現在」は自分の通ったすべての変化を自分の内にのみこんで行きます。ですから、我にとっては過去は現在の内に蓄えられてゆくのです。第二に動く質点はこれから先自分の通るべき点をすべて定められているのです。ところが「現在」はこれから自分の通る変化を自分で自由に定めます。ですから我にとっては将来は自分の創造物です。こういうわけですから、私の流れの将来と過去とを逆転しようということは、全然性質の異なる二つのものをいれかえようとすることで意味のないことです。

.....

物理学者のまねをして、私の流れを逆流させて考えようすると大変なことになります。物理現象ではフィルムを逆転してみられる現象はたとえ物理法則にかなっていいまいと、とにかく物理的な変化です。ところが私の流れを逆に流したものを無理に考えてみようとするれば、それはすでに我ではなくなります。この逆転された流れにおいては「現在」はその蓄えを限りなく後ろへ吐き出してゆくことになります。これでは「現在」ではありません。強いてあなたの言葉を用いれば、私の流れは徹底的に不可逆であります。

B あなたの今のお話を要約すると、私の流れは本質的に不可逆である、その不可逆性のよって来るところは「現在」すなわち「観察」の特別の性質によるので

あるということになったわけですね。

§277 以上長々と引用を重ねてきましたが、時間の流れにおける不可逆性が「具体的な我」の「観察」の結果であり、過去も未来もその「観察」の、いわば主動性にあるということを主張しています。そして著者は、それが「古典的物理学」の立場では時間の不可逆性が熱力学の第三法則といわれるものに由来しており、それが結局は観測の不可逆性に原因を持っているという、この後の議論につなげる前提となっています。

渡辺が結論として主張したいのは、物理学においても時間の観念は質点の運動を観測することによって生じ、同時にこの観測という契機が時間を不可逆なものにするのだ、ということにあります。そしてそれが「終末的」な時間と重なり合うものだということになるのでしょう。

(6) 時間の種類

§278 さらに渡辺は時間の種類について、「回帰的時間」、「終末的時間」ならびに「進化的時間」を区別して、おおよそ次のように述べています。

まず古典的な「回帰的時間」については、

人間が時間の計量を行うようになったのは、自然界のくりかえしに注目したことに由来することは明らかです。一日一日のくりかえし、春夏秋冬のくりかえし、恒星の回帰などが時間計量の基礎となったことは人の知るところです。

物理的な時間はガリレイの力学の法則(振り子の定理、速度保存の法則、さらに落体の距離と時間との関係)によって導入され、さらにニュートンにより厳正なものになり、さらに電磁気的時間、相対論的時間へと進展しました。しかしここに興味のあるのは、物理学にはエルゴード定理(このばあいポアンカレの復帰定理でも同じ)というものがあります。これはほとんどあらゆる物理的体系は、時間が充分たてば元の状態(速度も含めて)にいくらでも近い状態に戻るということです。……物理的時間可逆性は別のところで詳しく述べましたが、物理的時間のもう一つの特性はこの擬周期性です。これは、あらゆる力を周期的関数に分解したと考えると、充分多種の周期のものを寄せ集めれば、もとの力とほとんど同一のものになりますから、こういう力により生じる運動もほとんど周期的であることは想像されるところです。このことは、自然現象のくりかえしの性質は根深いものであることを示しています。……

人間の時間に関する初期の哲学が回帰的なものであったことは、まことに当然だったといえます。その著しいものは東洋のインド宗教における輪廻の思想、あらゆるギリシア哲学者たちに共通な環状時間であります。(文責引用者) cf. [65, pp.75-76]

と述べています。

§279 また「終末的時間」については、

これに対してキリスト教は、その終末観の教義により、時間観念に新しい要素を導入したといわれます。ここで問題なのは、終末観の内容ではなく、この観念に結晶したユダヤ教より受け継がれ発展された、生命における時間への洞察です。これはいうまでもなく、最後の審判と、神の国の実現とに関する信仰ですが、これは「危機」と「残存のための対策」を象徴化したものともいえましょう。これは、現在までの過去の清算と、未来への希望を表しています。ここでは決断が要求されています。未来を選択する決断です。これは不連続的な瞬間です。……復活、キリストの再来、審判、回心などの観念は、回帰的な時間の中には位置を見出すことのできないものです。(文責引用者) cf. [65, p.76]

としており、

さらに「進化的時間」については、

歴史的順序において、キリスト教より後に、時間について新しい観念が導入されました。それは近代を古代、中世より根本的に区別し特徴づける「進歩の思想」です。これはフランスに発した思想ですが、それは同時に、資本主義経済の基本的性格でもあり、またマルサスの人口論、ダーウィンの進化論の基底となる共通の傾向でもあります。これは古代の時間が繰り返される環状の時間であるのに対して、一方向きで、くりかえしもなく逆転もきかない進展の時間です。(文責引用者) cf. [65, p.77].

と述べています。

第二十三話

言語に反映している時間

(1) はじめに

§280 ヨーロッパの言語のばあい、動詞は時制という時間の体系を持っています、ある行為が起る時間を表すことになっています。もっとも生起の時間だけを純粹に表すことはなく、行為の完了だとか、継続などいろいろな要素がこれに絡み合って複雑な体系を形作っていることが多く見られます。このために時制の研究はおおのの形がどのように用いられているかを明らかにすることであります。

その他、言語には動詞だけでなく、時間を表す名詞や副詞もありました。ドイツ語の Zeit 「時間」というのは、英語の tide [潮の干満] と同じ語源を持っています。またロシア語で「時間」を表す vrēmya も、*wert-men という形をもっていたと考えられます¹。この語形は *wert- という語根と *-men という接尾辞からできていますが、*wert- は英語の version 「作り替え、変形、版」や anni-versary 「記念日」(anni- 「年」+ vert-) に使われていますように、「回る」という意味をもっています。このことから分りますように、印欧語を話していた人々は、渡辺のいう「回帰的な時間」の中に暮していたと考えることができます。仏教でいう輪廻転生の世界です。そこでは過去はやがてめぐり来る未来でもあり、また未来は過去を準備するものであったのかもしれません。

(2) 過去と現在の関係

§281 ところで渡辺は過去と現在の関係について「人間のばあいには過去は現在に含まれてはいるけれども、過去を現在から区別しているのであって、発生的には過去は現在が分裂してできたものだ」(291 ページ参照) といっています。このことから渡辺は現在が基本であって、過去はそこから分裂してできたものだ、と考えているように思われます。これは直感的にも正しい

¹ アスタリスクがついているのは、推定形で、インド・ヨーロッパ語がまだ分裂していない遙かな先史時代の言語(印欧祖語という)の語形だとされます。これは当てずっぽうな推定によるのではなく、印欧語比較文法という、精密な方法によって推定されたものです。

と思われるのですが、比較文法などから私たちが知っていることと考えあわせてみると、過去のでき方にはもうちょっと複雑な経過があるように思われてきます。この点を考えてみたいというのが、このお話の中心的な問題なのです。

§282 たたとえばギリシア語のばあい、現在形のほかにもっぱら「過去」を表すアオリストという形、「未来」を表す形、そのそれぞれに対して行為の完了を表す形を持っていました。これは印欧語が分裂してできた印欧語族に属するほかの諸言語にも広く見られるもので、印欧祖語のある時期にすでに存在していたと考えられています。印欧祖語はこれらに使われる語根に母音交替という手段を使って区別していました。*e : *o : zero, *ē : *ō : *ə というのがその交替でした。

たとえば現在語幹に用いられる語根は *e または *ē という「母音度」を持つのが普通でした (E 階梯)。アオリストの語幹には zero または *ə というゼロ階梯が、また完了形には *o または *ō という O 階梯に加えて、しばしば語根の重複が用いられました。(ただしここで言っているのはいわゆる語幹アオリストといわれるもので、後になると語根の母音度は現在と同じで語幹末に*s を付けて作る、いわゆるシグマのアオリストと呼ばれるものが大多数をしめるようになります。)

動詞	意味	現在	アオリスト	現在完了	参照
*leik-	残す	leip-ō	e-lip-on	le-loip-a	re-lict
*bheidh-	説得する	peith-ō	e-pith-on	pe-poith-a	in-fid-el
*weid-	見る	(w)eid-ō		(w)oid-a 知っている	梵 veda(吠陀) ((w)id-ea) 姿, 形

§283 このような母音交替を文法的な意味の違いに利用するのはメイエもいっていますように [17, pp.153-154], セム語族に典型的な形で現れています。例えば、セム語族の代表的なアラビア語では、三つの子音の並びが語の意味

を支えているといいます。例えば「殺す」という意味は *qtl* という子音の集りによって示されていました。「彼は殺した」という完了の意味は *qatala* によって、「殺しつつあった」は *ya-qtulu* で、「殺されてしまった」という受動の完了形は *qutila*、「殺されつつあった」という受動未完了過去は *ya-qtalu*、「殺されてしまった」という過去完了は *qūtila*、「殺しつつあった」という未完了過去は *yu-qātulu* という具合だといいます。

§284 こういうわけでアラビア語の文字は主として子音だけを表すことになっています。しかしそれではあまりアラビア語に習熟していない人にはどのような母音を入れたらよいのか分かりません。それで母音を表す補助記号を使います。アラビア語では母音は *a*, *i/e*, *o/u* の三つしかありません。*i* と *e*, *o* と *u* は環境によって変わりますが、アラビア人には同じ音と聞こえ、区別できないのです。序でにいえばコーランは聖典ですから、間違っってはいけないので、常に補助記号付きで書かれているようです。

完了	受動完了	過去完了
<i>qatala</i>	<i>qutila</i>	<i>qwutila</i>

現在	未完了過去	受動未完了過去
<i>yaqtulu</i>	<i>yaqatulu</i>	<i>yaqtalu</i>

こういう表し方は母音が文法的な役割を持たない英語や日本語のばあいには不完全な記法と思われますが、子音だけが意味を支えるセム語のような言語にとっては、合理的だということもできます。いずれにしてもこういう母音交代が文法的な役割をもっていたということから、印欧語とセム語の祖先が同じであったのではないかという考えを持つ学者もあるようです。

§285 アオリスト *a-oristos* というのはもともと「限定されない」という意味です。この形は主に過去に使われ、行為が起ったことを「言い切る」時に用いられます。これは過去形に付けられる **e-* (*augmentum*) を持つことが多

いのですが、この *e- は印欧語の比較的新しい時代に付けられるようになったと考えられています。アオリストは前にも述べましたように、語根の母音度がゼロ階梯ですから、いわば何も修飾していない語根というように考えられます。アントワヌ・メイエ Antoine Meillet(1866-1936) という有名な比較言語学者はこの形が「単純で純粋な行為」(action pur et simple) を表すと述べています [17, cf. p.249]²。そして彼は現在語幹は線で、アオリスト語幹は点で比喩的に表すことができるとして、クセノフォンの一節を引用しています (ibid.).

emakhonto	mekhri	hoi	Athēnaioi	apepleusan
ἐμάχοντο	μέχρι	οἱ	Ἀθηναῖοι	ἀπέπλευσαν
戦っていた	まで	冠詞	アテネ人たち	船で去る

=(彼らはアテネ人たちが船で立去るまで戦っていた.)

ここで「戦っていた」というのは未完了過去形といい、過去に於いて継続していた行為を表すとされているもので、現在語幹から作られています。「船で立去る」sail away というのはアオリストの形です。

これについては著名な古典学者のシャントレーヌ Pierre Chantraine(1899-1974) も同じように「現在は過程をその発展において示し、アオリストは純粋で単純な過程を示す」としています [5, p.155]³。

§286 これと関連して注目されるのはグノーミック・アオリスト gnomic aorist と呼ばれている用法です。これは英語では一般的真理を表す現在と同じ働きを持っています。時間や空間に左右されず、必ずそうになっているということを表すものです。

たとえば

1) kallos men gar ē khronos **anēlōsen** ē nosos **emarane**.

χάλλος μὲν γὰρ ἡ χρόνος ἀνῆλῳσεν ἡ νόσος ἐμάρανε.

²En grec, le thème de présent indique un procès considéré dans son développement, dans sa durée; le thème d'aoriste, le procès pur et simple: (下線引用者)

³le présent note un procès en cours de développement, l'aoriste un procès pur et simple, abstraction faite de toute considération du durée.....

美しさは時間がだめにするか、病気が萎れさせるものだ (Isoc. 1.6).

- 2) hoi turannoi plousion hon an boulōntai parakhrēma **epoiēsan**.

οἱ τύραννοι πλούσιον ὃν ἂν βούλωνται παραχρήμα ἐποίησαν.

僭主たちというのは誰でも好きな者を一瞬にして金持ちにできる者だ (Dem. 20.15).

§287 このような用法に非常に近いものとして、過去の経験から引き出した真実を述べるばあいがあります。たとえば、

- 3) polloi pollakis meizonōn epithumountes ta paront' **apōlesan**.

πολλοί πολλάκις μείζονων ἐπιθυμοῦντες τὰ παρόντ' ἀπώλεσαν

多くのものはしばしばより多くのものを望んで今持っているものを失うものだ。

3) の例は確かに過去の経験をもとにはいますが、いわれている内容はいつの時でも成り立つと思われるものです。

§288 これに対して現在形の語根は E 階梯の母音度の特徴としており、過程を表すと考えられます。したがってこれは 1) 現在進行中の行為、2) 現在意図している行為、3) 近接未来などのほか、4) 一般的真理を表します。たとえば、

- 1) alēthē **legō**

ἀληθῆ λέγω.

私は (いま) 真理を述べている。

- 2) tēn doksan tautēn **peithousin** hūmās apoballein.

τὴν δόξαν ταύτην πειθοῦσιν ὑμᾶς ἀποβάλλειν.

彼らはそのような名声を捨てるようにあなた方に説得しようとしている。

- 3) metaksu ton logon **kataluomen**;

μεταξύ τὸν λόγον καταλύομεν;

この話を途中で中断しろと言うのか?

4) agei de pros phōs tēn alētheian khronos.

ἄγει δὲ πρὸς φῶς τὴν ἀλήθειαν χρόνος.

時間が真実を光のもとに導いてくれる。

§289 先程述べましたように、メイエは現在語幹とアオリスト語幹との違いを線と点とに譬えましたが、このことから彼はこの違いを行為が継続しているか、あるいは完了しているかの違いと考えていたことを窺わせます。スラヴ諸語ではこの区別がはっきりしており、文法家はこれをアスペクト *aspectus* とよんでいます。しかし上に述べた用法をまとめた形で見れば、アオリストと現在との相違は、「言い切る」形のアオリストと、眼前に起っている事態を観察する形の現在という対立にあるのではないかと思われてきます。つまり、事実を「確実」なものとして述べるか、それとも「まだ確定してはいないもの」いわば不確定なものとして述べるかという相違ではなかったのか、と思われてくるのです。もしそうとすると、アオリストが過去の事実を表す傾向を持つようになるのは当然だと考えられます。過去の事実ほど確実なものはないのですから。

以上のことから現在形とアオリストはもともと「現在」に定位していて、確実な「知識」となっているものと、感覚的に体験しているものとの対立ではなかったのか、と思われてきます。もしそうとすれば、これは言葉を話す人々の側の、ことがらに対する態度の違いということができます。

(3) 現在形

§290 これを裏付けるものかも知れないのは、現在形の形です。

メイエはなぜアオリストを「単純な」形と言ったのでしょうか。おそらくはアオリストの語幹の母音度がゼロ階梯だったことを指しているのではないかと思います。先にアラビア語の例でいいましたように、母音度が零ということは、語の意味が子音だけで支えられていることを意味しているからです。

これに対して現在語幹は母音度が E 階梯をもっているのが普通です。この母音度は未完了過去 *imperfectum* と呼ばれ、「過去に起りつつあった行為」を示す形にも共通しています。たとえば先に挙げた *leikh- 「残す」という語幹からできたアオリストは e-lip-on ἔλιπον で、現在形は leip-ō λείπω でしたが、

未完了過去形は *e-leip-on* ἐλείπον でした。しかし印欧語のばあい、現在を表すには E 階梯の母音度の他にいわゆる「接中辞」による形もあったと考えられています。印欧語の接中辞は母音度ゼロ階梯をとる「鼻音接中辞」*infixe nasale* **ne/*n* だけが知られています。**leikʷ-* のばあい、ラテン語では **re-li-n-quō* 「残す」(cf. E. *relinquish* 「放棄する, 撤回する」), 完了 *reliqui* < **re-likʷi*, 完了分詞 *relictus* (cf. E. *relict* 「残存者, 売残り」) となり、サンスクリットでは *ri-ná-k-ti* 「彼は残す」のようになるといいます [17, p.215].

§291 すなわち、原始印欧語のばあい、母音度はかなり感覚的なものではなかったかというのが憶測でもあり、印象でもあるといたいのです。ゼロ階梯という単純で明快な形に対して、まだ結論がでてはいない過程として見るときにこのような延長した形が見られるのではないかと思います。

門外漢ですが、たとえばスワヒリ語のばあい、「習慣的行為」とされているものは全ての人称に共通な接頭辞 *hu-* をつけてその後に直接動詞の語幹が続きます。たとえば, *Ulevi hu-ondoa akili* 「飲酒は理性をだめにする」というようなばあいです。これに対して現在目の前で起りつつある行為は人称接頭辞の後に *-na-* をつけ、その後に動詞語幹が続きます。たとえば, *ni-na-andika barua* 「私は手紙を書いているところだ」というようなばあいです。

§292 1970 年代以降言語学に新しい理論が登場しました。内容的類型学というものです。これは言語は主語・述語・目的語の捉え方によって幾つかの類型に分類できるというものです。

現在指定されている類型には主としてアメリカのインディアン言語に多く見られる「活格言語類型」*active language type* とカフカスの言語に多く見られる「能格言語類型」*ergative language type* およびインド・ヨーロッパ語に見られる「対格言語類型」*accusative language type* とがあります。又活格言語は能格言語を経て、あるいは直接に対格言語類型に発展していくという方向をとると考えられています。

§293 活格言語および能格言語は文の中心になるのが動詞などの述語です。例えば「死ぬ」という述語があったならば、それだけでは意味が分りません

から、例えば「太郎」という語を説明として付け加えてやれば、「ああ、太郎が死ぬのだな」と分ります。これらの言語にはもう一つ行為を他のものにおよぼすことを示す(すなわち私たちのことばで言えば他動詞の主語となるもの)を表す語尾を持った「活格」あるいは「能格」があります。この格を持つのは当然生物を指す名詞でなければなりません、それを例えば「次郎-が」と表すことにしますと

次郎-が	太郎	死ぬ
------	----	----

のようになり、「次郎が太郎を殺す」ことになります。太郎が死ぬように次郎がしたということになるからです。しかしヨーロッパの人々には長い間こういうことがなかなか分りませんでした。同じく標識のない(すなわち日本語では「が」がない)「太郎」が場合によって主語になったり目的語になったりするようなことは、ヨーロッパのことばでは考えられなかったからです。またどちらの場合でも「死ぬ」ということばしかないというのも理解できませんでした。

一般にこれらの言語には自動詞と他動詞の区別がなかったのです。

しかし考えてみれば「太郎」の上に「死」が訪れなければ、「次郎」は太郎を殺すことができません。それに対して太郎は次郎がいなくても死ぬことができます。このばあい「次郎」が「太郎」の死に責任があるかは単なる認定の問題なのです。呪いが有効であるという文化を持った社会ならば遠く離れたところにいた「次郎」が太郎の死に責任があると認定される可能性は十分にあります。

このことから明らかになるのは、この種の言語では述語が文の中心にあり、「次郎-が」も「太郎」も述語を説明するためにあるということになります。

§294 ところが印欧語の場合には例えばラテン語の *amō*「私が愛する」、*amās*「おまえが愛する」のように、動詞述語にははじめから主語が組み込まれています。いいかえれば、述語は常に主語に従属し、支配されているというになります。

このように文が主体中心になることによって、述語にもっとも密接に結びついてこれを説明していたものは、行為のおよぼされる客体を表す目的語と

して、述語に支配されるようになります。こうして目的語を持つものと持たないもの、すなわち他動詞と自動詞の区別が生れてきたと考えられます。

活格言語あるいは能格言語の場合には何も印のない(絶対格)「太郎」が述語に密接に関わっていましたから、「太郎」が死んでしまったのか、死にそうなのかと、というような事柄にどうしても注意が集中すると考えられます。アスペクトの発達です。

ところが対格言語の場合には述語は主語の支配下にありますから、主語が何をしようとするのか、あるいは何をしたか、などという、主語の表すものの「主体性」が前面に押し出されてくると考えられます。これは主体の「決断」に関わることですから、このとき古典的な時間の輪は切断され、一つの線となって現象すると考えられます。いわば終末論的時間への変貌です。そしてそれは主体がどういう風に行為を行ったかという、行為の様態よりは、いつ主体が行為を行ったかということの方に注意が向くことにもなると考えられます。

§295 このような考えがもし妥当なものだとしたら、言語における時制の問題は、対格言語において初めて問題になってきたものではないかと考えられてくるのです。

しかも言語というものは一つの連続体を成しており、以前の言語状態を引き継ぎ作り直すことによって発展するものだと考えれば、印欧語が単に純粹に過去、現在、未来というような時間観念だけでなく、アスペクトに属する完了、未完了、継続といったものと縋い交ぜになった時制を作っていることも、よく説明できるように思います。アオリストと現在形の問題も、この枠の中で考えられるのではないのでしょうか。

§296 以上のような考えは対格言語においてなぜ時制が発達したのかという問題に対してきわめて示唆的だといえましょう。

活格言語および能格言語のばあい、述語が中心にあり、それを説明するものとしてまず絶対格に立つ名詞が置かれ、必要に応じてその述語によって示される事態をもたらした原因をなすものが活格に立って加えられるという構造を持っています。述語が常に絶対格に立つ名詞と文法的な一致をするという

のも、このような構造に起因しています。

これに対して対格言語では非人称文のばあいをのぞけば主体としての主語が中心に存在し、主語の立場から言語外現実が記述されるという構造をもっています。述語が常に主語と文法的な一致をするのも、このためだと考えられます。また行為の対象である広い意味での「目的」が有標的な形式として卓立されるようになったのも、このためだと思われます。

そうとすれば、このような主体性の確立とそれによる主体的な行為の選択は、結果として時制の発達を促すことになるでしょう。そう考えれば時制の発達はやはり理論的にも対格言語の本質的な現象だということになります。

§297 さらに付け加えれば、活格言語や能格言語のばあいにアスペクトが発達した理由は先に述べた通りですが、アスペクトがどうして対格言語の時制に発達したのかという機序については、まだ十分に分かったとはいえないのが現状です。しかしアスペクトの底に、確実な「知識」となっているものと、感覚的に体験しているものとの対立のような、主体的な認識の質の差が伏在していたとすれば、これがいわば「媒介項」となって時制の発生につながったのではないかと、思われてくるのです。

優れた英語学者であった細江逸紀は、名著『動詞時制の研究』[59]において英語の現在時を「直感直叙」の形式であるとし、完了形を「確認叙述」の形式であるとしています。また過去形にはアオリストに当る言い切りのものと未完了過去に当る過去の継続を表すものが含まれていますが、細江が過去形を「低回叙述」の形式だとしているのは、未完了過去の形式に相当するものではないかと私に考えています。

(4) 補説

§298 活格言語は生き物であるかないかの区別を基本にしている類型ですが、形容詞は存在していません。私たちが形容詞と考えているものは、すべて動詞でありました。この動詞からずっと後になって形容詞が発生してきます。

日本語のばあいも形容詞は言い切りの形で述語になります。そして文は述語が中心で、これを説明するために「が」や「を」を持った名詞が付け加わるという構造を持っていると考えられます。私は「が」は「集限的限定」、「は」は「排他的限定」だと考えています。たとえば「咲いた」というとき、「何が」

咲いたのか分かりません。それで「花が」という限定を加えると、話し手が何についていっているのかが分ります。「花は」によって限定されるときには「(他のものは知らないが) 少なくとも花については」「咲いている」ということになると思っています。そうすると聞き手が「花」があることについてはすでに知っていると言話し手が考えていることになります。そうすれば「は」は聞き手にとって既知の情報、あるいは話のテーマを表すことになり、「が」は未知の情報を表すことになると思うのです。

そうとすれば、たとえば

象は鼻が長い。

という文は「(他のことは知らないが) 象については鼻が長い」という意味だと考えられます。

通常いわれているように「が」が主語を表すとすると、「鼻は象が長い」という文は成り立ちません。上に述べた規定の仕方によれば、これは「(他のことは知らないが) 鼻についていえば、象が長い」ということになり、「長い」のは「象だ」という未知の情報が伝えられると思うのです。この解釈については、国語の専門家の御意見を伺いたいと思っています。

また、活格言語では絶対格に立つ名詞が述語の説明をするもので、これと密接に関係していますから、次郎が(太郎・死ぬ)という文の「次郎」を対格言語の言い方をかりてS(主語)、「太郎」をO(目的語)、「死ぬ」をV(動詞)としたとき活格言語ではS-O-Vが普通で、S-V-Oの語順も成り立ちますが、OとVとを切り離すO-S-Vとか、V-S-Oの語順は成り立ちません。日本語が(S)-O-Vの語順をかなり堅く守っているのは、そのせいかもしれません。

更に、日本語には時制が存在してはおりません。

「行った」というのが過去を表していると考えるのは、「た」が完了を表しているからにすぎません。同じように「行くだろう」、「行こう」などが未来時の行為を表すのは「う」が推量、意志あるいは勧奨を表すからに他なりません。広い意味でのアスペクトです。

いずれにしても、こう考えれば、日本語は活格言語の文の構造に似通ったところがあるように思われます。

一方たとえば「次郎が太郎をたたいて逃げていった」という文の「逃げて

いった」の主語は何かと聞かれれば、日本語でも「次郎」と考えます。このようになるのは日本語では「を」の働きがはっきりしているからだと思われますが、いずれにしてもこれは明らかに対格言語の論理に基づくものです。活格言語ならば、意味上の自動詞の主語と意味上の他動詞の目的語が同じ格に立ちますから、「逃げていった」という意味上の自動詞の主語になるのは、意味上の他動詞「たたく」の目的語と一致する「太郎」でなくてはならないのです。

第二十四話

時間の観念の発生以前

1. はじめに

§299 第二十二話で述べましたように、時間というものが必ずしも人間にとって外在的に存在するア・プリオリなものではなく、まさに観測によって認識されるものであるということになれば、時間と言語の関係は、時間の観念が一方的に言語に反映するというようなものではないということになります。

また第二十三話で見ましたように、時間というものがもし対格言語の状態において初めてかかるものとして発生したものであるとし、それ以前の言語類型の段階においては、少なくともその発生においては、言語における時間の意識の仕方が、たとえば現在の中で「確実な体験」と、「眼前に見られる過程」というような、かなり情動的なものが、たとえばアオリストと狭義の「現在」の相違をもたらし、その生起が確実なものと観念されたものがやがて過去の色彩を帯びるというように、「現在的」なものと「過去の」なものとの分離をもたらした(渡辺のいう、現在と過去の分離)という推定が、もし認められるとするならば、この「現在的」なものと「過去の」なものとの相違は、行為の属する真正な「時間」の相違というよりは、むしろ行為に対する言語主体の捉え方の相違という形で生じたものではないかという、疑いが生れてきます。

もしそうとするならば、これはまずアスペクトあるいはアクチオンス・アルトのような形を取るに違いありません。対格言語類型以前あるいは印欧語の発生の時点において、これがどのようなものであったかという問題が、ここに生じて来ないわけには行きません。

2. 時間の観念の発生以前

§300 以上見てきたように、もし時間が線状性を持つに至るのが偏に観察者の主動性にあるとするならば、少なくとも線状性を持った時間の概念というものは、先に挙げたような対格言語の段階において発生してきたと考える

のが、至当であるように思われてきます。

さらにもしこの考えが正しいとすれば、対格言語以前の類型学的な段階においては、どのようなことが考えられるか、ということが、新たに問題になってくると思われます。

内容的類型学の現状では印欧語族は活格言語類型から直接に(すなわち能格言語類型を経ずに)、対格言語類型を獲得した可能性が高いということになっています。したがってこのばあい問題になるのは主として活格言語類型における時間の扱いということになります。

しかし印欧語族が、幾千年の闇の中から歴史の薄明の中にその姿を浮び上らせてきたとき、それは幾多の夾雑物を含みながらも、すでに対格言語の特徴を備えていました。したがってその研究は、類型学の多くの問題と同じように、比較言語学という手段を籍りる以外には、方法がないということになります。

この点に関して示唆的なものに、ヴァチェスラフ・イヴァーノフの『スラヴ・バルト、並びに初期バルカンの動詞。印欧語の源泉』という著作があります[30]。彼は「印欧語の *injunctivum* 「指令法」と印欧語、バルト語およびスラヴ語における「第一次語尾」と「第二次語尾」をもった第一系列の形の相対的年代の問題について」という、この著作の第 6 節において、次のように述べています。

injunctivum が、一方では古代の法の形式(特に命令法としても用いられていたもの。特に『リグヴェーダ』において禁止の *mā* と用いられる *injunctivum*, Hoffmann 1967, p.43,45)([9]), 他方では古代インド語のような方言における過去形の源泉であるという考えは、95 年前にトゥルネイゼンによって述べられ (Thurneysen 1885)([22]), 今になってやっと広く認められるようになった (Watkins 1969 参照) ところであるが、これは時制と法とが初原的には同じものであったという考えと一致している。

共時的な観点からすればヴェーダの言語にも『アヴェスタ』の『ガーサ』の言語においても、(アウグメントウムをつけない二次語尾を持った) *injunctivum* の形は、過去時に関しても(ヴェーダ *réjad bhūmih* 「大地が揺れた」 RV X, 22, 14; アヴェスタ *kə mā tašat* 「誰が私を創ったのか」 Y.29, I), 法に関しても用いられた(ヴェーダ *súṣṇam pári pradakṣṇíd vísvāyave ní śiśnathaḥ* 「シュシナはすべての生けるもののために右手を以て滅ぼした」 RV X, 22, 14; アヴェスタ *āxsō vaṇha*

uš ašā ištīm manayho 「私のよき考えの力をみよ」) が、同時にこれは一般的現在に関しても使用することができた (Kuryłowicz 1925([14]; 1964([15, p.146]); Renou 1928(I.Y.[18]; Bappoy 1976, p.279, 280([4])); Hoffmann 1967([9])).

この仮説が提起された直後に、ウォトキンスはこの仮説について論じ、次のように書いている。「イヴァーノフとトポローフは、……injunctivum というものは直説法の全体系、現在、未完了過去及びアオリストの前身であると考えている。初原的に動詞における時制の対立が欠如していたと主張する点では、彼らは疑いなく正しい。しかし完了形が存在していたことは、この体系の中に、少なくとも一つのアスペクトの対立が存在していたことを仮定させる。そこで現在時とアオリストが初原的に同じであったと保証することは私にはできかねる。従って私は、再構成で達しうる時間的にもっとも古い時代の体系の少なくともいくつかの形に、完了性に関する対立が存在していたと考える。アスペクトに関して中立化した injunctivum の現在時称は、アスペクトに関して有標的な injunctivum の存在を排除するものではなく、ヴェーダにおいても現在語幹から形成された injunctivum と同じだけ、アオリスト語幹から形成された injunctivum が存在しているのである (Watkins 1962, p.113, Note 3)([23])」。

しかしこの点に関してウォトキンスが引用しているルヌーの統計によれば (Renou 1928 [18]), 「injunctivum は、最もしばしば現在あるいはアオリストという特別の形式的特徴を持たない語幹から形成される」 (Елизаренкова 1960, p.54([32])) ということであるから、別の解釈も可能である。mā を持つ、ヴェーダにとって比較的典型的な構文に関してすでに (初めてリグヴェーダの言語に統計的手法を用いた) ホイットニーが、これらの構文においては injunctivum は大多数アオリスト的な性格を持っていると述べており (未完了過去、すなわち非アオリスト的な語幹に対する比は『リグヴェーダ』において 5:1, 『アハルヴァヴェーダ』において 6:1 のレヴェルである。Whitney 1962, p.218. §579a ([24])), これはウォトキンスの主張と一致しない。

最近二十年間の印欧語学とヒッタイト学の発達には、ウォトキンスの主張が正しくないことを示した。かなりの数の学者が、印欧語古期における完了形の初原的存在という仮説を放棄しつつある (Cowgill 1975(I.Y. [6]); 1979(I.Y. [6]); Jasanoff 1979 ([12])). W. Meid は印欧語の動詞の研究において優勢になり始めている見解を、極めて明快に述べている。彼は (完了、アオリスト並びにこれと対立する未完了過去のような) ヒッタイト語において痕跡を残していないカテゴリーが、この言語において失われたものであると考えることのできないことを、明確に示したのである。

研究者たちは、ヒッタイト語において痕跡を見出すことのできないカテゴリーや、それを表す形式的手段という考えから解放され、初原的な 「injunctivum」

が、出発点となった形式であるという結論に達しつつある (Meid 1979, p.170. ([16])).

後のアスペクト的・時制的な体系の全体は、アスペクトだけではなく印欧語には初原的には欠けていた時間的な意義をも持って、次の時代へ発展していったのである。Meid によれば、古代の *injunctivum* の機能に近い状態がヒッタイト語に反映しているのである。

§301 イヴァーノフのこの引用に少し注釈を加えると、おおよそ次のようになると考えられます。印欧語には否定を表すものに、**ne* に遡るものと **mē* に遡るものがあることが知られています。サンスクリットでは **ne* は *na* として現れ、ふつうの否定を表すか、接続法に伴われて目的傾向句 (～するように) を表しました。これに対して **mē* は *mā* として現れ、禁止の意味を表しました。ギリシア語の *μή* もこれに当たります。このばあい動詞はしばしば命令法現在、あるいは接続法アオリストの形を取りました。すなわち、直説法以外の形を取ることが多かったのです。

たとえばギリシア語では *μή μευ πειράτω* 「私を試すな (命令法現在)」, *μή ματέυση θεός γενέσθαι* 「神になろうと思うな (接続法アオリスト)」のような形があります。興味のあるのは岩波全書の『ギリシア語入門』には、「……*μή* と現在接続法、または *μή* とアオリスト命令法との組み合わせは用いられない (前者は全くなく、後者は詩語で稀に用いられるのみである)」[54, p.140] と述べられ、更に引続いて「命令法においては、各時称形の間に時間的差異はない。現在命令法とアオリスト命令法との差は動作態の差であって、前者は動作を反復的 (習慣的) または継続的に眺め、後者は一回的または瞬間的に見ているものであるといえる。例えば、*μή ταῦτα ποίει* (命令法現在) といえ、現にやっているのを「もう止めよ、これ以上続けてするな」という意味になる場合が多く、*μή ταῦτα ποιήσης* は、まだしない前から「そんなことはするな」と始めから禁止する意味合いをもっている。また別の場合、例えば *μή κλέπτε* は一般的法則的な禁令として「盗みというものはしてはいけない」という意味であり、*μή κλέψῃς* は個々の場合について「(そのような) 盗みをしてはいけない」という意味になる」[54, pp.140-141] と解説されていることです。

このことは、この構文においては、過去であるか現在であるかという時制の問題は、関係がなかったことを示すものだといってもよいでしょう。

イヴァーノフは、過去を表す接辞である augmentum *e- を取らないで現在にも、過去の事実を表すアオリストにも用いられた、ヴェーダ古層の injunctivum が、普通なら直説法を伴わない mā と共に用いられる例のあることから、これが本来時称も法も持っていなかった時代の動詞述語であったといたったわけです。

§302 しかし当時は完了形は古い時代から存在していたと考えられていました。現在形と完了形の違いはアスペクトの違いですから、もしアスペクトが古くからあったとすれば、明らかにアスペクトの異なる現在形とアオリストについても、これらが同じ injunctivum から生じたというのは間違いではないかというのが、ウォトキンスの説くところでありました。

これに対してウォトキンスが援用しているルヌーの統計によれば、injunctivum は現在語幹とアオリスト語幹の区別のない語幹を持つ動詞から最も多く作られているということであるとすれば、そしてまたホイットニーがいうように、『リグヴェーダ』や『アハルヴァヴェーダ』では injunctivum は大多数がアオリスト的な性格をもって使用されていたとすれば、アスペクトの相違というものが、この形式の使用に強い影響を持っていたとは考えにくいということになります。イヴァーノフの反論はこのようなものでありました。

さらに、ヒッタイト学の発達の結果、完了形と現在形というのは、初源的にはこれらの機能を持っていたわけではなく、別の、非アスペクト的な機能を持っていたという考えが、比較言語学の中で優勢になりつつあることは事実です。

§303 これらのことを考えれば、イヴァーノフの主張には無理がなく、共感できるものだと考えられます。しかし一つ問題があります。ヒッタイト語の解読以後の印欧比較言語学の発達にはめざましいものがあり、祖語の内部の歴史に関わる、いわゆる deep reconstruction が或程度可能になってきています。先にもいいましたように、印欧語は歴史にその姿を現したときには、すでに対格言語 accusative language の特徴を備えていました。そして最近の内容的類型学 contensive typology では、印欧語に含まれている非対格言語的な諸要素 (いわゆる frequentary фреквенталия) の分析から、その前の

類型学的な段階が活格言語類型 active language type であって、能格言語類型から発達したものではない可能性が高いという考えが、一般に認められています。

さらに、活格言語類型に属するさまざまな言語の研究から、活格言語の前の段階がたとえばバントゥー語族に見られるような、多分類言語である可能性が高いということがいわれています。そうしますと、先ほどの *injunctivum* に関連して印欧語は「アスペクトだけではなく、……初源的には欠けていた時間的な意義をも持って、次の時代へ発展していった」としても、一体いつの時代にアスペクトが発生したのか、あるいはいつの時代に時制が生じてきたのかという問題は、決定することが難しいという現実があります。これを解決する新たな方法が見いだせるのかどうかという問題が問われるのです。いずれにしても、もしそのような方法が見いだせるとするならば、それはおそらく内容的類型学の研究と密接に関連したものにならざるを得ないと思われます。

3. 時間の観念の発生に関わる可能性をもつ諸現象

§304 すでに見てきましたように、印欧語においては、その古い時代の状態を解釈するにあいにく、諸家の説が必ずしも細部に亘って一致していないのが、現状と思われます。このような現状に徴してみれば、可能なのは、これまでさまざまな問題意識を持って扱われ、議論のなされてきたことがらを、別の観点、すなわち時間意識の発生との関連から、集め直し、見直してみることしかないのではないかと、思われてきます。勢いその結果も一個の仮説の域を出るものではありません。

(1) 完了形の問題

§305 従来完了形というのは、過去において生起した行為の結果としての状態、言い換えれば「到達した状態」と考えることが多く見られました。この考え方をとった有力な学者にはブルックマンがいたとされています [38, p.6]。しかしこの説は、ギリシア語に多く存在する現在時を表す完了形に十分な説明を与えることができませんでした。たとえば, μέμνηται 「熱望する」 < I.E. *men-, τέθηκα 「驚く」、γέγηθα 「喜ぶ」、ἐρρόγηται 「恐れふるえる」、οἶδα 「知っ

ている」 < I.E. *woid-*, δέδορχα 「見る」, ὄδωδα 「嗅ぐ」, τέτιργα 「(若鳥などが) 啼く」 その他かなり多くの動詞がこれに属しています (*ibid.*).

このような動詞は「到達した状態」説にとっては、はなはだ都合の悪いものでした。この説で説明できそうなものは、例えば οἶδα 「知っている」 ぐらいのものだったからです。というのはこの動詞は印欧語の語根 **weid-* 「見る」 (cf. L. *videō*, Gr. *εἶδω*, Sl. *viděnu* など) の O 階梯ですから、「見た結果知っている」という説明が可能だったからです。

§306 このような困難を避けるために、これらの完了形は行為が強く発現する、言い換えれば「強調行為」であるという説が現れたといえます。すなわち、例えばこの派の人々は δέ-δουχα を「私は恐れている恐れている」(すごく恐れている?), χέ-χραγε 「私は叫ぶ叫ぶ」という意味だということです (*ibid.* p.8). これは恐らく完了形がしばしば語幹のいわゆる「重複」を伴っていることによる発想なのでしょう。事実古典ギリシア語の規範的な動詞変化における完了形は重複を伴っていました。例えば παιδεύω 「教育する」: πε-παίδευχα(同現在完了)。

しかしこの説には大きな問題が二つあります。一つは、「強調行為」と「到達した状態」との意味的な関連が見いだせないことです。そして二つ目には印欧語の中で完了形に重複を用いる言語はギリシア語、サンスクリット、アルメニア語のようなものに限られていて、印欧祖語において完了形形成の手段であったとは考えられないことです。

専ら現在形に用いられるこれらの完了形は、ほとんどのばあいには現在形を持ちませんが、比較的少数ながら現在形を持っているものもあっていわれています。ペレリムーテルはこのようなばあいを比較して、完了形の方が強調的であるとは言えないと述べています。たとえば、

ὥς δ' ὅτ' ἐν οὐρανῷ ἄστροι φαεινὴν ἀμφὶ σελήνην
φαίνεται ἄριπρεπέα, ὅτε τ' ἔπλετο νήνεμος αἰθήρ.

.....

πάντα δέ τ' εἶδεται ἄστροι, γέγηθε δέ τε φρένα ποιμήν. (*Iliad.*

VIII, 555 & seq.)

空に輝く月の周りにきらめく

星が現れ、エーテルが風もなく動き、

.....

全ての星が見えるとき、羊飼は心において喜ぶ(完了形)。

Ἀτρείδῃ, νῦν δὴ που Ἀχιλλῆος ὀλοὸν κῆρ

γῆθεῖ ἐνὶ στήθεσσι, φόνον καὶ φύζαν Ἀχαιῶν

δερχομένων (Iliad.XIV,139 & seq.)

アトレウスの子よ、恐らく今こそ、アカイア軍の死と逃亡を

眺めている

アキレスの胸の中の破壊的な心が、喜んでいいるのだ(現在形)[38,

p.10].

これらの例が、機能的に異なっていないということも、重要だと思われますが、それよりもっと重要なのは、ペレリムーテルが何気なく触れていることがら、すなわちこれらの完了形が孤立していて、ホメーロスにおいて対応の現在形を持っていないものが多いということだろうと思われます。これこそが、これらの完了形が、完了形と現在形の機能上の相違を持っていなかったことを証すものに外ならないと考えられるからです。

§307 さて、これらの「不規則な」完了形のグループの外、その使用において特徴のある、もう一つの「不規則な」完了形のグループがあることが知られています。

今述べた完了形と現在形の対立をあえて「時制・アスペクトの対立の中立化」のばあいということにすれば、ここに述べる「不規則」とは、「相の対立の中立化」とでもいうべきものです。

すなわち、完了形が自動詞的ないしは中動相的な意義を持つ中動相の現在形に対応しているばあいです。

たとえば、

完了形	—	中動相
δέδορκα	—	δέρχομαι 見る
(προ)βέβουλα	—	βούλομαι 欲する
μέμυχα	—	μυχάομαι 咆吼する
μέμηχα	—	μηχάομαι 啼く
βέβρυχα	—	βρυχάομαι(牛が [§]) 鳴く
γέγηθα	—	γίγθομαι 喜ぶ

しかもこれらの動詞の完了形は、時に現在の意味を持って使用されるといえます。たとえば、

αἰχμᾶς δ' αἰχμᾶσσοι νεώτεροι, οἳ παρ ἐμεῖο
 ὀπλότεροι γεγάσσι πεποιθήσιν τε βίηφιν (*Iliad* IV, 324-325)
 より若い者は槍を投げよう。私よりも
 強く、力を信じている (完了形) ものは。

ὦ φίλος, οὗ σε ἔολπα καχὸν καὶ ἀναλκιν ἔσεσθαι. (*Od.* III, 375)
 友よ、私は君が怯懦で、力が弱いものになるとは思っていない (完
 了形)[38, pp.16-17].

§308 このような語彙群は、仮に「中立化」という言葉を使うとすれば、時制の「中立化」と共に、相の「中立化」を示すものと言えます。このうち能動相・中動相ないしは受動相という対立は、他動詞と自動詞の区別が文法化している段階、すなわち類型学的に言えば対格言語段階に成立するもの、言い換えれば対格言語の「包含事象」implication だと考えられますから、この「中立化」は、明らかに少なくとも対格言語以前の類型学的段階、おそらくは活格言語類型の段階の包含事象であると言えます。

しかし時制のばあい、内容的類型学においては、未だこれがどの段階の包含事象であるかについての明確な理論的位置づけは、なされていないと思われます。更にいえば、すでに見たような「強調行為」を表す完了形に、現在形を持つものが稀であるとする¹、完了形と現在形の相違を単なるアスペ

¹ ベレリムートルは第二群の完了形を持つ語群で現在形を持つものを考察して、これらの現

クトの差に帰することができるのか、という疑問も生じてきます。セメレニイは、「現在形と＜完了形＞の相違は、時間的なものでも、アスペクト的なものでもない」としているといえます。

更には完了形と現在形の両方を備えている動詞のばあいにも、たとえば、
 γηθ-έ-ω : γέ-γηθ-α 「喜ぶ」、μυχ-ά-ομαι : μέ-μυχ-α 「(牛などが) 鳴く」、
 γεγων-έ-ω : γέ-γων-α 「叫ぶ」、ὄπωπ-έ-ω : ὄπωπ-α 「見る」、πεπονθ-έ-ω :
 πέ-πονθ-α 「蒙る」 < πάσχω, θηλ-έ-ω : τέ-θηλ-α 「花咲く」など、現在形には語幹形成の接尾辞的要素が付くものが多く、中には πεπονθ-έ-ω 「影響を受ける」のように、語幹の重複さえそのままにしているものまであって、現在形が完了形から二次的に派生したことが歴然としているといえます。また、
 χλάζω < *χλαγ-ι-ω : χέ-κληγ-α 「(鳥が) 啼く」、τριζω < *τριγ-ι-ω : τέ-τριγ-α
 「(鳥が) 啼く」などの現在形も、接尾要素をもっています。

§309 それでは完了形の文法的な意義はどのようなものであったか、という問題がここに生じてきます。ペレリムーテルは、完了形の原因を「状態性」を表すところに求めています。例えば、

οἱ δὲ δὺω σκόπελοι ὁ μὲν οὐρανὸν εὐρὺν ἱκάνει
 ὀξείῃ κορυφῇ δὲ μιν ἀμφιβέβηκεν κυανέῃ. (Od. XII, 73-75)
 二つの山塊、一つは遙かな大空に鋭い頂を届かせ、
 青黒い雲がそれを取巻く (完了形)。

ἀμφὶ δὲ κύμα
 βέβρουχεν ῥόθιον, λισσὴ δ' ἀναδέδρωμε πέτρῃ (Od. V, 411-412)
 周りを押寄せる大波が
 吼え、滑らかな岩が切立つ (完了形)。

ἀλλὰ μάλ' αἶθρη
 πέπταται ἀνέφελος, λευκὴ δ' ἐπιδέδρομεν αἶγλη. (Od. I, 44-45)

在形の大部分が完了形に比べて複雑な構造を持ち、二次的に派生したものであるとして、「これらのデータから、我々が考察した完了形の少なくとも大部分は、初原的には孤立した perfectatum であつたと想定することが可能である」としています [38, p.24]。

ところで(オリンポスの山には)雲のない青空が
 広がり、輝く光があふれていた(完了形)[38, p.41].

これらは神話の中の描写であって、例えば最初の例のばあい、青黒い雲が最初にはなかったのに取巻いた結果を述べているわけではないと、著者は注釈しています。これが「完了形」の原義であるとする、これは「主語」の状態を表す「述語」ということになります。著者はここから現在形・アオリスト形に対する完了形の機能を、行為性に対する不活性(активность/инертность)に求めています(*op.cit.*, p.43).

§310 以上瞥見するだけで、完了形が時制の発生に関して考える際に、重要な鍵を握っていることが推察されます。事実ペレリムーテルも、「印欧語動詞体系における時間のカテゴリーの発生に寄せて」という箇所において、その議論の重要な論拠として、完了形の問題を取上げています。少し長くなりますが一部を引用すると、次のようになります。

時間の平面における完了形の特殊な反映の仕方は、「結果が現在に存在している過去の行為」を表す完了形が、そもそもの始めから時間の二つの平面に結びついており、その後には現在の方向にも、過去の方向にも発展することができた結果であると解釈されて来たことは確かである。しかし近年の研究者によって明らかにされたのは、結果が現在に保存されている過去の行為を意味するというのが、印欧語の完了形本来の意義ではないということである。完了形の時間の平面における反映の仕方の特殊性は、おそらくは極めて遠い、言語発達のある時期に、印欧語の完了形の諸形が、時間に関係なく、現在の意義にも過去の意義にも用いられたと考える根拠がある。この際に我々はまず、現代科学において広く承認されている次の前提から出発している。

- 1) 印欧語の動詞は一貫した変化を持っていなかった。一連の語根から作られたのは完了形だけであり、また他の一連の語根から作られたのは現在・アオリスト形だけであった²。印欧諸語の孤立した完了形はこの文法カテゴリーの最も古い層を形成している(伝存している文献においてそれらは通常現在の意義に用いられている)。

²原注。Wackernagel J. Studien zum griechischen Perfektum, Göttingen, 1904, S.3; Renou L. La valeur du parfait dans les hymnes védiques, Paris 1925, p.1; Шантрян П. Историческая морфология греческого языка, М., 1953, p. 127.

- 2) 一連の古い印欧語において認められる過去完了は、これらの言語の比較的新しいカテゴリーであり、印欧祖語に遡るものではない³。

今、なにかの孤立した完了形、例えば古ギリシア語の ἄγωγα「私は命令する、促す」を考えてみよう。もしこの完了形が対応の現在形あるいはアオリスト形を持たず、この我々が再構築する言語発達の遠い昔の時期には、まだ過去完了形が存在しなかったことを考慮すれば、この動詞からは過去を表す特別な形を作ることができなかったという結論に到達するに違いない。完了形は初原的には現在時の意義にも、過去時の意義にも用いられていたに違いないのである。しかしながら、時間に関して完了形が初原的には非関与的であったという結論に我々が到達するのは、純粋な語彙構成によってではなく、演繹的な推論によるのでもない。我々が再構築する言語状態が、印欧語の最古の文献にその明白な痕跡をとどめているのである。

すでに以前から古代インド語の完了形 *veda*「知る」および *āha*「話す」は、後代の言語では典型的な過去・現在的な動詞であり、現在の意義しか持っていないが、リグ・ヴェーダにおいては現在の意義にも、過去の意義にも用いられ得たのである⁴[38, p.81]。

もし完了形と現在・アオリスト形を作り出す語根が相互に異なっているとすれば、この両者の相違は、少なくとも文法化されたという意味での、アスペクトの対立を示すものではないということになるでしょう。もしそうとすれば、ウォトキンスの批判は根拠がないということになるはずです。

§311 ガムクレリゼとイヴァーノフは、「印欧祖語の動詞が、本来は専ら行為者 *активный актaнт* と結合する行為動詞 *активный глагол*、および統語上非行為者 *инактивный актaнт* と結合する非行為動詞 *инактивный глагол* という、二つの構造的・意味的なクラスに分たれていた」[31, p.293]として、前者を **-m(i)* 系列の動詞、後者を **-Ha* 系列の動詞に引当てています。彼は、印欧祖語の相対動詞 *дублетные глаголы* に属するものとして、次のような対の例を掲げています。

³Thieme P. *Das Plusquamperfectum in Veda*, Göttingen, 1929; Leumann M. *Morphologische Neuerungen im altindischen Verbsystem*, Amsterdam 1952, S.22; Тронский Б. М. *Общеиндоевропейское языковое состояние*, p.92.

⁴原注。例えば, cf. Renou L. *La valeur du parfait...* p.10.

I.E. *es- 「存在する」

Hit. eš-mi 1p.sg. eš-zi; Skr. ás-mi, ás-ti; Gr. εἶμι, ἐσ-τι, Lat. sum, est; OCS es-mŭ, es-tŭ;

I.E. *ses- 「横たわる」, 「眠る」

Hit. šeš-zi 3p.sg. 「眠る」, Skr. sásti 「眠る」;

I.E. *st^[h]aH- 「立っている」

Gr. ἵστημι, 1p.sg., Skr. tísthati, 3p.sg., Av. hištaiti, 3p.sg. 「立っている」 cf. Hit. tijami 「私は前にでる」;

I.E. *es- 「坐っている」

Hit. eš-zi, 3p.sg., cf. ṛṣṭai, Skr. áste;

I.E. *b^[h]uH- 「存在する」

Skr. 1p.sg.pf. babhūva 「私はあった」, 「私はなった」; πέφυκα perf. Lat. fuī 「私はあった」; OE bēom, 1p.sg. 「存在する」;

I.E. *k^[h]e 「横たわる」

Hit. kittari, 3p.sg.med. 「横たわる」, κεῖται 「横たわる」, Skr. sééte 「横たわる」;

I.E. *or- 「立っている」 「立上る」

arḥaḥari, 1p.sg. Gr. ὄρω, Lat. orior 「立上る/のぼる」;

I.E. *set'- 「坐っている」 Skr. sasāda, perf.;

*-m(i) 系列

*-H(a) 系列

ここでガムクレリゼなどが H としているのは、いわゆるラリンガルです。また $\hat{k}^{[h]}$ のように、上付きの ^[h] としているのは、有気音と無気音の両方を表しています。したがって例えば $\hat{k}^{[h]}$ は $\hat{k}$ と $\hat{k}^{[h]}$ の両方を表すことになります。これはガムクレリゼとイヴァーノフが、有気音と無気音とが、印欧祖語の時期には非弁別の特徴であったという考えをとっていたことに基づいています。さらに、「坐っている」を表す語根の set' における表記 t' は声門閉鎖を伴う [t], すなわち [ʔt] を表しています。これも彼が、従来の印欧語比較文法において有声破裂音の系列としていたものを、「類型学上の」理由から声門閉鎖音の系列としているためです。

§312 ガムクレリゼは、クリモフが集大成した「内容的類型学」contensive typology контенсивная типология にしたがって、印欧祖語が本来活格言

語類型に属する言語であったという立場から、いわば演繹的にこの結論を導いたという嫌いがありますが、結果においてこの結論は、ペレリムーテルやイヴァーノフが帰納的に論証しようとしてきたものと一致するということができます。バロウもすでに早く、サンスクリットの動詞の時制組織について、完了形の特殊性に触れて、完了体とそれ以外の時称の対立が、印欧語の基本的な動詞の分類に遡るとしています。すなわち、

The Sanskrit verb has four tense stems: Present, Future, Aorist and Perfect. The present stem forms the basis of a preterite, the so-called Imperfect, in addition to the present tense. In the same way there is formed a preterite of the future which functions as a conditional. In the Vedic language a form of preterite is formed on the basis of the perfect stem. These pluperfect forms are rare even in the earlier language, and disappear later. The aorist stem forms only a preterite.

The clearest division to be found in this somewhat complicated systems is that the perfect on the one hand and the other three systems on the other hand. The perfect is distinguished from the other tenses not only in stem-formation, but also in the fact that it possesses a special series of personal endings. Between the perfect and the rest of the conjugation we have clearly the most ancient and fundamental division in the Indo-European system [4, p.294].

ガムクレリゼにしたがって **-Ha* が本来非行為者、ないしは無生物のものに対する述語であったとすれば、これがやがて一方では完了形に発展し、他方では中動相になったことも、容易に説明できることになります。なぜならばこれは本来状態を示すものだったと考えられますから、これがやがて本来の無生物にのみ結合していたものから、有生物とも結合することになったとしても、状態を表すか、あるいは少なくとも能動的な行為は表さないことになっていったと考えられるからです。第一のばあいは、ペレリムーテルその他の学者が主張しているように、完了形が本来は「行為の結果到達した状態」ではなく、状態を示すものであり、時制には関係がなかったという時期に該当し、第二のばあいには他に行為を及ぼさないものとしての中動相に該当すると思われるからです。筆者はかつてギリシア語の古層においてしばしば見られた中動相が、なぜ歴史時代以降急速に消滅していったかということに関

して、これは、もし印欧祖語が活格言語から直接に対格言語に発達してきたとすれば、活格言語の段階にあるアメリカ先住民族の言語において、しばしば報告されている求心相と遠心相という、version の対立における、有標的な求心相にその起源を持っていたからではないかと考えました。

§313 すなわち、活格言語類型には生物と無生物の範疇的な対立がその構造の基礎にあると考えられますから、この対立は名詞の格においても、名詞を叙述する述語にも、当然生物・無生物の対立が反映されるのに対して、主体性・非主体性の対立の反映である、主格と対格に照応する自動詞と他動詞の区別は、理論的帰結として未だ存在してはいなかったということになります。

一方、文法範疇としての相 diathesis διάθεσιςが、客観的な現実としては同一の状況を、言語的に異なった文構造を用いて表現することをその本質とするならば、活格言語類型においては、自動詞と他動詞の存在をその前提とする能動相、受動相などの区別は、存在基盤を持たないことになります。なぜならこの種の言語においては、例えば「死ぬ」と「殺す」、あるいは「燃える」と「焼く」とは語彙的に区別されず、したがって両者とも現実としては同じ事態と観念されるからです。

§314 しかしこの種の言語においても、例えば「彼が(死ぬ/殺す)」という「同一の事態」からは明らかに二つの結果が可能です。「彼」が生きているかないかという結果です。この相違を言語的に表現するのが求心相・遠心相であるとするならば、これはやはり活格言語類型に内在する相であると考えることができます。これはいわば「結果の視点から見た相違」ということでもできるかも知れません。

結果としては対格言語類型における他動詞と自動詞の区別に当るではないかという反論ももちろんありましょう。しかし対格言語類型の能動・受動も、たとえば「A が B を殺す」という、対格言語においては「同一の事態」を A の立場から見るか、それとも B の立場から見るかという視点の違いは持っています。これはいわば「主語の視点から見た相違」です。しかしこの言語では「死ぬ」と「殺す」は語彙を異にしており、視点の違いに還元することのできない、現実には異なった事態なのです (cf. Concerning Diathesis and Related

Categories, [62, pp.505-515]).

§315 もし中動相が活格言語類型の求心相を継承したものとすれば、これは構成原理を異にする対格言語では、その存立の基盤を失うのは当然と考えられます。

しかし一方では、もしそうとすれば、求心相・遠心相の対立がどの時期に生じたのかという問題が、新たに発生してくるでしょう。すなわち、もしも一方でペレリムートルやガムクレリゼを始めとする多くの比較言語学者の主張するように、中動相が *-Ha 動詞から発生したとし、他方で中動相が活格言語類型の構成原理に合致するもの(包含事象)であったとするならば⁵、*-Ha 動詞と *-m(i) 動詞の対立は何によるものであったのかという問題です。

理論的な可能性としては二つあるように思われます。一つは活格言語類型以前の何らかの言語類型において、その言語類型の構成原理にかなったなにかの原理によって、この動詞の種類の特異が行われていて、その後活格言語類型に移行するに及んで、包含事象としての version に作り替えられたというばあい、もう一つは活格言語類型の内部において、初期に生物・無生物という原理の反映としてあった動詞の区別が、その中期あるいは末期に version に作り替えられたというばあいです。いずれにせよ、そのどちらのばあいであるかは、活格言語類型についての研究が進み、活格以前の言語類型についての見通しが立つまでは、結論を得ることはできないでしょう。

(2) 母音度の問題

§316 主として現在時称に用いられる、いわゆる「一次語尾」*-mi, *-si, *-ti etc. は、主として過去時称に用いられる、「二次語尾」*-m, *-s, *-t etc. に要素 *-i が附加してできたものとされていますが、通常の常識では無標的だと思われる現在時称に *-i という標識が附加され、かえって有標的だと思われる過去時称が標識を持たないということには、何か釈然としないところ

⁵ガムクレリゼとイヴァーノフは、「印欧語の古代の諸方言のデータによって再構成された、印欧語の完了形の最古の機能は、状態(特に心理的な)であるか、それぞれの行為者に特有な性質の表現である(cf. *Перельмутер* 1977; 5 et seq.)」としながら、「*-Ha 系列という、非行為的動詞形式の同じ範疇が、1p. *-Hai, 2p. *-t^[h]Hai, 3p. *-ei の語尾を持つ、最古の印欧語中動相の語幹の基底にあるが、その初原的な意義は、外に向う行為に対する求心的な行為の表現である」[31, p.301]としています。

ろがありました。

しかしこの標識がもともと時称と関係がなかったとすれば、この矛盾は一応解決できます。そのばあいには、この標識の本来の機能は何であったかという問題、及びもしそれがやがて現在時を表す標識になったとすれば、現在時を有標的なものとした経緯はどのようなものであったかという問題が生じてきます。

§317 ヴァチェスラフ・イヴァーノフは、「二次語尾」を持つヴェーダの *injunctivum* が本来時称に関係がなかったとする立場から、要素 **-i* の役割も、時称とは関係がなかったとしています。すなわち、

印欧語動詞の「一次」語尾の標識としての *-i* が初原的には時間の枠外の性質のものであるという仮説は、*injunctivum* の「二次語尾」と対立するインド・イラン語の「一次」語尾の性格についても同様であるという結論、並びに他の印欧語諸方言についてもよく似た相互関係が認められるという結論と、アナトリア語におけるこれらの相互関係を比較した結果に基づいている。能動相現在の語尾に関する、二つのトカラ語の間の方言内の相違は極めて特徴的である。トカラ B は一次語尾を事実上持っていない (Bader 1976, p.38)。トカラ A 複数 3 人称の *-ñc* が一次語尾 **-nt-i* に遡るのに対して、トカラ B は *m < *-nt* である (Krause-Thomas 1960, 1, p.259. §467)。すなわち「トカラ A では一次語尾、トカラ B では二次語尾なのである。このような区別は極めて古い時代のものである」(Lane 1966, p.219)。

以下で述べるようなトカラ語とアナトリア語 (特にルヴィ語) の動詞の数多い相似から考えれば、アナトリア語においても「一次」語尾と「二次」語尾の対立の非対称性はまさに複数 3 人称において明らかに認められる。ここでは *-nt-i* (現在), *-nt-o* (中動相及び過去), *-nt-u* (命令法) の変化しか知られていないのである。従ってアナトリア諸語並びにトカラ諸語は、複数における「一次」語尾と「二次」語尾の対立が未だ成立していなかった時期、すなわち単数の **-m(i)*, **-s(i)*, **-t(i)* の系列しか存在していなかった時期の再構成を可能にするという仮説が、可能なものに思えてくる。

ケルト諸語には一次語尾と二次語尾という時制的対立の痕跡はない。ケルト語ではこれらの語尾の分布は、文における動詞の古代の位置にのみ、依存している。文頭に動詞が立つのはバルト語と同じく印欧祖語本来のものであるが (Иванов 1974, cf. Dressler 1969), この位置は有標的 (倒置的) であり、ケルト語では、語源的にインド・イラン語の *injunctivum* に正確に対応する *conjunctive* の形が

用いられた (Meid 1963; Watkins 1969, p.45, 160). 例えば, O.Irl. *·tá* 「存在する」 < **(s)ā-t*, *·tét* 「行く」 < **ten-t*, *-t* 「存在する」 < **d(e) est*. これに対し独立形 (absolutive) のばあいには, 一次語尾 **-ti* を伴って, *táith* < **(s)tā-ti*, *teit* < **ten-ti*, *is* < **es-ti* となる (Watkins 1969, p.46, 164. conjunctivum と独立形の対立の起源の問題についての議論は Cowgill 1975 参照. これに対しては, Mc Cone の反論がある. Kortland 1979 も参照のこと)[30, p.40].

もしも要素 **-i* が, 印欧祖語のある時期に現在時の指標でなかったとすれば, **-i* が付いていなかったものでも, 現在時を表すことができたはずです. これに何らかの機能を付加するために **-i* をつけることによって得られた, 有標的な「前現在形」とでもいうべきものが, やがて何らかの理由で現在時を表す形に特化したとき, 元の **-i* をもたない形が, これに圧迫されて過去時を表すようになる, という筋道は, 論理的に充分考えられることです.

(3) アオリストの問題

§318 それではこのような「前現在形」はどのような機能を持っていたのでしょうか.

すでに述べたように, イヴァーノフにしたがってもしヴェーダの言語における *injunctivum* が, 法とも時間とも関係がなかったとし, またウォトキンスが引用するルヌーの統計のとおり, *injunctivum* が多くアオリストの語幹から形成したとすれば, それは語根の母音度がゼロ階梯であったことを意味するものと思われますから, このことから, 色々な議論が可能になってきます. 古典期のギリシア語では, よく知られていますように, アオリストにはシグマのアオリストと語根アオリストがあり, 語根アオリストが古い起源を持つものと考えられています. この語根アオリストは通常ゼロ階梯の形をとります.

§319 一方, ギリシア語のアオリストにも例えば *gnomic aorist* に代表されるように, 現在ないしは超時間的な行為を表す機能が, 部分的に残っています. 現在に関わるものとしては, スミスによれば, 次のようなものがあります.

§ **Empiric Aorist.**— With adverbs signifying *often, always, sometimes,*

already, not yet, never, etc., the aorist expressly denotes a fact of experience (ἐμπειρία).

πολλοὶ πολλάκις μειζόνων ἐπιθυμοῦντες τὰ παρόντ' ἀπώλεσαν many men often lose what they have from a desire for greater possessions D.23113, ἀθυμοῦντες ἄνδρες οὐπω τροπαῖον ἔστησαν faint heart never yet raised a trophy P.Criti.108 c. So with πολὺς: ἡ γλῶσσα πολλοὺς εἰς ὀλεθρον ἦγαγεν the tongue brings many a man to his ruin Men. Sent. 205...

a. The empiric aorist is commonly to be translated by the present or perfect. The statement in the aorist is often based upon a concrete historical fact set forth in the context, and the reader is left to infer that the thought holds good for all time.

§ **Gnomic Aorist** (γνώμη *maxim, proverb*). — The aorist may express a general truth. The aorist simply states a past occurrence and leaves the reader to draw the inference from a concrete case that what has occurred once is typical of what often occurs: παθὼν δέ τε νήπιος ἔγνων a fool learns by experience Hesiod, Works and Days, 218, κάλλος μὲν γὰρ χρόνος ἀνήλωσεν ἢ νόσος ἐμάρῃνε for beauty is either wasted by time or withered by disease I.1.6.

a. The gnomic aorist often alternates with the present of general truth: οὐ γὰρ ἡ πληγὴ παρέστησε τὴν ὀργήν, ἀλλ' ἡ ἀπμίᾳ· οὐδὲ τὸ τύπτεσθαι τοῖς ἐλευθέροις ἐστὶ δεινόν... ἀλλὰ τὸ ἐφ' ὅβρει for it is not the blow that causes anger, but the disgrace; nor is it the beating that is terrible to freemen, but the insult D.21.72. Cp.P.R.566 e.

b. The gnomic aorist is regarded as a primary tense: οἱ τύραννοι πλούσιον δὲν ἂν βούλωνται παραχρῆμ' ἐποίησαν tyrants make rich in a moment whomever they wish D.20.15.

§ **Aorist of General Description**.⁶ — Akin to the gnomic aorist is the aorist employed in general descriptions. So in imaginary scenes and in descriptions of manners and customs. Thus, ἐπειδὰν ἀφίκωνται οἱ τετελευτηκότες εἰς τὸν τόπον, οἳ δὲ δαίμων ἑκαστον κομίζει, πρῶτον μὲν διεδικάσαντο οἳ (sic) τε καλῶς καὶ ὁσίως βιώσαντες καὶ οἳ μὴ when the dead reach the place whither each is severally conducted by his genius, first of all they have judgment pronounced upon them as they have lived well and devoutly or not. P.Ph.113 d. φᾶρος δὲ αὐτῆμερὸν ἐξυφάναντες οἳ

⁶原著者は名前を付けていませんが、引用に不便なので仮に付けた表題です。

ἱρέες κατ' ὧν ἔδησαν ἐνὸς αὐτῶν μίτρη τοὺς ὀφθαλμούς after having woven a mantle on the same day the priests bind the eyes of one of their number with a snood Hdt, 2.122.

§ **Iterative Aorist.** — with ἄν the aorist may denote repetition: εἶπεν ἄν he used to say X.C.7.1.14.

§ **Aorist for Future.** — The aorist may be substituted for the future when a future event is vividly represented as having actually occurred : ἀπωλόμην ἄρ' , εἴ με δὴ λείψεις I am undone if thou dost leave me E.Alc.386.

§ **Aorist in Similes.** — The aorist is used in similes in poetry, and usually contains the point of comparison. It may alternate with the present. Thus, ἤριπε δ' ὡς ὅτε τις δρυὺς ἤριπεν he fell as falls an oak II 482. ὅλος δ' ἐκ νεφέων ἀναφαίνεται οὐλιος ἀστὴρ / παμφαίνων, τότε δ' αὖτις ἔδυν νέφεα σκιδέντα / ὥς Ἴεκτωρ κτλ. and as from out of clouds all radiant appears a baneful star, and then again sinks within the shadowy clouds, so Hector, etc. Λ 62. ...

§ **Aorist for Present.** — The aorist is used in questions with τί οὖν οὐ and τί οὐ to express surprise that something has not been done. The question is here equivalent to a command or proposal : τί οὖν οὐχὶ καὶ σὺ ὑπέμνησάς με; why don't you recall it to my mind? X.Hi. 1.3. The (less lively) present, and future, may also be used.

§ **Dramatic Aorist.** — The first person singular of the aorist is used in the dialogue parts of tragedy and comedy to denote a state of mind or an act expressing a state of mind (especially approval or disapproval) occurring to the speaker in the moment just passed. This use is derived from familiar discourse, but is not found in good prose. In translation the present is employed. Thus, ἦσθην, ἐγέλασα I am delighted, I can't help laughing Ar.Eq. 696, ἐδεξάμην τὸ ῥηθὲν I welcome the omen S.El. 668 (prose δέρχομαι τὸν οἰωνόν). So ἐπῆμυσα I approve, ξυνῆκα I understand. Sometimes this use appears outside of dialogue (ἀπέπτυσσα I spurn A. Pr. 1070, Ag. 1193).

§ With verbs of swearing, commanding, saying, and advising the aorist may denote a resolution that has already been formed by the speaker and remains unalterable : σὲ...εἶπον τῇσδε γῆς ἔξω περᾶν I command thee (once and for all) to depart from out this land E. Med. 272, ἀπώμυσα I swear 'nay' S. Ph. 1289. This use is not confined to dialogue.

§ So in other cases : πῶς τοῦτ' ἔλεξας; οὐ κάτοιδ' ὅπως λέγεις how

saidst thou (what dost thou mean)? I do not know how thou meanest S. Aj. 270. Cp. νῦν with the aorist (B 113, Γ 439).

§ **Aorist for Perfect.** — In Greek the aorist, which simply states a past occurrence, is often employed where English uses the perfect denoting a present condition resulting from a past action. Thus, παρεκάλεσα ὑμᾶς, ἄνδρες φίλοι I (have) summoned you, my friends X. A. I.6.6., ὁ μὲν τοίνυν πόλεμος ἀπάντων ἡμᾶς τῶν εἰρημένων ἀπεστέρηκεν· καὶ γὰρ πεινεστέρους ἐποίησε καὶ πολλοὺς κινδύνους ὑπομένειν ἠνάγκασε καὶ πρὸς τοὺς Ἕλληνας διαβέβληκε καὶ πάντας τρόπους τεταλαιπώρηκεν ἡμᾶς now the war has deprived us of all the blessings that have been mentioned; for it has made us poorer, compelled us to undergo many dangers, has brought us into reproach with the Greeks, and in every possible way has caused us suffering I. 8.19. Sometimes the aorist is chosen because of its affinity to the negative, as τῶν οἰκετῶν οὐδένα κατέλιπεν ἀλλ' ἅπαντας πέπρακε He (has) left not one of his servants, but has sold the all Aes. 1.99. This aorist is sometimes regarded as a primary tense.

a. When an active transitive perfect is not formed from a particular verb, or is rarely used, the aorist takes its place : Φεραίῳ μὲν ἀφήρηται τὴν πόλιν καὶ φρουρᾷ ἂν ἐν τῇ ἀκροπόλει κατέστησεν he has deprived the Phereans of their city and established a garrison in the acropolis D.7.32. (καθέσταχε transitive is not classic). So ἥγαγον is used for ἤκα.

b. In Greek of the classical period the aorist and perfect are not confused though the difference between the two tenses is often subtle. Cp. D.19.72 with 19.177.

§ The aorist may be translated by the perfect when the perfect has the force of a present : ἐκτησάμην I have acquired (κέτχημαι (sic) I possess), ἐθαύμασα I have wondered (τεθαύμαχα I admire). Thus, ἔκτησο αὐτὸς τάπερ αὐτός ἐκτήσαο(sic) keep thyself what thyself hast gained Hdt. 7.29. [20, pp.431-433]

(4) 一次語尾と二次語尾の問題

§320 アオリストがこのような多彩な機能を持っているとすると、ヴェーダの injunctivum についてのイヴァーノフの記述と考え合せれば (cf. 330), これらの機能は、「二次語尾」の形だけが存在して、それが未だ汎時的に用い

られていた時代の残余ではないかという疑いが、頭をもたげてきます。「二次語尾」についていえば、例えばラテン語の *esse* 「存在する」の直説法現在 1 人称 *sum* < **s-om*, 3 人称 *est* < **es-t* は共に「二次語尾」を用いています。2 人称単数 *es* もおそらくは **es-s* に由来していると思われます。また教会スラヴ語あるいは中世ロシア語に見られる *нѣ* の形は印欧語の *ne-est* に遡るといわれています [30, p.41]。現代語の否定 *нѣтъ* も *не-е-тъ* 「そこにない」に遡るとされますが、このばあいでも要素 *e* は **est* に起源を持つと考えられます。さらにロシア中世の年代記には *есѣ* と並んで数は少ないものの *e* の形が見られます。これは明らかに **est* に遡るものと見る事ができましょう。アオリストの機能が本来汎時的なものであったかどうかについて、主としてギリシア語の資料だけで即断することはできませんが、あるいは仮にそうだったとしても、それだけでは未だ、なぜ「一次語尾」が必要になったかという疑問に答えることにはなりません。

§321 「一次語尾」が「二次語尾」から派生するのに用いられた **i* という要素については、色々な説があるようです。イヴァーノフは、これについて次のように述べています。

印欧語の **i* の機能に関して同じような結論は他の諸方言の事実に基づいても為されてきた。マルチネは *-i* に終る形を類型学的に英語の Continuous と比較することを提案した (Martinet 1956)。マイドによれば, *bheret-i* のような形における小辞 *-i* は現実化の意義を持っていた (Meid 1963)。ウォトキンスもまた, *-i* を *hic et nunc* の指示であり, この意義は *-i* を持たない形にはないと考えた (Watkins 1962, p.112, cf. 1969)。いいかえれば, これは発話行為 (コミュニケーション行為。Якобсон 1972; Володин-Храковский 1977, p.47-50) に向けたシフター⁷ なのである [30, pp.39-40]。

§322 この **i* という要素は、スラヴ語において承前代名詞 anaphoric pron. として用いられていた *u(i)* と同じものである可能性があります。スラヴ語では、これが形容詞の語尾の後について、いわゆる「長語尾形」をつくっ

⁷訳注. *шифтер* コミュニケーション行為特に話し手と聞き手との伝達上の結びつきを示す要素を内容とするカテゴリー。

たことは、ほとんど間違いがありません。同じように指示代名詞の後について強調の機能を持ったといわれるギリシア語の *iota demonstrativum* (*οὐτοσί, αὐτήι, ἐκεῖνοσί* etc.) をも想起させます。この二つのものが同じであるかどうか、またそうとして、指示の機能と強調の機能のどちらが本来のものであったかについては、更に調べてみる必要があります。しかし両者とも他の語の後の位置をとっていること、ギリシア語では常にアクセントを持っていることなどを考えれば、これが共に強調の意義を持って使われていたとする蓋然性は、大きいように思われます。

さらにもしそうとすれば、これが行為を強調することによってこの要素を伴う形は現在に使われるようになり、その結果として「二次語尾」を持つ形は過去を表すようにシフトしていったという説明が、有標性・無標性という立場から無理なく説明できる、可能性が生れることになります。しかしこのばあいにも、*hic et nunc* 「ここかつ今」というのは、初原的には文字通りの意味、すなわち現在時との関連においていわれているのではなく、むしろ一種の強調という、感性的なものであったと、思われるのです。

(5) 語根の O 階梯の問題

§323 ペレリムーテルは、印欧語の完了形 O 階梯の母音度を持つとされていることについて、これは本来の文法的な母音交替ではなく、派生語を作るための語彙的なものであるとして、次のように述べています。

完了がかつて動詞体系の中でアオリスト・現在から派生された語彙形成のカテゴリーであったという推定を指示するものとして完了形の形式的構造に基づく推論がある。問題は語根の母音度の O 階梯であって、これは能動相における人称語尾と同じほどに無視できないような、完了形の特徴ではないにしても、完了形にとって極めて特徴的なものである。

音色の交替の発生のメカニズムに関してどのような見解を持っていたとしても、その相対年代に関しては次の事実を指摘しないわけにはいかない。すなわち、一つの変化形式に限る限り、通常観察できるのは量的な交替(完全階梯、ゼロ階梯、時には更に延長階梯)であって、語根の音節における e/o という音色の交替は、一つの語の形式間ではなく、同じ語根から派生される異なった語の間で観察されるものである。

したがって例えば *πέτομαι* 「飛ぶ」、*ἐπτόμην* — 同じ動詞のアオリスト、

一方 ποτάομαι は反復の意義を持つ派生動詞. πέλομαι 「回る」, ἐπλόμην 同じ動詞のアオリスト, 一方, πόλος 「軸」は動詞派生の名詞. 更にアテマティック動詞の単数形と複数形における語根の完全階梯とゼロ階梯交替を参照. Dor. φᾱμι — φᾱμέν 一方 φωνή 「音, 声」 は動詞派生の名詞.

語根の形態素における音色の交替は, 動詞派生名詞にも (φέρω 「運ぶ」 φόρος 「捧げもの, 贈物」 φορός 「運んでいるところの」, Lat. tego 「覆う」 — toga 「トーガ」, Got. steigan 「登る」 staiga 「小径」), 名詞派生動詞にも (φρήν 「横隔膜, 心, 知性」 — φρουέω 「考える, 思う」), また動詞派生の動詞 (φέρω 「運ぶ」 — φορέω 「運ぶのを常とする」, φέβομαι 「恐れる」 — φοβέω 「恐れさせる」, Got. ligan 「横たわる」 — lagjan 「置く」, sitan 「坐っている」 — satjan 「植える」) などにも見られる.

語根の形態素における音韻交替の O 階梯の利用は, 印欧語諸方言における最も古い語構成の手段の一つであるという, あらゆる根拠がある. したがって完了形は, かつては動詞の体系の中で, アオリスト・現在から派生された語構成上のカテゴリーである.

.....

.....

しかし, 見たところ, 完了形が動詞の体系において派生的変化形式であった時代よりも, 更に古い言語発達の時期に入り込むことを可能にするデータを, 我々は所有している. 最も古いものと見なす根拠をもつ完了諸形は, perfecta tantum の属する孤立した完了形だという事実が, すでにこれまで述べてきたことから, 我々を次の結論に導く. すなわち, かつて印欧語の諸方言において, 現在・アオリストと完了の形とが, 原則として異なる語根から作られたという状況が存在していたのである. 特別な意味を持つのは, 最も古層に属する完了形の大部分が, 派生の指標である O 階梯を語根に持っていないだったのである [38, pp.35-37].

§324 更にペレリムーテルは, Got. wait 「知っている」 — Skr. veda, Gr. (F)οἶδα Got. man 「考える」 — Gr. μέμνη 「望む」, Lat. memini 「覚えている」, Got. kan — (g)nōvī 「知っている」, Got. ga-dars, Skr. dadhārṣa 「敢てする」などの過去・現在形の動詞が完了形からつくられたが, 意義的に二次的に現在の意味を獲得し, そしてこれと同時に存在していた現在形がやがて消滅したという, 古いゲルマン語学の考え方に対して, 現在では最初から現在形はなかったこと, そしてこれらがもともと印欧語の古い完了形に遡るものであって, 古い印欧語の意義を反映しているのだという考えに傾いて

いることを指摘しています [38, pp.27-28].

彼はこれに続いて次のようにいっています.

したがって、古代ギリシア語及びいくつかの他の印欧諸語において現在形から派生したものでないだけでなく、対応する現在形に対してそれが一次的なものであるという特徴が明らかな、かなりの層の完了形がある。まさにこれらの孤立した完了形が、この文法カテゴリーの形の最も古い層であるという、重大な根拠がある。すでに示したように、明らかにかつて現在・アオリスト形と完了形が、原則として異なった語根から作られたという状況が存在していた。

我々が到達した結論は、完了形がそもそもの始めから現在・アオリスト体系から派生した動詞の文法的カテゴリーであり、これがこの体系に比較して歴史的に新しいものだという見解と相容れない。この見解を主張する研究者は、多くの完了形において、語根が派生に特徴的な O 階梯を持っているという事実を指摘している。

しかし語根の交替の O 階梯は、決して全ての完了形が持っているわけではない。例えばホメーロスの言語においては、かなり多数の完了形がこれを持ってはいない。母音交替のこの階梯が印欧語の完了形の形式的構造に欠くことのできない特徴であったことを示す、いかなるデータもないのである。まさに最古のいわゆる「不規則完了形」において、これは最も非典型的なのである。すでにメイエは「完了形の語根の O 階梯は印欧語の観点からすれば本質的なものではない」という完全に根拠のある結論に達していた (*op.cit.*, pp.28-29).

§325 Skr. *veda* < **woida* 「知っている」 や Gr. *μέμνηα* < **me-mon-a* 「望む」などはたしかに母音度は O 階梯ですが、一般にこれらの「不規則完了形」なるものの母音度はどうなっているのでしょうか。調べてみると全く統一したものは見あたらないように思われます。例えば先に述べた O 階梯を持つと思われるものの外に *ῥο-ωρ-a* 「動く, 自分を励ます」, *ἐ-γρη-γορ-a* 「目覚めている」のように長母音を持っているもの, *βέβρωκα* 「吼える, うめく」, *τέτρᾱγα* 「(獣が) 鋭い鳴声をする」のように、長ソナントを持つものなどがあります。*ἐ-γρη-γορ-a* は現在形が *ἐγείρω* < **ἐγερω-* で、語根は **εγερω-* ですから、延長階梯, *βέβρωκα* は、現在形 *βρυχάομαι* で明らかに完了形から派生したものです。現在形で *υ* が短いのは **ἐγερω* : *ἐ-γρη-γορ-a* に倣ったのかも知れません。また *τέτρᾱγα* も現在形では *τρίζω* < **τριζω-* で完了形

からの派生だと思われます。その長短も、先のばあいと同じでしょう。

§326 この最後の二つは「不規則完了形」の中の擬音的なグループに属しています。擬音的なものは聴覚の印象に基づいていますから、これに例えば E 階梯 *ei, *eu あるいは O 階梯 *oi, *ou といった母音交替が介在するというのは無理ではないかと思われます。また例えばここにラリングル *ə の痕跡を見ることも、現実的とは思えません。これらのことから、この種の動詞には当初ソナントと母音の区別、あるいは母音交替が形態論的な意味を持つてはいなかったのではないかと疑われます。そうとすれば、この種の完了形は極めて古い層に属するものということになり、またそれに対する現在形が存在しないか、あるいはあっても明らかに完了形からの二次的な派生によるものと見られることから、まだ時制が発達していなかった時代のものであるという可能性が濃いように思われます。

(6) 完了を表すとされるその他の接尾要素

§327 ペレリムーテルは印欧語において状態を表すとされている接尾辞 *-ē- と、その起源と機能について未ださまざまな見解が見られている接尾辞 *-ā- について、その使用のされ方に明らかな平行性が見られるとし、これが印欧語の完了形に起源を持っていると主張しています。彼の論旨を簡単にまとめますと、おおよそ次のようになるでしょう。

- 1) 印欧語の完了形と相、すなわち中動相との起源的關係が疑いないこと。
- 2) 古代ギリシア語の完了形、特に「孤立した」完了形において、持続の意義が極めてはっきりしていること。
- 3) 多くの印欧諸語において、祖語の完了形に起源を持つ動詞の形が、過去に完了した行為の叙述に用いられていること。
- 4) いくつかの言語において祖語の完了形に起源を持つ動詞の形が、非直説法に用いられること。
- 5) 語幹が長母音に終る形が、機能的意味的に古代ギリシア語及び古代インドの諸語の完了の重要な機能と一致すること [38, pp.105-107]。

§328 ここで述べられていることは未だ補強せねばならないことがありそうですが、もし *-ē および *-ā- の構成にかかるものが印欧祖語の古層において完了形を作っていたとすれば、語根の母音は、たとえ未だ母音交替が成立していなかったとしても、音声学的には後のゼロ階梯の形をとることが多かったのではないかという、想像が可能になります。更に妄想をもっと広げると、主として語根アオリストが通常ゼロ階梯をとることと考え合せれば、語根の意味を支えていたのが、セム語のように子音とソナントだけではなかったのかということにもなります。しかしこれは学問的に資料を集めて議論すべき問題です。

以上見たような議論から印欧語の古い諸言語の事実が、時制が未だ存在していなかった時代の記憶をとどめているとしますと、印欧諸語は、歴史時代には多数の随件事象を持ちながらも、はっきりとした対格言語の段階にあるものとしてその姿を現しましたが、その随件事象のうち例えば対格言語の中心的論理と完全に背馳する中動相が、その後急速に消滅したり、いわゆる再帰動詞にその機能の一部を譲渡して姿を消したことを考えれば、印欧語が長い準備期間を経て、最終的に対格言語に移行したのは、歴史時代からさほど隔っていない時期だったのではないかと思います。もしそうであったとすれば、時間が言語に現れるのは対格言語の段階であると考えることができます。すなわち、ここでもまた、時制は対格言語の包含事象であるということになります。

これがとりあえず現在の結論となります。(Last revised 2005.12.25)

関係文献

- [1] Charles E. Benett
Syntax of Early Latin, Hildelsheim, Germany 1966. Rep. from the original, Boston 1914, 1-3.
- [2] Herbert Bräuer
Slavische Sprachwissenschaft, I-III, Berlin 1961-1969.
- [3] Émil Benveniste
Origines de la formation des noms en indoeuropéen, Paris 1935.
- [4] Thomas Burrow (1909-)
The Sanskrit Language, London, 1976.
- [5] P. Chantraine
Morphologie historique du grec, Deuxième édition, Paris 1967.
- [6] W. Cowgill
More evidence for Indo-Hittite: the Tense-Aspect system. *Proceedings of the Eleventh International congress of linguists. L. Heilmann ed. II.* Bologna, 1975, pp.557-570.
- [7] W. Cowgill
Anatolian *hi*-Conjugation and Indo-European perfect. Instalment II. *HI* pp.25-39.
- [8] J. H. Greenberg, J. J. Jenkins, Ch. E. Osgood
Memorandum concerning language universals, *Universals of language, Report of a conference held at Dobbs Ferry, New York, April 13-15, 1961*, ed. by J. H. Greenberg, Cambridge (Mass.) 1963.
- [9] Karl Hoffmann (1915-)
Der Injunktiv im Veda. Eine synchronische Funktionsuntersuchung, Heidelberg 1967.

- [10] Wilhelm von Humboldt
Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java, Bd. 1 1832, Bd. 2 1838, Bd. 3, 1840.
- [11] Wilhelm von Humboldt
Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts, 1836.
- [12] J. H. Jasanoff
The position of hi-conjugation, *HI*, pp.79-90.
- [13] Jens Otto Harry Jespersen
Tid og Tempus. Fortsatte logisk-grammatisk studier. 邦訳:『オットー・イエスベルセン 時間と時制 (TID OG TEMPUS)』齊藤 静 山口秀夫共訳 東京 篠崎書林 1956.
- [14] Jerzy Kuryłowicz (1895-1978)
Injonctif et subjonctif dans les Gāthās de l'Avesta. *Rocznik Orientalistyczny*, t. III, Lwów 1925.
- [15] Jerzy Kuryłowicz
The inflectional categories of Indo-European. Heidelberg 1964.
- [16] Wolfgang Meid (1929-)
Der Archaismus des Hethitischen, *HI*, pp.159-176.
- [17] Antoine Meillet
Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, Paris 1964.
- [18] Louis Renou (1896-1966)
Les formes dites d'injonctif dans le R̥gveda. *Étrennes de linguistique offertes par quelques amis à Emile Benveniste*, Paris 1928.
- [19] Edward Sapir
Language, An introduction to the study of speech, New York 1949.
邦訳, 泉井久之助『言語—ことばの研究』紀伊国屋書店 1957.

-
- [20] Herbert Weir Smyth
Greek Grammar, Harvard University Press, 1971.
- [21] Oswald J. L. Szemerényi
Introduction to Indo-european linguistics, Oxford 1996.
- [22] Rudolf Thurneysen (1857-1940)
Der Indogermanische Imperativ, KZ 1885, Bd. 27, pp.172-180.
- [23] Calvert Watkins (1933-)
Indo-European origins of the Celtic verb. I. The sigmatic aorist.
Dublin 1962.
- [24] William Dwight Whitney (1827-1894)
Sanscrit Grammar, Delhi 1962.
- [25] АН СССР
Русская грамматика, 1-3, М. 1960.
- [26] АН СССР
Русская грамматика, 1-2, М. 1980.
- [27] Леон Арсеньевич Булаховский
Исторический комментарий к русскому литературному языку,
пятое, дополненное и переработанное, Киев 1958. Rep. Leipzig
1974.
- [28] Леон Арсеньевич Булаховский
Русский литературный язык первой половины XIX века, М.
1954. Rep. Leipzig 1976.
- [29] Федор Иванович Буслаев
Историческая грамматика русского языка, М. 1950. Rep. pub. 5
ed. (1881.)
- [30] Вячеслав Всеславич Иванов (1929-)
*Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индо-
европейские истоки*, Москва 1981.

- [31] Тамаз Валерианович Гамкрелидзе & Вячеслав Всеволодович Иванов
Индоевропейский язык и индоевропейцы, Реконструкция и историко-типологический анализ праязыка и протокультуры, I-II, Тбилиси 1984.
- [32] Татьяна Яковлевна Елизаренкова (1929-)
Аорист в «Ригведе», Москва 1960.
- [33] Георгий Андреевич Климов
Очерк общей теории эргативности, М. 1973.
- [34] Георгий Андреевич Климов
Типология языков активного строя, М. 1977.
- [35] Георгий Андреевич Климов
Принципы контенсивной типологии, М. 1983.
- [36] Петр Саввич Кузнецов
Историческая грамматика русского языка, М. 1953
- [37] Československá akademie věd
Русская грамматика, 1-2, Praha 1979.
- [38] Илья Аронович Перельмутер (1929-)
Общеславянский и греческий глагол, Ленинград 1977.
- [39] Михаил Николаевич Петерсон
Очерк литовского языка, М. 1955.
- [40] Александр Афанасьевич Потебня
Из записок по русской грамматике, Том I-II, М. 1958, III, М. 1968, IV, М. 1977.
- [41] Иосиф Моисеевич Тронский
Историческая грамматика латинского языка, М. 1960.
- [42] Макс Фасмер
Этимологический словарь русского языка, 1-4, Перевод и дополнения О. И. Трубачева, М. 1971.

-
- [43] Павел Яковлевич Черных
Историческая грамматика русского языка, М. 1954.
- [44] Ивао Ямагути, О функциях полной и краткой форм имен прилагательных древнерусского языка, 『言語研究』 第41号 1962, pp.28-54. [62, pp.3-32]
- [45] Виктория Николаевна Ярцева, ред.
Лингвистический энциклопедический словарь, М. 1990.
- [46] 青木信仰
『時と暦』 東京大学出版会 1997.
- [47] 井筒俊彦
「アラビア語入門」, 『井筒俊彦著作集2 イスラーム文化』 中央公論社 1993.
- [48] G. A. クリモフ, 石田修一訳
『新しい言語類型学, 活格構造言語とは何か』 三省堂 1999.
- [49] 高津春繁
『印欧語比較文法』 岩波全書 187, 岩波書店 1954.
- [50] 高津春繁
『言語学概論』 有精堂 1957.
- [51] 暦計算研究会編
『こよみ便利帳』 恒星社厚生閣 1983.
- [52] フェルディナン・ド・ソシュール
小林英夫訳 『一般言語学講義』 岩波書店 1952.
- [53] デヴィッド・E・ダンカン
松浦俊輔訳 『暦をつくった人々』 河出書房新社 1998.
- [54] 田中美知太郎, 松平千秋
『ギリシア語入門』 改訂版, 岩波全書 137, 岩波書店 2000.
- [55] 永田久
『暦と占いの科学』 新潮選書 1996.

- [56] 服部四郎
『音声学』 岩波全書 131, 岩波書店 1952.
- [57] フンボルト,
亀山健吉訳 『言語と精神』, 法政大学出版局 1984.
- [58] Hermann Schreiber, 金森誠也訳 『アッチラ王とフン族の秘密. 古代社会の終焉』, 佑学社 1977. 原書 Hermann Schreiber, *Die Hunnen — Attila probt den Weltuntergang*, 1976.
- [59] 細江逸記
『動詞時制の研究』, 泰文堂, 初版 昭和7年, 8版 昭和30年.
- [60] 山口巖
「古代ロシア語形容詞の長語尾・短語尾両形の職能と形容詞の種類の相関について」『古代ロシア研究』4, 1962, pp.145-166. [62, pp.60-72]
- [61] 山口巖
『類型学序説』 京都大学学術出版会 1995.
- [62] 山口巖 『ことばの構造とことばの論理』 日本古代ロシア研究会 1998.
- [63] 渡辺敏夫
『暦(こよみ)入門 暦のすべて』 雄山閣 1995.
- [64] 渡辺慧
『時間』 白晝書院 1948.
- [65] 渡辺慧
『時』 河出書房新社 1974.
- [66] 渡辺慧
『認識とパタン』 岩波新書 岩波書店 1978.

古代ロシア研究特別号
ロシア文法の周辺
一般言語学への招待

著者 山口巖
編集・発行 日本古代ロシア研究会
印刷 有限会社アトリエサンク

TEL 03-5951-4363

2005 年 3 月